
箱庭の勇者 ～ガイのなりあがり冒険記～

ししだ じょうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭の勇者 ～ガイのなりあがり冒険記～

【Nコード】

N5099W

【作者名】

ししだ じょうた

【あらすじ】

異世界召喚冒険もの。

異世界に召喚された底辺にいる主人公が気づけばいつの間にかやら流されるままになんとか世界を救う……かもしれないお話。

各種設定あれこれ（前書き）

一番最初にでんとありますが、読まなくても特に問題がないように話を進めていくつもりです。

設定類が気になる方などは参考程度にどうぞ。

9 / 2 3 武器などの装備に関して 加筆

1 0 / 1 8 種族に関して・ギルドに関して・魔法に関して 加筆・

修正

各種設定あれこれ

はじめに

世界設定などに関してです。

主に種族、魔法、国、ギルド、お金なんかに関してを記述しておきます。

考えている設定をグダグダと書いていきますので、多少見栄えは意識して書きますが、見難いのは勘弁してください。

今後、感想などでこんな項目が欲しい。という意見や、多く寄せられた質問などはこちらに追記していきますので、気になることがある方はご意見などお待ちしております。

大陸について

箱庭の世界には、大陸がいくつか存在します。主人公たちがいる大陸をロンダーシエルといい、面積としては地球でいうところのユーラシア大陸に相当します。人口はおよそ60億人（亜人含む）です。

ロンダーシエル大陸は、中央にそびえるメトロエロ山脈により3分割されており、北をアルファン地方、南東をクーデルネア地方、そして1章、2章の舞台となる南西部、リンガ地方となっています。同じ大陸内ですが、メトロエロ山脈は非常に険しい山なため交流が少なく、文化的にはまったく別のものができていると言っても過言ではありません。

特に魔法文化での違いが大きく、魔法の形式は各地方でまったくの別ものになっています。言語的、人種的には非常に近く、文明としての発展具合はどの地方も中世程度（ただし、魔法の存在によ

り随所に地球よりも高度な部分がある)のものです。

種族に関して

・人族

異世界『ロンダーシエル』でもっとも数が多い種族。戦争に巻き込まれることなく天寿を全うするのなら平均寿命は100歳ほど。ただし、戦争が多発している地域などでは平均20歳程度。

領土拡大欲が強く、戦争をするのは人族の国ばかり。

身体能力などは亜人と比較される基本とされることが多いため、すべてが平均的とされる。

・エルフ

外見の特徴は耳が長く尖っている、肌が白い、など。人族の美醜の感覚でいうと美人が多い。平均的な天寿は殺されるか病気以外で死んだ個体がないため不明。

生まれてから20年程度は成長が続き、それ以降はゆったりと歳をとっていく。平均すると200歳くらいまでは10代から20代程度の外見。400歳までは30代から40代程度、600歳まで50代程度、600歳を超えると人族の老人とそれほど変わらない外見になる。ただし、個人差がかなり大きく、1000歳を超えても10代の外見をしている個体はいる。外見の個体差については詳細不明。

基本的に長年住みついた土地を好み、領土拡大などの野心はない。身体能力は、筋力的な面では人族と同等か劣っている程度。魔法

的な面で見るとエルフが圧倒的に優位。

・鬼人

外見的特徴は額から角が生えている点。角の数がその人物の力の大きさと高貴さを表す基準になっている。ただ、鬼人以外の種族では2本以上の角は視認できない。

平均的な天寿は300歳ほど。地球でいうところの日本的な雰囲気と文明を持った種族。

基本的に鎖国的。

服装は和服系、武器も日本刀的な武器が多い。

身体能力は筋力的な面では人族を圧倒する。反面で魔法の才能や耐性が低く、防御という点では全種族中で最弱。

・獣人

外見的特徴は各種族の耳が頭から生えているなどがある。種族的には犬（狼）、猫（虎）など、伝承の中では、鳥や牛、馬などの種族がいるらしいが、人族はそれらの存在を確認していない。

各部族ごとに自らの部族を賢狼族、王虎族などと呼称している。ただし、賢狼族は他の狼族より魔法の力に優れていたり、王虎族は虎族のなかでも王と呼ばれるほど強い力を有しているなどの特徴がある。

基本的に各部族ごとの縄張りを重視する。自分たちの縄張りに害がなければ、対外的にはなにもしない。

身体能力は各部族ごとに差が大きく一概にこう、と言えないが、瞬発力に優れ、筋力も人族より強い場合が多い。魔法に関しても同様だが、人族に比べ劣っている場合が多い。

・魔物

スライムやデーモンなど人族や亜人とは外見的に大きな差がある。たいていの場合知能は低く、本能で生きている。大陸のどこでも生息しているが、魔王領に生息している魔物は同種であっても力が強くなっているなど、環境によって能力に差が生まれる。

基本的に人族、亜人族とは敵対関係にある。

・魔族

外見的には人族に近いのだが、性格はたいてい残忍。人族たちが確認している魔族は現在は魔王を含め8人。身体能力は人族、亜人らすべてを圧倒し、魔法能力も高い。

人間の用いる武器では傷をつけることも難しく、伝説級の武器なんかを持った冒険者や勇者が討伐に赴いたことはあるが、討伐に成功したのは1例だけでそれ以外はすべて返り討ちにあっている。

気まぐれな性格の個体が多く、魔王領の中で生活していると推測されるが、人間の国を襲うことはあまりない。ただし、ときおりふらりとどこかの国を訪れ、滅ぼしたり壊滅的な打撃を与えることがある。

・幻獣

ドラゴンやユニコーン、グリフォンなどの種族。魔物や獣などに比べ圧倒的なまでの力を有しており、ドラゴンの下位種族であるワイバーンを倒すのにも50人のベテラン冒険者が挑み半数以上が被

害を受けてようやく倒せるほどの力を持っている。

幻獣は一般的には最高位の種族とされているが、伝説の中には神獣と呼ばれる種族も登場している。

神獣には一部のドラゴンの中でも特に力の強いものやユニコーンの王などがあるとされている。多くの場合、人語を解し、勇者に力を授けるなど人族の味方として伝説に登場する。

魔法に関して

魔法には以下の種類がある。

・初等魔法

） 一般人でも使えるレベルの魔法。

・中等魔法

） 一般人以外が使う、戦いにも用いられるレベルの魔法。魔法の種類などが各魔法の中でも最も多く、各国にある魔法部隊の人間でもこのレベル。

・高等魔法

） 宮廷魔法使いなどの才能にあふれる人間ではないと使えないレベルの魔法。1000万人に1人程度の才能が必要。

・最高位魔法

） もはや伝説と言われるレベルの魔法。歴史上でもこのレベルの魔法を使えた魔法使いは片手で数えられる数しかない。かつて、唯一魔族を倒した冒険者のパーティにはこのレベルの使い手がいたとされている。

・召喚魔法

普通魔法とは違う形式の魔法。特殊な訓練を積んだ人間にしか使えず、どんなに大きな国でも3人程度しかいない。一般的には高等魔法を使える人間でもごく一部の大魔法使いと言われる人間が勉強し、実行できるレベル。

・契約魔法

伝説級と言われる魔法。語感的には単純そうな魔法だが、契約対象は幻獣のため使われる機会はめったにない。一般に確認されている契約魔法を使う人間は歴史的に見ても最高位魔法を使える人間並みに少ない。

・特殊魔法

普通の魔法とは違い、システムのなものに使われている魔法。主にギルドカードや魔法アイテムなどに使われている魔法。大昔に召喚された勇者が作り出した魔法体系で、厳密な意味で仕組みは理解されていない。ただ、使えるだけのもの。

初等から最高位魔法までに関しては、属性があり、基本属性は火、水、土、風、雷の5種。

使える魔法の属性の数≡魔法の才能ともいわれ、一般人では1種類しか使えない場合が多い。

各属性の使える人間を割合で示すと

火：水：土：風：雷＝40：25：18：15：2

となる。(なお、2属性以上使える人間は得意な属性をカウントし

てこの割合に含まれる)

その他特殊属性に光と闇があり、上の割合と比べると0.001以下の割合にこの二つの属性が使える人間がいる。

光と闇の使い手は基本属性はすべて使えるが、光か闇はどちらか一方しか使えない。

国に関して

・バルデンフェルト帝国

総人口 7億5900万人 総兵力 1000万人(予備役含む)

特徴

実力至上主義の国。優秀であれば人族、亜人と隔たりなく登用される。西方の海に面した国であったが、侵略を繰り返しリンガ地方中央あたりまで領地を伸ばしてきた。

リンガ地方では1、2を争う大国。基本的には支配を繰り返しているため同盟国はなく、属国が少しある。

・リエルド王国

総人口 1億8000万人 総兵力 300万人(予備役含む)

特徴

バルデンフェルトが進出してくるまではリンガ地方の中央でも中

心的な国だった。周囲は同盟国が多く、同盟国の兵力も計算に入れば900万人ほどの総兵数となる。

人族至上主義の国で、亜人種は非常に肩身の狭い生活をしている。なお、総人口に亜人が含まれていないため、亜人を含めた人口は1億9000万人ほどになる。

ギルドに関して

ギルドはこの国にも存在するが、国ではなくギルド議会に所属する組織。

ただし、登録している人間の本籍はそれぞれの生国にあるため、ギルド職員以外は基本的にその国の法で処罰される。職員の方は働きたしと共に本籍をギルド本部と言う国に移すため、治外法権が認められる。治外法権が認められているのはギルド本部が公明正大を地で行く組織であるから認められているのである。

ギルド本部にあるギルドの各ギルドマスターたちの話し合いをギルド議会と呼び、その決定が各国にあるギルドの大方針となる。

ギルドの種類は有名なものを上げれば以下のもの

・冒険者ギルド

一般人の中でも特に有名なギルド。各国で起きたトラブルを解決する代わりに各国に存在する迷宮を探索する権利を有する。一攫千金を狙う人間が登録するギルドで、仕事から乱暴者などが多い。一般的な英雄の多くは冒険者ギルドに登録していた過去を持つ。

・商業ギルド

商人の多くが登録するギルド。商売をする際のトラブルや法律

なんかを手掛けるギルドで、ここに登録していない人間が商売をする
と国によっては通報されて捕まる。

・一般労働ギルド

↳ 早い話が派遣会社会的なギルド。もしくはアルバイト紹介ギルド
でもいい。

・他いくつかは省略

各ギルドにはギルドごとにランクが存在する。ランクの呼称、昇
級条件はギルドによって違うが、主人公が所属することになる冒険
者ギルドについては以下の通り

・Gランク ギルドP0ポイント～100

↳ 新人冒険者。登録したての見習い的な実力。
主な仕事、薬草の採取、草食動物の捕獲など

・Fランク ギルドP101～300

↳ 新米冒険者。少しは仕事に慣れてきたレベル。
主な仕事、草食動物の捕獲、低危険度なモンスターの討伐など

・Eランク ギルドP301～600

↳ 半人前の冒険者。それなりに仕事に慣れてきたレベル。
主な仕事、低危険度なモンスターの討伐、中危険度のモンスター
の調査など

・Dランク ギルドP601～1000

↳ 一人前の冒険者。基本はできているレベル。
主な仕事、中危険度のモンスターの調査、低危険度な迷宮の探索

など

・Cランク ギルドP10001～20000

↳少しはできる冒険者。

主な仕事、中危険度のモンスターの討伐、高危険度なモンスターの調査など

・Bランク ギルドP20001～50000

↳一流と呼ばれる一歩手前の冒険者のレベル。このランクになると死亡率が跳ね上がり、仕事の失敗確率も急上昇する。

主な仕事、中危険度な迷宮の探索、高危険度なモンスターの調査など

・Aランク ギルドP50001～100000

↳一流と言われるレベルの冒険者。このランクに到達できる冒険者はごく一握り。このランクの人間の多くは二つ名を持つほどの有名な人。

主な仕事、高危険度の迷宮の探索、高危険度なモンスターの討伐など

・Sランク ギルドP100001～500000

↳超一流と半のレベルの冒険者。半と言っても、もはや超一流と言つて過言ではない。Aランクでも特に実力がある人間たちが到達するレベル。

主な仕事、高危険度の迷宮の探索、高危険度のモンスターの討伐など

・SSランク ギルドP500001～

↳事実上ランク最高位。超一流の冒険者。各国のギルドに数名はいるAランクの冒険者以上の実力者で、大国と言われる国にあるギル

ドに1人いるかないかというレベル。

主な仕事、高危険度な迷宮の探索、高危険度なモンスターの討伐など

・SSSランク ギルドP 名誉称号のためポイントは無関係

く伝説の冒険者レベル。かつて魔族を倒した冒険者たちに与えられた名誉職ぐらいのレベル。歴史上でも3名しかこのランクに到達した人間はいなかった。

主な仕事、超高危険度なモンスターの討伐など

仕事で取り上げられるモンスターの危険度の基準

ゴブリンで例を挙げるなら

低危険度 ゴブリン1,2匹

中危険度 ゴブリンの集団

高危険度 ゴブリン(上位種多数)の軍団

超高危険度は魔族のみです。

ギルドPとは

ギルドで受注できる仕事にはそれぞれの難易度に応じてポイントがある。仕事が成功した場合、ギルドカードにそのポイントが加算されていく。ただし、失敗すると1,5倍のポイントが減点される。

受注できる仕事

自分のランクの2つ上までが受注できる。自分より下のランクは受注できるが、ギルドポイントの加算はない。(SランクがAラン

クを受けた場合は除く）（Aランク以上の仕事は絶対数が少ないので、Sランクの仕事は数年に1つあるかないかというレベルなため、Aランクの仕事を受けても加算される）

お金に関して

通貨単位はBフレット（某シミュレーションゲーム会社に登場するゲームの通貨単位のパク……通貨単位を参考にさせていただきました）

1Bでパンが一つ買え、成人男性1人当たりの一日の使用金額がおよそ15B。

一般的なアパートのような借家が1月当たりの家賃が10000B
光熱費などは魔法を使用することによりほぼ無料

一般家庭で購入するような一軒家で平均10万Bほど

一般的な成人男性の収入は1月当たりで、手取りが20000～50000Bほど

貴族の収入は

バルデンフェルトのような大国の貴族の場合、領地から集める税金などが2000万～2億Bほど

金額はあくまで目安です。

通貨

1B銅貨

10B銅貨

100B銀貨

1000B銀貨

100000B金貨
1000000B金貨
10000000B白貨
10000000000B(1億)白貨
1000000000000B(100億)白金貨
1000000000000000B(1兆)白金貨

白金貨は基本的に超一流の冒険者以外は使いません。国の金庫にくつつかの白金貨があったりしますが、普通はどんな金持ちでも白金貨以上は使われません。

冒険者や国の軍隊などでの需要が高い武器、防具類だけは価格の差が激しく、一部の高性能なものは価格破壊的な値段になっている。ただし、安いものは安く存在している。が、高いものは途方もなく高価。

武器などの装備に関して

冒険者が一番金をかけるもの。国なんかでも、兵士の装備のためにも一番の金食い虫。

・武器の材料

木<銅<鉄<鋼<特殊(ダマスカス、ミスリルなど)

・防具の材料

皮<銅<鉄<鋼<特殊

・レアリティ

コモン<アンコモン<レア<スーパーレア<伝説<神具(魔剣、
聖剣など)

属性が付与されるとレアリティに+が付く。(例、火の剣 レア
リティ:コモン+)

また、精霊などに祝福されるとさらに+が付く。(例、祝福され
た斧)

祝福とは、通常よりも壊れにくい、能力に補正が付くなどの
特典がある。

同じ装備でも、+が多いほどいい装備。ただし、最高は祝福され
た全能(光と闇を除いた全属性)の装備の+++まで。

レア以上になると、武器に名前がついている。(例、祝福された
火の剣『ダンブレイド』 レアリティ:レア++)

・神具

神が作ったとされる装備。主に武器に多い。

階位が存在し、1位が最も強く、数字が増えるほど弱くなる。(
ただし弱いと言っても一番弱い5位の武器であっても、人族やドワ
ーフが作ったどんな武器よりも強い)

種類は剣、槍、斧、弓、杖、盾、鎧が存在する。

それぞれ神、聖、魔、真 と呼ばれる。

剣で例を挙げれば、第一位は神剣と呼ばれ、2位と3位は聖剣か
魔剣と呼ばれる。4位と5位は真剣となる。

第一位は世界中に1つ、第二位で2つ、第三位で4つ、第四位で
8つ、第五位で16個が存在する。

つまるところ、神具は剣、槍、斧、弓、杖、盾、鎧それぞれに3

1あり、全て合わせると217存在する。

その全てがロンダーシエル大陸にあるわけではなく、世界中に散在している。

とりあえず、以上。

各種設定あれこれ（後書き）

もっとなんか詳しく知りたいとかありました場合も、言っていただければ書きますので、よろしければ感想などでお知らせください。

ここおかしくない？などの指摘も大歓迎です。

プロローグ

さて、まずは何から語るとしよう？

語るにしても言葉は陳腐で稚拙でどうしようもない戯言だがそれは勘弁してほしい。

そうだな、まずは自己紹介から。

俺の名前は獅子王　ガイ、勇気あるGGGの隊員……ではない。普通の高校生だった。ちなみに本名。

ああ、当然のことだけどサイボーグでも超進化人類とかいうエヴオリュダーでもない。だから『イー　イップ』なんてできるわけないからその辺聞いてがっかりしないでほしい。ああ、でもこんなにゃくは嫌いだし、紅生姜たつぷりの牛丼は大好物だ。

ちなみに、小学校のときに自分の名前の由来を調べましようってやつで、知った自分の名前の由来には心底がっかりした。

なにせ、俺の名前を考えてる時に親父が偶然見たテレビアニメでやってた主人公が偶然同じ苗字だったから、まんま使ったって言われたんだ。いや、いくらなんでもそんなテキトーな……

もう少しドラマチックな理由が欲しかったよ。

さて、そろそろ本題に入ろう。お気づきだろうか？いや、聡明な読者諸君なら気づいているだろう。

俺の職業、普通の高校生だった。そう”だった”という点に注目してほしい。そう、過去形だ。

つまり俺は現在進行形で高校生じゃない。卒業したの？ってそんな馬鹿な質問はよしてほしい。

じゃあ、大学生だ！っていうのもなしだ。不登校のニート？ってのも違うからパス。少なくとも働いたら負けだなんて思ってないしな。

あんまり引っ張ってもしょうがない、そろそろ俺の職業をお教えしよう。

かつての俺は高校生。そして今の俺は、異世界に召喚されて勇者になっちった、テヘッ

いや、すまん。激しく自己嫌悪だ。

召喚された俺は勇者。奇しくも名前の由来となった人物とおんなじような立場になったわけだが、一つ大きな問題がある。

これは、もう正直どうしようもないレベルの問題なんだ。

何せ俺は、あの勇者王さんが好きじゃないんだよ。

プロローグ（後書き）

あんまり変わってないプロローグ。

多少の変化を見せるのは明日以降更新される本編でってことばどどど
ぞよろしく。

1話 俺が召喚された国は本日滅びました

俺の名前は獅子王 ガイ、勇気あるGGGの隊員……ではない。
普通の高校生だ。ちなみに本名。

さて、突然だが俺はある問題に直面してる。べつに試験中で数学の問題が難しいとかそんなもんじゃない。現実として直面している問題にどう対処すればいいのかわからないんだ。

では、問題だ。

「どこだどこ？」

周囲を見回してみてもドーム状の建物の中にいるらしいこと以外はわからない。足元には変な光を放っているなにかの模様みたいなもの。

一応、俺以外に二人の人間がドーム内にいることは確認できたけど、少なくとも俺の知り合いじゃない。というか、ずいぶん面白いファッションセンスしてるな。特にデブの方。

上着の方はべつにいいんだ。ごてごて宝石がついているだとか、ラメが入って妙にキラキラしてるってのは別に気にしないさ。ただな、チューリップ状の半ズボンに白タイツってお前……ハムみたいですよ？

もう一人の方だって、腰の曲がり具合から見ればじじいって呼べ

るぐらいの年齢っぽいやつがぼろ布みたいなローブを着てるし……
あ、顔見えた。やっぱりじじいだな。つか、なんでそんな目を見開いて馬鹿みたいに口を開けてるんだ？

「おお！ようやく我が国も勇者の召喚に成功したでおじゃる」

……お、おじゃるだと！？

まさか、現実におじゃるなんて言葉を使うやつに会うなんて思ってもみなかった。気持ち的にはツチノコ見つけちゃいましたってぐらい衝撃的なんだけど……

誰かはこの感情を共有したいところだけど、残念ながらそれができそうな相手はこの場にいない。

「じゃ、じゃからい……言ったじゃるデ・ブー王よ。わしは天才じ、じゃとな」

おいじじい何をそんなに焦ってるんだ？なんか自分でもすごい意外ですって顔してんじゃねえよ。しかもあれか？デブーってのはそのデブの名前か？見たまんまじゃねえかよ。

「むふふ、ジ・ジーよ。よくやったでおじゃる。約束通りお前を宮廷魔法使いにしてやるでおじゃるよ」

「おお、宮廷魔法使いに……」

両手を胸の前で組んで目をキラキラと輝かせてるじじい。むふふとか超個性的な笑い方をするデブ。うん、はつきり言おう。お前からキモい。

こんな連中とはお近づきになっちゃいけないな。

俺はとりあえず二人のことは無視して外へ出ることにした。扉は
一か所しかないし、あそこから外に出れるだろう。

「こりやお前、どこに行くでおじゃる！」

っち、さすがに堂々と真横を通るのはまずかったか。

呼び止められるなんて俺もまだまだだな。

「あ、いや。なんか喜んでるみたいだし邪魔しちや悪いと思っ
ね。とりあえず外にでも出ていようと思っただけどっ。」

「むふふ、さすが余が召喚した勇者でおじゃる。説明せずともバル
デnfフェルトに攻め込もうとするなんてさすがでおじゃる」

「わしわし、召喚したのはデ・ブー王じゃなくてわしじゃよ」

は？ばるなんちゃらってなんだよ。つか、自己主張してくるじじいがうぜえ。

ったく。さっきからこのデブとじじいの言葉から予想は立ってるだけに認めたくないな。

異世界への召喚？

ふつうこういう場合は、すげえ可愛い巫女さんが召喚して頑張ってください勇者様！的な展開になるか。そうじゃなくともすげえ可愛いお姫様が召喚の場に同席してどうか、この世界をお救いください。的な展開になるもんじゃねえの？

何が好きで、じじいに召喚されてデブの言うこと聞かなきゃいけねえんだよ。

「さあ、バルデンフェルトを攻め滅ぼすでおじゃる」

「断る」

「な、なぜでおじゃる？」

なぜ？なぜときたかこのハムデブが。

「なんで俺がお前なんぞの言うことを聞かなきゃいけないんだ？」

「……余が召喚したのだからお前が余の言うことを聞くのは当然で

おじゃる」

「だが、断る」

「……」

召喚したから言うこと聞けなんて、お前馬鹿じゃないの？

「ジ・ジー、なぜこの男は余の言うことを聞かないでおじゃる！」

「え？ああ……隷属の魔法をかけ忘れたからじゃな。てへっ」

おいじじい……いや、もう何も言うまい。

でも、隷属の魔法とかかけられてなくてよかった。このデブの言うこと聞かなくなるなんて恐ろしいことこの上ないぜ。

「ぶひー！なにやってるでおじゃる！お前はやっぱり宮廷魔法使いにはせん！」

「な、なんじゃとお！？それは話が違つぞい」

いや……お前らそんな不毛な喧嘩を今この場でしてんじゃねえよ。

まあいいや、今のうちに外に行かせてもらおう。

「だからどこへ行くでおじゃる!」

「いや、また忙しそうだし外へ出てようかと思ってな」

デブとじじいの不毛な言い争いを無視してドームを出ようと扉に手をかけたところで、再び止められてしまった。本当に俺もまだまだだな。

「むふふ、やっぱりバルデンフェルトへ攻めに行くつもりになったでおじゃるな?」

「……はあ?」

……うぜえ、マジでこいつうぜえ。

なんか、めんどくせえし、適当にあしらうかなあ。

「さあ、はやくバルデンフェルトを滅ぼすでおじゃる」

「ああ、はいはい。わかりましたよ」

扉を開いてとりあえず外に出る。

わかつちやいたけど、完全に異世界だな。なんかどこが違うって
言われると詳しく説明できないけど。

とりあえず、石造りの家が多くて、妙にでかい城がある。馬車が
道を走ってて街を外れたところには草原が広がっている。

ああ、違和感の正体がわかった。こんだけ広い場所でも車がない
のが地球との違いだな。

「マジで異世界っぽいな」

こんな景色だけじゃヨーロッパの片田舎に来たってだけかもしれ
ない。いや、さすがにそれはどうかって自分でも思っけどさ。

でも、なんとなくわかるさ。空気が違う。

とりあえず、この世界の景色も楽しんだことだしいったん戻るか。

俺は再び扉を開いてドームの中に戻った。

「デブ王様、ばるなんちゃらつての滅ぼしてきましたよ」

「むほほおーい！よくやったでおじゃるー！」

え、まじで！？信じるの？とりあえず適当にやる気のなさをアピ
ールしてクビにでもしてもらおうと思ったのに。どうやら俺の想像

以上にこのデブはおつむが弱いようだ。

「では、さっそく余は愛しのセリル姫を迎えに行くでおじゃる！帰ってきたらすぐに結婚式でおじゃる！」

デブは俺が種明かしをする前にさっさとドームの中から出て行った。というか、ずいぶんデブのわりに俊敏だなあいつ……。

で、セリル姫って誰だ？

翌日、俺にはよくわからないが国境でデ・ブー王と、お供のじじいがバルデンフェルトに討たれたという話が国中に流れたらしい。戦争状態の隣国にまともな護衛も連れずに向かい、「お主たちは敗戦国じゃから余に従うでおじゃる！」と言っていたらしい。

さすがにあれだけの馬鹿でも国王が討ち取られたというのは国的にも一大事だし、どうやらあいつには世継ぎも何もいなかったらしい。長年に及ぶ戦争の末に王族はみな倒れ、最後の一人だったあのデブが討ち取られたこの国はバルデンフェルトに無条件降伏。俺が召喚された国は俺が来てからたったの一日で滅びてしまったとさ。

……………え、俺のせい？

1話 俺が召喚された国は本日滅びました(後書き)

ちよつと、出番が少なかったのでデブとじじいの会話を増やしてあげました。(微妙に)

2話 俺は帝国の勇者になり損ねました

俺の名前は獅子王 ガイ、勇気あるGGGの隊員……ではない。
普通の高校生だ。ちなみに本名。

どうやら異世界に召喚されてしまった俺は、異世界に召喚されてすぐに俺を召喚した国が亡びると言う不幸な事態に見舞われた。いや、本当に悲しいことだ。

別に召喚されてから恩を受けたわけでもないのに、国が亡びたことに関してなんの感慨も浮かばないが、1日たって新たな問題が発生した。

「さて、どうしよう?」

何をすればいいのか見当もつかない。

普通の異世界に召喚された人間だったら、召喚した国の王様とか、召喚した相手に説明を受けて冒険に出発だ!とかって展開になるんだろうけど、不幸なことに、本当に不幸なことにこの国の王様は昨日お亡くなりになってしまったんだ。

「まったく、あのデブ王め。死ぬ前に今後の方針の一つも残して行けってんだ。え?ばるなんちゃらを攻める?知らないな。そんな話は誰からも聞いてないさ。」

ちなみに昨日は召喚されたドームに泊まった。

召喚以外に使い道はない建物なんだろう、軟らかいベッドどころか椅子の一つもありやしない。仕方がないから床で寝たけど、石でできた床の固いこと固いこと。体中が痛いぜ、まったく。

もう二度と戻るまいとドームを出てからは行くあてもなく街中を歩いている。

さすがにばるなんちゃらに負けた昨日の今日、町中は敗戦ムードが充満しているのか、人通りはまばらで妙に思えるほど静かだ。

日も十分に上っているだけに、普段なら商人たちの活気にあふれた声で溢れているだろう大通りも、客はいないし商売人もいやしない。

「来た！」

「やったぞ！」

「ばんざーい！」

にわかには聞こえてきた歓声に顔を上げると、人だかりができている。その向こうに見えるのは騎兵？

この国の兵士たちが帰ってきたのか？いや、掲げられている旗が城に描かれてる国旗みたいなものだから、あれがばるなんちゃらの軍隊なんだろう。

だったら、なんであの人だかりにいる連中は喜んでるんだ？

不意に俺の頭上で何かがはためく音がする。視線を上げてみれば、横断幕が建物の二階を跨いで掲げられている。

『歓迎、バルデンフェルト！』

……文字が読めること以上に書いてある内容が驚きだよ！

あれか？もしかしてさっきまで静かだったのはばるなんちゃらの軍隊がいつやってくるかっていう期待で静かになってたのか？どんだけあのデブ王嫌われてたんだよ。

国が滅びて喜ぶ国民。よっぱどひどい国だったんだな……

ものすごい勢いで集まりだした人の波が、ばるなんちゃらの兵隊たちが通れるだけの幅を残して、大通りを覆い尽くす。

人の波に流されて気づけば通りを囲む人垣の最前列に追いやられてしまった。

徐々に近づいてくるばるなんちゃらの兵士たちの姿。歓声で耳が痛いけど、ずいぶんと堂々としている。

「？」

不意に正面を向いていた先頭を行っていた女性騎士と目が合った。

切れ長の瞳は鮮やかな深紅。陽光を受けてきらめく金色の長い髪は、女性だったら誰もが羨むだろうほどの美しさだ。白人らしい白い肌と白銀の鎧、白馬にまたがる姿は芸術って言っていいいんじゃないだろうか？

え、なに一目惚れですか？

なんかすぐ後ろの兵になんか言ってる。周りがつるさくて全然聞こえないけどどうしたんだろう。

「おいお前」

「俺？」

「ああ、そつだ。セリル姫様から話があるそつだ、ついてこい」

女性騎士と話していた兵士がこっちへ来たけど、姫ってどういうこと？いや、あの女性騎士が姫様ってことか？それも気になるけど話ってなんですか？

やっぱり一目惚れされたか？いやあ、照れるなあ。

っけ、冗談だよ。残念ながら俺がモテるはずがない。生まれてこのかた彼女なんてできたためしはないし、俺なんぞが人様から好かれる柄かってんだ。

じゃあいつたいなんだって言うんだらうな……

まあいい。どうせやることもないし、ついていけば何とかなるだらう。

俺は、声をかけてきた兵士に導かれ、兵隊の行列の最後尾に続いて城へ向かった。なんか、俺に歓声が向けられてるみたいで少し気分がよかった マル

ばるなんちゃらの兵士たちは列をなして街の中心にある城へ入城した。

こういった西洋的な世界で、戦争に勝った国の人間は本能の赴くままに略奪なんかをするイメージがあっただけに、肅々とした空気の中で入城する様はなんとも不思議な感じがした。

しばらく応接室みたいな場所で待たされた後に連れて行かれたのは謁見の間って言えばいいのか？ 広い造りの部屋の奥には豪華な椅子に座った女性騎士の姿、やっぱり彼女がお姫様なんだな。

入り口から豪華な椅子（玉座かな？）に続く床にはレッドカーペットが敷かれ、その左右には完全武装の兵士が並んでいる。

なんか知らんけど、ずいぶん厳かな空気が部屋の中を満たしてい

る。ああ、やばいな。こんな場所での礼儀作法なんて知らねえよ……

兵士に付き添われるように謁見の間の中央あたりまで進むと、その場に立たされる。ここで止まわってことですね。あの、跪いたりしなくていいんでしょうか？

「お主、勇者じゃな？」

……………は？え、あ、お？

今のは間違いなく、俺の前にいるお姫様の言葉なのか？ずいぶん変わった口調をしていらっしやいますね？

お姫様なら、それっぽいしゃべり方をしてほしいけど……いや、まあしゃべり方なんてその人の個性ってことでいいんだろうけど。やっぱりなあ……

というか、あれだよ。前置きもなしにそんなこと言われてもなんて返事を返せばいいのかわかんねえよ。心の準備ぐらいさせてくれるの。

「何を呆けておる、質問に答えよ。そのポリエステルで出来たセーフクを着ている人族は勇者の場合が多いんじゃないが、違うのか？」

「いや……よくわかんないっすけど、勇者らしいです」

「ふむ、そうかなるほどの。お主が……」

お姫様は興味深げに俺のを見つめる。それこそ上から下に穴が開くほどに。おいおい、そんなに見られたら照れちまうぜ……冗談だよ。間違ってもこんなこと口にできないしな。

というか、このお姫様の纏ってる空気がやばい。あのハムデブとは大違いだ。これが王族の纏う雰囲気ってやつなのかね？下手な受け答えしたら殺されそうだよ。

「なるほどの、あの間抜けな王が死ぬ間際に勇者に騙されたと言っておったが、まさか本当に勇者を召喚しておるとはな……」

「騙されたつてのはちょっと納得できませんけど、何か問題でもあるんでしょうか？」

「いや、我が国に敵対するわけでもなしに問題などありませんよ。しかし、だ」

「しかし？」

「お主はなぜあの間抜けに嘘をついたのじゃ？」

「嘘？」

嘘なんてあのハムデブについた覚えはない。めんどくさくなって適当なことは言ったような気はするが……

「お主がバルデンフェルトを滅ぼした、とあの間抜けは言っておったぞ？」

「ああ、あのことですか。あれは嘘じゃなくて単なる冗談です」

「冗談？」

「はい」

「……ふむ」

お姫様は顎に手を当てて何かを考えてるみたいだ。いや、笑うとか怒るとかリアクションが欲しいんですけど……

なんか、物語的にはここでこのお姫様に気に入られて、ばるんちやらの勇者として大活躍！とかあるんじゃないの？

「わかった。もう帰っていいぞ」

「は？」

え、なにそれどゆこと？

帰れってなにさ。これから異世界に召喚されて面白くなってくるところじゃないのか？

もしかしてどっかで選択し間違えたのか俺は？

「どうした、早く帰れ」

「あの……どうやって帰ればいいんでしょうか？」

「お前は馬鹿か？来た道を戻れば外に出れるじゃろくに」

あつ！帰れってそういうこと？地球に帰れって言うてんのかと思
った。

でも、勇者が召喚されたんなら魔王と戦ったりするんじゃないの
？ここで帰れってのはどうなのよ。

「あの、俺って勇者ですよ？」

「だからどうした？」

だからどうしたって……

「魔王と戦ったりしなくていいんですか？」

「そんなもの我が国の勇者だけで事足りる」

え、嘘。勇者って俺以外にいるの？普通勇者って一人じゃないの？

「なんだ、お主はそんなに武芸に自信があるのか？ならば我が国の勇者を一人倒せればお前を我が国の勇者として取り立てよう」

あの一人つてことは勇者は複数いるんですか？

完全に俺の予想の斜め上の展開に思考が追いついてこない。

「え、あの、はい、ではそうします」

俺の馬鹿！なんでそう返事をした。いくら呆けてるからってそりやねえよ。

まずい、喧嘩ぐらいはしたことあるけど、戦いが本職の兵士との戦いなんて経験ない。さすがに学生の喧嘩と比べるのはまずいだろ。

しかもこっちは丸腰で、相手は剣もあるんだぞ？勝てるわけないじゃん。

「そうか、三井」

「はい、姫様」

三井と呼ばれた男が整然と並んでる兵隊の中から一歩歩み出た。

たぶん20歳くらいだろう、体つきはがっしりとしていてなんか肉体系の仕事をしてそうな感じだ。(いや、勇者なり兵隊はたしかに肉体系だが)

「この男と戦え」

「かしこまりました」

三井はうなづくと腰に差された剣を抜いた。

いや、だからこっち素手ですよ？武器は反則じゃない？

「君、この世界に来たばかりだろ」

質問、というよりは確認のように三井は言った。なんでわかるかは知らんけど、その通りだからぐうの音も出ない。

「元の世界で格闘技でもしてた？そうじゃないなら俺には絶対勝てないよ」

じゃあだめじゃん。絶対勝てないじゃん。格闘技なんてやってないもん。

「はじめ！」

姫の一言で三井は一気に駆け出した。10メートルくらいあった距離が瞬きするような時間でなくなり、気づいた時には俺のど元に剣が突きつけられている。

「なんだ、面白くもない」

あまりにもあっけない幕切れ。というか、勝負なんて恥ずかしくて言えるもんじゃない。

どうやら姫様は完全に俺から興味をなくされたようで席を立つとさっさと部屋を出て行ってしまった。

当の俺の方は生まれてこの方ナイフや包丁すらつきつけられたことがないもんで、自分のど元に剣なんて言う物騒なもんがつきつけられている事実へなへなと腰を抜かしてしまった。

「さっさと城を出た方がいいよ」

三井は剣を鞘に戻しながらそう言ってさっさと俺に背中を向けた。

え、いや、あの……これでおしまい？いくらなんでも早すぎじゃない？

しかしながら勝負に負けてしまった俺は弁解も何もする暇がないうちに両腕を掴まれて城の外まで連れられて行ってしまった。

まるでゴミを放るように門の外に投げつけられた俺は無様に地面に転がってしまつた。

「さつさと帰るんだな勇者様」

俺を放り投げた一般兵B（仮）はそう言い残して城の中に戻っていった。

あつれえく、どこでフラグ壊したんだろ？

2話 俺は帝国の勇者になり損ねました（後書き）

今回もあんまり変わってません。

が、お姫様の描写をちょっと詳しく入れてみたりとほんの少しだけ変わってます。

次は、説明なんか若干変わる予定です。

3話 今後の方針が決まりました

俺の名前は獅子王 ガイ、勇気あるGGGの隊員……ではない。
普通の高校生だった。ちなみに本名。ばるなんちゃらの勇者になり
損ねた俺は、単なる元高校生だ。

ばるなんちゃらの勇者になり損ね、行くあてもなくするべきこと
もわからない。まじでどうしたらいいんだろう。

そもそも、人間生きていくためには金を稼がなきゃなんないだろう
けど、働くあてだってありやしない。

「どうしたもんか……」

とりあえず、城から大通りまでは戻ってきた。どうすればいいか
わからないけど、城の前で魂が抜けたみたいに呆然としていたって
事態は好転しない。

大通りに戻ったからと言って何かがあるわけじゃあないだろうけど、
なにもしないよりはましだろう。

さっきばるなんちゃらの勇者になれば、こんな悩みはなかった
たんだろうけど、なれなかったもんは仕方がない。いつまでも悔や
んでたら前進できないぜ！

なんて、無理やりポジティブに考えようとしたって無理なもんは
無理。いったいこれからどうすればいいんだろう。

「あ！よかった、見つかったよ」

「？」

なんだか聞き覚えのある声に振り返ると、どこかで見たような顔。

……ああ、あいつだ。城で俺が勇者になるのを妨害してくれやがった三井じゃないか。負け犬を笑いにでも来たのか？

鎧を着ていないからか、少しばかり軽装備っぽい感じの三井がこちらに駆け寄ってくる。

さすがに胸倉掴んで「よくぬけぬけと俺の前にその顔だせたな！とか言うほどの恨みはないが、少しばかりの恨みはある。できれば、会いたくなかったな。」

「時間はあるかい？よかったら話がしたいんだけど？」

ええ、おかげさまで時間は有り余ってますよ？って、嫌味を言っ
ていても仕方がない。この世界のことなんて何一つ知らないし、情
報は喉から手が出るほど欲しい。

「まあ、特に用事はありません」

「そう？だったら、どっか飯屋にでも入って話そう。あ、金は俺が出すから心配しないでいいよ」

さすがに、この世界での先輩だ。こっちの懐事情くらいは察しがついているんだろう。

奢ってもらえるなら喜んで奢ってもらおう。なにせこっちは昨日から何も食ってなくて腹が減ってるからな。

飯屋に入って手早く注文を済ませると、俺たちは向かい合う形で席に着いた。文字が読めても料理名から料理が想像できなかったので、注文はすべて三井任せだ。

昼時と言うこともあって、ほぼ満席状態。しかも、バルデンフェルト統治記念とかって祭りがそこら中で騒がれ、文字通り町中がお祭り騒ぎだ。昼間から酒を飲んでいる客が多く、かなり店の中はうるさい。

「さて、まずは自己紹介かな？俺は三井 純、地球にいたころはW大学に通って教師を目指してた。2年なんだけど、一浪してたから歳は21ってね。はは」

一浪しようがW大だろ？何を恥ずかしそうに笑ってるんだ。こちららW大学なんて逆立ちしたって入れないってのに。いや、これは単なる僻みだけだ。

「獅子王 ガイ、高3、17です」

「え！？獅子王ガイって、ライオンの獅子に王様の王で獅子王？」

「そうです」

なんか妙に食いつくな……ヲタクだなこの人。高校でもこんな人何人かいたよ。

「ご想像の通り、あの勇者王の主人公と同姓同名です」

「すっげー！獅子王なんて名字あるんだね。まさに勇者になるべくして勇者になっただって感じじゃん」

「はぁ……」

たしかに、勇者になるべくしてって感は少しばかりはあるが、今の俺は勇者って言えるのか？

「いやあ、うらやましいよそんな名前」

「ちょっととしては厨二くさくて嫌な名前なんだがな。」

「っと。話が脱線したね。獅子王君はいつこの世界へ？」

「ガイでいいですよ。獅子王って言いにくいでしょ？」

「そっか、わかった。で、ガイ君はいつ来たの？」

「昨日です」

「昨日！？そのわりにはずいぶん落ち着いてるね」

ぶっちゃけ、落ち着いているっていうよりもあきらめてるって感の方が強いけど。

一応、俺だってヲタクっぽい部分……というかやつぱり男の子として厨二の心は忘れてない。こんな状況にあったら、そりゃ楽しみたいとか興奮するって部分は否定できないさ。

「俺の場合、なるようになる。ってのが座右の銘なんでこうなった以上はここで生活するんだなくらいにしか思ってますよ。落ち着いてるっていうなら、三井さんも同じだったんじゃないですか？」

「あ、わかる？まあ俺の場合は来たばかりのころは興奮が収まらなかつたけどね」

わかりますとも。あなたは完全なるヲタクだろうからこの状況になつたら狂喜乱舞するにきまつてる。

「でも、昨日来たばかりだったら、この世界のことにはなにもわからないよね」

「まあそれは」

「んじゃ、説明はそこからだね」

三井さんの通うW大学、学力が高いうえに彼は教師を目指しているだけあつて説明は非常にわかりやすかつた。

三井さんいわく、この世界は国家間の戦争が頻発しているため、人材が不足しがちになる。そのため、召喚の魔法を用いて異世界から勇者を召喚するそうだ。また、この世界には魔物や魔王といわれる存在がいるので、勇者の中にはその魔王や魔物と戦うために召喚された人間もいる。

召喚魔法自体は一方通行のため元の世界に戻る方法は今のところ確立していない、そのため召喚された勇者はこの世界で生きるために様々な職に就いている。軒並み地球にいたころよりも身体能力などが向上したり、この世界では上級といわれる魔法を簡単に扱えるようになる人間が居たりする。基本的には隠れた才能が開花するよくなものなので戦闘向きでない人間もいるが、様々な分野で活躍しているそうだ。などなど要約するとそんなもんだ。

「まあ、俺の場合は召喚された国がバルデンフェルトに滅ぼされち

やってね。その後は冒険者ギルドに登録して1年くらい活動してただけ、実力が認められてスカウトされたって感じかな」

国が滅ぼされる。俺もつい昨日召喚された国が滅んでしまった。国の滅亡なんてありきたりな話なのか？

「そのばるなんちゃらってのはどんな国なんですか？」

「どんな……ねえ？」

三井さんは首をひねってしばらく考え込むと、ばるなんちゃらについて説明してくれた。

バルデンフェルトは実力至上主義の国で、実力さえ認められればどんな種族であつてもそれなりの地位に就くことができる。近年、勢力を加速度的に拡大しており、リングア地方と呼ばれる大陸南西部のおよそ半分を占領している超巨大国家だそうだ。

「三井さんのコネでそのばるなんちゃらの勇者にはなれませんかね？」

「いやあ、俺もバルデンフェルトの勇者団の中じゃあそこまで優秀じゃないし入ってから1年も経ってないしね。さすがにそこまでできる権限はないな」

ふむ、やはりばるなんちゃらの勇者になるのはむずかしいようだ。

「とりあえずは、三井さんみたいに冒険者ギルドで活動するっていうのが一番現実的ですか？」

「んー、ガイ君の能力がどんなものになるのかわからないからいきなり冒険者ギルドってのは考え物だね。能力がわかったらそれに見合った職に就くのが一番現実的だよ。基本的に能力が開花したらこの世界では超一流って言われるくらいの実力になる人間も少なくないしね」

確かに、自分の才能が戦闘向けじゃなくて料理人とかだったら簡単に死ねるな。

「その能力はどうやってわかるんですか？」

「ちょっとわかんないんだよね。俺の場合、こんな世界に入ったら冒険しかない。って思って冒険者ギルドに入ったからね。たまたま能力が身体能力アップみたいな感じだったからそれが幸いしたけど」

わからないんだったら、当面はどうしようもないな。金を稼がなければどうしようもないが、そのために死ぬような思いもしたくない。

「とりあえずは、どっかの店で下働きでもしながら自分の能力がど

んなものか調べるのが一番無難だと思つよ。料理屋でも宿屋でも少なくとも死ぬような心配もないし」

「……そうですか」

異世界にきてアルバイトかよ。なんか泣けてくる。勇者なのに……

でも死ぬのは勘弁してほしい。

ここで少し沈黙が訪れ、俺たち二人は話の途中で運ばれてきた料理を無言のまま口にした。

俺は三井さんに注文してもらったベルフィというリゾート風のものぐちゃぐちゃとかき混ぜながら思考にふける。

「まあ、考えていても埒はあかないし食べ終わったらギルドの相談所にも行くんだね。場所はその辺の人に適当に聞けばすぐわかるだろうから」

食事を終えて席を立った三井さんが「これは饞別だよ」と言つて、硬貨を何枚かテーブルに置いた。置かれていたのは銀色の硬貨、さっきの説明の中で見せてもらった100B銀貨が4枚も置かれてい

る。
「こんなにいいんですか!？」

「はは、何を始めるにしても多少のお金はいるよ。下働きするにしても給金が入るのはしばらく後だしね。それまでの生活費にすればしばらく生活には困らないはずだから。これでも国家専属の勇者ってのは給料がいいから気にしないでいいよ」

「ありがとうございます」

俺は三井さんに頭を下げて銀貨を受け取った。今日まで見ず知らずだった相手からこんな大金を受け取るのはさすがに迷うところだが、無一文では人間生きていけない。

「じゃあ、俺はそろそろ休憩時間も終わるし行くから。言った通り代金は払っておくから安心してね」

三井さんはそう言い残すと手を振って料理屋を後にした。

まじでこの世界でこんないい人に会えてよかった。何も知らないままだったらいきなり死亡フラグ経ってたしな。

本当に三井さんには感謝しても感謝しきれないぜ。あんないい人をさっきまでちょっと恨んでたなんて申し訳なく思える。

俺は、三井さんの助言に従ってギルドの相談所を目指すために、ベルフィを一息にかきこんだ。

熱いわ。

さて、やってきましたギルド相談所。お祭り騒ぎのおかげで相談所の前の人通りはほとんど皆無だ。

「さて、入るか」

俺は両開きの扉を押して中に入った。木造の椅子やテーブルが多く並んでいるそこは俺のイメージ通りの荒くれどもが酒を飲み騒いでいるようなことが容易にできそうなつくりをしていた。そう、つくりをしているだけで実際にそうしている人間はいない。というか、人間がない。

「あの、誰かいませんか？」

受付らしい場所にすら誰もいない。カウンターの目の前に立って声をかけても返事すらない。いったいどこゴーストタウンだ？

どうしようもないので、人が来るまで待つしかないだろう。俺は適当な椅子を引いて座ろうとした。

「？」

椅子の色がなんだかおかしい。昼間だが、広い建物内は明かりを焚かなければほの暗い。しかし、それ以上にこの椅子は奇妙な色をしている。

俺はとりあえず椅子の上に人差し指を走らせた。

「……………」

なんだか、いじわるの小姑のおそうじ検査のようだが、すくなくとも激甘に見たところでこの状態じゃ合格できまい。汚すぎ……指が真っ黒だよ。

どうやら、この椅子はしばらく使われてなかったのだろうと判断した俺は別の椅子を引いて座ろうとした。……どうやらすべての椅子が同じ状態みたいだ。

なんか廃墟みたいだな。

疑問に思った俺は仕方がないので建物内を適当に調べてみる。すると入り口近くの扉に一つの張り紙を発見した。

『閉鎖しました。御用の際は各ギルドにてお伺いいたします』

……………マジでー！？っちょ、あの……………じゃあどこに行けばいいんだ？

ギルドなんて三井さんから聞いてた冒険者ギルドって名前しか知らないしな。

まあ、外に出て誰かに聞けば教えてもらえるだろう。

入ってきたばかりの扉を再びくぐって外に出る。人通りは少ないが、まあ0じゃない。

「あの………すみません」

「あん？………ういっく」

あ、人選間違えた。すんごい酔っぱらってるし。まあ、いいや。

「宿屋とかの下働きをしたいんですけどそっぴい仕事の手廻をしてるギルドってどこにありますか？」

「ギルド？ギルドだったらそこにあんだろ………ういっく」

酒臭え。酔っぱらいの言葉を真に受けるのは危険だけど、指差された先には確かにギルドって看板が掲げられている。ギルドの上の文字がぼろぼろになって読めないけど、説明聞いて違ったら場所を聞けば大丈夫だろう。

うん、酔っぱらいに聞くよりよっぽど建設的だ。

俺は、この決定がどんな結果をもたらすのか事の時知る由もない。

少なくとも、翌日は今日一日の出来事を激しく後悔することになるのだった。

3話 今後の方針が決まりました（後書き）

旧作の3話と4話を合体

3分の2ぐらいコピペです。

なんで、ガイが冒険者ギルドに入ってしまったとか説明不足だったので、入る原因なんかを書き足させていただきました。

ちなみに酔っぱらいは単なるモブキャラなんで名前もないし再登場はしませんw

4話 なぜか冒険者になってしまいました

俺の名前は獅子王 ガイ、勇気あるGGGの隊員……ではない。
勇者……らしい。ちなみに本名。

日々の生活のために働くことを決心した。……二トじゃないですよ？

とりあえずは、命の危険がない宿屋の下働きなんかをするために、そう言った仕事を斡旋しているらしいギルドに登録することにした。だが、この世界に来たばかりの俺がどこのギルドに登録すればいいのかわかるはずがない。

超絶いい人の三井さんの助言に従って、そのことを相談所で聞こうと思つたら、その相談所がつぶれてるって有様だ。いや、俺はこんなところで諦めたりしない。

道行く人（酔っぱらい）に聞こうと思つたら、なんのギルドかはわからないが、ギルドの場所を教えてもらったので、どこのギルドで登録すればいいのかを聞けばいいと思い、建物の中に入ったのだが、そこでもまた問題があった。

もう、ここまで問題が続いたら神様に意地悪されてるんじゃないの？って思えるが、俺はこの程度で神様を嫌いになつたりしない。なにせ、俺の厨二精神を震わせるこんな世界に招待してくれたんだ、この程度で嫌いになつたら神様に申し訳ないぜ。……強がりじゃないですよ？

さて、説明が長くなったが今俺が直面している問題について説明

しよつ。

なんか知らないが、俺は入ったばかりのギルドでメンバーに登録されてしまったらしい。そのギルドってのが問題だ。

「いきなり冒険者とか、準備もなしになれませんって！何とかならないんですか？」

「だから、無理だつてば」

「そこをなんとか！」

「だああ、もうあんたしつこいわね！無理なもんは無理！」

俺は美人のお姉さんを前に必死で縋り付いている。いや、冒険者にされるとかどんないじめですか？

土下座しろつてんなら土下座でもなんでもしてやるから何とかしてくれつて……

さて、理由を説明するために10分ばかり時間をもどそう。

新たに始めようとする仕事は、単なる下働きっていうアルバイトみたいなもんだが、異世界に来ての生活が始まるんだ。心躍らぬわ

けない。

スキップしながら鼻歌交じりにつてほど傍目から気持ち悪いこと
はしないが、心ときめかせてギルドの扉をあけ放つ。

さて、やってまいりましたギルド！さっきの相談所と同じで、案
の定人が居ない。

ここも閉鎖してるのかと思ったたらカウンターの向こうに人はいる
らしい。下働きの斡旋をしてるギルドはどこか聞いてみるとしよう。

「あの、すみません」

「?.....ああ、はいはい。町中で祭りやってんのに、ギルドに来る
なんて物好きね」

なんでいきなり毒づかれなきゃいけないんだ？さもめんどくさそ
うに対応するのはやめてほしい。

お姉さん美人なんだからそんな顔しないで.....ぶっちゃけ怖いで
す。

「どっ？」

「はい?」

「いや、いきなり」で?」とか言われても何にも出来ないんですが。

「はい?じゃなくてギルドカード出しなさいよ」

「持ってないんですけど……」

「ええ〜登録なの?もつめんどくさいわねえ……わざわざこんな日に登録に来なくなっついていいじゃない。まったく」

「いや、そうじゃなくて……」

お姉さんは人の話も聞かないでカウンターの下に潜り込んでがさごそと何かを探しているようだ。

「じゃあはい、このカードに血い垂らして」

「いやだから……」

お姉さんはそう言って何かの金属でできたような板とナイフをカウンターに置いた。ていうか、話を聞け。

「もう、ただでさえめんどくさいんだから早くしてよ」

「っちよ!?!?」

お姉さんは、じれったそうに俺の手を掴むとナイフで指先に小さく傷をつける。ちくりとした痛みを伴い俺の血が一滴だけ板に落ちる。

「はいかんにょー。明日には手続きも終わるから取りに来るように。わかったら帰んな」

「……だから、俺はギルドに入りに来たんじゃないんだよ」

「は？」

ようやく要件を切り出せそうになったところでお姉さんは美人だ。呆けたようにあんぐりと口を開けた。美人の間抜けな面つてのは初めて見たが、美人はどんな顔しても美人だ。

「ここって宿屋とかの下働きの斡旋してますか？」

「いやしてないよ。だってここ冒険者ギルドだし」

「じゃあ、下働きの斡旋をしてるのはどこのギルドですか？」

「一般労働ギルドだけど……」

「どこにあるんですか？」

先ほどまでと違い、どうにもお姉さんの歯切れが悪くなった。なんだか気まずそうな顔をしてるがどうしたんだろう。

「……あんたそこに行つてどうするつもり？」

「いや、とりあえずそういつた仕事から始めてみようと思ひまして」

いきなり異世界に召喚された勇者が下働きを始めるとかっつて言いたくはない。詳しい説明は省きたいところだ。なにせ勇者だからな、情けないところはできるだけ隠しておきたい。

「……………」

「どうしたんですか？」

「……いや、悪いけどあんた一般労働ギルドには入れないよ」

「は？な、なんでですか？」

あれか？勇者はそんな情けない仕事をしてはいけないと法律で決まっているのか？

いや、お姉さんには俺が勇者だと説明してないし……服を見ればそれっぽいとはわかるのか？

なんでもいいけど、それは困る。

「だってあんた冒険者ギルドに登録されちゃったもん」

「へ？」

なぜ？ why？なにゆえ？

そんな書類とかにサインした覚えは一切ないんですが。

「さつき血を垂らしたカードがギルドカードなんだけど、あれってどこのギルドとも情報の共有がされてるんだよね。だからどこかのギルドに登録したら、別のギルドでは登録できないの」

「なんでですか！？別にいいじゃないですか！」

「まあ規則だからしょうがないってやつよ。一応半年たつたらギルドは脱退できるようになるからそれまでの辛抱ってやつね」

それまでに生活費が底ついて死にますって……働こうとしても冒険者の仕事でも死ねるっばいし。

餓死するかそれ以外の死に方か……ある意味究極の選択だな。

「そうだ！だったらそのギルドカードを提出しなければいいじゃないですか。お姉さんがそれを登録しなければ……」

「ああ、それは無理。登録自体は血液登録した瞬間に魔法で自動的に実行されるからもう手遅れ。明日までかかるのは書類上の事務仕事があるからだし」

……どうしようもねえな。完全に退路断たれたか？いや、まだどつかに抜け道があるはずだ。

「だったら、お姉さんのミスなんだからその辺無効にしてくださいよ」

「無理無理、私にそんな権限ないから」

「せめて上に掛け合ってくださいよ。こっちには命かかってんですから」

「こっちはマジで、命がけだ。今後の人生すべてが今この瞬間にかかってると言っても過言じゃないだろう。」

「無理だつつの。人間諦めが肝心なんだ、あきらめな」

「いや、俺はあきらめない。あきらめたらそこで試合終了だと偉大な先生が言っていたんだ。」

俺は絶対あきらめない。

そして、冒頭へと戻る。

「アリア君どうしたのかね？」

「あ、マスター……」

お姉さんの背後から現れたのは初老の男性だった。うう〜ん、ナイスマドルって感じのダンディなおじ様だ。マスターってことは、ギルドマスターでいいんだよね？

「あー！」

「実は、ちょっとした手違いで彼のことうちのギルドに登録しちゃったんですよ。で、彼の方は一般労働ギルドに入りたかったらしかっただんですけど、登録終わっちゃってるんで……」

「はあ、なるほどね」

俺が話す前にお姉さんが説明してくれた。いや、俺に言わせなかつたって言うのが正しいか？

下手なこと言われて困るのはお姉さんの方だからな。

「ふむ、困ったね。……君はなぜうちのギルドへ？」

「いや、相談所が閉鎖してたんで最寄りのギルドに来たんですよ。外は酔っぱらいばかりだったから、その一般労働ギルドですか？ そのギルドの場所を聞こうとしたんですけど、最寄りのギルドを教えられたんで、最悪ここで一般労働ギルドの場所を聞こうと思いまして」

「……なるほどね。服装を見たところ、君は勇者ってことでもいいのかな？」

「あ、はい」

やっぱり、学生服着てるのは勇者ってみなされるんだろうな。事実だからどうでもいいけど。

「そうか……この世界に来たのはつい最近かね？」

「はい」

「なるほど、住む場所もないから、住み込みで働ける下働きをしようとしたってところかな？」

「……はい、そのとおりです」

ここまで見事に推理されるってことは俺みたいなやつは多いのか？でも、何十人も勇者がこの世界に召喚されるってことはそれだけ、地球から行方不明者が出るってことだろ？

そんな神隠しが頻発しているなんて話、聞いたことないしそんなに数が多いとは思えないけど、どうなんだろう？

「彼女から説明されただろうが、一度ギルドに登録されると半年は待たないと解除することができない。申し訳ないと思うが、我々ではどうしようもないんだ」

「なんでですか？」

そもそも一つのギルドにしか登録できない理由がわからん。別に二つでも三つでも登録してもいいじゃないか。

「異世界から来た君には理解しがたいかもしれないが、基本的にギルドの仕事はすべてギルドカードに大きく依存しているんだ。仕事の受領、達成か失敗かの判断、報酬の受け取りのすべてをギルドカードが自動で行っている」

あの……ギルドカードってどんだけ高性能なんですか？

そもそも仕事の達成とか失敗とかの判断ってどうやってるんだよ。詳しいシステムの説明を要求する。

「ギルドカードはすべてのギルドで統一された規格のものが使われているが、中身が違う。冒険者ギルドであれば、冒険者ギルドの仕事に関してしか、判断できないんだ。確か、君たちの世界でいうテレビゲームとかいうもので説明すると、ピーエスのゲームはロクヨンでできないとかだったかな？」

「なんで、テレビゲームとか知ってるんだ？やっぱり、俺の前にこの世界に来ていた勇者たちがそんな表現をしたのか？というか、例えが古いわ。」

「まあ、自分で言ってるってどんなものかわかってないみたいだし、マニュアルとかでそういう説明をしろってなってるっばいな。」

「だったら、もう一度労働者ギルドで登録すればいいんでしょ？もう、登録を取り消せとは言わないんで、場所だけ教えてもらえませんか？」

「……それもできないんだ」

「なんでだよ！」

「あれだろ？PSのゲームが64で出来ないんだからPS買えばいいって話じゃないのか！？」

「ギルドカードは非常に優秀な魔法具だが、優秀であるだけに条件

がある。複数を所有した場合は情報が錯綜して処理できなくなるんだ。ああ……たしか君の世界で言うところのええと、一つのメアドでアカウントは二つ作れないのと同じ感じで、この場合のメアドである人間は二つのギルドカードは持てない……だったかな？」

なんだそりゃ……アカウントなら消去して登録しなおせるだろ。いや、まあなかなか面倒なシステムってことなのか？

ちよつと納得できないけど、どうしてもできないって言うなら仕方がない。

「わかりました。百歩譲って冒険者ギルドに登録されたってことはこの際かまいません。ただ、こんな事態になったんだから、冒険者ギルドの仕事として宿屋の下働きをするとかの特例を認めてください」

「悪いがそれは無理だ。同じギルドと名のつく組織だが、冒険者ギルドと一般労働ギルド、それに他のギルドはすべて別の組織だ。お互いに利権なんかも絡んでくるし、簡単に頭を下げたりも出来ないんだ」

いや、こっちは被害者だぞ？そんな理不尽な話があるか。

「そちらに都合があるつと、こっちは何も知らずに一方的に登録されたんですよ？組織にはいろいろと制約があるのはわかりますけど、もっと誠意のある対応とかなできないんですか？」

「君の気持ちもよく理解できるよ。だから、こちらの不手際で君がこのギルドに登録された以上は、最大限の便宜を図らせてもらう。低危険度の仕事の報酬は通常の倍支払うし、基本的な装備の一式はこちらで用意する」

……冒険者ギルド内での便宜は図ってもらえるのか。だからってなあ……

俺だつて男の子（厨二）だから冒険者にあこがれている部分は多大にある。もしも才能がそっち方向なら喜んで冒険者になるつもりだった。だからって、こんな無理やりな展開で冒険者になるなんて嫌だ。

ああ、そうさ。これは単なる俺のわがままでよ。冒険者になるときはいきなり期待の新人現る！みたいな感じで颯爽と登場したかったんだよ。

それを、自分の能力もわからない現段階で冒険者になるなんて……

「あとは、そうだね……住む場所のことだが、アリア君」

「はい？」

説得なんかはギルドマスターに一任した事件の張本人は突然話を振られて、驚きに目を見開いてギルドマスターの方へ顔を向けた。

アリアさん

お姉さん、説明をギルドマスターがしてくれるからって、我関せずって感じているのはどうなんだ？

「君は確かギルド管理のアパルトメントに一人で住んでいたよね？」

「ええ……まあ……一応………あ！もしかして、あそこに住ませる気ですか！？ダメですよ、今あそこ満室ですから。いくら、ギルドの失態とは言え、今住んでる住人を追い出すようなまねできませんから」

ギルドのって……いや、まあギルドのって言えばギルドの失態だけど、諸悪の根源はあなたですよね？

「ははは、いくら私でもそんな真似はしないさ。ただね？たしかあのアパルトメントの間取りはキッチンにリビング、あとは個室が2つだったよね？」

「……………ま、まさか……………」

「君の部屋は個室がひとつ空いているわけだ」

「あの……マスター？」

「私が言いたいことはわかってもらえたかな？」

「あの……私、女ですよ？いくらなんでも見ず知らずの男と一緒に暮らすのは……………」

「ははは、まさか彼を手違いで登録した張本人が、断るはずがないよね？」

「……………」

「……いや、いきなり見ず知らずの女の人の家に厄介になるのはこちとしても戸惑うんですけど……」

「そりゃ、このお姉さんは美人だし、一緒に暮らせるってんなら嬉しいことは嬉しいけど、ぶっちゃけ戸惑いの方が強いし、このままの空気だとめっちゃめっちゃ気まずいんですけど？」

「で、アリア君。私の言いたいことは理解してもらえたかな？私としても、ギルドマスターとしての強権を振るって、無理やりと言うのは好ましくはないんだ」

「あの、それってほとんど強権振るってるようなもんですよね？」

「なんか、お姉さんが気の毒になってきた……」

「あぁっ、もう！わかりましたよ！私の家に住ませればいいんですよ！？」

「君の所に彼を住まわせてくれるのかい？それは助かるよ」

……マスターさん、いけしゃあしゃあとよく言えますね。

お姉さんに心の中で合掌しつつ、マスターさんの言葉を待つ。

「というわけで、当面の間は君の住む家もたつた今こちらで用意した。どうだろう、とりあえず登録が解除できるまではこのギルドで仕事をして、時を待ってはもらえないだろうか？」

登録は解除できない、冒険者ギルドで仕事をする上でサポートをしてくれる。俺に選択肢なんて残されちゃいないか……

「わかりました。よろしくお願いします」

「そうかい、それはよかった。じゃあ、とりあえずは冒険者ギルドの説明と君に渡す装備なんかの説明をするから、2階にある私の応接室に来てもらえるかな？」

ギルドマスターの応接室？そんなところで説明されんの！？

まあ、こっちとしてはおとなしく指示に従うほかないから、とりあえずは行くけどさ……てか、それよりの部屋とかないのかね？

俺は、受付にいたお姉さんとは別のギルドの職員さんに案内されて2階へと続く階段を上って行った。

……ギルドマスターの部屋ってどんななんだろう。

side out

まさか、自分の家に今日あったばかりの少年……いやさ、青年を住まわせることになるとは思っていなかったアリアは、心の中で涙を流しつつギルドマスターである、キューマの言葉に我が耳を疑う思いだった。

彼を自分の部屋に住ませるといつ時点でも驚きだったが、こんなこの世界のことを何も知らないような青年をキューマが自らの応接室で応対するなど思ってもみなかったからだ。

そもそもが、彼のような勇者は1年で数名から数十名が冒険者ギルドに登録される。彼のような事情で登録されることは滅多にないが、必ずしも0ではない。だいたい、2年に1回くらいは似たような事例がギルド内で話題になる。

今までの例を見れば、装備の1つか2つとしばらく宿屋で暮らせる程度の当面の生活費を渡して、ギルドの簡単な仕事を説明して終わると言うのが対処の仕方だった。

当然のことだが、その説得などの部分は各町にある冒険者ギルドのマスターが行うのが常ではあるが、彼に対して提示された条件はあまりにも破格だ。

「マスター……どういつもりですか？」

「なにがかね？」

彼を自分の家に住ませるといふ事実には、カウンターに突っ伏していたエリアはキューマを見上げながら尋ねた。

「彼に提示した条件、普通じゃないです。それに説明なんかは一般の応接室があるじゃないですか。それをわざわざギルドマスターの執務室で説明するなんて、今までに聞いてきたトラブルの対処でも聞いたことがないです」

青年、ガイに伝えたキューマの応接室とはギルドマスターとしての執務室も兼ねている。当然、機密にかかわるような書類などは別室にて保管されているが、マスターの執務室での対応など、どこぞの貴族でもなければありえないことだ。少なくとも、一介の冒険者との話し合いに使われることなどありえない。

「提示した条件に何か不満でも？」

「今までにあった同類の事例の対処法から見ても、報酬を倍にするだとか、装備一式を渡すなんてなかったはずですよ」

「そうだな。今までにはないことだ」

「だったら……」

「だがね、アリア君」

「？」

「彼にはなにかある」

「なにか……ですか？」

「ああ、長年ギルドマスターなんてやってると、その人物がどんな人間か見ただけである程度は判断できるようになるもんだ。君だつてそうだろう？」

「まあ、マスターはやってませんけど、受付も長いですからね……確かに言われてみると、受付した時にその人がどのくらいのランクかってなんとなく、わかりますけど」

「少なくとも、あの青年にはそんな冒険者としての空気なんてみじんも感じられなかった。」

「当たり前だろう、アリアが感じ取っているのは冒険者としての経験から纏つようになった空気をなんとなく感じ取っているのだから、なんの経験もないガイの纏う空気など感じ取れるはずがない。」

「まあ、人生経験の差だな。彼は、なにかある」

「……もしかして耄碌したんじゃないですか？」

「……………アリア君」

「はい？」

「今日の失敗について、明日の出勤前までに始末書を300枚書いて提出しなさい。あと、減給1か月だ」

「え”!?”」

ガイの対応のために、自室へと戻っていくキューマの後姿を見送りながら、アリアはさめざめと泣いた。

なんで、自分がこんな目に合わなくてはいけないのか……

古き人はよく言ったものだ。自業自得、口は災いの元、短気は損気、弱り目に祟り目、全部あてはまっている自分が悲しかった。

4話 なぜか冒険者になってしまいました(後書き)

遅くなりました。ちょっとプライベートがバタバタして更新が遅くなってしまいました。

モチベーションが下がったとか、ネタに詰まったとかじゃないのでご安心ください。

さて、基本的に旧作の5話から進行していないのに、文章量は倍以上になりました。

しかもギルマスに名前が!?

説得の仕方なんか、けっこう力技になってしまいました。ご容赦ください。

5話 新たに装備を手に入れました

俺の名前は獅子王 ガイ、勇気あるGGGの隊員……ではない。
勇者……らしい。ちなみに本名。

俺は今、冒険者ギルドのギルドマスターの応接室にいる。なんか、いかにもと言った風情の執務机にいろんな本やファイルなんかが並んだ本棚。そして、部屋の中央に置かれた豪華な椅子と妙につややかな光沢を放つ机が置かれている。

想像以上に豪華であつても想像以下ではないと思う。貧困な俺のボキャブラリーではこの部屋の豪華さをなんとも説明しづらい。

まあ、さすがにふかふかのソファつてのはこの世界にないのか、椅子は木製だつたけどソファに負けないくらいすわり心地は抜群だ。

「さて、まずは自己紹介をさせてもらおう。この街で冒険者ギルドのギルドマスターをしているキューマ・ベキだ」

ギルマス、キューマさんはなんとも落ち着いた雰囲気のおジサマだ。見た目と雰囲気だけだったらジェントルマンってこういう人と言っんじゃないか？って思える。

スーツみたいな服を着こなし、蓄えられた髭もダンディの一言に尽きる。

「獅子王 ガイ、先日この世界に召喚された勇者です」

一応、キューマさんもわかってるだろうけど、勇者だったことをもう一度言っておく。いや、俺自身勇者だなんて自覚は全然ないですけどね？

「ふむ、不躰で悪いがガイ君。君はこの世界に来てどのくらいになるのかね？」

「今日で2日目です」

「2日？それはまた、ずいぶんと面白い時期に召喚されたものだね」

まあ、召喚された当日に国が亡びるんだから、面白い時期だろうな。ほんと、国が亡びるなんて誰が原因でそんな大事になったのやら。

「しかし、2日でどうやってこの国……いや、もうバルデンフェルト領だな。どうやってこの街へ来たんだい？」

「どうやって……ってのは？」

「隣国だったバルデンフェルトにしろリエルドにしろ、召喚の神殿からこの街までは早馬を潰しながら走り続けても4日はかかる。それをどうやって、召喚されて2日でこの街まで？」

「どつやってもなにも、俺はこの街で召喚されたんですよ」

「この、街で？」

「はい」

「なるほど……ああ、すまない話題がそれてしまったね。君をこの部屋に呼んだのはギルドの説明のためだった」

キユーマさんはそう言って、一枚の板を机の上に置いた。

その板は、漆塗りっぽい机の光沢とはまた違う、かといって金属らしい光沢とも違う光方をしていた。大きさはテレカや免許証とそう大差ないみたいだ。これ何製？

「これが明日、君に渡されるギルドカードと同じものだ。血液による登録をすることでその人物の情報を記録する。たしか……ディエヌエイとか言うんだったかな、君の世界では」

「こんなちやちな板がDNAを記録する？まあ、地球での道具だつてそんなに大きくないのか？いや、詳しいことなんて何も知らないけど。」

「そして、この板がギルドに所属する者にとっての身分証であり、成果の一端だ」

「？」

「このカードはさつきも説明した通り、複雑な魔法がかけられていてね。一般的には特殊魔法と呼ばれる、成立から300年以上が過ぎた今も詳しい原理なんかは解明されていない魔法なんだ。その魔法により、登録者のデータの記録、更新、実績の記録、更新、物品の譲渡契約、売買契約、様々な部分で使われている」

いや、どんなカードですか？ちよつと高性能すぎるんじゃない？

だって記録はわかるよ。いや、わからないけど納得はできる。だけど、更新ってなんですか？どうやって判断してるんですか？

つか、解明してない技術ってことはオーバーツじゃん。それを普通に使ってるんですかあんたらは！

「……その、ギルドカードって貴重なんじゃないですか？」

オーバーツなくしたりしたらすんごい金額取られたりするんじゃないの？っていうか、それは貸与？それとも付与？

「いや、そんなことはない。どういった原理かはわかっていないが、作り方はわかっている。これも大量生産されたものの一つだから、なくしたところで少しの再発行手数料で作り直せるさ」

ああ、俺以外にもそんな心配する人いるんでしょうね。なんか、説明が手馴れてますよ……いや、ギルマスがわざわざ説明することであるのか？下積みが長かったとか？

「とりあえず覚えておいてほしいことは、このカードは君が冒険者として生きていくうえで、冒険中でも、普通の生活でも大事にしないではいけないということだ」

「普段の生活でも？」

「ああ。さっきも言ったが、売買の契約つまり、普通の買い物にも使えると言うことだ。基本的にギルドの報酬はギルドカード内にデータとして記録される。使えない場所もあるから、多少はギルドで現金化して受け取る必要があるだろうが、この街で買い物をするなら、カードさえあれば問題はない」

その後も、カードの説明を続けられたけど、それはなんでそんなに高性能なんですか？

このちっぽけなカード一枚が、クレジットカードにキャッシュカードとして使えるほか、各種契約書の保存機能、さらには一般人でも操れるレベルの魔力を流し込むことで、その場でお互いに契約の魔法をかけることができるとか……これってある種のチートアイテムじゃないですか？

「さて、次に君がこれから行う冒険者ギルドに依頼されている仕事についてだが、基本的には街の外での活動が中心になる。時折、用

心棒みたいな依頼もあるが、あれはまあ例外ってやつだ」

そもそも戦闘力皆無……いや、不明ってことにしておこう。戦闘力不明な俺では用心棒なんてできるわけない。

「大まかに分類すると、冒険者ギルドの仕事は、採集、討伐、探索の3つに分けられる」

まあ、名前のままだな。採集は、依頼主が欲しいものを取ってくるだけ。討伐は、依頼されたモンスターを倒すだけ。探索するのは……ダンジョンとかを調べることか？

「前の2つはわかるんですけど、探索ってというのは？」

「そのままの意味だ。街の外にあるダンジョンに潜ることや、未開拓の地を調べることでってというのが一番多い仕事だな」

なんでもこの世界には、突如何もなかった場所に小さな山？みたいなものが出現し、その山の麓にある穴に入ると迷宮と言われるダンジョンが存在するらしい。

一般的には最下層に存在するボスを倒すとダンジョンは消滅するらしいのだが、実際に消滅したダンジョンは両手の数で数えられる程度のものらしい。

「先日もこの街の近くにダンジョンが出現した。何名かの冒険者が探索に向かったが、半数は重症、4分の1が死亡した」

……危なくない？ダンジョンって、マジで危なくない？

「……でも、ダンジョンってのは探索しなくちゃいけないものなんですか？死ぬような危険な目に遭うくらいなら、ちよっかい出さなければいいじゃないですか」

「それが、そもいかなくてね。定期的にモンスターを間引いておかないと、迷宮からモンスターが外に出てくるようになる。そうすると近隣にある町や村が危ないし、街道も安心して往来することができない」

「……なるほど」

迷宮の出現理由や、ボスを倒すことで消滅する詳しい原理なんかは説明されてないらしい。この世界では、そういうものと半ば納得と言っか諦めているとか。

しかも、迷宮ではRPGよろしくアイテムが散在しているらしい。比較的上の階層では、それほど貴重なものはないらしいが、ボスに近づけば近づくほどレア度の高いアイテムが手に入るとか。

さすがに、モンスターを倒して金を拾うことはできないが、死骸から売れる部位をはぎ取ることと結構な金になるとか……どこのモ

ン
ン？

「君にお勧めするのは、やはり採集の仕事になる。気を付けてさえいれば、危険なモンスターに会うこともなく仕事を進めることができる」

まあ、そうでしょうね。討伐の依頼が出されるようなモンスターなんて、凶暴だとか人を殺したとかって理由で依頼が出されるに決まってる。そんな一般人が相手にできないようなモンスターを、俺が相手できるはずがない。

「さて、仕事についてはだいたい説明も終わったが、なにか質問はあるかね？」

「ん〜……今のところは大丈夫だと思います」

まあ、仕事を続けていくうちに疑問は出てくるかもしれないが、それはその時に聞けばいい。採集だったら死ぬ危険も少ないって言うし、油断は危ないかもしれないけど、気を張りすぎる必要はないだろ。

「そうかい？では、君に渡す装備を決めたいのだが、君は何が得意かね？」

「さあ？」

物語の主人公みたいに剣道をやったただとか、武道の経験があるなんて設定が俺にあるわけない。運動神経が悪いとは言わないが、武道の経験なんて、中学の時に授業でやった柔道と高校の授業で選択した剣道くらいのもんだ。

授業で習うレベルなんて、素人に毛が生えた程度。本職の人間と比べられるようなもんじゃない。いや、でも剣道やってたし、ある意味では剣がいいのか？でも、この世界に刀なんてあるのか？

「なら、君の世界には侍とか言うものがいたんだろ？なんとなくでも動きが分かるぶん、剣がいいだろうな」

言いながらキューマさんは女性職員さんに言っていくつかの武器を持ってこさせた。

けっこう重そうなロングソード、刀に近いがどちらかというところラスっぽい片刃剣、俺の身長ぐらいの長さがある大剣、皮っぽいテカリ具合の鎧、銅製の鎧、先の2つと違い全身を鉄で覆うタイプのプレートメイル（バラバラだけど）。

他にもよくわからん武器なんかがあるところ狭しと並べられる。さすがに、一人でこれだけのものを持ってこれるわけないので、持ってきたのは男性職員を中心とした数名だが、プレートメイルを一式抱えていた男の人なんか、俺よりも確実に力がありそうなのに息を切らしている。

プレートメイルなんかは、訓練された人間なら普通に動けるようなものらしいけど、事務仕事中心だろうギルドの職員さんや、俺みたいに休日は日がな1日、家に籠ってゲームしてるような人間には重すぎる装備だろう。

プレートメイルと同じ理由で大剣もアウトだな。というか、ゲームならともかく、あんなデカイ武器を人間が振りまわせるなんて到底思えないんだが、どうなんだろう？

「好きなものを選ぶといい。引退した冒険者の中古品や、冒険者が迷宮の上の階層で見つけたものばかりで申し訳ないんだがね」

いや、種類の豊富さから見てもあんまり気にしなくていいですよ？まあ、中古品だと手入れとかしないといけないかもしれないから、ちよつと微妙な感じはするけど。

さて、どうするか……いくらなんでも、3つも4つも貰うのはちよつと気が引ける。というか、持って帰るのも大変だ。せいぜい武器と防具2つずつってのがいいところだな。

いくつか手に取ってみるけど、重いもの軽いものデカイもの小さいものと種類は本当に多い。

移動のことなんかを考えるとあんまり重いものはいやだけど、金属の重さはすなわち防御力の高さだろう。命の危険を考えると重いからいやだなんて言えない。

だからって、移動できないぐらい重いものは論外。適度な重さで

頑丈そうなやつがいいな。ってか、気持ち銅より鉄の方が軽いつて驚きだ。なんか、銅の方が軽くてもろく、鉄の方が重くて硬いつてイメージあつただけだ……

まあいいや。とりあえず防具はこの鉄の鎧にしよう。前面は胸と腹、後面は背中全体を守るタイプで、肩は出てるから、腕も動かしやすそうだし。見た目がなんとなくサヤ人の戦闘服っぽいけど、まあそれは、気にしない方向で。

でも、そうすると肩から腕までが守れないし、手甲も貰っておこう。

あとは武器だけだ……どうすっかな？

手に取って振ってみたりするけど、なんとなくしっくりこない。最初に目が入った、ロングソードは結構な大きさと重さがあるから、ちよつと取り回しに難があるし、細剣は軽くていいけど、なんか頼りない。

形的に日本刀に近いものがあるし、カトラスがいいかな……

「？」

カトラスを取ろうと手を伸ばしたところでその存在に気が付いた。

刃は細く、長い。だいたい5センチぐらいの幅で、1メートルほどの刃と他のものに比べて少し長く作られている柄。

手に取ってみると、なんとなく他の剣とは違った印象を受ける。なんて言えばいいのか……そう剣を振った感触が違う。他の剣は刃の方が重いから、振った時に遠心力で振り回される感じがするのだが、この剣は柄が重いからそれがあまりない。

「これにします」

「これを？いや、刀身の長い剣がいいのだったら、こっちのツーンデットソードの方がいいんじゃないかね？」

どうやら、俺が最初に手に取った剣はロングソードじゃなくてツーンデットソードと言うらしい。ツーンデットってことは両手で持つ剣ってことかな？

「いえ、こっちの剣の方がしっくりくるんですよ」

「ふむ……得意な武器はないと言っていたが、バスタードの訓練を受けていたのかい？」

「バスタード？この剣のことですか？」

「なんだ、知らずに選んだのか？バスタードは訓練次第では、両手持ち、片手持ち両方使え、刃が長いことで間合いが広いなど利点はあるが、普通の剣とは重心や扱い方が違うから、あまり一般的とは言えない武器だ」

なるほど、さっきの俺が感じてた他の剣と違つと感じたのは重心が違つからか。バスタードってことは……ああ……破壊者？なんか、かっこいいじゃん。

副装備にグルカナイフを選び、それを腰に差す。誰だ、なんでグルカナイフを選んだって言ったやつ！いいじゃん、かっこいいじゃん。グルカナイフ！ずっと欲しかったけど、日本じゃ使い道がないから買えなかつたんだ、趣味に走って何が悪い！

まあ、副装備って言うには、ちょっとデカいけどその分、便利な使い道がたくさんあるはずだ。うん、そういうことにおこう。

一通り選んだ装備を身に着けて、体を動かしてみる。重さは全部で10キロちょっとぐらいかな？少し重いけど、これは慣れるしかないな。このぐらいの重さだったらトレーニングすれば大丈夫だろ。……たぶん。

説明が終わり、装備も選び終わったので、帰り支度を整えたお姉さん。アリアさんだったか？と合流して家へと案内してもらう。

帰り道がすっごい気まずいです。

「あの……俺は獅子王 ガイです。これから、ご迷惑おかけするか

と思いますが、よろしく申し上げます」

「アリア・ロントリーよ……そうね、すごい迷惑」

……あの、アリアさん。それはこれからじゃなくて、今このときの感想ですよ？

諸手を挙げて、キューマさんの提案に賛同してしまったけど、早まったかもしれない。なにせ、俺を冒険者ギルドに引き込んだ張本人だ。

今日一日の感想だけで言うなら、短気でめんどくさがりってところか？

「なんてね。そうは言っても、あんたがうちに来る原因を作ったのは私なんだから、あんたを責めたって仕方ないわよ」

一応、自覚はあるんですね。

「ま、半年の我慢だしね。短いつて言うほどじゃないけど、長くもないし、自業自得ってあきらめるわよ」

苦い笑みを浮かべながら、アリアさんはこちらに片手を差し出した。来た。

「これからは一緒に暮らすんだし、ギスギスすんのはいやでしょ？
ま、よろしく」

「……よろしくおねがいます」

俺はアリアさんの手を取り、握手を交わす。思ったとおり、彼女はいい人なのかもしれない。脳内での評価は見直す必要があるな。

夕暮れ時の街の中を二人で歩く。

アリアさんの手はすべすべしていて気持ちよかった マル

5話 新たに装備を手に入れました(後書き)

またまた、更新が遅くなってしまいました。申し訳ないです。

さて、フルネームが登場したキューマ氏ですが、お気づきの方いらっしゃいますでしょうか？まあ、あえて言及はしませんが、気づいた方はどうぞお一人で、にやにやとなさってください。

4話、5話と説明なんか長くなってしまいましたが、次回から冒険が始まります。

ようやくここまでこれたって感じですが、まだまだ先は長いです。

6話 仲間が増えました？

俺の名前は獅子王 ガイ、勇気あるGGGの隊員……ではない。
冒険者兼一応は勇者だ。ちなみに本名。

冒険者ギルドでの悶着から3日が過ぎた今日、俺はついにギルドの仕事を受けて森へとやってきた。

さすがに、武器を持つてるからって即実践ってわけにはいかない。いくら安全性が高い採集系の仕事であっても、モンスターと出くわす可能性は0じゃない。

モンスターと出くわしても、倒すなり逃げ出すなりの対処ができるよう武器の扱い方を勉強した。今ではバスタードを小枝のように……振るえませんか？いや、3日程度でそんな、使いこなせるような武器じゃありません。

ただ、比較的弱いモンスターが多いこの森ならば、大丈夫だろうとギルドからの依頼で、俺を指導してくれた冒険者ギルドの人（現 冒険者）も言っていた。

というわけで、ドメドメ草20株を採集する仕事を受けて、この森に来たわけなんです。モンスターが思いのほか出てきません。

15分くらい歩いていけば、スライム（姿形が某RPGと同じかは不明）やゴブリン（これもまた某RPGと姿形が同じかは不明）が出て来るらしいんだが、1時間ほど歩いているのに一度も見かけない。というか、鳥以外に動物すら見かけません。

ドメドメ草が群生している場所は、ここからさらに10分ほど進んだ場所にあるらしい。

ドメドメ草なんて見たことなかった俺は、そのことをギルドの受付のお姉さんに相談したところ、見本にドメドメ草を見してもらい、生えている場所を教えてもらった。

お姉さん曰く、道に沿って、とは言っても草木が刈られ、地面が露出しているだけのけもの道みたいなもんに沿って歩いていけば、猿でも行けるって言われた。

で、言われた通り道なりに歩いているわけだが、退屈だな。

不意にすぐその茂みが揺れた。間違っても風に揺れたなんてことはない、一か所だけ不自然な動きをした。

「？」

腰に差したバスタードの柄に手をかけ、じっと身構える。とうとう、モンスターが現れたのか？

しかし、いつまでたっても茂みから何かが姿を現すことはない。

「誰がいるのか？」

けが人でもいたのか？だとしたららうめき声とか聞こえるだろうし、

普通に誰か人がいたんなら、なんかしら動きがあるはず……

「キユウ……」

……鳴き声？動物か？

茂みをかき分けて向こう側を覗き込んでみると、そこには子猫み
たいな大きさの小動物が一匹いた。

黄色つばい毛並みで、頭や体の大きさに対して耳が異様に大きい。
頭から尻尾の先までで40センチくらい、耳の長さは20センチく
らいか？なんとなく見た目は風 谷のナウ カに出てくるキツネリ
スつばい。

怪我をしているのか知らないが、なんか弱ってる。

俺は、小動物を刺激しないようにゆっくりと近づき、逃げないの
を確認するとすぐそばで屈んだ。

「どうした、怪我でもしてるのか？」

野生の動物が言葉をわかるはずなんてないのに話しかけてしまう
のはなぜだろう？俺の予想に反して小動物は首を横に振った。え、
わかんのか？

「お前、俺の言ってることがわかるのか？」

「キユウ……」

「どつやら、わかるらしい。俺の質問に答えるように、首を縦に振って一つ鳴いた。まさにファンタジー……」

「怪我じゃないなら、どうしたんだ？腹でも減ってるのか？」

「……キユイ」

なるほど、腹が減ってるのか。

俺は腰に下げた袋の中から、適当に選んだ干し肉を地面に置いた。万が一迷った時や、腹が減った時のために持ってきていた携行食だ。まあ、一つくらいなくなっても、問題ない……と思う。

それにしても、こんな小動物じゃ、モンスターがいる森の中で生きていけるのか？自力でエサも捕まえないようじゃ、野生として失格だろ。

まあ、今回は俺が助けてやったからよかったけど、こいつはこれからどうするんだろうな。

一心不乱に干し肉をむさぼっている小動物を軽く撫でてやりながら、ぼんやりとそんなことを考える。食事の邪魔をしているような感じだが、存外、邪険にはされないもんだ。

「さて、行くか……」

ここからドドメ草が群生している場所まではそんなに遠くないはずだ。小動物が、食事を終えるのを見届けるとすくっと立ち上がって、歩き始める。

「じゃ、またな」

もう会えないだろうけど、そう言ってしまうのはなぜだろう。

まあ、モンスターも出るっていう森で初めて会ったのが、あんな小動物つてのは以外と言うか、なんとと言うか……

いい加減、モンスターの一匹ぐらいは出てきてほしい。いや、集団で出てこられたら困るけど。

しばらく歩き続けていると、徐々に道が開けていき、最終的には広い空間にたどり着く。ここがドドメ草の群生している場所のはずだ。

きよろきよろとあたりを見回すと、見本として見せてもらったドドメ草と同じ草が一本だけ生えている。群生っていうぐらいだから、密集して生えている場所があるはずだ。

なにか黒い影のようなものが動くのを視界の隅でとらえたので、

ちらりと目を向けてみると、そこにはドメドメ草がたくさん生えていた……はずだ。

なんかいるんですけど……

デカイ、なんたるボスファ　ゴ？それともおっこ　ぬし様？とりあえず、猪の親玉みたいなのがいる。

あれじゃない？ちょっとデカすぎない？普通、猪って1メートルくらいじゃないの？どう見ても4倍はデカイぞ……

「ブヒエアアア！」

鳴き声は、ブヒーじゃないのか！？

なぜだか知らんけど、俺は敵とみなされてしまったらしい。何にもしてないぞ！？

突撃してくる猪の親玉、めんどいからボス猪にしておこう。部下が見当たらないのにボス、これいかに？なんて、くだらないことを考えている場合じゃない。

原付ぐらいのスピードは出てそうな勢いで突進してくるボス猪をひらりと右に飛んで回避する。

「っふ、猪突猛進の馬鹿たれはまっすぐしか進めないんだろ？」

なんてかつこつけたことを言った矢先、ボス猪は急停止した。俺のいる位置を瞬時に悟ったのか、右に飛んで横っ飛びの体当たり。

「ぐほあっ！」

猪は、直進しか出来ないんじゃないのか！？いや、よく考えたら、そんな生物が進化の過程で、淘汰されないはずがないか……

体当たりで2メートルはすっ飛ばされたが、慌てて体を起こすと同時に腰に差してあったバスタードを抜いて、両手で構える。

はつきり言って、体中が痛い。

ふつとばされた時にうまく受け身を取れなかった。そのせいで、足を痛めたっばいから、逃げるのもきつそうだ。

またもこちらに向き直ると同時に突進してくるボス猪の攻撃を左の前に出ることで回避する。真横に立ったら、また体当たりを喰らってしまうから、ボス猪の進行方向とは逆の位置に抜けるしか避ける手段はない。

ついでとばかりに、すれ違いざまにボス猪の体に剣を立ててやったけど、うまく刺さらなかったのか少しばかりの皮が切れただけみたいだ。

「おいおい、今の俺の実力なら、余裕じゃなかったのかよ……」

うそつき！今の俺の実力なら、この森のモンスターは余裕って言うってたじゃないか！

この場にはない先輩冒険者に心の中で、文句を言ってるが、生憎と返事なんか返ってこない。というか、こんな状況で返事が返ってきても困る。

なんて、くだらないことを考えている場合じゃない。

こっちの機動力は、足を痛めているせいでガタガタ、攻撃も剣の振り方の基礎を知っている程度。あっちの機動力は直進に関しては原付並み、攻撃は巨体を活かした体当たり。……勝てる気がしない。

剣の指導をしてくれた冒険者以外にも、心構えや冒険をする上での生き残り方なんかを教えてもらってはいるが、すいません……なんにも活かせそうにありません。

冷静になってお互いの戦力を分析しろ、なんて言われてたからそれぐらいは何かかなるけど、自分より明らかに上な相手からは逃げる、なんて出来そうにない。

そもそもが、こっちがケガをしないようにするのを前提とした冒険者の心構えを、怪我した今に実践できるわけがないって。

「……」

こつちが考えていることなどお構いなしに、ボス猪はまたも突撃してきた。それも避けると同時に切りつけてやる。

今のところはなんとか避けられるけど、このまま持久戦になったりしたらまずい。

運動不足だった元高校生VS野性を生きるボス猪。どっちのスタミナが上かなんて比べるまでもない。

勝ち目なしじゃん……

逃げられない、勝てない、どうしようもない。ないないないの3拍子。

避けてから切るのではなく、避けてから目を突くか？いや、バスタードは切るのには適してるけど、突くのにはあんまり向いてないしな……

こりもせず突撃してくるボス猪の攻撃を避ける。とりあえず、目を狙って剣を振るってみるが、あたったのは額の上あたり。まあ、俺の実力で、激しく動きながら狙った場所を斬れるわけないな。

狙いすぎて動きが止まってしまった俺を、ボス猪は横っ飛びの体当たりで吹っ飛ばす。

無駄な抵抗をする俺に、なかなか腹を立てていらっしやるようです……

バスタードを杖代わりにしてなんとか立ち上がるのと、ボス猪が突進してくるのはほとんど同時だった。

やばい、足にきてる……防具類が重くてうごけねえ……

死んだっばい。頭がそう判断したのと、何かが俺とボス猪の戦いに割り込んだのもほとんど同時だった。

「ブウヒュエアアア！」

悲鳴を上げながら足を止めたボス猪。勢いが殺しきれなかったのか、地面に沈み込むように倒れこんだ。

「な、なんだ!？」

状況が全く分からん。何が起きたんだ？

突撃してくるボス猪の足元を、何か黒い小さな影が通り過ぎたのは目の端でとらえたけど、速すぎてなんだったのかはわからなかった。

「キュイ！」

「しょう……どつぶつっ。」

何が起きたのかわからない俺の耳に飛び込んできたのは、元気よ

く鳴く小動物の声だった。こいつはさつき干し肉をやったあいつなのか？

なんか、白っぽい光に包まれて全身の毛が逆立ってるから、なんとなく雰囲気が違うけど、たぶんそうだろう。いや、似たような小動物が他にもいたかもしれないけど、たぶんアイツだと思う。

あ、やばい。よそ見をしてる場合じゃなかった。

慌ててボス猪に視線を向けるともがき苦しんでるだけで、起き上がった攻撃を再開しようとしていない。

何が起きたんだ？と思ったが、俺の目はどうやら節穴だったらしい。

次第に広がっていくおびただしい量の血液、流れ出ているのはボス猪の体からだ。よくよく見てみると片足がなくなり、体に穴が開いている。……え、なにごと!？

ボス猪の体に開いた穴は直径30センチほど、ちょうどあの小動物がくぐれるくらいの大きさだ。

……まさかねえ……

「……お前がやったのか？」

「キユイ！」

恐る恐る尋ねる俺に、小動物は元気のいい返事を返してくれました。つちよ、小動物のくせに強すぎだろ……なんでこんなに強いのに、獲物の一匹も捕まえられなかったんだ？

俺の疑問をよそに、小動物は俺の肩の上に飛び乗って、俺の首筋を舐めた。なんか、なめられた場所は、さっきからひりひりしてたし、吹っ飛ばされた時に擦りむきでもしたのかな？

傷をなめるあたり、こいつは俺に敵意はないんだろう。というか、微妙に重いです。いや、軽いんだけど、膝ががくがくしてる今の状態じゃ、ちよっときついんだよ……

「助けてくれたんだな、ありがとう」

「キユイ！」

お礼を言っただけで頭をなでてやる俺に、小動物は気にするなどでも言うように一鳴きした。うん、さっきも思ったけど、こいつはなかなか可愛いぞ。

とりあえず、俺は敵がいなくなったことに安心し、その場にぐったりとあくらをかいて座り込んだ。

ほんと疲れた。まあ、最終的に俺はなんにもしてないようなもんだけど、精神的にはほんと疲れた。

こんな化け物猪がいるなんて聞いてないし。

それにしても、こいつがやったってのはいいにしても、いったいどうやってこんな穴開けたんだ？

ちらりと小動物に視線を向けてみるが、いつの間にか座り込んだ俺の膝の上で丸くなっている。……いつの間に。

でも、さっきの白っぽい光は消えてるし、逆立ってた毛もおとなしくなってる。魔法かなんかを使ったってことか？

まあいいや。そんなこと気にしても仕方ないだろ。

1時間ほど休憩して、なんとかダメージも引いたみたいだ。さっさと仕事を終わらせて帰らないと、このままじゃ夜になっちまう。

いつまでたっても膝の上や肩の上なんかに乗って、俺から離れようとしてない小動物のことはもう、あきらめた。完全に俺についてくる気だなこいつは……

肩の上に乗った小動物のことは気にしないで、あたりを見回してドメドメ草を探す。けっこうな数が生えていたのだが、ほとんどが食われかけだったり、踏みつけられたりして完全な状態のものがほとんどない。

……やばいな、完全な状態じゃないと引き取れないとか言ってたの……

なんでも、傷つけられたり、踏まれたりすると成分が変わって薬

にならないんだとか。

つまりは、この荒れ果てたドメドメ草の群生地帯で、傷一つないドメドメ草を探せと……

くそ、踏んだり蹴ったりだよ！

ま、危険はもうなくなったみたいだし、遅くならない程度にゆっくり探すか。

結局、無事に採取できたドメドメ草は19株でした……あれ、足りない？

7話 仕事に失敗しました

俺の名前は・・・（後略）。

七転八起……じゃない、七転八倒……これでもない、七難八苦……これだ。

七難八苦のドメドメ草採取の仕事を終えて街へと帰ってきました。巨大な猪に襲われたり、猪に食われたり踏まれたりして、ドメドメ草を探すのが大変だったりと本当に疲れた。

だから、それが報われてもいいと思ってたんだ。少なくとも、俺は……

「では、ドメドメ草の採取は失敗ということですね。成功時の獲得ポイントの1/5倍、1.5ポイントの減点です」

……マジですか？

パリッとした制服に身を包み、容姿端麗、たぶん仕事も出来そうに見える。にっこりと浮かべられた完璧な営業スマイルを見た限り、優秀そうな受付のお姉さんだが、容赦つてものは持ち合わせていないみたいだ。

「でも、あんなデカイ猪が出るなんて聞いてませんよ？」

「それらの突発的なトラブルに対応するのも冒険者としての仕事に含まれます。たとえ、自然にドメドメ草が枯れていたとしても、あらゆる手段を講じて手に入れる方法はあつたはずです」

……いや、確かにその通りって言えば、その通りですけどね？

「それに、ギルドカードの方で行われている自動査定での判断が、失敗となつていきますので、こちらで判定を変えようとしてもできませんので」

………だったら、諦めるしかないか。

キユーマさんが言っていたが、ギルドカードの決定は絶対らしい。作ることではできるが、どういった理論で動いているのかはわかっていない。自動で中身は更新されていくが、それがどうやってなされているのかはわかっていないとか。

ならば、自己申告制にすればいいのかも思ったが、申告制にすれば、必ずと言っていいほど嘘の報告をする人間は出てくる。たとえばそれが悪意を持っていなくても、例えば討伐の仕事で、本人は討伐したつもりでも止めをさせていないような状況だつて出てくる。それらの問題が起こらぬよう、ギルドカードを使っている以上、ギルドカードの決定は絶対だとか。

どういう原理で判定を下しているのかのかつて言う疑問とか、ギルドカードが間違っている可能性だつてあるとは思つたのもあるが、

今のところはそういった問題はないらしい。

今回の俺の仕事の失敗という判断だって、問題は起きたとはいえドメドメ草を集められなかったのがいけなかったってことだろう。それに、受付のお姉さんの言うとおり、ドメドメ草を手に入れる方法は他にもあった。

思い当たる理由がある以上は、文句を言うわけにもいかないか……

「ご納得いただけましたか？でしたら、違約金として100B銀貨一枚をお願いします」

マ・ジ・で!?

違約金なんて聞いてないっすよ!?!つか、100B銀貨1枚って俺の全財産の4分の1じゃん……

無理やり冒険者にさせられて、金も払わされて……いや、くそっ！選択肢がなかったとはいえ、最終的に冒険者になることを了承したのは俺だ。しかも、装備だってもらったし、現状で俺が受けられる仕事に限っては報酬を倍支払うって条件も出されてる。相手だって譲歩してるんだから、ここで俺がごねるのもなんか違うだろ……

俺は、しぶしぶながらも財布代わりの小さな袋から100B銀貨を取りだし、受付のお姉さんに手渡した。ああ……お金が無くなる

……

「そう言えば、その猪はどうなさったんですか？」

「?.....ああ、そう言えば」

俺は受付のお姉さんに指摘されて、ようやくあのボス猪の首を持ち帰っていたことを思い出した。

何度もバスタードを振り下ろし、ようやく切り落としたボス猪の首は、予備として持っていたドメドメ草を入れるための袋を2重に入れてある。しばらくツタなんかを使って吊るしておいたから血はほとんど抜けていたけど、袋の底はいくらか湿っている。

ボス猪の首が入った袋をカウンターに置いて、袋の口を開いて取り出す。

「.....これをあなたが倒したんですか？」

「いや、正確には俺ってわけじゃないですけど.....」

倒したのは俺じゃなくて、俺の隣の椅子で丸くなっている小動物だ。まあ、それを話したって信じてもらえるかはわからんけど。

「申し訳ありませんが、少々お待ちください」

お姉さんはそう言い残してカウンターから離れた。かなり驚いて

いた様子だし、なんかすごいモンスターなのか？

それから少しして、お姉さんはキューマさんと共に戻ってきた。

「やあ、師子王君。さっそくやつてくれたみたいだね」

剣の練習をしているときも、何度か顔を見せてくれたキューマさんとはギルドに入った初日以外でも何度か話をしている。

まあ、仲がいいって言えるわけじゃないけど、それなりには親しくなれたと思う。

キューマさんは挨拶もそこそこに、ボス猪の首を調べ、何かの冊子と見比べ頻りに頷いている。やっぱりすごいモンスターなのか？

「やはりね。モブ子君、ありがとう。君の報告の通りだ」

お姉さん、モブ子さんって言うのか……モブ？いや、気にするまい。

「結論から言うと、この猪は前に話した迷宮にいるモンスターだ。中階層のボスが確かこんなモンスターだと報告が来ている」

中階層のボス？

迷宮つてのは、初日に説明されたこの街の近くにある迷宮のことだろう。その中階層のボスって言ったらけっこうすごいんじゃないか？

「まあ、危険度は低危険度の最上級つてところかな？ランクで言えば、FとEの丁度中間くらいだ。まあ、集団で来られると面倒だけど、一匹だけならそれほど苦戦する相手でもないからね」

……案外たいしたことないんですね……

つていうか、中階層のボスなのにそんなしょぼいのか！？しかもあんなに苦戦したのに……

「迷宮で新たに発見された種で、一応ギルドではホワイトボアと名付けたが、まさか地上に出ているとはね……もしも、周囲の村やキヤラバンが襲われていたら間違いなく賞金が賭けられていただろう。仕事の評価は覆せないが、特別に討伐報酬として1000B、首を持ち帰った報酬として300B、合わせて1300Bを支払おう」

1300B……だいたい13万円くらいか？あんな死ぬ思いしてそれだけかよ……まあ、罰金の分を引いても1200Bの儲けだからいいじゃないけど……

文句を言つて不評を買つてもしょうがない、これで我慢するか……そもそも倒したの俺じゃないし。

報酬なんかをギルドカードに振り込んでもらい、俺は冒険者ギルドを後にした。

とりあえず、仕事は失敗だったけど金は入ったし、アリアさんのご機嫌を取るためになんか買っ行って行くな？

side out

執務室に戻ったキューマは椅子に腰かけると深く息を吐いた。

まさか、初めての採取系の仕事でこんなトラブルが起きると思ってもいなかった。そもそも、今までの例を考えれば、仕事に定められたランクを逸脱したモンスターが出現した場合は、ギルドカードも判断を成功としていたはずだ。

しかし、今回のガイの仕事では失敗とされていた。そんなことは通常であればありえない。

採集するはずのドメドメ草が足りなかったからなどと言う理由では、考えられない。なぜなら、ホワイトボアは1対1ならDランク相当の冒険者が苦戦する相手だからだ。

ガイにはFかEランクと言ったが、それは彼を増長させないための方便だ。チームを組んでの仕事であれば、Eランク相当という意味では事実であるだけに、一概に嘘ともいえない。

Gランクの仕事に個人であればDランク、チームでもEランク相

当のトラブルが発生したと言うのに、なぜ失敗とみなされたのか。いくら考えようとキューマにその答えはわからなかった。

「やはり、彼は私の考えていた通りの人間と言うことなのか？」

誰もいない執務室でつぶやかれた言葉は、沈みゆく太陽と共に闇へと飲まれていった。

7話 仕事に失敗しました（後書き）

短めです。

次の話では、ガイのステータスを大公開しちゃいます。旧作の方とは、デザインを一新し、多少は細かい作りにする予定です。

さらには、そこで今後の展開に影響する新事実が明らかに！？……なるかもしれませんw

8話 ギルドカードの新機能を知りました

俺の名前は……（後略）。

順風満帆とは言えないまでも、異世界にきてから順調な日々を過ごしている。とは言っても、この世界にきてから5日目で、死ぬような目にもあったから、順調ともいえないかもしれない。

初めての仕事が失敗に終わったとはいえ、結構な金額の報酬が手に入ったので、良かったと言えば良かった。

いや、今日という日はまだ終わっていない。ある意味、これからが本番かもしれない。

なにせ、居候の身でありながらペットを飼おうなんて暴挙に出ようとしているんだから……

俺の肩に乗って、ぐてんと力を抜いて眠っている小動物はそんな俺の緊張を気にもしないで、のんびりモードだ。おいこら……

「た、ただいまー……」

「あ、おかえり。思ったより遅かったわね……？」

扉を開けてリビングまで足を運ぶと、エプロン姿のアリアさんが出迎えてくれた。桶に水がたまっているところを見ると、洗い物をしてみたいだ。

「いやあ……い、いろいろ大変でしてね……」

「ふうん。ドメドメ草の採取なんて誰でもできるぐらい簡単な仕事なのに、どんな大変なことがあったわけ？」

「……もう、馬鹿みたいにデカイ猪がドメドメ草の群生地帯を荒らしててさ、そいつと戦ったりしてほんと大変だったよ」

「へえ、馬鹿みたいに大きい猪ねえ……で？」

「で？って？」

「そのあなたの肩に乗ってる生き物は何？」

「……あ、あれえ、こんなのがいつの間にか肩に乗ってるなんて気づかなかったぞお……あ、あははは……」

「やばい、アリアさんの視線が痛い……」。

「もっと軽い調子で、森で見つけちゃってついてきちゃったから、飼ってもいい？って聞くことと思ってたのに……」

「無言で責めるようなアリアさんの視線が……というか、もはや空気が痛い。」

「でっ」

「すみません……どうも懐かれちゃったみたいでして……」

「ふうくん、で？」

「……………飼ってもよろしいでしょうか？」

アリアさん、「で？」ってというのが怖いです。マジで……

美人の怒り顔ってなんでこんなに怖いんだ？

なんかもう、捨て犬を拾ってきた子供を親が叱ってるような感じだな……いや、いい年こいて子供と同じことしてるってのは、ちょっとあれだが。

「あんたね、野生の動物が人間に懐くわけないでしょ！？仮にあんたには懐いてたとしても、ここはたくさんの方が暮らす街なのよ！誰かに怪我させたらどうする気よー！」

「いや、こいつかなり頭がいいし、ちゃんと言い聞かせればそんなことしないって……しないでです」

アリアさん、睨むのやめてください……

あれだな、子供なら泣く。間違いなく泣く。いい年してても、ちびりそうなくらい怖い。

「野生の動物がそんな人の言葉を理解できるほど頭が良いって言っわけ？そんな話聞いたことないわよ」

アリアさんの声に反応して、小動物の耳がぴくって動いた。やっと起きたのか……アリアさんの怒声を聞きながら、ここまでのんびりしてるなんてある意味尊敬するぜ……

「キユイ」

小動物は俺の肩から飛び降りると、アリアさんの足元まで寄って行き、アリアさんの足にすりすりとお尻をなでる。いいぞ、それはかなり萌える。この3日でアリアさんが世話焼きの姉さんっぽい人だってわかったし、これはきつと保護欲をそそるはずだ。

「つぐ……なかなか、可愛い……だ、だからって、飼うなんて認めないわよ」

「キユウ……」

小動物の耳がシュンと垂れ下がる、うるうるとした瞳は「飼ってくれないの？」と、訴えかけるようだ。

そう、昔のCMで、チワワがお父さんに訴えかけるようなあの目だ。

よし行け！このまま行けば、アリアさんもアイ ルにお金を借りるはずだ……いや、この世界にアイ ル無いか。でも、俺の中では完全に「どうする、アイ ル」って流れてる。たぶん、アリアさんだっておんなじ状況のはずだ。

「キユウ……」

止めのすりすり攻撃だああ！挑戦者が、チャンピオンに止めを刺しにかかった！

チャンピオン、ダウン寸前。陥落は時間の問題だああ！……何やってんだる俺。

「はあ……わかったわよ。普段の世話はもちろんだけど、何かあった時の責任もしっかり取んなさいよ……」

小動物のすりすりとうるる攻撃にがつくりと肩を落としたアリアさんはやけ気味になってそう言った。

いや、ほんとありがとうございます。

「で、飼うにしてもこの子、名前は？」

「名前？」

そう言えば、全然考えていなかった。命の恩人で、一緒に居たいらしいから絶対アリアさんを説得しなくてはって事ばかり考えてたから、名前なんて候補すら上がってない……

「まさか、あんた考えてなかったわけ？そんなんで、飼いたいつて言ったの!？」

「いや、あの……考えてますよ？いくつか候補があつて、どれにしようかなあつて……」

「へえ」

「すみません、ジト目でこっち見ないでください。というか、いかにも信じてませんって表情やめて……いや、事実ですけど。」

「とりあえず、適当に候補つて言つて名前を挙げて、その間に本命を考えよう……」

「それっぽい名前……やばい、全然思いつかん……そういや、こいつ雄か？雌か？」

「なあ、お前つて雄？」

「キコイ」

鳴きながら首を横に振る。ああ、雌なのね……

小動物、子供、成長？……未来……雌……

「……………スクルド……………」

「……………スクルド？」

「うん、これだ。スクルドがいい。どうだ、お前はスクルドって名前は気に入るか？」

「キュイ！」

元気よく一つ鳴いてうなづく小動物、改めスクルド。なんか、なんとなくだけど、こいつの感情の機微ってのがわかる気がする。

……………？

なんか、ギルドカードを入れてるポケットが一瞬熱くなったけど、どうしたんだろう……

取り出して、適当にいじってみても何の変化もない。

「どうしたの？」

「いや、なんかギルドカードが一瞬熱くなったから、どうしたのか

と思って……ずっとポケットに入れてたし、足動かしたときの摩擦で熱を持ってたとかかな？」

いや、さすがにそれはないか……

「もしかして、更新されたんじゃない？」

「更新？」

「そ、ギルドカードの所持者が何かしらして、データが更新されると中の魔法回路が働くんだけど、情報量が多すぎると熱を持つって聞いたことあるわよ」

「へえ、そうなんだ」

「確認しないの？」

「……できるの？」

「すみません、初耳なんですけど……」

渡された時の説明も、身分証の提示を求められたら見せるようにとか、ギルドを使うときは何をすることもまずは最初に提示するようになるとかって説明をされるばかりで、てっきり、何かしらの道具を使って中身を見ることしかできないんだと思ってた。

まさか、俺でも使える機能があるなんてなあ……

「ギルドカードの魔法回路の露出部分。そう、その緑色の丸に触りながら開示するようにイメージするだけ」

「開示？」

「まあ、わかりにくかったら、『オープン』って口で言っても大丈夫よ」

「ふう〜ん……『オープン』」

俺の声に反応してギルドカードからいくつかのウィンドウが飛び出した。え、なにごと!？

空中にいくつかのウィンドウが浮かび上がるのって、こういうフアンタジー世界じゃなくて、未来のロボットものとか科学技術がすごいことになってる世界じゃないのか!？

宙に浮いているウィンドウにはいくつかの文字が並んでるけど、タッチパネル式か？

とりあえず、本人情報ってところをタッチしようとして、俺の手は見事に空振りした。

「ああ、あんたの世界から来た人は勘違いする人いるらしいけど、それ触れないからね。全部音声認識だから」

先に言つてください……

ああ、恥かいた。まあいい。

「本人情報」

Name: 獅子王 ガイ > Gai Shishioh < Lv: 2
Race: 人族
Age: 17
Job: 冒険者 勇者
Title: Tamer

Ability
格闘: Lv: 1
剣術: Lv: 3
槍術: Lv: 0
斧術: Lv: 0
弓術: Lv: 0
魔法: Lv: 0

Passive: 幸運 Lv: - - - ? ? ? の加護 Lv: - - -
? ? ? の加護 Lv: - - - ? ? ? の呪い Lv: - - - 冒険者 Lv: - - -
v. 3 肉体強化 Lv: 2
Action:

> スクール <

……さすが新人、空白が目立つぜ。っていうか、『……』ってなってるのはなんでだろ？

「……の加護は、『……』ってのが、なんなのかわかんないとわからないとかなら、無理やりでも納得できるけど、幸運も……」
「……ってのはわけが分からん。」

それにしても、勇者だったらもつとドーン！とすごい能力とかないのかな？

せつかく異世界に召喚されて、これから楽しい異世界ライフって思っても、能力低くて死にましたじゃ笑えもしない。

てか、なにこの>スクルド<って欄。俺の本人情報なのに、なんでスクルドの文字が？これも声に出せば中を見れるのか？

「スクルド」

……無反応………なぜ？あ、別にお前を呼んだわけじゃないから、こつちを見上げなくてもいいぞ、スクルド。

案の定、タッチパネル式でもないから、触ることも出来やしない。

「アリアさん、このスクルドって欄が見れないんですけど？」

「え？ああ、これ本人情報でしょ？専用のレンズを通すか、ギルド

にある読み取りのアイテムがないと他人じゃ見れないのよ」

俺が指差したあたりを見て、アリアさんはそう言った。つまりは、アリアさんには俺が何を指差しているのかわからないんだろう。

「アビリティのところの、スキルの下に括弧してスクルドの名前があるんですよ。スクルドって言っても反応しないんですけど、何ですかね？」

「ううーん、ちょっとわかんないわね。実際に見てみれば、わかるかもしれないけど、見ないと何とも言えない。普通は、本人情報なんて、登録者以外の名前が出ることなんてないんだけどね」

「そっつすか……」

まあ、スクルドの名前があるから、いけないってわけでもない。別に気にする必要はないかな。

もう一度、本人情報を流し見ているうちに俺は、アビリティに不吉な文字があることに気が付いた。

『????の呪い』

……なにこれ？

呪いってなんですか！？え、まじで？なんで？俺呪われてんの！？

アリアさんに聞きたいけど、怖くて聞けない……もしも、呪われてる人間とは暮らせないとかわわれて、家を追い出されたら住む場所が……

いや、キューマさんに相談するとか、金もあるし宿屋に泊ることはできるかもしれないけど、アリアさんみたいな美人との同居を捨てることなんて俺にはできない。

男ならば、呪われようが、美人との同居を選ぶべきだ！

……いや、でも……この呪いのせいで、アリアさんになんかあったらどうしよう……

「あの……アリアさん」

「なに？」

やっぱり、黙ってるのはよくない。きちんと話しておくべきだな。

「実は、アビリティに『???の呪い』ってのがあったんですよ…

……」

「へえ」

あの、それだけですか？

「へえ、ってそれだけですか？呪われてる人間なんかと一緒に暮らせないわ、出て行きなさい！とかってないんですか!？」

「なによ、あんた出ていきたいの？だったら、いいわよ」

「いや、俺はできればここで暮らしたいですけど、俺が呪われてるせいでアリアさんになにかあつたりしたら……」

「ああ、そんなこと心配したの？大丈夫大丈夫、基本的に呪いなんて時間が経てば消えるし、呪いによる能力低下とかは本人にしか影響しないから」

あ、呪いって能力の低下なんですか？それなら安心……できないし……

冒険者やるのに能力低下なんてシャレにならんわ！

「ふふ……」

「何が面白いんですか？」

「いや、あんたが面白いと思ってね」

「面白い？」

「そ。だって、普通呪いのことがわかんないんだったら、自分の心配するもんでしょ？それを、私の心配するなんてお人よしって言う

か、なんて言うか」

「フラグ？フラグですか？」

「っふ、俺に惚れたらやけどするぜ？……自己嫌悪だ。そもそも、この程度で女性に惚れられるんだったら、世の中モテ男で溢れかえるだろうな。」

「でもまあ、そのうち消えるらしいし、呪いの心配はそんなにする必要ないのか？」

「呪いが消えるまでは、安全な仕事を選ぶようにして、能力の低下が問題にならない程度の仕事をしよう。生きていくためには仕事はせにゃならんしな。」

「安心したら、腹減ってきた。今日は、化け物猪と戦ったり、スクルドを飼うことをアリアさんをお願いするとか、緊張の連続だったしな……」

「緊張の糸が切れた瞬間に腹が減るなんて、我ながら現金なやつだよ……」

「すみません、アリアさん。メシってありますか？」

「はいはい、食いしん坊は椅子に座って待ってな。すぐあんたたち二人分の食事の用意するからさ」

納得したとはいえ、消極的だったのに、スクルドの飯も用意してくれるあたり、アリアさんはやっぱりいい人だ。

8話 ギルドカードの新機能を知りました(後書き)

相変わらず、説明なんかかなり強引でしません。

次の話は、アリアとガイの二人のお話です。

旧作の方では、いつの間にかガイに惚れていたアリアですが、今回は一味違う!?!?!?!?! かもしれせんw

9話 盗み聞きをしてしまいました

(略)

さて、スクールが仲間になった次の日、つまり本日わたくしは街の中にある女性物を売っているブティックへとやってまいりました。

なぜかって？助走に……女装に目覚めてしまったからさ！……ウソデスゴメンナサイ。

「どう？これなんかどうかしら？」

「ああ……いいんじゃないでしょうか？」

まあ、早い話がアリアさんの付添いです。なんでも、明日の夜にバルデンフェルトの騎士たちとの合コンがあるらしい。

この世界での騎士ってのは、三井さんが給料がいいって言うていた通り、かなり高収入な職業らしい。どんな職業の人と結婚したい？ってアンケートを取れば、まず間違いなく不動の1位になるとか何とか……地球でいうところの外資系とか、広告代理店かな？いや、例えがちよっと古いか？

とまあ、そんなわけでアリアさんが勝負服を買うののお手伝いというか荷物持ちってわけだ。

「まあ、さつきからいいんじゃない？しか言わないじゃん。もつとこう、アリアさんは世界一きれいだよ？とか、君の美しさにはバルデンフェルトの三姫さえ、路傍の石のようだ。とか言えないの！？」

「すいません、それは服の感想ではなく、ただアリアさんを褒め称えてるだけです。」

騎士との合コンってことでちょっと舞い上がりすぎじゃないですか？

そもそも、アリアさんはかなりの美人だから、何着たって似合うんだから感想一緒でも仕方ないじゃん……なんて、面と向かって言えるほどの度胸は俺にはありませんて……

つか、アリアさんが合コンなんて行ったらモテんだろうな……俺は合コンなんて行ったことないけど、こんな美人が合コンの席に居たら、男ならだれでも猛烈にアタックかけるだろ……

少なくとも、特殊な趣味の人間じゃなかったら、アリアさんは、ものすごい美人だ、と10人中10人が言うほどの美人だ。

肩甲骨のあたりまで伸ばされた金髪は、太陽の光を受ければ眩しく、夜にろうそくの光をあびれば妖艶に輝く。整った顔立ちをしていて、吊り上り気味の目は気の強さをうかがえるけど、なんかお姉さまって感じの彼女には、そのきつそうな感じが逆にしっくりくる。

胸はデカいし、ウエストも細く、尻もデカい。バン、キュツ、ボンのムチプリ系のスタイル。なんか、白衣着て保健室に居たら、ものすごい似合いそう……

ま、俺みたいな平凡な男には、高嶺の花だし、本人も嫌ってはいないだろうけど恋愛対象とはみなしてないだろうから、気にしても仕方ないんだけどね。高望みしすぎて、今の日常を壊すのは馬鹿のすることだ。

ちなみにアリアさんはすでに2時間が経過しているブティックでの買い物も、3時間後に終えることとなった。一緒にいた俺は激しくげんなりしていたことを追記しておく。

翌日、アリアさんはギルドでの仕事を終えたら直接合コンの会場に行くらしい。冒険者ギルドご用達の居酒屋ではなく、騎士たちのおごりだからとかなり値の張る料理屋に行くんだとか……

朝に家を出るときはルンルンって感じで上機嫌だったからまあ、いいけど……ちょっと年甲斐なさすぎじゃないだろうか？ルンルンはないだろ、ルンルンは……

まあ、俺も今日はギルドのお仕事を入れてあるから、その報酬で夕飯は外で食べることにしようと思っている。

アリアさんが奢りでうまい飯食ってんのに、俺は家でまずい飯（俺作）なんて食いたくない。

今日のお仕事は、バルデンフェルトの騎士団に付き添って草原に出てきちゃった迷宮のモンスターの討伐だそうです。

本来なら俺のランクでは受けられない仕事だし、討伐なんて危険だからあれだったけど、精強で知られるバルデンフェルト騎士団との合同の仕事なら安全性はかなり保障される。なんか、腕の一本切り落とされても治せるぐらいの魔法使いがいるとかなんとか……あ、ちなみにこの世界では、^{クレリック}聖職者なんかも、総称は魔法使いなんだとか。

キューマさんが、バルデンフェルトの騎士団と仕事をするのは冒険者としても、この世界でただ暮らしていくだけでもいい経験になるからぜひ、と強く言うので受けることにした。

しかも、バルデンフェルトの騎士団ってことは、三井さんがいるはずだ。成り行きとは言え、冒険者として生活することにもなったし、いろいろ教えてくれた三井さんにはぜひとも近況の報告がしたい。

今日、アリアさんと合コンする騎士と会ったら笑えるな。

さて、やってきました。草原です。

点々とモンスターの姿が見られる草原は、大きささまざまなモンスターがいる。あのちっこいのがゴブリンかな？

「ガイ君、あんまり前に出すぎないようにしなよ。たとえゴブリンでも、初心者が油断したら大けがするからね」

「はい。でも、バルデンフェルトには腕の一本ぐらいなら簡単に治せる魔法使いがいるんですよね？」

「ああ、あれは周りが誇張しすぎてただけ。折れたとかなら、すぐ治せるけど、切り落とされたら秘薬とかいろいろ必要になるし、簡単には治せないよ」

……まじですか？

つくそ……治療魔法使いがいるから、安全性が高いつて安心してたのに。

ま、ここに来るまでにいろいろ話をしたら、俺の面倒を三井さんが見てくれるらしいから、油断しないようにするのは当たり前だけど、ある程度は安心できる。

さっそくゴブリンに襲い掛かろうとする三井さん。俺は、その後を追って、モンスターに攻撃を仕掛ける。

三井さんがゴブリンの両手を切り落として、俺が止めを刺す。なんでも、経験値は止めを刺した人間にしか入らないらしい。つまり、この間戦った、ボス猪の経験値は全部スクルドに持っていかれたってことだ……ちょっと悲しい。

だけど、今回の戦いで経験値はかなり稼げそうだから、そのことは忘れよう。

前は三井さんが突き進み、後ろはスクルドが警戒してくれている。ボス猪を一撃で倒せるようなスクルドは、ゴブリンくらいは軽く屠っている。

ちなみに、スクルドを三井さんに紹介したらかなり驚かれた。なんか、モンスターを役するにはそれ用の能力が必要なんだとか……俺の、この世界に来ることで開花する能力って、モンスターテイマーとかだったのかな？

それからも休憩をはさみつつ、しばらくはあたりのモンスターを倒し続けた。太陽が傾くぐらいの時間になると、草原のモンスターは大部分が掃討されていた。

今日の成果はどんなもんかと、ギルドカードで確認したら、レベルは3になってた。それ以外にも、剣術レベルも5に、新アビリティの剣士は新しい能力だって言うのにレベル2、肉体強化もレベルが5に上がっていた。

討伐したモンスターの数はギルドカードに記録されていて、それに応じた報酬が支払われるとか……三井さんのおかげでかなり稼げたっぽい……

ほんと、三井さんには頭が上がらないぜ。なんて、思いながら馬車に乗り込もうとしたところで、馬車の中から声が聞こえた。何人かの男が話してるみたいだけど、声を潜めて何を話してるんだろう……

「で、今夜だよな……」

「ああ、ギルドの姉ちゃんごまして、合コンって言ってセッティン
グさせた」

「つかあゝ、お前もワルだね」

「それに便乗してるお前はどつなんだよ」

「ま、俺は女が抱けるならなんだっていいさ」

「そつだな。薬も用意したし……」

「あの薬の効き目はすごいからな、ぐへへ」

「おい、涎垂らすなよ汚えな」

「ちょっと、物騒なお話みたいです……」

「つていうか、これはもしかして、こいつらアリアさんの合コン相
手か？」

「薬とかなんとか不穏な単語が聞こえたけど……もしかしてアリア
さんピンチ？」

「どつしたの、ガイ君？」

「あ、三井さん……ちょっとお話があるんですけど……」

「？」

もしかしたら、別の人かもしれないけど、念には念を入れないといけないからな。

草原から街へと戻ってきた。できることなら、さつき話していた男たちに張り付いていたいところだけど、お城には入れないし、ギルドへ報告もしに行かなくてはいけない。

ギルドでの手続きをしている間、アリアさんの姿を探したが、どうやらすでに店の方に移動しているらしい。

報酬の振り込み手続きなどが終わると同時に急いでアリアさんたちのいる店を探す。なんで俺は店を聞いていなかったんだろう……

side out

アリアたち冒険者ギルドの女性職員たちは予定の時間通りに店へとやってきた。普通の合コンだったなら、わざと遅れて男たちの反応を見るところだが、騎士なんてプライドの高い相手にそんなことをするのは、よろしくない。

ただでさえ、騎士と合コンできる機会など少ないことなのだから、モブ美には感謝しないといけないとアリアは考えていた。

しかし、時間になっても騎士たちは現れない。これでは、女性と男性の立場が逆だ。

「ねえ、遅くないかしら？」

「そ、そうね……でも、もう少し待ちましょよ」

「？……そりゃ、少し遅れたぐらいなら待つけどさ」

妙に落ち着きがないモブ美の態度に、少しばかりの違和感を感じつつアリアはお冷を口にした。

不意に扉を開けてどやどやと何人かの男が店の中に入ってきた。モブ美が反応したのを見ても、彼らが合コンの相手なのだろう。

しかし、さすがは騎士と言える。鎧こそ簡素なものに変えられているとはいえ、腰に差された剣は帝国の紋章が掘られた騎士の身分証だ。合コンだからと武器を外すような馬鹿な真似はしないらしい。

だが、女性陣からすれば、まさか武器を持つてくるとは思っていなかったのか、少しばかり嫌そうな顔をした者も何人がいた。

アリアは、そんな女性陣の中であって、すでにどの男を狙うのか品定めを始めていた。

「いや、すまないね。昼間は騎士団としての仕事があったから、少

し遅れてしまったよ。女性を待たせるなど、騎士として恥ずべき行為だ。お詫びしよう」

そう言っつて、一人の騎士が頭を下げた。

顔はまあまあいいが、マザコンっばいから却下。というのがアリアの感想。

騎士たちも席に着き、酒が来るのを待つ間に軽く自己紹介をしていく。

酒が来ると乾杯し、適度に質問などを繰り返していくが、アリアはなんとなく熱が冷めていくのを感じた。

今回の合コンは失敗だったかもしれない。

騎士と言っつのを鼻にかけ、面白くない人間や、なんとなく心許せない相手ばかりだ。これなら、最近居候することになった、あの青年の方がいくらもましだ。

そう、彼ならこういう場でどうするだろうか？ 案外、大人の女性ばかりでどきまぎして面白いことを言っつかもしれない。

そんなことを考えてアリアは一人小さな笑みを浮かべた。

自分は案外年下の方が好きなのかもしれない。自分でも世話焼きなのは認めるが、それを恋愛感情と言えるのだろうか？

もっと、頼りがいがあっつて、いざと言っつときに自分を守っつてくれ

るような男性の方がいいのではないだろうか？そうやって考えるとあの青年はちょっと頼りない。

そうやって考えていると、アリアは再び笑みを浮かべた。

合コンに来たというのに、なぜここにはいない青年のことばかりを考えているのだろうか、これでは本当にあの青年を好きに思っているようだ。

「どうかしましたか？」

「いえ………すいません、ちょっと失礼します」

青年について考えている間、ひたすらに話しかけてきていた男に一言断って立ち上がり、手洗いへ向かう。

いったん落ち着こう。もしかしたら、話しているうちに心惹かれる相手がいるかもしれない。手洗いから出たアリアはそう考えながら、男性用手洗いへと入る男に一瞬目を奪われた。

長年ギルドの受付をしている間に、できる人間の纏う空気と言ったものをなんとなく感じ取れる彼女だからこそ気が付いた、その男のすじわ。

ちらりと目を向けると腰には合コン相手の騎士たちと同じ、バルデンフェルトの紋章が掘られた剣を差している。しかし、彼は合コンの相手ではない。こんな空気を纏う男はあの中にはいなかった。

こんな男があの中にいたのなら、もう少し気分は違ったのだろうが、あまり贅沢も言っていられないだろう。

アリアは、一息を吐くと席へと戻るのだった。

9 話 盗み聞きをしてしまいました(後書き)

要点だけでいろいろと端折ってしまいました。

それでも想定外の長さになってしまったので前後編の2本立てです。

次回、ガイが新たな力に目覚める！？……かもしれませんが

10話 騎士と戦うことになりました

(略)

俺はとにかく走っていた。事前にアリアさんから聞いていた情報は、普段ギルド職員が行く店よりも高い店というだけだ。ギルドにいた女性職員に確認してみたが、誰も知らなかった。行きたくないし、騎士との合コンなどうらやましいばかりだから、話は何も聞かなかったらしい。

それでもいくつかの店をリストアップしてもらったが、いかなせん土地勘がなさすぎる。道行く人に聞きつつ、見つかった店の中を確認していく。

「つくそ……予想が外れてるといいんだけどな……」

往々にして悪い予感ってのは当たるもんだ。騎士たちの話していた合コンってのがアリアさんたちとの合コンと同じってのはまず間違いないだろう。

こまして合コンって言わせた、だとか、薬、なんて不穏な単語から察するに、あいつらは女性を食い物にして悪事を働いているような人間なんじゃないだろうか？

そんな男の毒牙にアリアさんをかけさせるなど、絶対にしたくない。彼女は俺の家族のような人なんだ。

恋愛対象として見てはもらえないだろうが、家族としては扱ってもらえてると思う。まあ、彼女が世話焼きってことは確かにあるが、世話になっっているもたしかだ。

少なくとも、恋愛対象、家族云々を別にしても、自分が知っている人が何か犯罪に巻き込まれるなんて絶対に許せない。

「キユイ！」

「!?!」

スクルドの鳴き声に反応して、視線を動かすと、一軒の店が目に入る。リストにある名前と一致する料理屋に戸をあけて入ると、三井さんの姿が目に入る。ビンゴだ。

「すみません、お待たせしました」

「やあ、思ったより早かったね」

声を潜めながら席に着く。

草原での仕事の終わり際をお願いして、三井さんにはあの騎士たちをつけてもらっていた。

自分と同じ騎士団に所属する人間が悪さをしているかもしれない、って話は仕事がある三井さんでも手伝わざるを得ないだろう。まあ、

三井さんみたいがいい人だったら、それがなくても手伝ってくれたかもしれないけど……

できれば、話だけ聞けばかなり悪質な手口をつかう連中みたいだし、さつさと捕まえてほしいと言ったが、さすがに話を聞いただけで悪と判断するわけにもいかず、現行犯逮捕をするしかない和三井さんに言われた。

まあ、もしかしたら、万が一の可能性でも、普通に合コンをするだけかもしれないって言われたら、反論はできない。実際、話を聞いたのは俺だけ……俺と言葉を話せないスクールだけなのだから。

不意に三井さんの目が細められた。

「どうしました？」

「飲み物に薬を入れたかもしれない……」

「！」

三井さんの言葉に、俺は睨むように視線をそちらに向けた。

アリアさんやギルドで見かけたことのある女性たちが、複数の男たちと話している。アリアさんの表情があまり楽しそうでないところに、少しばかり心が軽くなる。

「行きますか？」

「……そうだね」

俺たちは席を立つと、アリアさんたちが座る席へと歩み寄った。

何人かは俺なり三井さんに見覚えがあったのだろう、一様に不思議そうな顔をしている。いや、女性らの表情がどこかおかしい。…
…やっぱり、なんか怪しい薬を使ったみたいだ。

「貴様ら、バルデンフェルト騎士としての恥を知れ！」

三井さんが剣を抜くのに合わせて、俺も剣を抜く。

いきなり店中に響く大声で話した上に、剣を抜き放つような男たちの登場に、店の中がにわかに騒ぎ出す。

騎士たちの方も三井さんの登場など予想外だったのか一様に慌てている。

「なんで、三井の野郎が!?!」

「やばいぞ、逃げろ!」

「くそ、もう少しだったのに!」

騎士たちは慌てて立ち上がると三々五々と散り散りに逃げていく。

「っち！」

三井さんは舌打ちすると騎士たちを追って店を飛び出した。警笛の音があたりに響いているので、増援を呼んでいるのだろう。

でもね、あの……三井さん？

こちらに2人ほど残っているのですが……

裏手から逃げると見せかけて戻ってきたときはビビった。普通、こんな騒ぎになった店に戻るか？三井さんの後を追おうとして、アリアさんたちを残していくわけにはいけないんじゃないかと足を止めたのは、ある意味正解だったってことだ。

……でも、あの……俺が騎士を一人も相手できるとお思いですか？こちとらレベル3ですよ！？

「くそっ！三井が現れるなんて予想外だったぜ」

「今まではうまくいったって言うのに……」

「どっせ、この国にはいられないんだ。この女たちだけでも、どっかに売りつけてやるっぜ」

ちょっと、あんたら悪すぎない？っていつか、こんな早く戻ってきたのはそのためか！？」

「アリアさんたちを売るって、お前ら何考えてるんだよ！」

「……お前は、今日の仕事にいたギルドのガキだな」

「三井に言われて無理やり手伝わされたんだろ？見逃してやるから、さっさと逃げな」

言いながら男たちはアリアさんたちに近づいていく。やっぱり、アリアさんたちを攫おうって言うのか！？」

「……ちょっと待てやコラ！その薄汚え手でアリアさんに触らせるか！」

「なんかもっプツンといきそうです。」

「その薄汚え手で、その人に触るんじゃないやねえよ！」

「ああん！？」

「んだと、ガキが！」

騎士二人は怒り心頭みたいだが、こっちだってかなり頭にきてる。昨日楽しそうに服を選んでいたアリアさんを、今朝合コンを楽しみ

にしながら家を出たアリアさんの期待をこいつらは薄汚い欲望で裏切ったんだ。

許せねえ……絶対に。

「スクルド、一人相手できるか？」

「キュイ！」

「よし、いい子だ」

元気よくうなづいたスクルドは右手の男を正面に襲い掛かる。

こっちも先手必勝だ。刺し違えてでも倒してやる。

バスタードを振りかぶり、左手に立っていた男に襲い掛かる。いかんせん実力差があるためにこちらの攻撃は当たらないが、抵抗すると思っていなかったらしい男は剣を抜いてすらいない。

刀であったなら居合を警戒するところだが、この世界の西洋系の剣じゃ、日本刀みたいな素早い居合はできないのだろう。

だんだんと剣が重くなってきた息も切れるけど、部屋の隅まで追い込めばこっちが有利になるはずだ。

連続して剣を振っているうちに、攻撃が雑になり剣が地面に刺さってしまった。やばい！？

「なめんじゃねえガキが！」

男の方も剣を抜き、俺に襲い掛かる。くそつ。

俺は剣を放して後ろに跳ぶ。肩で息をしながら腰に差してあったグルカナイフに手をかける。

即座に追撃を仕掛けてくる男の攻撃をなんとか回避し、グルカナ
イフを抜き放つ。

男の剣はロングソード、こっちはグルカナイフ。間合いは完全に
相手の方が長いし、技量も相手が上。やべえ、また勝ち目ないな……

だけど、アリアさんを守らなきゃいけない。

さすがに、さっき頭をよぎった刺し違えてでもってのは勘弁願
いたいが、引き下がるわけにもいかない。

店の中は俺たちの戦いで大騒ぎになっているが、そんなことを気
にしてる余裕はない。

思いのほかスクルドも苦戦してるのか？気になるけど、そっちに
意識を向けられる状況じゃない。

男が動いた。

武器のリーチと体格の差を活かしての突き。横に避けて懐に潜り
込めるか？いや、相手の攻撃が速い。

相手の攻撃が避けられそうにない、一瞬のうちに攻撃を喰らう覚悟を決めて歯を食いしばる。そんな俺の視界に飛び込んできたのは、アリアさんだった。

「え？」

男と俺の間にアリアさんが飛び込む。男の攻撃は間違いなく俺ではなく、アリアさんに達するだろう。

一瞬の時間がスローモーションのようにゆっくりと、ものすごく長い時間を感じる。

「や」

何かのはじけたようだった。

「やめるおおおおおおお！！！」

体が軽い。

男の剣を蹴りつけ、軌道を無理やりに変える。それと同時に男の懐に潜り込んだ俺は、回転するようにしてグルカナイフを下から上へ切り上げた。

鮮血をまき散らしながら男が倒れる。

「はあ……はあ……アリアさん!？」

慌てて振り返ると、アリアさんは怪我一つなくそこに座り込んでいた。ああ……よかった。

急に体が重くなる。さっき一瞬感じた体の軽さが嘘のようだ。それに、ものすごく眠い……

スクルドはどうしたんだ？

ちらりと目を向けてみれば、スクルドの方も男を倒したのか、倒れ伏している男をしり目にこちらへトコトコと歩いてきている。

よかった、あいつも無事か……

だめ……だ……ね……む……い……

薄れゆく意識の中、誰かに名

前を呼ばれるような気がした。

side out

アリアは自分の鼓動が早鐘のようになっていてるのを感じていた。

急に酔いとは違う体のほてりを感じ、なにかがおかしいと思った矢先に、さきほどのできる雰囲気を纏った男と、青年が現れたのだ。

最初は何事かと思った。

慌てて逃げ出す騎士たちの姿と、できる男の言葉から、騎士たちがなにかおかしなことでもやったと言うのはぼんやりとした頭でも理解できた。

目の前で繰り広げられる戦い。冒険者ギルドにある酒場で、殴り合いの喧嘩を目の前に行うことなどは多々あったが、剣を抜いての戦いなど初めて目の前にした。

それは、頼りないと思っていた青年が自分を守るための戦いだったのが妙にうれしかった。

しかし、青年はこの世界に来たばかりで、剣の扱いだってまだまだと聞いている。そんな彼が精強で知られるバルデンフェルトの騎士を相手にするなど、どんな冗談かとも思った。

気づけば、二人の戦いに割って入り、自分が死んだかもしれないと思ったが、今こうして自分は生きている。そのことがアリアには不思議に思えた。

突然青年の動きが早くなった。

時を同じくして、青年が先日連れ帰ったペットの動きも異常な速さを見せていた。

ペットは、体の小ささを活かして男を翻弄していたが、決定力にかけるのかなか勝負がつかずにいたが、突如として異常な速さで剣に横から体当たりをし、剣を折ると同時にその長い尾でもって相手の横っ面を強打したのだ。

男は一撃で昏倒し、その場に崩れ落ちてしまった。

その場の出来事のすべてが悪い夢のようにも思えた。しかし、夢ではない。

事切れた男、そこから流れ出る血液とその匂いが、今この場が現実であることを如実に語っている。

「……………ガイ？」

アリアはようやく、はっとなって青年へと駆け寄った。

医者でも魔法使いでもないアリアには、詳しい診断などできないが、疲労から倒れてしまったようだ。外傷もないし、どこかを強打した様子もなかったので、間違いないと思われる。

騒ぎが一向に収まらない料理屋の中、アリアをはじめとしたギルド職員の女性たちは誰もが呆然としていた。

ただ一人、今回の合コンをセッティングしたモブ美だけが、事切れた男の死体に縋り付き、涙を流しているだけだった。

10話 騎士と戦うことになりました（後書き）

後編です。

今回も、いろいろ端折ってあります。こうしてアリアはガイへと惹かれていくのでした……的な話にしたかったんですが、まだちょっと物足りない気が……

まあ、ちょっと気になり始めたし、今後の展開でアリアさんはガイ君に惚れてくれるでしょう（たぶん）

次回、ガイが帝国の騎士になる！？……かもしれないw

11話 報酬はまだ貰えませんでした

(略)

偽合コン事件から3日が過ぎた今日、俺は城へと呼び出された。

まさか総じて誇り高く、国に忠誠を尽くす騎士がそんな犯罪行為に手を染めているなどと、って感じで城の方はかなり慌ただしかつたらしく、俺が呼ばれるのもだいぶ遅くなってしまったとか。

冒険者ギルドの方でも、モブ美さんが騎士たちに命じられて被害者が増えることを知りながら、合コンをセッティングしたってことで、こつちも大騒ぎ。お城の方とかなり面倒なやりとりが多くなされたらしい。

かく言う俺は、事件の翌日には目をさまし、意識がはつきりすると同時に激しくおう吐した。

事件当日の昼以来何も食っていなかったので、出てくるのは胃液ばかりで、食道がえらいことになったけど、吐き気はいつまでたっても収まらなかった。

なにせ、人を斬ったんだ。結果的に、あの騎士は死んでしまったらしいが、そうでなかったとしても俺のこの結果は変わらなかっただろう。

物語の主人公とかなら、まあいろいろと葛藤した結果に前向きになるんだろつが、俺の気分は3日が過ぎても一向に回復しなかった。

優等生ってわけでもなかった俺は、喧嘩ぐらいしたことはある。だけど、そんな俺も不良ってほど悪いわけでもない。

不良の喧嘩だと、ナイフを出すやつだとか、明らかに人を殺せるような武器、釘バットとかチェーンなんかを出すやつがいるのかもしれないが、普通の喧嘩では、単純に拳で殴りあうことすら稀だ。

大概は、お互いにつまみ合いになると誰かしらが仲裁に入って終わり、って感じで終わる。だってのに、今回は自分がナイフを持って相手を斬りつけたんだ。

昼間に殺した、ゴブリンなんかのモンスターは、見た目が化け物だったからなんとなくゲーム感覚で戦えた。多少の抵抗はあるにしろ、それほど気にかかるものでもなかった。

だけど、人間相手だとやっぱり違うんだ。

いくら時間が過ぎても、この手に残る感触がなかなか消えてくれない。

俺が落ち着いた頃合いを見計らって、アリアさんがお礼を言ってくれてようやく俺は少しだけ気分を持ち直した。

人を殺してしまったっていう罪悪感と気分の悪さはまだまだ俺の気持ち病ませているが、この世界で生きていく以上、人を殺すってことも避けては通れない道なんだろう。

物語の主人公みたいに、人を殺すのに慣れたくないとは言わない。人を殺すことに快樂を見出すのは勘弁願いたいけど、人を傷つけたら、殺したりするたびにこんだけ気分が落ちるのも嫌だから、さっ

さと慣れてしまいたい。

さて、前置きが長くなってしまったが、俺は今、お姫様の前に跪いている。

この間は、何にも知らなかったから、立つたままだったけど、三井さんがいろいろ教えてくれたのと、俺の隣にキューマさんがいるので、それに倣うって感じで礼を尽くしている。

「此度の一件、ギルドには迷惑をかけたな。そちらのギルドに所属する冒険者のおかげで助かった、礼を言う」

セリル姫様は、相変わらずの口調でそう言った。間違っちゃいけない、頭は下げていない。まあ、王族として頭を下げるわけにはいかないのかな？

「いえ……この国に居を置く以上は当然のことでございます」

バルデンフェルトが運営するわけじゃないが、ギルドには居を構える国に最低限の最大限に協力する義務がある。らしい。

ちなみに、モブ美さんは仕事帰りに騎士たちに襲われ、薬を飲まされたらしい。その薬が、媚薬でありながら麻薬らしく、1度の服用にも関わらず激しい中毒性があるものだった。

そのため、薬欲しさに騎士たちの言うことを聞かされていたため、

ギルドとしては被害者と認定したらしい。

ただ、そう言った事態になった際に、キューマさんに報告するだとか、警兵（警察みたいなの）に相談するといった対処を怠ったとして、謹慎と減給の罰を下されたとか。ちなみに、今は中毒の治療のために入院中。

たぶん、このままこの街で仕事を続けるのは本人としても、周りとしてもいろいろやりにくいだろうから、最終的には違う国なり、違う街に異動されるんだろう。

とまあ、モブ美さんのことは俺には関係ないので、それ以上のことを知ることはないだろう。

「うむ、問題を起こした者たちは、騎士の位を剥奪し身分を奴隷とした。一族郎党に関しても国の役に付いているものは相応の罰を下してある」

あ、奴隷制とかあるんですね。犯罪を犯したら、全員奴隷になるのか？

まあ、懲役とかで監獄に入れられたら、国の税金なんかで食わしていくことになるんだろうから、その辺の金額考えたら無駄、それなら奴隷として売った方が金の足しになるって考え方なのかなあ……

あれ？もしかして俺、過剰防衛で奴隷堕ち？

ははは……それはない……よな？

「さて、今日お主らと呼んだのは他でもない、ギルドには詫びと謝礼。そして、実際に動いた冒険者であるお主に褒美を取らせようと思っただけ」

あ、過剰防衛じゃないんですね……よかったです。褒美って言って奴隷にするとか、そんな嫌な冗談じゃないですよ？

「ありがとうございます、幸せにございます」

「……あ……あ、ありがとうございます」

ほっとしたから、礼を言うのが遅くなった。

でも、礼に対して礼をするってどうなんだ？まあ、いいか。

「ギルドへは、10万Bを支払おう。冒険者……ほお、お主はこの国で召喚された勇者だな」

「っは、はい」

覚えてたんですね、全然アクションがないから俺のことなんて完全に忘れたと思ってました。いや、今の今までは忘れてた、っていつか気づかなかっただけだ。

「あの時は、実力を隠しておったのか？お主が殺した男は、三井ほどではないが、我が国の騎士の一人だった男だぞ？」

なんて答えればいいんですか？

謙遜？自慢？日本人的には、そんなことないって謙遜した方がいいとは思っけど、この世界ではどんな態度が望ましいかなんて知らねえし。

「まあいい。確か、お主は我が国の勇者になりたがっていたな。いだろう。褒美として取り立ててやるっ」

マジで！？

あれからいろいろ聞いたりして、知ったけどバルデンフェルトって超大国ですよ？

俺がその国の勇者の一人って……

「あ、あのぉ……せっかくですがそのお話はお断りしてもよろしいでしょうか？」

「なぜだ？お主は我が国の勇者になりたかったのではないのか？」

「いえ、あの時はこの世界へきて間もなかったもので、何もわかっていなかったんです。この世界のことを知るにつれて、やりたいことも出てきましたので、申し訳ありませんが、そのお話は……」

「ふむ……ならば、仕方ないな。ならば、何か望みはあるか？」

「……できれば、自分もお金のような形あるものの方が……」

「そうか、わかった。………待てよ？」

セリル姫様はわかったと言った後、なんかつぶやいたっぽいけど、ちよつと遠くて聞こえなかった。

それにしてお、これで正解だよな？ やりたいことなんて全然見つかってないけど、バルデンフェルトの勇者にはなりたくない。

実入りが良いとはいえ、バルデンフェルトの勇者ってのは要するに軍隊の一人になるってことだ。留まることを知らず、ひたすらに領土を拡大していくバルデンフェルトの勇者になるってことは、明日にも戦場に立たなければいけないかもしれないってことだ。

いくら腕のいい回復魔法使いがいるからって、それは勘弁だ。

しかも、戦場に立つってことは、また人を殺すってことだろ？ それもまだ、俺には覚悟が足りない。

というか、覚悟以上にレベルが低すぎる。俺のレベルは3なんだから………そう言えば、あの一件でレベルは上がったのか？ 後で調べてみよう。

「悪いが、報酬はしばし待て、少し用意しなくてはならないものがある」

用意？でも、キューマさんの分の金は横にいる侍女みたいな人が持ってますよね

いや、あれも3日のうちに用意したもつてことか？10万Bつてことは日本円でだいたい1000万だ、すぐには用意できないのか？

まあ、ここはつい最近占領したばかりの街だから、手持ちが少ないつてことかな。うん、もらえるなら別にいいや。

ふふふ、金さえもらえば、冒険者の仕事なんてしなくても半年は生きていける。そうしたら、冒険者辞めて、どっかで働けばいいんだ。ラッキーだぜ。

「話は以上だ。下がってよいぞ」

「セリル姫殿下、少しお話がございませぬのでお時間の方よろしいでしょうか？」

「？……ふむ、よいぞ」

いざ退室つてところで、キューマさんは立ち上がらず、セリル姫

様にそう言った。姫様の方も一瞬訝しげな表情をしたけど、今回の件でまだ話したいことがあるみたいだし、うなづいた。

まあ、俺には関係ないだろうし俺の方はお暇させてもらおう。

ああ、勇者の件断つたのは失敗だったか？いや、大丈夫だろう。

side out

ガイが謁見の間を後にしたが、その場にはセリルとキューマ、侍女、衛兵たちと人数はほとんど変わっていない。

セリルは、玉座に腰かけたまま、いまだに跪いているキューマの言葉を待つ。

「して、話とは？」

いつまでたつても口を開かないキューマにしびれを切らしたセリルが言葉を促す。些か性急ではあるが、セリルは気の長い方ではない。

「無礼な物言い失礼いたしますが、姫殿下は……いえ、バルデンフエルトではこの街の周囲での異変に気づいておりますでしょうか？」

「異変？」

キューマの言葉にセリルは首をかしげる。

この街の近くに迷宮が出現したことが、異変と言えは異変だが、この世界においてはそれほど珍しいことでもない。最近、迷宮から漏れ出すモンスターも多く、近隣の村や町との行き来が阻害されているらしいが、それも迷宮がある以上は異変と言っほど珍しくない。

少なくともセリルにはキューマの言う異変に心当たりはなかった。

「はい、迷宮からモンスターがあふれ出ております」

「それは、珍しいことではなからう」

「中階層のモンスターが溢れ出ているのです」

「なに！？」

中階層のモンスター、レベルで言えば20相当だ。バルデンフェルト本国の王宮騎士であれば平均レベルが50はあるから、苦も無く倒せるだろうが、今この国に駐在している騎士たちは、中階層のモンスターと同じ20ほど。一番高いレベルの三井ならば40は越えているので、余裕をもって戦えるだろうが、それ以外の人間ではかなりの苦戦を強いられる。

セリルたちがいる城があったもとの国は、平均レベルが15程度の弱小国家だ。その向こうに控えるリエルド王国との戦いのために主戦力を温存していたのが裏目に出たかもしれない。

「至急本国に要請して、増援を求めよう。しかし、到着するまでどうやって時を稼ぐか……」

バルデンフェルトは大陸の西端に位置する国だ。中央に程近いここからでは、魔法による加速を用いても1週間はかかる。軍を率いての移動であれば、ゆづに3倍の時間がかかるだろう。

増援が到着するまでは1月はかかる計算になる。それまでにモンスターが増え続けては、最悪この街を放棄しなくてはいけなくなる。

「しかし、今までのように民にその話を隠していたのだ？ひとたび気づかれれば、民衆は混乱していただろう」

「はい、私どもも初めは気づいておりませんでした。しかし、近くにあるアヌの森が少々奇怪な状況にあるとの話を受けてギルドの冒険者を派遣したのでございます」

キューマの言うギルドの冒険者とは、ギルドに所属する冒険者ではなく、冒険者のギルド職員だ。彼らは、普通の冒険者としての実績を買われ、本籍を捨てギルド議会と言う国家に所属する冒険者だ。

通常、冒険者と言っても、ギルドと言う仲介を通して仕事をする

だけの人間だが、ギルドの冒険者は違う。

彼らはギルドからの報酬やギルドPというシステムの外にあり、ギルドから依頼された仕事をこなす冒険者なのだ。

当然、実力は精鋭と言うに相応しいものを持っており、年齢、国籍を問わず様々な国のギルド支部の本部に駐在している。

「して、そこでなにが？」

「アヌの森にはただ一つの例外を除きモンスターの姿が一切なく、ドメドメ草や他の薬草が食い荒らされておりました」

「ドメドメ草が？」

ドメドメ草とは、傷薬の原料となる薬草だ。森であれば、大概の場所に自生しており、入手はかなり容易にできる。

しかし、それが食い荒らされたとあっては、傷薬の値段が高騰してしまう。

「そこで、発見されたのが、中階層のボスであるホワイトボアでした。幸い、すぐに討伐が完了しましたので、その場では事なきを得たのですが、その後も調査を続けていくと、中階層相当のモンスターが地上へ出てきているのが多く確認されました」

「なるほど、ギルドが全力を持って隠ぺいしていたということか」

「隠ぺいしていたとは聞こえが悪いですな。ギルドが全力を持って対処していたと言っていただけだ」

少なくとも、中階層のモンスターは上階層のモンスターのようには草原や近隣の村を直接襲うことはなかった。地上に出てきた大部分が、森や鉱山などの資源がある場所に陣取っていた。

森にしる鉱山にしる、一般人はまず立ち寄らない。もともとモンスターが出現するために、そこを訪れるのは冒険者たちがほとんどだ。そういう意味でも、一般人にことが知られなかったのは、隠ぺいしていたのではなく、事実を公表していなかっただけの話だ。

キューマは立ち上がると、正面からセリルをジッと見る。

「今までは、ギルドの冒険者だけで対処していましたが、一向に数が減りません。ギルド議会にも救援を要請していますが、そちらも到着まで時間がかかります」

「それまでは、互いに協力しよう。と、お主はそう言いたいのだな？」

「はい」

少なくとも、冒険者ギルドだけで対処できない事態と言うことは今この街にいるバルデンフェルトの騎士たちだけでは対処できない事態と同義だ。協力体制を取るのには間違いではない。

「いいだろう。三井、お前は騎士10を引き連れて、迷宮を調査しろ。ガルデアンは冒険者ギルドと協力し、地上に出てきたモンスター討伐の指揮を取れ」

「っは！」

「かしこまりました」

バルデンフェルトの騎士たちはそれぞれ指示されたことを迅速に行動に移す。被害が出るのを防ぐためには、時間が最大の敵だ。

その後も話し合いを続け、有力な冒険者や、騎士たちを動員することで、一応の対処は決められたが、このとき、キューマもセリルも互いにガイのことには一切触れようとしなかった。

互いが互いに、彼には何かあると気づきながら、意図して何も口にしようとはしなかった。

そして、この日からギルドも城も3日前の事件以上に慌ただしい日々を送ることとなる。しかし、彼らはこの先どんな事態が待ち受けているのか、何もわかっていなかった。

気づいた時には、全て手遅れだったのだ。

11話 報酬はまだ貰えませんでした（後書き）

ええ、ちよつと大事なお知らせがあります。

詳しい説明など興味ない方のために後書きでもお知らせさせていただきますが、

今後、箱庭の勇者の更新は週に1〜3回程度になります。

たぶん平均すれば、2回ぐらいに落ち着くかと思えます。

詳しい理由など知りたい方がいらっしやいましたら、活動報告の方で説明いいわけしますので、そちらを一読ください。

12話 武器はかなり高価でした

(略)

城に呼び出された翌日、俺は街を見て回ろうと散策に出ていた。

冒険者として働き始めて街の外はある程度わかってきたが、街の中のことは全くと言っていいほどわからない。

俺が知っている場所なんて、大通りと城の周り、冒険者ギルドのあるあたりぐらいで、南の一角程度しか分かってないんだ。

アリアさんに軽く教えてもらった限りだと、城を中心として南が全体的に庶民のエリア。俺の知ってるのもこのあたりだけだ。

北には鍛冶職人や縫製工場なんかのものを作る人間が多いエリア。東側は貴族とか金持ちが住んでるエリアで、西はスラムとか全体的に治安が悪いエリアって感じらしい。

西側の比較的、城に近いあたりには奴隷市場があるらしく、この間の偽合コン事件で捕まった元騎士たちはもうそこで売りに出されているらしい。

治安が悪い所ってのは怖いし、元騎士の連中を笑いに行くほど腐ってもいないので、西側には用はない。

金持ちに用があるわけでもないのに、東側もどうでもいい。

と言うわけで、俺は北にある職人のエリアへとやってきたわけだ。
これがまた面白い。

技術レベルは機械どころか蒸気機関も取り入れられていないって
いうのに、魔法があるおかげなのか大量生産品とかのレベルが思っ
たよりも高い。

プラスチックだとかの化石燃料を使った素材はさすがに見当たら
ないけど、木や鉄なんかを使って作られたアクセサリーだとか置物
は、地球で売られていた工場で作られた物なんかと比べても遜色な
いものが並んでいる。

一方で、武器や防具なんかはワンオフのものなんかが目立つ。当
然、大量生産されたものだって売られているには売られているが、
店の人間の技術を前面に押し出すためか、それぞれの店の見える範
囲に置かれているものと同じようなものはほとんどなかった。

武器の良し悪し、技術の有無なんて俺には判断できないが、値段
だけ見ると結構いいものに見える。たぶん……

興味本位で、見かけた中で一番デカイ店に入ってみたけど、やば
かった。

武器の値段は0が最低でも4つはあったんだ。

日本円で最低でも百万円。武器って高すぎだよ……

まあ、他の店にも冷やかしに行ってみたけど、ピンキリってこと
が分かった。

比較的小さな店では一番高くても0が4つ。デカイ店の最低品が、最高品として並んでた。

中くらいの規模の店では、バランスよくって感じ。

それでも本当に安いものは大量生産の粗悪品ぐらいで、それなりの武器を買おうとしたら云十万円は覚悟しないとイケないってことが分かった。

バスタードはけっこう気に入ってるけど、やっぱり高い武器が欲しい。

これはもう、お姫様からもらえるご褒美に期待するしかないな。うん。

その後もテキトーにそこらの店を冷やかしながら、南地区へと戻るために足を進めていく。

知らず知らずのうちに、体は金持ちってやつに拒否反応を示していたのか、帰り道は西側沿い。

不意に視界に入ってきた店にふらりと足を運んでみれば、そこには薄汚れた布に身を包んだ人間がずらりと並んでいる。

子供や大人って区別はないらしく、老若男女けっこう多くの人がいる。

視界の隅に見覚えのある顔があった気がしたけど、気にしないことにした。

どじやら、ここは奴隷商らしい。

「よっこそいらっしやいました。本日はどのような奴隷をお求めでしょうか？」

声をかけてきたのは、俺のイメージしていた奴隷商人とは違って、結構まともそうな男だった。

なんか、こういう場合の奴隷商人って小太りの脂ぎったおっさんじゃないのか？

まあ、いいけど。

「いや、ここに来たのは偶然なんで。別に奴隷が欲しいわけじゃないです」

「なんと！？では、偶然にこの店に来たと言うことはこれこそ神の意志に違いありません。どうぞ、ごゆっくりと見て行ってください」

無理やりだなこの野郎……

俺は、日本人だからって、奴隷みたいな人身売買に拒否感と言うか嫌悪するのはあんまりない。

ここに居る人間は、悪事を働いたとか、やむに已まれぬ事情が

あつて売られたつて理由があるんだろう。

出稼ぎで不法入国とか、何の罪もない人間が払った税金でこのうと生活する囚人なんかのことを考えたら、奴隷のほうがマシだろう。つてのが、俺の考え方だ。

さすがに、無理やり誘拐して売っているとかだったらムカつくし、叩き潰してやりたいけど、その辺は俺には分からないしな。まあ、見覚えのあるあいつらは間違いなく犯罪人だつてのはわかつてる。

「ここに居る奴隷つてのは、どうして奴隷になつたんですか？」

「はあ？多くの場合は、犯罪人への罰ですね。罪の重さによって買い戻しの額が決められるので、重犯罪者はなかなか奴隷身分から解放されません」

「つまり、罪の重い犯罪者は高いんですか？」

「いえいえ、その逆です。重犯罪者は非常に安価です。ただし、罪の重い犯罪者の場合は買う人間にそれなりの用意を求めます。逃げられたりしたら大変なので」

つまり、家に牢獄みたいなもんを持つてる必要があるつてことか。

まあ、看守とかその辺も必要だろうから、値段の安い重犯罪者は、数を求めるデカイ工事とかの現場での労働力として買われるらしい。

多くの場合は、貴族が買うとか。

富裕層は重犯罪者より値は張るものの、軽犯罪者だとか、口減らして売られた奴隷を買って、使用人にするらしい。

この場合は、軽犯罪者より口減らして売られた奴隷の方が多いらしいけど。

まあ、口減らして売られた奴隷なんかは、金がたまってもよっぽどの額じゃないと、家に戻ることも出来ないし、一人暮らしだってそれなりの額が必要だから、必然的に働く期間が長くなるから、結構元が取れるとか。

「誘拐して、無理やり奴隷を売るってことはないですよね」

「ははは、さすがに私どものような店ではそのようなことはしませんよ。これでも、バルデンフェルトに認可を受けていますので」

「認可？」

「はい。私どもデレイア商会は奴隷以外に食料や衣類なども販売しておりますし、それなりに大きな部類に含まれております。南地区や東地区でも店舗を構えておりますので、お求めの際は是非デレイア商会をご利用ください」

商人つてのはさすがに商魂たくましいな。

「おっと失礼、認可のことでしたね。奴隷商というものは、お客様

のご指摘の通り、犯罪を行う者も少なくありません。そう言った、犯罪への対策として国が店舗を調査し、認められた店舗のみが店の前に看板を立てることができるのです」

「つまり、一度認可を受ければ、その後はやりたい放題ってことですか？」

「まさか。当然、定期的に調査が入りますし、年に数回予告なしでの調査も入ります。その時に誘拐した人間を奴隷として売ってれば、その店は即座に潰されてしまいます。つまり、店の前に看板がある奴隷商はそういった犯罪とは無縁の店舗と言うことで安心して奴隷をお求めいただくことができます」

誘拐した人間を奴隷として売るのは犯罪だし、それを買うのも犯罪になるらしい。

まあ、きちんとした店で奴隷を買った場合は書類やらの手続きも多く、国に奴隷を所有することを報告しなくちゃいけないんだとか。

看板のない店で奴隷を買った場合、そう言った手続きは一切なく、隷属の首輪っていうギルドカード並みのチートアイテムを渡されるだけで終わるって……まあいいや。

治安の悪い西地区でも、奥の方に行くとそう言った店もあるらしい。

ただ、そう言った店はアングラに潜り込んでいるだけに、探すのも一苦労。

そもそも、国の騎士とか警兵以外がそう言った店を探すことも犯罪に当たるとして、一般人が捕まったこともあるらしい。

まあ、それぐらいの軽い犯罪だと、何日か独房に捕まって、その間の食費なんかを含めた罰金を支払って解放されるらしい。

何も知らない俺に懇切丁寧に説明してくれるなんて、この人はけっこういい人だな。うん。

でもまあ、俺が知る必要はあんまない知識ばかりだったけど。

居候の身でペットを飼わせてもらってるんだ、奴隷が欲しいなんて言えるはずない。というか、奴隷が欲しいわけでもない。

その後、適当に話を聞いてからデレイア商会を後にした。

うん、美人の女奴隷が欲しくなったけど、少なくともアリアさんの家に居候してるのに買えるわけないな。いつか、買いたい。

で、家に帰るとアリアさんと三井さんがお茶をしていた。

いや、三井さんはけっこうイケメンだし、美人のアリアさんと二人でいるとけっこう絵になるんだけど、なぜにあんたがここに居る。

「あ、帰ってきたね。お邪魔してるよ。」

「お帰り、北の方はどうだった？」

「ただいまです。北はかなり面白かったです。見るものみんな見慣れないものだし、武器屋なんかもいろいろなもの置いてあったんで、なぜに三井さんがここに？」

三井さんは出されていたお茶に口をつけてから、まじめな表情になって口を開いた。

「実は、いろいろと面倒なことになってね。この間の件の報酬と冒険者としての君に依頼があるから、また城に来てほしいんだ」

……単なる伝言に三井さんが来るってのは、よっぽどのことじゃないのか？

聞いた話によれば、この街にいるバルデンフェルトの騎士の中で最強なのは間違いなく三井さんだ。その三井さんがメッセンジャーボーイとして寄越されるってことは、事態がよほど切迫しているか、よほど暇か……

暇なんじゃないのか？

そうだよな。よく考えれば、隣の国に戦争を仕掛けるって話はよく耳にするけど、まだ戦争が始まったわけじゃない。

戦争が始まる直前の、平和な日常を過ごしてる段階のはずだ。

……すいません。単なる現実逃避です。

間違いなく事態が切迫してるんだろう。じゃなきゃ、三井さんの表情に説明がつかない。

「わかりました。で、すぐに行った方がいいんですか？」

「いや、明日の朝に迎える馬車をよこすから、それに乗って城にきてくれ。詳しい話は、明日」

「はい、了解です。あんまり、面倒な話は嫌なんですけどね」

「無理だろうね。覚悟しといたほうがいいよ」

三井さんの言葉に俺はため息をついて、三井さんを見送った。

世間話でもしたかったが、三井さんもけっこう忙しいらしい。

ああ、褒美でしばらく遊んで暮らすってのはダメになったっぽい。

勘弁してくれよ……

12話 武器はかなり高価でした（後書き）

応募作の執筆が思った以上に進まないのので、先に箱庭の更新です。

奴隷の話はまあ、適当に流してやってください。

プリル事件の前知識として、誘拐して奴隷を売るって言う馬鹿がいるって話があったただけなんです。

次回はようやくレナが登場……するかもしれません。

13話 報酬は でした(前書き)

ずいぶんと更新が遅くなってしまいました。

いろいろとプライベートが忙しく、応募作品すらまともに書けていません。

少しはましになってきたので、できるだけ迅速に更新していきたいと思えます。

ちなみにタイトルはネタです。意味が分かった方は一人でにやにやしましょう。

13話 報酬は でした

(略)

三井さんが家を訪れた翌日の朝、伝えられていた通りに馬車が迎えに来た。

依頼云々は激しくめんどくさい気がしたけど、ご褒美がもらえなくなる俺の幸せ未来計画が台無しになってしまうので、俺には選択肢つてものが用意されていなかった。

アリアさんは仕事があるし、呼ばれたわけでもないのに、馬車に乗ったのは俺と俺の肩に乗るスクルドだけだ。

この世界にきてから11日目だったのに、城に来るのはこれで3日目だ。

なかなかハイペースだと思う。なにせ、4日に1回のペースだ。

俺みたいな一般人なら、もともとこの世界にいる人間だってこんなハイペースで城へ来ることなんてないんじゃないだろうか？

いや、この世界の人間じゃないからこそ何度も城にくる羽目になってるのか？

まあいいや。とりあえず、今までと同じく城に着くと控室みたいな部屋に通された。

しばらくぼけー、としていればこれまた今までと同じように騎士

の一人に呼ばれて謁見の間まで通される。

謁見の間の半ばまで歩いたところで、お姫様が来る前に跪いて無礼のないようにする。って予定だったのだが、これがいきなり崩された。

なぜにお姫様がすでに待機していらっしやるのでしょうか？

おかげで謁見の間に入ると同時に、俺は動きを止めてしまった。

いや、俺を連れてきた騎士に小突かれたりはしなかったものの、咳払いでせかされる。

「っと」

慌てて半ばまで歩いたところで、跪いた方がいいのか、立ったままでもいいのかとあたふたしているうちに、お姫様が口を開いた。

「よく来た。さっそくだが、要件に入らせてもらおう」

あの、跪かなくていいですか？

うん。突っ込まれないし、立ったままでいいか。

「三井が伝えているとは思いますが、お主に依頼したいことがある」

……「褒美は？」

要件って依頼が先！？

つくそ、褒美をもらう側として急かすわけにもいかないし、とりあえず聞くしかないのか……忘れてないですよ？

「先日から周辺で魔物の動きが活発になっていてな。おそらくは迷宮の内部で何かが起こっている」

魔物とモンスターの違いはなんでしょう？

お姫様にモンスターって言いにくいとか？

まあいいや、そんなんでもいいし。

「お主には迷宮の探索を行ってほしい」

「……あの、姫様？」

「なんじゃ」

「その迷宮って今も結構な人が入ってるんじゃないですか？」

「うむ」

うむって、あの……

「俺よりもランクが上の人間だって探索してますよね？」

「そうじゃな」

……俺、Gランクですよ？

迷宮の探索って言ったら、比較的 안전한迷宮だってDランク。つまりは、俺の3つ上のランクの仕事だ。

しかも、この街の近くにある迷宮。通称『漆黒の迷宮』は迷宮発見から1年以内、最高危険度に分類される迷宮だ。

そこの探索って言ったら、Aランク相当の仕事だ。

Aランクの人間って言ったら、ギルドに入って日の浅い俺だって二つ名ぐらい聞いたことのあるレベルの人間だぞ？

さすがに、Aランクなんてこの街に2人くらいしかないから、Bランク5人とCランク2人とかでも探索に乗り出すけど……

そんなレベルの人間が1人か2人くらい重症か瀕死、下手すりゃ動けなくなっ出てくる次元の話だ。

それを俺に行けと……

「俺はGランクですよ？ ギルドに入って数日の俺だってあの迷宮の危険度くらいは話に聞いています。それを、俺に探索しろって言うんですか？」

「Gランクとは言え、元は我が国の騎士だった男を倒せるだけの実力は有しているだろう。安心しろ、お前が殺したあの男は冒険者で言えば、Cランク程度の実力はあったと聞いている」

じゃあ、死にますよね。

Cランクってあれじゃん。B5人、C2人で入って死亡する最有力候補じゃん。

しかも、俺がああ騎士を倒した時だって無我夢中で、なにしたかわかってないのに。

「……でも、危険なことに変わりはありませんよね？ 騎士の皆さんと一緒に探索に行くんですかねえ？」

「そんなはずはあるまい。そもそも、我が国の騎士たちは、街の周りの魔物たちを倒すので手一杯だ。迷宮にはお主とお主の仲間だけで言ってもらう」

すみません。俺には仲間なんていません。

いや、アリアさんが仲間って言えば仲間だけど、あの人は非戦闘

員だし。

スクルドか？

スクルドだけが頼りなのか？

「……ちょっと、それは厳しすぎるので、勘弁してもらえませんか？」

「ほお。ならば、あの狼藉者を倒したお前への報酬は、我が自ら依頼したこの件を断る。ということでもいいのか？」

……依頼を先に話したのは、このためか！

つく。俺のニートライフが……

受けても迷宮探索。断つてもギルドの仕事をしないと食っていない。

に、逃げ場がないだとお！？

「……………」

「そう難しく考えるな。別に迷宮を攻略するように言っているわけではない。何か異変があるかもしれないから、実際に異変があるかどうか調べてほしいだけじゃ。魔物と戦う必要はない」

なら……いいのか？

そうだ。前向きに考えよう。

金さえもらえれば、高い装備を揃える。高い装備を変えるってことは俺の安全性が増すってことだ。

お姫様からの依頼ってことは、当然この依頼を完遂すれば報酬が支払われる。

これから毎日危険な仕事をするのと、今回一回だけ危険な仕事をするのはどっちが安全だ？

当然後者だな。

そうだ。これは、明日からの二トライフを送るための試練なんだ。

この試練を乗り越えれば、極上で薔薇色でメルヘンチックな二トライフが待っているんだ。

そうだ、よし頑張れ俺。負けるな俺。大丈夫さ俺。

「わかりました。その依頼、受けさせてもらいます」

「おお、そうか。そう言ってくれればいい」

お姫様は俺の言葉に諸手を上げて喜んだっばい。

つくそ。選択肢を潰しておいてよく言うぜ。

だけど、これで10万Bは手に入る。

そうだ。10万Bもの大金があれば、武器と防具にそれぞれ5万近くは使える。どうせ、成功報酬がもらえるんだ、けちけちしたって仕方ない。

できるだけ怪我したくないし、防具に6万、武器に3万、残りはスクルド用の装備ってところだな。

大事な相棒だし、こいつにも怪我してほしくない。

俺は、肩に乗ってのんきにあくびしている相棒を見つめながらそんなことを考えていた。

「よし、では件の褒美を授けよう」

来たぞ。

お姫様の言葉に従って後ろの侍女さんが……大金の入った……袋………を？

あの、なんで何も持ってないんですか？

もしかして馬鹿には見えない袋に入れてるとか？

でもそれなら、中身は透けて見えますよね？

淡々とこちらに歩み寄ってくる侍女さんの手には指輪でも入って
そんな小箱。

あ、手ぶらじゃなかったんですね……でも、小箱？

ほんとに、地球でいうところの『あたりは夜の帳も落ちて、にわか
かに暗くなっていた。

しかし、大都会東京。無数のネオンはそんな夜の闇すらも明るく
照らし出している。

そんな明かりをはるか眼下に見下ろしながら、二人はホテルの最
上階にあるレストランでの食事を今まさに終えようとしていた。

「実は今夜君にプレゼントがあるんだ」

モテ男はそういって、懐に手を入れた。モテ美はそんなモテ男を
不思議そうに見つめている。

不思議そうな顔をしているモテ美の前に差し出されたのは、小さ
な箱。周りは紫色のフェルトに包まれている小箱だ。

モテ男はそつと箱を開いた。そこに鎮座していたのは目を見張る
ほどの大きさをしているダイヤを乗せた指輪。

あのサイズってことは……まさか、今まで見たこともない貨幣なのか!?

俺の見たことのある中で最高のやつは、1万B金貨だ。

キューマさんが渡された10万Bも、1枚の金貨でまかなえるけど、実際に渡されたときはじゃらじゃら音がしてたから、複数の硬貨で渡されていた。

今回の騒ぎで、俺とギルドは同等の働きをしたって言うていいはずだから、俺の貰える額が10万以下ってことはないはず。

つまり、10万以上の硬貨ってことだ。

ってことは、100万B白貨か、1億B白貨、はたまた100億B白金貨、1兆B白金貨ってことも……ありえないな。

いくらなんでも100億とか1兆はありえないな。1億も微妙でも、100万B白貨なのか?

あんな丁寧に運ぶってことはそれだけ貴重なものってことなんだよな……

「どうした、受け取らんのか?」

「へ?」

どうやら、俺がいろいろと妄想を巡らせているうちに侍女さんは

俺のすぐそばまで来ていたようだ。

すでに小箱は開けられ、その中身が見えるようになってる。

俺は、緊張に激しくなる鼓動を感じながらゆっくりと視線を箱の中へと向けた。

「……………指輪？」

そう、指輪だ。金色のシンプルなリング。

台座の下に潜り込んでいなければ、なんの装飾もなされていない、宝石の一つもついていないリングにしか見えない。

純金製とか？

これがご褒美？高く売れるのか？

「それは、マジックアイテムの一つだな。名を『賢人の指輪』と言う。魔法威力向上といった作用があるが、そんなものはおまけだ」

……………俺は魔法なんて使えませんよ？

あれか、この世界では冒険者が魔法を使えるのがデフォなのか？

そういう意味でも、俺が勇者って意味でも、普通とは違う。

俺はこの世界でも異端なのか？

「というわけだ。わかったか？」

「え？ あ、はい」

「ふむ。ならば、いい。では、さっそくつけてみるといい。お前が持ち主と認められなければ、別の……そうだな。その指輪の価値とは比べ物にならないが、ギルドに払った慰謝料と同額ぐらいは支払おう」

俺的にはそっちのほうがいいです。

なんだよ、さんざん期待させてこの微妙なプレゼントって……

仕方がない、とりあえずつけてみて認められないことを願おう。

と、言うわけで指輪を手にとって指にはめる。少しデカめだし、中指ぐらいの大きさか？

指輪なんてつけたことないってのにまったく。

するり、と指輪は俺の指を通し、ずれることはない。

サイズを計ったわけでもないのにぴったりだ。

「うむ。思った通りだな。無事に持ち主と認められたか」

「え？ 魔法の試し打ちとかしなくていいんですか？」

「試し打ち？ そんなものする必要はない。持ち主と認められなければ、ハメた指が消し飛んでいただけだからな」

怖えよ。

え、なに？ 俺って今、自分の指が消し飛ぶかもしれない状況だったの？

先に言ってくれよ。

ああ……でも、報酬は指輪か……

しょうがない。マジックアイテムってことは、それなりの値段で売れるだろ。

どっかの店で売るしかないな。

そう思って俺は指輪に手をかけた。が、抜けない。

「？」

いくら引っ張っても指輪はびくともしない。

まるで、俺の指に張り付いたみたいだ。

「ああ、その指輪は一度ハメると持ち主が死ぬまで外れないぞ」

……それって呪いの装備じゃないですか？

売れないじゃん。

外れなかったら、売ることも出来ない。

俺の安心迷宮探索計画が……音を立てて崩壊していく。

さっきの依頼を断りたいけど、報酬は受け取っちゃったし……もしここであの依頼を断ろうものなら、どんな目に遭うか想像もつかない。

「まさか、報酬を受け取ったというのに依頼を断るとは言わぬよな？」

………先手を打たれました。

この間の草原のモンスター討伐の時に、世間話ついでに三井さんが言っていた。

あのお姫様は怖い。

礼節は弁え、最低限相手の意思も尊重するが、最低限の話だ。

自分の計画のためならどれだけ陰気で陰湿で陰険で凶悪な手も辞さない人。

あらゆる逃げ道をふさぎ、絶対に自分の計画通りに事を運びつとする人。

そんな人だと。

人生経験未熟な俺がそんな相手に立ち向かえるのか？

答えは否だ。

そして、俺は逃げ道をふさがれ、迷宮探索と言う道を歩まざるを得なくなってしまった。

安心迷宮探索計画は出鼻から崩壊し、新たに与えられた装備は俺には何の役にも立たない指輪一つ。

もともと持っていた武器のバスタードにグルカナイフ、サヤ人の戦闘服的な防具に手甲。

全部、中古か迷宮でも上の階層で見つけたレアともいえない装備だ。

これで迷宮探索とか……死ねるし……

断るわけにもいかない。家に帰る馬車の中で俺は泣きなくなった。

街の大通りを彼女は歩いていった。

フードを目深にかぶり、その顔は隠されているが、彼女が纏う空気と言うものが彼女が一般人とは隔絶した人間だと言うことを物語っている。

見る者が見れば、彼女が殺気をまき散らし、フードに隠され表情が見えぬとはいえ、何かに怒りを覚えていると言うことに気が付いただろう。

そんな彼女が放つ殺気に気が付かぬ一般人は彼女の周りを普通に歩いていくが、ある程度の実力を持った人間は彼女からは距離を取っている。

放たれる殺気、ただ歩く姿だけでも彼女の实力は明らかだった。

「……クレイ様」

フードで顔を隠す女性、レスティアナ・ブrouティアは静かにつぶやいた。

雑踏に紛れたその声は、誰の耳にも届きはしなかった。

13話 報酬は でした（後書き）

以前から指摘していただいていた、「?」「!」の後へ空白を入れるという点は、応募作を書くに当たったの最低限のルールに抵触するため、矯正中です。

12話までの修正はしませんが、今後は空白をいれます。

ちなみに、旧作で登場したレナの名前が変更になりました。

レナ・アンストロ・リイガー レスティアナ・ブロウティア

愛称は「レナ」と変わりません。変更の理由は特にありません、気分です。

14話 迷宮挑戦は命知らずの証でした

(略)

城でお姫様から依頼めいわいされた翌日、嫌なことはさっさと済ませるに限るので迷宮へとやってきた。

入り口には危険と書かれた看板や、富士の樹海にあるような命は大事にしましょう的な看板が立てられているけど、ここは自殺の名所なのか？正直入りたくなってきた……

だけど、ここで引き返したりしたらお姫様にどんな報復を食らうかわかったもんじゃない。

逃げ出したくなる気持ちを無理矢理胸の奥底に押し込めて、迷宮の中へと足を踏み入れる。

さすがに迷宮に入ると同時にモンスターが襲いかかってくるわけはなく、入ってすぐのエントランス……迷宮の中でエントランスってのも変な話だが……には、冒険者が数組。

それぞれ行きか帰りのどちらからしく、傷の治療をしているか、装備の確認をしているかといった感じた。

で、1つ気になるんだけど。

迷宮探索ってグループでの探索しか受け付けてないの？

なんか、みなさん最低でも4人とかのパーティですよ。

いくらなんでも俺以外全員グループってのは予想してなかった…
腕自慢のやつとかが、1人で入るのとかありそうなのに。

1人と1匹で迷宮へ挑もうとしている俺たちはエントランスの中で浮きまくっていた。

周りの冒険者たちはみんな装備だって豪華で強そうだ。一番あからさまにこつちを見ている身長が俺の1.5倍くらいありそうな大男なんかは顔だけで俺より強いってわかる。いや、体格だけでもわかるな。

こつちなんかは、装備だってみすばらしく、防具だってしょぼい。唯一まともな装備は、昨日お姫様からもらった指輪くらいのもんだ。

指輪だってどれだけ使えるもんかはわからないし、もしかして俺はここで死ぬんだろうかなんて思えてくる。

やっぱり、三井さんとは言わないけど、せめて騎士さんとか兵士の数人ぐらいはお供にほしかった。

激しく帰りたい……

「おい、坊主」

「はい？」

呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃ……じゃなくて、呼ばれて思わず

返事をしたけど、ここに俺の知り合いなんかはいない。

振り返ってみると、そこにいたのはいかついおっさん。

「お前もこの迷宮に入る気か？」

「ええ……まあ」

たぶん帰りなのかな？

肩には真新しい傷があり、ちょっと怖いくらいの血が流れている。

「ランクとレベルは？」

「言わないといけないんですか？」

ランクもレベルも地球で言えば、個人情報に匹敵する………というか、まんま個人情報だ。下手に知らない相手に話したりしたら、盗賊だとかに流れて行って襲われることもある。つてのは三井さんから教えてもらった話だ。

すくなくとも見ず知らずのおっさんに話していいもんじゃないのは確かだ。

「……その反応は、何も知らないガキってわけじゃないのか。だが、

「まだまだ新人だな」

おっさんは言いながらとんとんと子供の胴体ぐらいありそうな腕に巻かれた腕章をトントンと叩いた。腕章？

見覚えなんかはないけど、変なマークが描かれてる。

「こいつをつけてるのはギルド所属の冒険者。まあ、迷宮の管理人ってとこだな。迷宮に入る冒険者の管理をするのが俺の仕事だ」

迷宮の管理人？そんな話聞いてませんけど……

いや、あたりを見回しても腕章をつけた人間が何人かいて、他の冒険者グループと話をしてるみたいだし、本当のことなのか？

周り全員サクラってことはないよな……

「つまりは、レベルとランクで迷宮に入れるかどうかを判断するんですか？」

「ん？ いや、入りたければレベル1だろうがなんだろうが入れるぞ。ただ、命の保証はしない。まあ、確認したのはレベルとランクからどの程度の階層で探索するのが望ましいかアドバイスをするくらいだ」

やっぱり帰りたい。

ここで、レベルが低かったら追い返すとか言われれば、逃げられたのに……

誰でもウエルカムなんて言われたら、帰れないじゃないか。ったく、空気読めよおっさん。

「で、坊主のレベルは？」

「5」

「は？」

「だからレベル5」

「聞き間違いじゃなければ、5レベルってことでいいんだな？
1
5でも25でも、ましてや55でもなく5」

「そつだよ」

さすがにおっさんも目を丸くしていた。

「坊主、あの看板が読めるか？」

「命は大事にしましょう。あなたの命はご両親が云々って書いてある」

「そうだ。確かに俺もこの家業を続けて長い。冒険者になったからには迷宮探索で一山当てようって連中を何人も見てきた。だがな、そんな連中だつてレベル1桁で迷宮に潜るなんて聞いたことがねえよ」

そりゃそうでしょうよ。

俺だつてお姫様の依頼めいれいじゃなかったら、こんな危ないところに来たくなかつたし。

「レベル5で迷宮探索なんて自殺行為だ。いくらなんでも認められねえよ」

「ですよね」

もしかして、帰れる!?

「ここでおっさんがダメだつて言えば、面目も経つからお姫様に言い訳ができる。」

よし、頑張れおっさん。頑張つて俺を説得してくれ。

「今この迷宮はおかしくなってるんだ。Aランクのやつだつて一人じゃ潜つたりしねえ。一人で潜るなんてそれこそ、バルデンフェルトに認められた冒険者のシシオーって男ぐらいのもんだ」

ん？

おっさん、今なんて言った？

「坊主、いいか？ 命は無駄にしちゃいけない。なんなら、これから来るシシオーの武勇伝を特別に聞かせてやる。だから、おとなしく家に帰んな」

聞き間違いじゃないな。どう考えても俺の名前だよ、シシオーって……

まさか、すでに根回しがされてたって言うのか？

「あの、おっさん？ そのシシオーってのはそんなにすごいのかい？」

「おお！ 今日まで俺も聞いたことなかったんだがな。お達しが来たんだよ。シシオーって冒険者が迷宮に潜るってな。で、そいつはいつたいどんな男かって聞いてみたら、なんとまああのバルデンフェルトの騎士を一人でバツバツと切り倒したって言うじゃねえかよ」

……俺が倒したのは1人ですよ？ どうやってバツバツと倒すんですか？

「いま街に来てる元冒険者の三井 純がその実力を認めるほどの男だ。そりゃあすごい男だろうよ。だからな、きつとそいつは有名になる。なんでもこの迷宮に潜るのは初めてらしいんだが、きつと他の迷宮はあらかた回ったんだろうよ。この街じゃ無名だが、すぐにシシオーの話題で持ちきりになるだろうさ。だからな、そいつの武勇伝を教えてやるから、坊主は帰った方がいい。武勇伝を知ってるっただけでお前、酒場じゃ一躍人気者になれるぜ」

そうですね。その武勇伝が本当であればね……

帰れそうにない。

ここで帰ったら、お姫様からお仕置きされるだろうし、このおっさんだってシシオーを追い返したって罰を喰らうかもしれない。

見ず知らずのおっさんだけど、見ず知らずの俺の命を心配してくれるようないい人だ。

俺のせいで不幸な目に遭ってほしくない。

いや、ここで帰れたらどれだけよかったか……

「悪いけど、帰るわけにはいかないんだ」

「おいおい、命を無駄にする気か？ 帰った方がいいって」

「……死んだら骨は拾ってくれ」

「死ぬってわかってて行くってのか？ ……ああ、ったく。最近のガキは命知らずって言うかなんて言うか。ちよっと待ってる」

おっさんは、ぼりぼりと頭の裏をかきながら懐をまさぐった。

なにやらブレスレットを取り出すとこっちに差し出してくる。

「こいつをはめて行きな。死にそうになったらこのボタンを押すんだ。そうすりゃ、俺や管理人が助けに行く。だが、あんまりにも無謀なことはするんじゃないぞ」

俺はおっさんからブレスレットを受け取ると左手にはめた。

装飾はあまりなされていないが、3つのボタンがある。

「こんな便利なもんがあるの？」

「ああ、命の危険がつきものの迷宮だが、いくらなんでも簡単に冒険者の数を減らすわけにもいかねえ。3つあるボタンはそれぞれ、救援要請、緊急事態通知、マップ機能だ。迷宮内では助け合いが基本。まあ、お前みたいな坊主は自分の身を第一に考えるんだな」

なんでも、救援要請は押せば近くににいる冒険者や迷宮の管理人で

あるおっさんたちのブレスレットに通信をおくれるらしい。本来は、突然モンスターの大量に襲われたときなんかに使っらしい。

緊急事態通知は、これまたモンスターの大量が突如として迷宮を昇り始めた時に警戒を知らせるためのボタン。救援要請以上に使われる機会は少なく、全ての迷宮で使われているが過去に2度しか使われたことがないらしい。

「本来は、中階層よりも下に行く人間が使うもんなんだがな、ちょっと設定をいじってどのボタンも俺にしか通信が届かないようにしてある。特別扱いはするもんじゃないんだが、今回だけは特別だ」

おっさん……いい人だ……

あの傷だって、俺みたいなのを助けるために無茶をしたんだろう。実際どうなのかは知らないけど。

あのさ、これ以上血が流れたらあんた死ぬんじゃないかって思うんだ。

ダメだ。おっさんにこれ以上血を流させちゃいけない。

変な使命感を胸に俺は腰に差した剣の位置を軽く直して前を見据えた。

「よし、行ってくる」

「おお。死ぬんじゃないぞ」

たぶん、大丈夫……だと思っ。

そうじゃなきゃ困る。

やっぱり自信ないし……

俺の不安もよそに迷宮の探索はつつがなく進んでいた。

迷宮ってのは人間が全く持ってその存在を解明できていないらしく、初めて迷宮に潜っている俺にはあらゆるものが不思議でしよっがなかった。

だってさ、緑色に光ってる魔法陣に乗ったらワープするとか意味わかんないじゃん。

おっさんに渡されていたブレスレッド、そのマップ機能で調べてみたら、一つ下の階に進んだから、あれが階段の役割をはたしているんだろっ。

魔法スゲー。

で、今は地下5階まで来ました。

暇です。モンスターが居ません。

角を曲がるたびにびくびくしながら進み、なぜそんなものが存在するのかって扉をびくびくしながら開き、魔法陣で下の階に進むたびにびくびくしていたんだが、いい加減疲れてきた。

モンスター遭遇率0%です。

一応、この迷宮は地下52階まで探索が行われているらしいけど、30階ぐらいが上階層と中階層の境目に当たるらしい。下階層は今のところ確認されていないから、中階層との境目に関しては不明。

で、今俺がいる上階層は雑魚モンスターが3匹くらいでまとまって現れたり、ちょい強めのモンスターが1匹で現れたりするって聞いてたんだが……

いや、うん。なんで？

もしかして、俺の前に潜った冒険者が全部倒しちゃったのか？

でも、どういう原理かわからないけど、モンスターは無限に湧き上がるらしいから、完全に0ってのはちょっとおかしいんじゃないのか？

そういや、お姫様もおっさんも迷宮で異変って言ってたけど、これがその異変なのか？

そうだろうな。うん、たぶんそうだ。

いや、待てよ？

迷宮の外にモンスターがあふれてるって言ってたよな……

たしか、モンスターは迷宮の中がいっぱいになって狭くなったから外に出るって前にキューマさんが言ってたよな。

だとしたら、これが異変ってのはおかしいか？

上階層にモンスターがいないんだから、もっと下の階で狭い思いをしたら、こつちに来るはず……

だったらなんでだ？

まあ、それを調べるのが今回の俺の仕事なんだけど……

とりあえずもう少し進んでみよう。

と、思ったら角を曲がった先に何人かの人間が横たわっていた。

あれ、けが人？

「大丈夫ですか？」

周囲にモンスターの影がないことを確認しながら倒れている人間に近寄ってみる。

が、反応はない。

どうやらすでに事切れているようだ。

某RPGで言えば、返事はないただの屍のようだ。って感じだな。

そんな冗談はどうでもいいんだけど、この人たちはどうして死んでいるんだろう？

鎧には大きな損傷があり、頭からは血を流していた。そんな男女の死体が4つ。

普通に考えればモンスターに襲われたんだろうけど、モンスターの全く見当たらないこの迷宮でどうやってモンスターに襲われるんだ？

もしかして、俺が見てないだけでモンスターはいるのか？

しかも、俺よりもはるかに重装備の冒険者を4人も倒すようなモンスターが……

いたらやだな。

「南無阿弥陀仏」

とりあえず死体を1か所にまとめて合掌する。

どこか安全な場所に、できたら迷宮の外とかに埋めてあげたいところだが、こんな死体を4つも運べるような力は俺にはない。

仮にそんなことができたとしても、この人たちを倒したモンスターに遭遇したら俺の命だって危ないんだ。

1か所にまとめるだけで勘弁してほしい。

とりあえず、迷宮探索を続ける。

10階まで到達したが、5階で見かけた4人の死体以外は、やっぱりなんにも遭遇しなかった。

モンスターもいない。冒険者もいない。宝の番人もいない。いない。いない。いない。

何にもいない。

少し退屈だ。

8階ぐらいまではびくびくしてたけど、やっぱりなんにもいないので、少し気分も楽になってきた。

お姫様も言っていた通り、俺は調べるのが仕事でモンスターを倒したり宝を見つけるのが仕事じゃないんだ。

モンスターに遭遇しないのは実にありがたいことなんだ。

というわけで、俺は9階からはスクルドとおしゃべりをしながら

歩いている。

とはいっても、俺が話すことにスクルドがキュイキュイと返事をするだけ。

相手からも何か話題を振ってほしい。

……いや、むりか。

そんなこんなで、迷宮を進んでいく。

11階に降りるための魔法陣が地面に描かれていた。

なんか、今までの魔法陣と違って緑色に光ってるけど、これ以外に魔法陣は見つからなかったし、これがそうだろう。

『10階に到達しました、記録しますか？ はい／いいえ』

なにこれ？

セーブ機能？

なんでこんなもんがあるんだ？

とりあえず、『はい』を選ぶ。

『記録完了です。地上へ戻りますか？ はい／いいえ』

どうする？

というか、どうなってるんだ？

記録機能に地上への帰還機能、迷宮の魔法陣は化け物か！って、赤い人がいいそうだ。

とりあえず帰る？

でも、なんにも迷宮の異変についてはわかってないしなあ……

いつまでって期限も決められてないし、今日はとりあえず帰るか？

うん……

「どうする、スクルド」

「キユイ？」

突然聞かれたスクルドは首をかしげている。

いや、答えてくれよ。

しょうがない、まだ時間も早いしこのまま続けよう。

『いいえ』を選択し、俺とスクルドを緑色の光が包み込む。

そして、俺とスクルドの姿は10階から消えた。

14話 迷宮挑戦は命知らずの証でした（後書き）

迷宮に入ったのにバトルがない。

バトルがないのに迷宮に入ってしまった。

そして、まともレナが登場していない。

ちなみに、迷宮管理人のおっさんは、武器屋のおっさんではありません。
せん。

双子の弟さんです。（ちなみに、主人公が呼ぶとどちらも「おっさん」）

15話 魔物は白黒でした

(略)

「何も変わらないな」

11階に到着した俺は、ため息をつきながらそう漏らした。

10階の移動紋章(仮)が他の階と違う色をしていたし、11階からは今までと違うんじゃないかって予想していた俺の期待は、幸か不幸か裏切られていた。

一通り11階を回り終えた俺の前では、移動紋章が青い輝きを放っている。

スクルドもあまりに退屈なのか、俺の肩の上であくびをしている。

「12階こそは……」

淡い期待を胸に俺は移動紋章の上に乗った。

現在23階でございます。

案の定なにもありません。トラップすらありません。宝なんてもつてのほか。

20階の移動紋章が緑の輝きを放ち、10階と同じ記録機能があったので、どうやらセーブは10階ごとにできるらしいことがわかった。

なにもない。

17階を過ぎたあたりでスクルドは寝の体勢に入ってしまった。さつきから声をかけても何の返事もしてくれません。

というか、眠ってるのによく落ちないなこいつ……

今日何度目かわからないため息について俺は移動紋章に乗った。

たららたつたらら！ ガイは30階に到着した。

ハイブラザー、今日も平和だな。

ダメだ。話し相手が居なくてさびしすぎる。

意味の分かんないことを頭の中で考えて寂しさを紛らせているけど、そろそろ限界だ。

「なあスクルド。そろそろ起きてくれよ」

返事はない。

マジで泣きたい。

こつから下は中階層だ。モンスターの危険度は上がるし、俺一人で無事に探索ができるのか？

ここまでと同じでモンスターが全くいないって可能性も否定はできないけど、モンスターがいた場合はシャレにならない。

奇しくも記録機能付き移動魔法陣があるはずの30階だ。

とりあえず今日のところは退散して、お城に報告。

できたら、騎士の何人かをお供に付けてもらえるように交渉して明日出直した方がいいんじゃないだろうか。

そうしよう。

このままだと退屈すぎるのとさびしすぎるので発狂しそうだ。

「キ」

「ん？ スクルド、起きたのか？」

ピクリと耳を動かしたかと思うとスクルドが俺の肩から飛び降りた。

帰ろうって決めた矢先に起きるなんてこの相棒は俺が嫌いなのか？

「ん？ どうしたんだ、スクルド」

スクルドは毛を逆立てて次の曲がり角を睨みつける、というか、威嚇している。

今までにない反応だ。

もしかしたら、この先にモンスターがいるのか？

ようやく、冒険者らしいことができるのか。と、俺は胸をなでおろしていた。

そう、曲がり角を曲がるまでは。

「GYUAAAAA!!!」

……なにこいつ？

曲がり角を曲がってほんの数歩歩いた先はドーム状の大部屋だった。

扉はなく、出入り口だけがぼつんとある大部屋。

そこで俺たちを待ち受けていたのは、巨大な……熊？ いや、パ
ンダか？

全体的に白い色合いで、ところどころが黒い。

見た目はパンダ。ただサイズは規格外。

かなりの広さの部屋で、ビックパンダ（仮）とは結構な距離が開
いているけど、どう考えても俺が知っているパンダのサイズじゃな
い。

目測で4メートル以上ありそうだ。

腕は俺の胴回りぐらいの太さがあり、正直エントランスにいたお
っさんなんかよりもはるかに威圧感がある。

「おいおい、マジかよ……」

俺は慌てて剣を抜くと、両手で柄を握って構えた。

すみません、モンスター舐めてました。

っていつか、ここまで何もなかったから油断してたんだろっ。

ビックパンダは信じられない速さで俺の目の前まで近づいたかと思

うと問答無用でその腕を、俺にたたきつけた。

偶然構えていた剣で受けていなかったら即死してただろう。

剣で受けたのが幸いしたのは確かだが、俺は3メートルはふつとばされた。

攻撃力高すぎませんか？

剣は折れてないけど、防具に若干亀裂が走ってる。左手の手甲なんかは一部が完全に欠落して、腕が露出している。

「つちよ!？」

俺が起き上がるよりも早く、ビックパンダは追撃をかけてくる。

即座に後ろに跳んでなかったら、これまた即死してたっぽい。

だって地面がえぐれてるんですもの。

「GYUAAAAA!!!」

それがパンダの鳴き声なのか!? って突っ込みたい。

でも、たぶん理解してもらえない。

追撃を躲されたからか、ビックパンダはさらなる追撃を仕掛けてこなかった。

じつとこちらを見つめている。

たぶん、すきを見せた瞬間には襲い掛かってくるだろう。

油断なんて絶対できないし……

「キユイ！」

ビックパンダに完全に無視されていたスクルドが後ろから襲い掛かった。

が、サイズが違いすぎるからか、ビックパンダはびくともしていない。

こんなサイズが違う相手に向かっていくなんて自殺行為だぞスクルド。

ん？ 待てよ。

そうだ、スクルドはあのボス猪だって倒せたんだ。このパンダを倒せないって道理はない。

あの時の突撃を喰らわせてやれば、こいつだって倒せるかも。

「スクルド、前に猪を倒した突撃は使えないのか？」

剣を構え、パンダに隙を見せないようにしながら叫んだ。

「キユイ」

ちょっと遠くてわかりづらいけど、首を横にふったっばい。

ダメなの？ なんて？

なんか条件でもあるのか？

仕方ない。三十六計なんとやら、とりあえず逃げるしかないな。

自分で戦おうとしない小心者だと笑わば笑え、怪我はしたくないんだ。

と、言うわけで、じりじりと移動し、足の先で小石を蹴飛ばしてパンダの注意を俺から逸らすと同時に俺はスクルドを拾い上げて元来た通路へと走った。

っふ、完璧だ。

「キユイ！」

「ん、どうした？」

不意に腕の中のスクルドが鳴いたので足を止めることなく後方を確認する。

「GYUAAAAA!!!!!!」

……ナンデツイテキテルノ？

ちよ、おま……早い、早いよ。

なんかの本で読んだ覚えがある。熊は時速60キロで走るって……パンダはどうなんだ？

うん、どんどん距離を詰められてるみたいだけど、パンダも例外じゃないのか？

つか、やばいって……

「ぬがああああおえあえああああんぎやああああ」

自分でも意味不明の奇声だと思う。

でもなんか知らないけど、気づいたら口から洩れていた。

曲がり角を曲がって、全力疾走。追い付かれそうになってまた曲

がる。そして全力疾走。

パンダは体がでかいせいで、そんなに広くない迷宮の通路内では、あんまり激しく動けないっぽい。

これなら逃げ切れそうだ。

で、問題はどこへ逃げるかだな。

迷宮から脱出するには専用のポイント、たぶん10階ごとにある緑色の魔法陣に到達するか、10万Bはするアイテムを使うかだ。

当然のことながら、俺がそんなレアアイテムを持つてるはずがない。

幸いなことにここは30階だから、緑の魔法陣が存在する。つまりは、そこに到達すれば価値なわけなんだけど……

29階の魔法陣で飛ばされた30階の入り口(?)から、さっきの大部屋までは一本道だったんだ。

そう、緑色の魔法陣に到達するにはさっきのパンダの向こうに行かなくちゃいけない。

やばい、死亡フラグたつたかも……

そうだ、こんなときこそ、おっさんにもらったブレスレッドが活躍するときだ。

今こそ、時は来た。俺は喜び勇んで救援要請ボタンを押した。

『ガイは救援要請ボタンを押した。しかし何も起こらなかった』
なぜに？

押すのが弱かったのか？

『ガイは救援要請ボタンを押した。しかし何も起こらなかった』
どういうことだ。

つくそ、もう一度。

『ガイは救援要請ボタンを押した。ブレスレットが壊れた』

な、なんだと……

俺の手の中には真っ二つになったブレスレッドだったもの。

まさか、さっきのパンダの攻撃で壊れたって言うのか？

……おっさん、すまない。あんたの好意は何の役にも立たなかったよ。

やばいな。どうしよう。

こつなったら、戦うって選択肢が有力候補。ただし、俺の死亡率高め。

第二候補、死んだふり作戦。ただし、マジで殺される可能性高め。

知ってるか？ 熊は動物の死骸も食べるんだぜ。

第三候補、もう諦めて死ぬのを待つ。ただし、俺は死亡する。意味ないな……

第四候補、なんとか隙を見つけてパンダの向こう側へ抜ける。ただし、パンダに圧殺される可能性高め。体デカすぎて、隙探す以前に隙間を探さなきゃいけない。これも現実的じゃないな。

やっぱり戦うしかないんだろうな……

「キユイ！」

「ん、どうした？」

スクルドが俺の向かってる先に向かって鳴いた。

後ろからパンダが迫ってくる様子もないので足を止めて様子を見よう。と、そいつは姿を現した。

パンダ。

なぜ？ なぜあいつが俺の前にいる。

いつの間に抜かれた？

いや、どこか抜け道でもあるのか？

しかし、これはチャンスだ。

俺の進行方向にあいつがいるってことは、後ろには誰もいない。つまりは緑の魔法陣まで直行できるってことだ。

「よっしゃー！」

俺は思いつくや否や踵を返して走り出した。

そして、少し進んだところで再び足を止める。

なぜかって？

やつがいたからさ。

そう、なぜかやつらは前後にいる。

やつらは2匹いる。

「GYUAAAAAAAAA!!!」

前後にいるパンダが咆哮した。

誰か助けてくれよ……

ガイが迷宮探索に乗り出している頃、セリルは城での政務に忙殺されていた。

モンスターの出現報告があれば、討伐指示をだし、街からの陳情があれば検討し、指示を出していた。

街道や近隣の森にあふれているモンスターの数は尋常ではない。

本来であれば、三井と他数名の騎士たちを迷宮探索に向かわせる予定だったが、それすらも溢れ出てきているモンスターたちの討伐に当てなくてはならないほどに事態は切迫していた。

モンスターの異常発生理由は間違いなく迷宮が原因だ。それを調査しないと選ぶ選択肢はありえない。

しかし、調査するだけの余裕はない。

冒険者ギルドに依頼を出そうにも、ギルド側もモンスターの討伐で手いっぱいのため、高ランクの冒険者はほとんど迷宮にかまっている余裕がない。

バルデンフェルトにしるギルドにしる、増援を要請しているが、到着するまではまだそれなりの日数を必要としている。

が、それを待っている余裕はない。

なぜなら、最初に地上で危険度の高いモンスターが発見されてからというものの、同様の事態が加速度的に増加しているのだ。

増援が到着するころには、増援もモンスターの討伐に当てなくてはならないほどにモンスターが増えることすらもあり得ない話ではない。

そもそも、増援が到着するまでに街が滅ぼされる可能性すらあるのだ。

「やつは、役に立つのだろうか……」

バルデンフェルトの元騎士を倒した駆け出し冒険者、獅子王 ガイ。

セリルは彼のことをよく覚えていた。

かつてはこの城を王城としていた国を滅ぼした勇者。この国に存在するはずのない人間。

まったくもって興味深い人材であるのは確かだった。

いくら腐ってようと厳しい試験を乗り越えて騎士となった男を倒したのだから、実力が無いわけではない。

しかし、どうやら彼はなかなか変わった人間だ。

大国バルデンフェルト、その専属勇者となる機会を得てもそれを

断る人間など普通はいない。

リンガ地方と呼ばれる大陸の南西で最大の領土を誇り、圧倒的な武力を持ち、ほとんどの民が不満を抱かないだけの政治を行えるだけの資金と政治力。それらをすべて持ち合わせている国などリンガ地方にはバルデンフェルトを除いてありはしない。

そんなバルデンフェルトの専属勇者となれば、富も名声も一介の勇者、冒険者とは思えないだけのものを得ることができる。

冒険者であれば、誰もかれもが喉から手が出るほどにその機会を欲するはずだが、それを彼は断った。

この世界に来てから日が浅いからバルデンフェルトの強大さを理解していないのか、とも考えられる。が、三井から彼のことを聞いていた限りでは、その程度のことかわからないほどの馬鹿ではないらしい。

だが、彼は断った。

なにか理由があるかもしれない。そうは思うが、納得はしかねる。

なぜなら、バルデンフェルトでも武・魅・政でそれぞれ名高い三姫の一人、セルフィール・シエスト・アナ・バルデンフェルトが直々に声をかけたと言うのに、それを面と向かって断るような人間などよほどの馬鹿か大人だけだからだ。

少なくとも、事前に自分がどのような人間なのか彼に吹き込むように三井に命じておいた。

曰く、目的のために手段は択ばない。

曰く、今までに達せることのできなかつた目的はない。

曰く、彼女の邪魔をすれば下手をすれば命はない。

後は三井なりに工夫して、セリルの言葉に肯定的な返事を返すように誘導していたはずだ。

しかし、彼は断つたのだ。

セリルが知ることのないことではあるが、騎士の勧誘を断つた際に、ガイはその話を完全に忘れていた。

だからこそ簡単に断つた。

そして、それほど求められていることを知らなかった。

事実、セリルは彼を求める理由を誰にも話していないのだから、それを彼が知る由もない。

だが、そうとは知らない、そして気づいていないセリルは、ガイが馬鹿なのか大人なのかと、心を乱されていた。

「ふん、ただか一介の冒険者の分際で私の心を乱すとはな」

セリルは叩きつけるように判子を書類にたたきつけると新たな書類を手に取った。

わずか3秒ほどで書類に目を通し終えたセリルが、再び判子を振り下ろそうとした矢先、何者かが扉をたたいた。

「入れ」

「失礼します、姫様」

セリルに促されて彼女の執務室の戸を開いたのは、バルデンフェルトの騎士にして専属勇者の三井 純であった。

「どうした？」

「はい、新たな魔物が発見されました」

「なに？ どうせ、また中階層の魔物だろう。それらの対応はお前に任せただけだ」

「はい。ですが、新たな魔物はギガースパンダです」

「ギガースパンダだと！？」

語感だけ見ればなかなか滑稽だが、セリルは動物園で人気がありそうな名前を驚きに満ちた表情で言った。

「なぜだ……なぜあんな化け物が、地上に出ている」

「わかりません。わたしも下階層の魔物が地上に現れた話など聞いたことがありませんので」

三井の言うとおり、ギガースパンダとは本来ならば下階層に出現する魔物だ。

属性を持った熊のモンスターであれば地上でもその姿が確認されているし、中階層だけでなく稀ではあるが上階層にも出現することがある。

しかし、光と闇の属性を持ったギガースパンダが上階層すら通り越して地上に出ているなどと言う話は前代未聞であった。

「幸いにも確認されているのは1体だけです。私が対応させていただきます。しかし、下階層の魔物が地上に出るのが今回だけとは限りませんので、報告に馳せ参じた次第です」

「そうか、ご苦労。だが、仮に複数の魔物が……いや、今それを問うても意味はないな。わかった、今後の対策は私の方でも考えておく。お前は、とり急ぎギガースパンダを倒してこい」

「っは！」

バツと胸に握り拳を置いてバルデンフェルト騎士流の敬礼をすると、三井は執務室を後にした。

執務室に残されたセリルは、先ほど目を通し終えた書類を手に握ったまま思考を巡らせる。

下階層の魔物を単独で倒せるのはSランク冒険者だった三井以外には今この街にはいない。

多人数でかかれば、いくらかの被害を出しつつも倒すことは可能だが、こちらの被害は拡大するし、他の場所に出現した魔物を放置することはできない。

今もほぼぎりぎりの状態で対処していると言うのに、ここにきて下階層の魔物が地上に現れるというのは完全に予想外だ。

もはや、近隣の村や森が魔物に蹂躪されるのは時間の問題になっている。

「…………あの男が、うまくやってくれば……………いや、単なる冒険者に過度な期待はできないな」

セリルはため息を一つつくくと、執務机に置いた書類に判子を押し
た。

15話 魔物は白黒でした（後書き）

名前はジャイアントパンダにしようかと思っていたのですが、ま
ま普通のパンダの名前になるので却下。

ギリシャ神話で巨人を表す、ギガースにしたんですけど、かなりミ
スマッチですね。

次回は、第1次迷宮探索終了する……かもしれませぬ。

16話 迷宮は不思議でいっぱいでした

(略)

ピンチだった。

この上なくピンチだった。

逃げ場の全くない一本の道の真ん中に立つ俺の前にはパンダ。後ろにもパンダ。

前門の狼、後門の虎……と見せかけて、後門にも狼がいた。

パンダは嫌いじゃないさ。

動物園の人気者、笹を食べてる姿がキュート。

だけど、俺の進路と退路を塞いでいるパンダは、全長4メートル以上、推定体重500キロ超の文字通りのモンスターなんだ。

可愛いって言いながら抱き着こうものなら、そのまま絞殺されるか、丸太みたいな腕でぶんなぐられると思う。

一撃喰らった感想としては、この前戦ったボス猪と同程度のモンスターだと思う。少なくともあれより弱くはない。

で、俺がそれに勝てるのかって疑問。

ボス猪は絶体絶命のところまでスキルドに助けられたが、そのスク

ルドも俺を助けた時と同じ戦い方はできないと言っ。

勝てる要素が見当たらない。

それにしても、あの後ろにいるパンダはどうやって現れたんだ？

湧き出てきたのかもしれないが、魔物が湧き出るのは専用の部屋があるらしく、そこから以外は突然現れる可能性はないはず。

俺が通ったこの階の道には個室など存在しなかったので、湧き出てきたってことはないはずだ。

だとしたら、どうやって？

「……もしかして、人間だけじゃなくてあの移動紋章はモンスターも転移するのかわ？」

だとしたら、上の階で見落としていたあのパンダがこの階に現れた理由も納得できる。

だけどそれなら、上の階にいる間に遭遇しておきたかった。

なんで2体も同時に相手しなきゃいけないんだ……

動きを止めている俺に対して、前後のパンダたちはそれぞれがじりじりと距離を詰めてきている。

もしもこいつらが俺と言った1人の獲物を2体で奪い合って

くれば、その隙に逃げ出すことができるかもしれない。

だけど、まあたぶん巻き込まれるだろう。

なにせあのデカさだ。

通路の幅と高さぎりぎりの大きさの2体が同時に暴れる中心から、怪我一つなく抜け出すなんて芸当が俺にできるわけがない。

だったらどうするか。

スクルドと同時に前にいるパンダを狙って攻撃する。だけど、そうすると背中を向けて走り出すと同時に後ろのパンダが突っ込んでくるだろう。

ならば2体を俺とスクルドそれぞれが1体ずつ相手取るか？

1対1で勝てる自信がまったくない。

毎回毎回いつも思うし、その結論に達するが、打つ手がない、勝ち目がない、生き残る手段がない。

さて、どうしよう。

いつものパターンなら、ここで誰かしら救世主が現れて助けくれるはずだ。

だけどその救世主は？

ボス猪の時は、事前にスクルドと会って、干し肉をやるっていう

フラグを立てていた。今回はどうだろう。

おっさん？ いや、ブレスレットが壊れてるから、おっさんが今の俺の窮地を知るすべがない。

5階にあった冒険者パーティ？ いや、あの人たちはすでに死んでいる。

ゾンビになって助けに来てくれるかもなんて、考えたくもない。怖いし。

というか、あの人たちはこのパンダに襲われたのか？

いや、今そんなことを考えていたってしょうがない。

とりあえずはフラグはこんなもんだろう。つまり……

助けてくれる救世主が現れる可能性は皆無。

ああ……どうしよう。

前後のパンダとの距離はそれぞれ10メートルほど。一足飛びに距離を詰められたら一瞬で勝負がつきそうだ。

偶然にも前後のパンダはそれぞれお互いを牽制して足を止めたので、まだなんとか考える時間はある。

「なあ、スクルド。やっぱりこの前の猪を倒したときみたいに一撃であのパンダを倒したりはできないんだよね？」

「キユ」

コクリと頷くスクルド。

俺はその場につくりと膝をつきたい気持ちになった。

俺くらいの人間の大きさであれば、速さと小さいながらも獣としての攻撃力で足止めなどはけっこうできると思う。

が、今回の相手はサイズが違いすぎる。

それに対してスクルドはどこまで行っても小動物としてのサイズを越えない。その分体重も軽いので、一撃の威力は期待ができない。さっきもそうだったけど、あのパンダにとってはスクルドの攻撃なんて蚊に刺されたようなもんだらう。

「ったく。どうすりゃいいんだ」

次の瞬間、俺は不用意に大きな声を出したことを激しく後悔した。

俺の声に反応した2体のパンダが襲い掛かってきたからだ。

前後から同時に襲い掛かる巨大パンダ。

俺は慌てて前にいたパンダの下をくぐろうとしたが、ほとんど隙

間がない。

パンダと壁に挟まれて圧死。そうじゃなければ、パンダとパンダに挟まれて圧死。

どっちにしろすごく嫌だ。

「どちくしょー、こっとなったら自棄だ」

俺は剣を抜き放つと、前方から迫りくるパンダに切っ先を向けた。

四足歩行で突撃してくるパンダ。その後ろから突っ込んでくる奴にあえて突き飛ばされ、正面にいるパンダの脳天に剣を突き立てる。

下手をすれば、背骨が折れるかもしれないし、突撃じゃなくて腕でぶん殴られるかもしれない。

勝算は高くないが、俺の思いつく限りではこれが一番それっぽい作戦だ。

案の定、後ろからパンダが俺の背中に頭突きをしてきた。

吹っ飛ばされつつも、切っ先はまっすぐと正面から迫っていたパンダへ向ける。

ザシュツ、ズババ、バターン。ってなればよかった。それが理想だった。

剣は正面のパンダの肩口に突き刺さった。が、それだけだった。

剣がつかえ棒になってくれたおかげで、正面から来ていたパンダの頭突きを喰らうことはなかったけど、やばい。

時速60キロ同士の正面衝突。そのど真ん中にいたんだ。

肩と手首の骨が外れたくさい。

剣から何とか手を放すと、両手が力なく垂れ下がり、動かそうにも動いてくれない。

詰んだ。

未熟とは言え剣士の俺が剣を振るえないのだ。蹴り技なんてローキックぐらいしか使えないし、攻撃手段がほとんどない。

剣を突き刺されて怒り狂ったパンダの一撃が俺に迫る。

眼前につきつけられた死神の鎌が大きく振り上げられ、俺に振り下ろされようとしている感じだな。

恐怖に目をつむり、最後の時を待とうとする俺の耳に聞こえたのは、なぜだか知らないがパンダの悲鳴のような方向だった。

「GYURAAA!」

驚きつつ目を開くと、いつの間にもやら剣に取りついていたスクル

ドが白っぽい光を放っている。

悲鳴を上げてのた打ち回るパンダに気を引かれていると、今度は後ろにいたパンダが腕を振り上げ俺へ襲い掛かるうとしていた。

慌てて前かがみになって距離を空け、ぎりぎりとのところでパンダの攻撃を回避する。

迷宮全体が震えているんじゃないかと思わせる震動、どうやらスクルドが取りついていたパンダが倒れたようだ。

倒れたまま、ピクリピクリと痙攣するパンダをしり目に、スクルドが俺の肩へ戻ってくる。

「お前、なにしたんだよ」

「キユイ」

元より俺の問いかけに答えられないスクルドに質問をしたところで意味なんてないんだろうが、それでも俺は問いかけていた。

ついでに言うなら、肩に乗るのはやめてほしい。

ものすごく痛い。

ライバルがいなくなつて獲物を独り占めできることが分かったのか、後ろにいたパンダの攻撃は苛烈を極めた。

腕を振るい、かみつこうともする。

後ろ歩きのような形で、バックステップや屈んだりしてなんとかパンダの攻撃を避け続ける。

なんだか、俺は回避能力だけ異様に高い気がする。

幸いにも移動魔法陣の方向をふさいでいたパンダが倒れた今、隙を見て逃げ出せばなんとか振り切れるかもしれない。

パンダの攻撃が止まった瞬間、一も二もなく逃げ出した。

相変わらずパンダの肩にバスタードが刺さったままだったが、両腕が使えない状態で回収することも出来ない。

腕が垂れ下がった状態で走るのは、なんとも走りにくく、外れた肩が動いたたびに痛んだけど、死ぬよりははるかにマシだ。

パンダとの距離はおよそで10メートル。

曲がり角を曲がるとその距離がわずかに開き、直線になると距離が詰まる。

時折パンダの射程に入ったのか、パンダの腕が俺の背中をかすめたりしたけど、ぎりぎりのところで回避してなんとか距離を開く。

初めにパンダと出会った広い部屋を通り、出口からわずかに進んだ先に光っていた移動魔法陣を見つけると、俺は兎にも角にも飛び込んだ。

「記録する、地上へ戻る！」

俺が早口でまくしたてると、光が俺とスクルドを包み込む。

俺たちの姿が消えるのと、パンダの一撃が俺たちのいた場所を通り過ぎたのはほとんど同時だった。

気が付いた時には、俺は迷宮に入って最初の部屋、エントランスに戻ってきていた。

相変わらず何人かの冒険者たちがその場で会話をしている。

「おお、坊主。なんとか無事に戻ってきたみたいだな」

「おかげさまで」

「おいおい。大丈夫か？ って、その腕どうしたんだよ」

「まあちょっと巨大なパンダに襲われましてね」

「パンダ？ まあいい。とにかく、ちょっと見せてみる」

俺が戻ってきてすぐに気のいいおっさんが話しかけてきて、俺の腕の状態を見てくれた。

「ああ。こりや完全に外れてるな。まあ、こんだけきれいに外れてるんなら、すぐ治るぞ」

おっさんはそう言って、俺の腕をはめてくれた。

「つつう……ありがとうございます。でも、脱臼なんて素人が治したらまずいんじゃないですか？」

「ん？ 何いつてるんだ。冒険者なら、この程度治療できて当たり前だろ。まあ、街に戻ったら治療所で回復魔法かけてもらえば、すぐに動かせるぞ」

そう言えば、この世界には魔法があるんだな。

それなら、とりあえず素人が治療しても後は回復魔法でって、やり方ができるのか。

まあ脱臼と違ってのはあんまり経験がないから、地球だとどんな風に治療するのかとかよく知らないけど、こんなもんなのか？

「にしても、パンダってのは、もしかしてギガースパンダのことか？」

「ギガス？」

「ああ。大きさはだいたい5メートル前後で、白黒の模様の熊種だ」

「ああ、たぶんそれですね」

「おいおい、お前。ありゃあ、下階層のモンスターだぜ？ 何階まで潜ったんだよ」

「ええ！？ あれって、下階層のモンスターなんですか？ 一応、30階までは行ったんですけど」

「つな！？ 30階だって！ お前、レベル5のくせにフロアボス倒したのか？」

「フロアボス？」

「ああ、5階降りるごとに、ボスがいただろ？」

「いや、そんなんいなかったけど」

「はあ！？」

「ぜんぜんモンスターがいなかったんですよ。30階までモンスターはまったく見つからなくて、初めて出てきたのがパンダだったっていう」

「そりゃ、ほんとにパンダだったのか？ 別の熊種のモンスターとか……」

「どう見てもあれはパンダですって。なあ、スクルド？」

「キユイ」

スクルドだって肯定してくれる。あれは間違いなくパンダだった。

「フロアボスもいなくて、30階でギガスパンダ。そもそもモンスターがぜんぜんいないだと……どうなってるんだ？」

「もしかして、最近の迷宮で起こってる異変ってこのことなんじゃないですかね？」

「いや、そんなはずねえ。俺の知る迷宮でのおかしなことってのは魔物の異常発生だ。どうやら、下階層のモンスターが増えてるみたいで、中階層の魔物が上階層にまで押し寄せてきてるんだよ」

「へ？」

そりやおかしいだろ。

だって、30階までモンスターは影も形もなかったんだ。

なのに、異常発生だって？

「まったくもっておかしなことばかりだ」

「そうですね」

「それにしても、ギガースパンダにあったって言うのに救援要請もしないなんて、大丈夫だったのか？」

「いやあ、すぐに助けを呼ぼうとしたんですけど、最初にパンダから一発貰っちゃいましたね。壊れちゃったんですよ」

そう言って半分になったブレスレットをおっさんに見せた。

「どうやら、逃げてる途中でもう半分は落としてしまったようで、どこにも見当たらなかった。」

「あっちゃー……こりやすげえ。こいつは簡単に壊れないようになってきてるんだがねえ。それこそ、下階層のモンスターの一撃くらいなら耐えられる設計なんだが……」

「そうなんすか？ でも、簡単に壊れ……いや、簡単だったかなあ」

「まあ、なんにしても壊れちまったもんは仕方ねえよ。モンスターの攻撃で壊れたってんなら、経費で落ちるしな」

止めを刺したのは、俺がボタンを押したせいなんだけど、それは黙ってた方がいいな。

弁償しろって言われても、金ないし。

「とにかく、詳しく調べる必要があるな。坊主はどうするんだ？」

「とりあえず、街に戻って腕の治療をしますよ。今日はもうおしま
い」

「まあ、それが妥当だな。一応、今回のことを上の方に報告もしな
くちゃならんから名前を覚えてもらえるか？」

「ああ……うん……が、ガイです」

「ガイ、ね。了解。今回のことでお前にいろいろと聞くかもしれん
から、念のために明日はギルドにも来てくれ」

「はい」

「どうやら、おっさんはシシオーの下の名前は聞いてなかったよう
だ。」

微妙に複雑な気分になりながら、俺は迷宮を後にした。

「姫さんに報告もしなくちゃならんし、なんだか面倒なことになっ
たのかな？」

17話 お願いは失敗でした

(略)

迷宮を探索した翌日、俺は城へとやってきた。

昨日は両肩および両手首の脱臼っていうかなり重症じゃないのこれ？ ってぐらいの怪我をしていたわけだが、この世界のすごさってのを改めて思い知らされた。

迷宮管理人のおっさんがやつついで応急処置したそのままの状態
で、街にあるギルド付属の診療所に行き、回復魔法をかけたらあら不思議。

まったく痛みもないし、違和感もない。

なんでも、骨が外れた場合ならはめてから魔法をかけないとダメらしい。

魔法で何から何まで治すってわけにはいかないようだ。

とまあ、そんなどうでもいい話は置いておいて、俺はお姫様に昨日の結果を報告するために城に来たわけだ。

さすがに直でお姫様に報告するわけじゃないだろうけど、やっぱり城にくるのは緊張する。

できれば三井さんあたりが担当してくれれば、あんまり緊張もしないで済むんだけどそんな都合よくは進まないよな。

「こちらへどうぞ」

門番に話をしただけ、身なりのいい男が現れてそう言った。

なんか見たことのない人だけど、こんな人もいたんだな。

軽く門番に会釈をしてから、男に続いて門をくぐる。

あぁと……どう説明するかなあ………

で、やってまいりました謁見の間でございます。

おかしいなあ。俺の中では、適当な部屋であんまり話したこともない騎士さんかなんかに話をするのが決定事項だったんだけど……

っていうか、お姫様はそんなに頻繁に俺みたいな一介の冒険者と話すほど暇なのか？

そんなことを考えながら跪いていると、騎士の一人が声を張り上げてお姫様が入室することを告げた。

俺は一層頭を低くして、お姫様に声をかけられるのを待つ。

「早速だが、迷宮はどうなっていた？」

何の前置きもなしに姫様は言った。

あの、さっそくすぎませんか？

もっちょっと、こっつ前置きのことを言ってほしい。

面を上げよとか、そんなことでいいからさ。

「ああ、つと……依頼された迷宮探索を昨日行ってきました。何度潜るのか、何階まで潜るのかとか、どのようなことを調べ上げるまでという達成条件を厳密にお知らせいただいていませんでしたので、とりあえずですが、経過報告に参った次第です」

敬語とかそれ系の言葉は苦手だ。

相手はただでさえ恐ろしいお姫様だから、変なことを言って斬首になったりしたら目も当てられない。

なんとかかつつかえたりしないで言うことが出来たけど、言葉遣いは間違っったりしてないよな？

「そう言えば、そうだな。うむ。賢明な判断だ。して、昨日の結果を聞こつ」

「はい。迷宮に潜る際に確認したところ、迷宮には魔物があふれかえっていると聞いていたのですが、私が実際に潜ったところ、まったく違う結果となりました」

「全く違う結果？」

「はい。昨日はひとまず30階まで潜ってみましたが、そこに到達するまで遭遇したモンスターはおらず、30階にてようやく初めてのモンスターがいました」

姫様に促されて言った俺の言葉に、周りに控えていた騎士たちがざわめいた。

「騎士の皆さんはたぶん、迷宮管理人のおっさんが言っていたように、モンスターが異常発生していると思うっていたんだろう。」

だから、「なに」だとか「馬鹿な」みたいなことを言っているけど、俺が実際にそうだったという事実を話してるんだから、仕方のないことだと思っただけほしい。

「静まれ。して、30階にて魔物を見つけたのだな？」

「はい。私はモンスターについて詳しくないのですが、よく知る人間に、私が遭遇したモンスターの特徴を話したところ、ギガースパindaではないかとの結論に達しました」

「ギガースパindaだと？」

もっと取り乱すかと思ったけど、お姫様はいたって平静なままだった。

逆に周りの騎士たちは面白いぐらいに驚愕している。

ただ一人、三井さんだけが神妙な面持ちで佇んでいるけど、どうしたんだろう。

「はい。ご存じのとおり私はGランクの冒険者です。さすがにギガースパンダと戦って無事に済むはずもなく、両肩が外れるなどの怪我を負って命からがら逃げ帰ってきました」

「ふむう……」

「迷宮を管理している人間に尋ねたところ、迷宮ではモンスターが異常発生しているとの話を聞きました。しかし、実際に私が潜ったところ、モンスターはまったくいなかった。そこがはなはだ疑問に思われるところです。ひとまず、その迷宮を管理している人間にも事情を話したので、ギルドでも調査をする方向になると思われます」

昨日の時点で、おっさんがギルドに報告するから、明日……つまりは今日にギルドへ行くように言っていたから、現状ではどうなっているか分からないけど、話は通っているはずだ。

「つまり、お前の調査の結果は他の冒険者たちとは違うものという

わけだな」

「はい」

「しかし、なぜそのようなことになった？」

知らんよ。

いや、迷宮の探索自体昨日が初めてのことだったし、本来はどんなもんだか知らない。

それをいきなり、なぜ？ とか聞かれてもわかるわけないじゃないか。

「それは、今のところ私には」

「姫様、そのような男の話を聞く必要はございません！」

「わかりません。……ん？」

なんだ、突然話に割って入りやがって。

「貴様のような男が、迷宮探索？ それも30階まで潜るなど信じられるものか。どうせ、適当なことを言っただけ報酬を受け取るつとと言っ心積もりだろう！」

言いながら、控えている騎士の列から一步前に進み出たのは、いかにも純粹培養されたようなエリート風の騎士だった。

無駄に長い前髪は顔の左半分を覆い隠し、実用性に欠けるほど磨き上げられた鎧は他の騎士たちのものに比べて、無駄に華美な印象を受ける。

こいつは、あれだ。鬼 郎か？

顔の半分を隠してるし、頭頂部の髪の毛を一本逆立てて、「父さん妖気が」とか、言わせたらまんまそうだと思う。

いや、あれは茶髪と言うか、黒系の髪で、こっちの鬼 郎は金髪だ。

これじゃあ、鬼 郎じゃなくて、金 郎だな。……あれ、日本昔話のキャラクターみたいになってる……

「冒険者とは言え、所詮はGランクの小者。ギガースパンダを前にして無事に逃げおおせるはずがない。それらしい話をして謀ろうとしたところで、その話に信憑性などまるでないわ！」

いや、確かにその通りと言えばその通りだ。

下階層に出現するはずのギガースパンダをたった一人の冒険者、それもGランクの新米が相手にして無事で済むなんて普通はない。

まあ、俺が言っていることは事実だから例外にしても、この金鬼郎の言っていることにはある程度同意できる。

「自分でも嘘のような話ですが、この話は事実です。証拠を見せると言われても、物的なものは何も持ち帰っていないので、申し訳ないですが不可能ですが」

一応、迷宮の方に冒険の記録があるけど、あれは持って帰れるよ
うなものじゃない。

……ん？

というか、あれはどうやって記録されてるんだ？

もしかして、ギルドカードに記録されてるならそれを見せれば証拠になるかもしれない。

俺は小声で、オープンと言ってギルドカードの情報を表示すると、
手早く内容に目を通す。

生憎と迷宮関連の項目もそれらしい表示もなかったので、ギルド
カードに記録されてるってわけでもなさそうだ。

「貴様、何をやっている！ 姫様の前で失礼だろう！ だから私は
このような下賤の者に誇りあるバルデンフェルトが仕事を依頼する
などと」

「黙れ」

「　　いうのは嫌……だった……の……だ………姫様？」

俺をぐちぐちと罵ろうとしていた金鬼　郎の言葉をさえぎって、
姫様は有無を言わさぬ口調で言った。

金鬼　郎の間抜けな顔がなかなかに見ものだ。

「黙れキツタローン。その者を貶める言葉は、つまりその者に依頼を決めた私を、ひいては王族をも貶めるということだ。文句があるのならば私に直接言えばいい！」

「いえ、姫様。姫様の決断に異論があるはずなどありません。ただ、私はこの者の言う虚偽にまみれた言葉が　　」

「私は黙れと言ったぞ、キツタローン！」

「　　申し訳ありません」

……あの、金鬼　郎はキツタローンと言うのか。

まんまだ。

あいつの両親はきつと、某リモコン下駄を履いた少年妖怪（要するに鬼　郎）の大ファンなんだろう。

「話の途中ですまん、現状は詳しくわかっていない。これからさらに調査を進める。と言うことでいいんだな」

「はい」

できることなら、ここまでで終わりにしたいけど。

「っと、そうだ。調査を進めるに当たり姫様にお願いがございます」
「願います？」

「はい。ご存じのとおり私はGランク冒険者で剣の腕も大したことはありません。今回のようにギガースパンダや、下階層のモンスターが現れた際に対処する術がありません。そこで、騎士の何名かを護衛につれていくことができますか？」

これを言っておかないとな。

ギガースパンダなんて化け物が出るってわかったんだ。姫様だつて助けてくれるだろう。

……あの、姫様？

なんでそんなに馬鹿を見るような眼をこちらに向けるんですか？

明らかに相手を見下したような目ではないけど、なにこいつ馬鹿

なこと言ってるんだ？　みたいな顔は辞めていただけませんか？
お美しい顔が、馬鹿に見えますよ？

やばい、口にしたら殺されそうだな。

って、なんか俺変なこと言ったか？

「お主は冒険者だろう。騎士を護衛に付けるよりも仲間を探すなり、
己が強くなるなりという選択肢はないのか？」

「……ああ」

俺は思わず手を打って納得してしまった。

確かに商人やお姫様みたいな偉い人が護衛をつけるのならわかる
けど、俺は冒険者だ。

どちらかと言えば護衛する側の人間。

護衛をつけるよりも、仲間を探したり自分のレベルを上げたりす
るのが常識だ。

でも、仲間を探そうにもレベル5程度の俺とパーティを組んでく
れそうな人間はいないだろうし、強くなるうにも迷宮ではほとんど
モンスターに遭うことがなかった。

どっちも難しそうだな。

「まあよい。願いというのはそれだけか？ 以前にも話したが、騎士たちは皆、地上にあふれた魔物たちの討伐で手一杯だ。お主の護衛につける余裕はない。しかし、このままでは調査を進めるのが難しいこともわかった。報告は1週間に1度、週の終わりに城へ来るようにしろ。今週の分は今日終えたことにしてよいから、次の報告までは10日ある」

つまりは、その間にレベルを上げるなり仲間を探すなりして、調査を進めろ、と言うわけですね。

でも週に一度の報告ってことは、ずいぶんと長期的に調査をする方向で考えてるのか？

「はい、わかりました。あと確認しておきたいのですが、報酬はどのようなものでしょうか？」

長期的になるのはこの際仕方ないにしても、今回は報酬もちゃんと確認しとかなきゃいけない。

前回はご褒美が、俺にとって何の役にも立たない指輪だったし、今回もおんなじようなことになったら目も当てられない。

「どのように、とは？」

「この依頼が達成するまでは、他の依頼を行う余裕が私にはありま

せん。生きていくうえで最低限のお金は必要になります」

「……なるほどな。よいだろう。受けた報告に応じてそれなりの報酬を支払う。今回はそうだな……1000Bと言ったところか」

1000Bか……

ま、十分かな？ いや、でもなあ……

文句言っただげられたりしたらシャレにならないけど、腕の治療費が300B、失くしたバスタードが前見た感じだと900Bぐらい。

完全に赤字ですね。

もう少し何とかしてほしい。

「念のために確認しておきたいのですが、最低額はいかほどで？」

「なに？ ……そうだな。価値のない報告であれば0、有益であれば金に糸目はつけん」

「そうですか……ちなみに、今回の報酬は価値的にはどの程度のものなんでしょうか？」

「なんだ、金額に不服でもあるのか？ ふむ。まあ、原因もわからず対策の立てようもないが、新たな発見ではあったからな。まったくの無価値でもない、といった程度だ」

つまりは、本来なら0だったってことですな。

そりゃそうか、何もわからないけど、こんなでしたよ。って報告は誰にでもできる。

姫様が依頼したのは、原因の調査とできることなら事態の解決。

調査の方ですら不十分なんだから、文句は言えないな。

「そうですか、わかりました。ありがとうございます」

「うむ。他に何ぞあるか？」

「いえ、大丈夫です」

「そうか。では、次の報告の日に待っておる」

「はい」

お姫様は意外と心優しい？ 言葉を残して謁見の間を後にする。

俺はお姫様がいなくなってから、立ち上がると、目の前にさっきの文句を言っていた男、キッターンが立っていた。

「調子に乗るなよ、薄汚い冒険者風情が」

……なんか、こいつはずいぶんと小者くさいな。

あれだ。主人公に散々文句を言って、不満たらたらなところを悪役に利用されて使い捨てで殺されるようなやつ？

まあ、俺が主人公かどうかは別にしても、こういうやつを俺は好きになれそうにない。

「調子になんて乗ってませんよ」

「なんだとお！」

「はいはい、抑えて抑えて」

激昂して剣の柄に手をかけるキツタローンと俺の間に入ってきたのは、三井さんだった。

ま、三井さんがいるってわかってたからこいつの神経逆撫でるよ
うなことを言ったわけだけど。

……止めてくれてなかったらやばかったな。

次からは気を付けよう。

「彼を選んだのはセリル様だ。その彼を侮辱するのは姫様に忠誠を

立てた騎士としてどうなんだ？」

「……姫様はこの薄汚い冒険者を過大評価しているにすぎん。今日の報告にしても、近所の子供が買物物についでにできるようなものではなかったか」

近所の子供って……さすがにそれは無理だろ。

「キッタローン。これ以上の暴言はセリル姫殿下直属騎士隊長として処罰しなくちゃいけない。抑えろ」

「だが……つく、わかった」

「ありがとう、キッタローン」

キッタローンは柄から手を放すと、俺に背を向けて無言のままに謁見の間から出て行った。

ずいぶん怒ってるみたいだけど、俺にはどうしようもないかな。

「すみません、三井さん。助かりました」

「いや、こつちこそお願いしてる立場だつてのに嫌な思いをさせてしまったね」

「いえ、俺が半人前の冒険者だつてことは事実なんで」

「ま、誰でも最初は初心者だよ。そうそう、ギガースパンダと戦ったってのは本当?」

「三井さんも疑うんですか? 嘘みたいな話ですけど事実ですよ。まあ、戦ったって言うよりも命から逃げだしたってののほうが正しいですけど」

「ごめんごめん。それにしたって、ついこの間冒険者になったばかりだって言うのに、ギガースパンダに襲われて無事ってのは驚きだよ」

「無傷ってわけじゃないですけどね。両腕の関節が外れちゃったんで、昨日はギルドにある診療所で治療魔法かけてもらいましたよ。この世界の魔法ってのはほんとすごいですよね」

「そうだね。たしかに俺も初めて目の当たりにしたときは心の底から驚いたよ」

そりゃそうだよな。

完全脱臼をはめなおした状態にしてからとはいえ、痛みを一瞬で消せるんだ。

地球の医療では考えられないレベルだよなあ。

「でも、信じないわけじゃないけど、ガイ君の話が本当だとしたら、迷宮はいつたいどうなってるんだろうね」

「そうですね。大多数の人間が魔物が増えるって言ってるのに、俺が潜ったらモンスターはパンダしかいなかった、なんて、普通はありえないんですよ？」

「そうだね。周りにモンスターは溢れ出てるし、実際に迷宮に潜った冒険者たちもモンスターの数が多すぎるって言ってるわけだから」

普通に考えれば、俺が嘘を言っているって判断するしかないだろう。

俺が実際に体験したことは他の誰も知らない。

幸い、お姫様も三井さんも信じてるとは言わないまでも、事実の可能性を考慮してるってのは十分にありがたい話だ。

「っと、あまり長く引き留めても悪いね。俺も仕事があるしそろそろ行くよ」

「そうですか。お仕事頑張ってください」

「うん。ガイ君も頑張ってくれよ。君の働き次第で地上でモンスターを倒してる僕らの忙しさが変わってくるんだから」

「わかりました。でも、あんまプレッシャーかけないてくださいよ。俺なんて大した冒険者じゃないんですから」

「ははは、わかったよ。あまり期待しないでおく。それじゃあ」

「はい、また来週に」

謁見の間を出て報酬を受け取りに向かう。

そして、そこで気が付いた。

どこで報酬をもらえばいいのかわからない。そして、俺は姫様にはずいぶんと失礼な口をきいていたから、今更そんなことを気にしてなくても大丈夫じゃないか？ と言う事実……

いや、とりあえずどこで報酬をもらえばいいんだ？

17話 お願いは失敗でした（後書き）

ずいぶんとお待たせしました、箱庭17話でございます。

とりあえず、忙しい。忙しくて目が回りそうでしたが、ひと段落ついたので、これからはもう少しハイペースな更新ができると思います。

今回はギルドでのお話、そしてついにおっさんが登場……するかもしれません。

18話 とりあえず問題は保留でした

(略)

謁見の間から廊下に出たところで、案内をしてくれた身なりのいい人から報酬の1000Bを受け取り、俺は城を出た。

一度家に帰ろうかとも思ったけど、昨日おっさんからギルドに行くように言われていたので、とりあえずギルドへと足を向ける。

城からギルドまでは近くはないがさして遠くもない。

途中でパンで肉を挟んだハンバーガー風のを購入してのんびりとギルドを目指す。

あいにくと道を歩いていると声をかけられるほどこの街になじんでもいないし、見知らぬ女性が話しかけてくるほどのイケメンでもない。

バーガーもどきを食べ終えたところで、何の真新しい出会いもなかった俺はギルドの扉をくぐった。

「あれ、ガイ。どうしたの?」

「あ。アリアさん。ちょうどよかった」

「ちょうどいい?」

俺がギルドに入ると、ちょうど受付にいたアリアさんが声をかけて来た。

昨日の迷宮での話はそこそこしかしていなかったし、おっさんがギルドへ行くようになって言っていたのは知らないんだろう。

「昨日、迷宮であったことをギルドで説明するようになって迷宮の管理をしている人に言われたんですよ。だけど、誰に言えばいいのかわからないんですけど、どうすればいいんですか?」

「え!?! 昨日ギガ スパンダとやりあったのってあんだだったの? ……ま、単身で迷宮に潜る馬鹿なんてあんたぐらいしかないわね」

バカって……

まあ、一人で潜るのはありえないってのは、昨日の経験から俺もすっかり理解したけどさ。

面と向かって言うのはひどいと思う。

「で、誰に説明すればいいんですか?」

「ん〜、この場合はそれなりの上役かしら？ あんまりこんなことないから私もよくわかんないわ。とりあえずマスターかしら？」

「キューマさんですか？」

まさか、直接ギルドマスターに説明するようなことなのか？

たしかに城で話した時もけっこうな反応だったけど、それだけ珍しいことなのかなあ？

「ちょっと待ってて」

そう言ってアリアさんは受付から立つと、奥へと向かった。

他のギルド職員と話してるところを見るとキューマさんがどこにいるのか確認してるところだろうか。

しばらく待たされるとアリアさんがキューマさんを連れて戻ってきた。本当に直でギルマスに説明することになるんだ……

「お待たせ。わざわざ悪かったね」

「いえ、冒険者として当然のこと……なんですよね？」

「ははは。確かにこう言った場合は報告の義務はあるよ。だけど、めんどくさがって報告しない人だっているからね」

どこの世界にもそういう人間はいるもんだ。

まあ、このギルドにはお世話になってるし……いや、お世話になってるか？

むしろ俺がかなりいろんな被害を受けてる気がするけど……

って、そんなことは別にして冒険者になったんだから義務なら当然。そう、当然だ。

あんまマイナス思考すんのはやめよう。

「とりあえず僕の部屋で話を聞かせてもらおう。アリア君、お茶を頼むよ」

「りょーかいです」

「　　というわけで、俺はギガ スパンだから逃げ出して、さっき話した管理をしてるおっさんに腕をはめてもらったんです」

城で説明したのと同じようなことを説明し終わると、キューマさんは考え込むように押し黙った。

沈黙が続いて、なんだか気まずい俺はアリアさんが運んできてくれた紅茶みたいなものが満たされたカップをとる。

「……冷めてる」

ぼつりと漏らした俺の言葉ですら馬鹿みたいに大きく聞こえる。

普段キューマさんが仕事をしているであろう執務机の向こうにある窓からは街の喧騒が聞こえてくる。

「迷宮に魔物はいなかった。そういうわけだね」

「はい」

5分か10分か、黙ったままだったキューマさんはようやく口を開いた。

「昨日も迷宮に潜った冒険者たちは何人かいる。彼らはみなかなりの数の魔物と戦って傷つきながらも成果をあげている」

「……そうなんですか？」

「ああ。昨日のうちに報告を受けていたから、今日もすでに何人かの冒険者が迷宮に潜った。戻ってきた者は数名だが、君の話した状

況とはずいぶんと違う」

つまり、モンスターだらけでめっちゃめっちゃきつい思いをしたってことだよな。

でも、昨日の今日でモンスターが増えるのか？

……そもそも、昨日迷宮に潜った冒険者の中には俺の後に潜った人間だっているはずだ、そいつらも全員モンスターだらけだって言ってたのか？

「詳しい状況がまったくわからない。そもそも、できたばかりの迷宮から大量の魔物が溢れだすことすらも前代未聞だ。今までとは何もかもが違う」

「つまり、どういことですか？」

「考えられるのは3つ。君が嘘をついている」

「嘘ついたってしょうがないでしょう」

「ああ。僕もそうは思っていない。短い時間とはいえ、君がそんな不正を働くような人間じゃないことはわかってる」

そりゃよかった。

ここでキューマさんにうそつき扱いされたら、今後のことに差し

支えすぎる。

「次に考えられるのは、君の潜った迷宮が別の迷宮だった可能性だ」

「別の迷宮？ でも、俺は間違いなく漆黒の迷宮に入りましたよ？」

「ああ。だが、数こそ少ないが迷宮の入り口とは別の迷宮に飛ばされた例がある」

「……はあ」

ということは、例えば入り口は漆黒の迷宮だけど、地上にある移動紋章から別の迷宮の1階に飛ばされたってことだよな。

「そんなことがあったんですか。でも、どうしてそんなことがあるんですか？ 言い方が正しいかはわかんないですけど、移動紋章が暴走したってことですよね」

「考え方はあっていると思うよ。ただ、迷宮に存在する移動紋章はギルドカードの魔法回路のように詳しい原理が解明されていない」

「確か、転送魔法と移動魔法ってのがありましたよね。それとは違うんですか？」

「どちらもまったくの別物だよ。過去に移動紋章を調べようとした人間もいたようだけど、何の手がかりもつかめずに終わっている」

原因不明ってわけですね。

でも、そんな怪しげなもんをよく普通に使えるよな。いや、キユ
ーマさんも言ってるけど、そういう意味ではギルドカードだって原
理は分かってないんだからおんなじか。

「まあ、可能性の一つさ。そして、最後が全く違う階層に飛ばされ
たという可能性だね」

「違う階層？　つまり、1階に飛んだはずが30階まで飛んでたと
かってわけですか？」

「ああ。こちらには前例はまったくないが、あの迷宮にはギガス
パンダが生息していることは確認されているし、魔物がまったくない
なかった階層はギガスパンダや他の下階層の魔物に上へ追いやら
れていたとすれば、多少の説明はつく」

「でも、前例がないならなんでそんな可能性があるんですか？」

「状況的にそういう判断ができるだけさ。どこの迷宮でもモンスター
ーが全くいない階層があるなんて話は聞いたことがない。中階層の
魔物が増えすぎて上階層の魔物が地上へ溢れ出すということはあ
るから、下階層の魔物が増えたために中階層以上の魔物が逃げ出し、
もめけの殻になった。とね」

……それもちょっと無理がありませんか？

まあ、いいですけど。あくまで可能性の話だしね。

「いくら話したところで、可能性の話でしかない。実際のところがどうなのかというのは、調べるしかないだろうね」

「やっぱりそうですよね……そうそう、ところで相談なんですけど」

「なになかな？」

「二つあるんですけど、まず一つ。さっき話した通り、ギガースパ
ンダと戦った時に剣を迷宮の中に残してきちゃったんですよ。本来
なら自分で買わなきゃいけないんですけど、自分で了承したと
はいえ俺はギルドの被害者じゃないですか」

「なるほど、剣がほしい。」と

「はい」

今回の迷宮探索は何の収穫もなかったし、赤字だ。

できることなら自分で北地区に行って新しい剣を買いたいところ
だけど、そんな金はない。

「わかった。ちょっと待ってくれ」

キューマさんはそう言うと隣の部屋に続いてる扉をたたいた。

ほんのわずかな時間をおいて開かれた扉の向こうに立っていたのは普通のギルド職員とは違った制服に身を包んだ女性。

たぶん、キューマさんの秘書かなんかだろう。

2人は2、3言葉を交わすと、秘書さんが頭を下げて扉が閉められる。

「さて、剣は取りに行かせたから、次の話を聞こう」

「はい。今は1人でやってるんですけど、一時的でもいいんで仲間がほしいんですよ。なんかいい人知りませんか？」

「……1人で迷宮探索をしていたのかい？」

「はい」

「……まったく、君は何を考えてるんだ」

キューマさんもやっぱり無謀だって判断したんだろう。

そりゃ当然だ。

何度も言うが、Gランクの俺がたった1人で最高危険度の迷宮に潜るなんて自殺行為以外の何物でもないのだから。

「今回潜ってきつさはよくわかったんで、仲間がほしいんですね。今さらですけど」

「ふむ……君の言いたいことはよくわかる。実際、君が冒険者になつてから迷宮に行くとは思ってもみなかったし、仲間を探す必要性もなかったからな」

「ええ」

「紹介したいところだが難しいだろう」

「え!？」

「実績は皆無。そもそも、ギルドPマイナス。ランクはG、装備も中古レベル。レベルは………5か」

「そんな人間と組みたがる人間はいないと……」

「そうだ。いたとしても、自分たちの手に負えない魔物が現れた時に君を囮にして逃げるだとかの目的を持っているだろうな」

きつつう……

たしかに実績ないし、ランクも最低。その他もろもろマイナス要素しかないもんな。

普通に考えたら仲間になつてくれる人間に下心がない方がどうかしてる。

「とりあえず、信頼を置く何人かに打診してみよう。だが、あまり期待はしないでくれ」

「いえ、お願いしてもらえただけ助かります」

ちょうど話が終わったところで扉がノックされ、ギルド職員の男性が部屋に入ってきた。

キューマさんになにやら耳打ちすると、キューマさんの顔色が渋いものになる。

「どうかしましたか？」

「いや。申し訳ないんだが、君の望む剣。バスタードがないらしい。もともと使い手も少ないので、在庫として用意していたのが君に渡した分だけだったようだ」

「まじっすか!？」

「他の剣であれば、すぐに用意させよう」

バスタード以外か……

もともと練習していたのはあの剣だけだし、それ以外ってのはな

あ……

バスタードは癖が強いらしいから、あれしかまともに振ったことのない俺が他の剣を振っても、バスタードの癖があるせいでまともに振れないんじゃないのか？

仮に他の剣にしたとしたら、また練習だけで3日を消費することになるかもしれない。

まあ、癖の強いバスタードでも3日の練習だったんだから、他の剣ならもつと短いかもしれないけど、練習は必須だろう。

「なんとかありませんかねえ？ バスタード以外はちょっと……」

「むう……」

やっぱり難しいよな。

倉庫にあるから無償でくれてたんだ。倉庫にないものを頼まれたってどうしようもないんだろう。

「ならば、北地区で購入するのはどうかね？」

「北地区ですか？ でも、俺手持ちの金が……」

「仮にも冒険者ギルドだ。懇意にしている武器屋も何人かいる。紹介状を書いて特別にローンを組めるようにしよう。後は……そうだね、料金の30%はギルドが負担しよう。さすがにあまり高いもの

は遠慮してほしいが」

「ううん……」

ないなら買え。か。

ローンってことはぶっちゃけた話、借金だろ？

ただでさえ金がないのにさらに借金しろってのかよ……

できたら新しくいい武器は欲しかったけど、借金までしてってのはなあ。

「紹介状にある程度理由を書いておくから、おそらくは値引きもしてくれるはずだ」

日本人はみんな値引きとかサービスに弱いと思ってるのか？

いや、善意で言ってくれてるんだらうけど。

バスタードにこだわるなら買うしかない。

でも、ローンを支払って行けるかわからない。

新しいバスタードを買えば、迷宮探索が楽になる可能性がある。

そうすると？

姫様から報酬がどつちやり。イコールはローンを即払い。

って、楽に進んだらいいんだけど。

無理だろうなあ。

この世界で俺ってめっちゃめっちゃ不幸だろ。

次から次に無理難題が降ってくるし。

うう〜ん。

迷ってても仕方ないか。

「わかりました。北地区に行きます。ただ、30%じゃなくてギルドで出せる限界金額にしてください」

「む」

「こつちが無理なこと言ってるのはわかりますけど、そもそも俺がこんな目に遭ってるのは言っちゃ悪いですけどギルドのせいです。安心してください。金額によりますけど、無理に全部使おうとしたりはしないんで」

「……しょうがない。この間の事件の際にも世話になったしね」

交渉成立。

金額は1万Bと、俺の予想以上に金額は高かった。

というか、ある程度安いのなら剣一本買える金額だし、これなら初めから全額だすって言ってほしかった。

俺は、懐が潤ってホクホク顔でギルドを出る。まあ、正確には俺の金ではないわけだけど。

北地区へとやってまいりました。

相変わらず職人さんばかりみたいで、そこら中の店から剣を打つ音が聞こえてくる。

相変わらずって言っても、まだ2回目だけど……

気を取り直して、ギルドで紹介された店を探してるんだけど、それが全然見つからない。

「スクール、お前知らない？」

「キユイ」

俺の問いかけにスクルドは首を横に振る。

そりゃそうか、小動物が武器屋の場所を知ってたらビックリだな。

「すみません、この店に行きたいんですけど」

仕方ないので道行く人に聞きました。

18話 とりあえず問題は保留でした（後書き）

おっさん登場しなかった!?

中途半端なところで区切りですけど、次の話の長さを考えるとこの辺で区切っておかない微妙だったので、無理やり区切らせていただきます。

次回はようやく旧作のヒロイン2人目が登場する……かもしれませ
ん。（ただし、おっさんは確定）

19話 なんか問題だらけでした

(略)

扉を開けるとカランカランという音が鳴り、店主に來客を知らせる。

ギルドに紹介された武器屋は、北地区としては珍しく工房一体型ではない、武器の売買だけを目的とした店舗だった。

「すいませ〜ん、ギルドの紹介できたんですけど」

「あいよ。兄貴のお手伝いか？ 坊主」

「ギルドの紹介できたんです。手伝いも何も兄貴なんていません」

「ははは、そいつは悪かったな。で、何が欲しいんだ？」

「とりあえず、先にこの紹介状を」

そうやって俺は武器屋のおっさんにキューマさんから受け取った紹介状を手渡す。

「というか、このおっさんちょっと苦手だ。」

「ふんふん、坊主も苦労してるんだな。わかった、好きな武器を選

びな」

「どもです」

俺はおっさんが示したあたりの剣を適当に見てみる。

シミター、ロングソード、ツーハンドトソード、カトラス et c e t c . と様々な武器が並んでいる。が、肝心の目当ての品が見当たらない。

「すみません、バスタードはないんですか？」

「バスタード？　なんだ、お前あんな剣を使うのか？」

「あんな？」

確かに癖は強いけど、あんなって言われるほどひどいものじゃないと思う。

名前だって、破壊者^{バスタード}ってかっこいいから、地球（日本）産勇者の主に大きな男の子なんかは喜んで使いそうだし。

「斬ることも突くことも出来る、両手剣と片手剣の長所を併せ持った雑種^{バスタード}って言やあ、使いこなせりやかなりのもんだが、素人が持ったってまともに使えねえし、玄人だって使いこなせる奴はまずいねえ。超上級者以外が使えば中途半端以外の何物にもならねえよ」

「はあ……」

「雑種！？ 破壊者じゃないのか！？」

「いや、それは今更気にしないまでも、超上級者向けって……」

「確かに他の剣とは感触も何もかも違うとは思ってたけど、そんな扱いの難しい剣だったのか。」

「悪いことは言わねえから、そのロングソードなりカトラスなりにしとけや」

「いえ。バスタードにこだわりがあるからここまで来たんで、バスタードがいいです。この店にはないんですか？」

「ん〜。あるにはあるが……」

「おっさんはいったんカウンター奥へ入ると、一振りの剣を持って戻ってきた。」

「白い鞘に納められ、柄には宝石のようなものが埋め込まれている。」

「下手にごてごてしておらず、宝石以外には装飾らしい装飾もなされていない一見すれば安物なのかどうかもわからない剣だった。」

「バスタードを買うような奴は冒険者としてもかなり成功してる人間ばかりだからな、この剣はけっこう値が張るぞ」

「……おいくらですか？」

「15万B」

高っ！

この店に置いてある他の剣は高くても6万B、安ければ9000B。

店の規模を考えれば品ぞろえはよく、中堅くらいの店なんだろうけど、この剣だけは完全に別格だ。

「たぶん他の店に行っても似たようなもんしかないぜ？ 予算はいくらあるんだよ」

「ギルドから1万B、足が出たらローンを組んでもらうって考えてたんですけど……」

「紹介状にもあつたんでローンはかまわねえけど、1万じゃ頭金にもならねえな」

ですよね。

日本円換算で1億5千万円の剣ってどうなのよ。もはや国宝クラ

スじゃね？

「よっぽどバスタードに思い入れがあるみてえだし、多少は安くしてやりてえが、どんだけ安くしても5000Bがせいぜいだ。1万Bを頭金として受け取ってもその後の支払いの当てはあるのか？」

当てなんてありません。

そこまでの思い入れもありません。

今回バスタードを買おうとしてるのだって、練習日数がもつたいたないって打算ですし……

「ちょっとその剣は無理ですね……本当に他にバスタードはないんですか？」

「ないな……いや、待てよ」

おっさんは再びカウンターの奥へ入ると、今度は別の剣を持って戻ってきた。

鞘はなく、抜身のまま。

鈍い光を放つ刀身はどこか武器特有の禍々しさを感じさせる。

柄に撒かれた布はところどころ擦り切れ、相当の年代物のように

見える。

「ずいぶん前に冒険者が売りに来たんだ。状態もよくねえし、鞘だつてないから断ろうと思つたんだが、金は要らないから処分だけしてくれって言われてな。まあ、こいつはあんまりおすすめはできねえ」

そりゃそつだろつ。

どう見ても中古品。しかも状態もよくはない。

「これはいくらですか？」

「ん〜、ただで手に入ったもんだしな。欲しいんならタダでいい。その代り、他に何か買ってもらうけどよ」

タダか……

「とりあえず、ためしに振ってみてもいいですか？」

「おつ」

おっさんからおんぼろバスタードを受け取って一度だけ振ってみると、何とも言えない感触だった。

軽い。

そして、鋭い。

使い込まれてぼろぼろにしか見えないのに、振ってみた感触はギースパンダの固い皮膚すら切り裂きそうだ。

前のバスタードは普通の剣だったし、振った感じはかなり重かったので両手で持たないとどうしようもなかったけど、これなら片手でだって振れそうだ。

ために片手で持って振ってみるが両手で振った時と変わらない鋭さだった。

これはかなりの掘り出し物かもしれない。いや、掘り出し物だ。

「おっさん。これくれ」

「なんだ、それでいいのか？ まあ、坊主ほどの腕があればそんな剣でもいいのかもな。ったく、俺もずいぶんと耄碌したな。客の腕を見誤るたあ」

「どうやら、おっさんは剣を振った鋭さを俺の腕だと思ったみたいだ。」

「違う。」

俺はどんなに高く見積もったって素人に毛が生えた程度の腕しかない。

この剣は、その俺の腕を補って余りある代物ってことだ。

「で、その剣をやるのはいいんだが、何を買ってきてくれるんだ？」

「……鞘が欲しい。あと、できれば柄も布を新しくするかちゃんとしたものに変えてほしい」

「ん。だが、そりゃあうちの店じゃ無理だな。見ての通りうちには工房がねえ」

なるほど。いや、だめじゃん。

買った後に自分でどうにかしないとイケないってことか。

まあ、それはどっかの工房でやってもらつことにしても、何を買おう。

防具は一応ある。

どうせなら、ギルドから受け取った金で防具を買うか？

そつえば。

「スクルド、お前は何か武器みたいなのはいらんのか？」

某有名RPGだって、仲間にしたモンスターには装備品が装備できた。

鉄の爪とか、なんたらクローみたいなのが。

だったら、スクルドだってなにか必要になるんじゃないだろうか。

「キユイ」

が、俺の予想に反してスクルドの答えはノーだった。

どうやら、うちの子は素手で戦うのが好きらしい。

まあ、こいつの大きさにあった装備なんてなかなか見つからないだろうけど。

でも、だったらどうしよう。

やっぱりここは防具かなあ。

だけど、今の防具に不満はないんだよな。いや、待てよ？

よく考えたら、パンダの攻撃で防具がゆがんだりするんじゃないか？

脱ぐときとかに違和感なかったからあんまり確認してないけど、

あの勢いで突撃されてなんともないわけないよな。

とりあえず、鎧なんかを買えば問題ないかな。

「おっさん。防具はここにあるので全部？」

「ああ、うちは武器屋だからな。防具はそんなに多くは扱ってねえんだ」

なるほど。

ん〜、こん中だとこの防具かな。

前はサ ヤ人の防具だったけど、今回はそれプラス肩も守れるタイプだ。

持った感じでは重さもそんなに大したことないし、値段は……1万2000Bだと!？」

「なんだ、それにするのか？ ああ、値段見て固まっちゃまって……1万Bでいいぞ」

「マジで!？」

「ああ。ついでに、お前の腰に差してある中身のない鞘を知り合いの工房でこいつに合うものに仕立て直してもらってやるよ。ついでに柄もな」

「そ、そこまでしてもらってもいいんですか!?!」

「そのかわり、今後うちの店を鼻屑にしるよ。これはそのための事前投資だ」

やばい。おっさんがいい人すぎる。

2000Bっていったら大金だよ?

日本円なら20万円ですよ?

それをサービスって……

絶対今後も武器はこの店で買おう。決めた。絶対だ。

「鎧の方も坊主のサイズに調整するし、受け渡しは3日後だな」

「え?」

そつだ。よく考えたら買ってすぐに受け取れるわけじゃないじゃないか……

これなら、ギルドで新しい武器をもらって練習しても変わんなかったんじゃないのか?

……いや、もういい。

あのバスタードを見つけられただけでも今回はずいぶんいい収穫があった。

あの剣だったら、ギガースパンダがまた出てきても対抗できるはずだ。たぶん。

待ちに待った剣の受け取りの日。

朝も早いうちから俺はおっさんの店を訪れた。

だって、はやくしないとお姫様が怖いかもしれないんだ……

ごめんなさい。仕立て直された剣を早く振ってみただけです。

「おっさん。剣はできてる？」

「なんだ、坊主。ずいぶん早いじゃねえかよ」

おっさんは苦笑しながら下に置いてあつたらしい剣をカウンターにのせた。

前に使っていたバスタード用の鞘は外見こそあまり変わっていないが、わずかに装飾が増えている。

柄は真新しい布が巻かれ、一見すれば新品にしか見えなかった。

「すげえ……」

「ははは。確かにあのボロ剣には見えないだろ？ 体裁を整えるのも意外と大変だったらしいぞ」

俺はさっそく受け取った剣を腰に佩き、持って歩くには面倒なので鎧を着ける。

鎧の方も値が張るだけあって重さをほとんど感じさせないが、前のサヤ人の防具よりも頑丈そうに見える。

「おお。冒険者みてえじゃねえかよ」

「冒険者なんだよ」

「はっはっは。そうだったな」

俺は残りの代金を支払うとおっさんの店を出た。

とりあえずは外に出て剣の感触を確かめたい。

この街から少し歩けば迷宮から溢れ出たモンスターがいる場所があるのは事前調査済みだ。

おっさんの店から出て10分ほどだろうか、ちょうど西地区を通りがかつたあたりで視線を感じた。

立ち止まってあたりを見回してみてもそれらしい人影はなく、勘違いかと思つて再び歩き出そうとしたところでさらなる違和感を感じた。

「……剣が、啼いてる？」

実際に音がしたわけでも、剣が突然震えたりしたわけでもないのになぜか俺はそう感じた。

スクルドも視線を感じていたのかきよろきよろとあたりを見回しているが、剣の方を見ることはないの、俺以外には分からないんだろう。

不思議に思いながら柄に手をのせたところで、腕が突然動いた。

俺の意志とは全く関係なしに柄を握りしめ、剣を抜き放つ。

鉄同士がぶつかる甲高い音があたりに鳴り響いた。

「はあ!？」

「なに!？」

驚きのあまりに目を見開いて剣が切り払ったものを見てみると矢が地面に落ちていた。

矢じりが欠けているので丁度そこを剣が薙いだことで軌道を逸らしたんだろつ。

続いて声のした方に目を向けてみると、目深にフードをかぶったいかにもと言った感じの怪しい人影。

誰だあれ……

少なくともこの世界で誰かに恨みを買っ覚えは……あるな。

キッタローンがいたわ。

「つく」

「あ、待て！」

フードの人物が逃げ出したので俺は、反射的に後を追った。

あまりに突然のことになんで突然体が勝手に動いたのかとか、そんな疑問はどこかへ吹っ飛んでしまった。

細い路地に逃げ込んだフードを追っているうちにどんどんと西地区の奥へと進んでいく。

太陽が昇っている時間帯だと言うのにあたりは薄暗く、ほとんど

の壁が崩れているか落書きのようなものが書いてあったりと、どこそのスラム街のようだ。

「待て……っつて、あれ？」

フードの人物の姿が見当たらない。

まっすぐと後を追っていたはずなのにどこに消えたんだ？

再び剣が啼いた気がして俺は即座に柄に手をかけた。

するとまたもや体全体が勝手に動き、背後から迫っていた矢を切り落とす。

「おお！　すげえ」

どこぞの剣豪にでもなった気分だ。

またつまらぬものを斬ってしまった。とか言ってみたい。

「くそ」

矢が飛んできた先に目を向ければフードの人物が再び弓に矢をつがえている。

即座に飛んできた第2射も切り落とし、フードとの距離を詰める。

3の矢、4の矢と続けて飛んでくる矢も切り払い、俺はフードの人物の首筋に剣をつきつけた。

「あんたいったい何者だ？ 見ず知らずの相手に命を狙われる覚えはないんだけど」

キッタローンの雇った暗殺者とかならわかるが、仮にも騎士がそんな真似をするのか？ …… するかもしれない。

薬を使って女性を食い物にするようなやつだっていたんだし。

でも、少なくともあのキッタローンはそこまで薄汚い奴とは思えないな。

「あ、あなたが……」

「あなたが？」

「あなたがクレイ様を誘拐したんでしょー！」

「……………誰？」

誘拐ってのはなんとも、穏やかじゃないな。

でも、クレイ様ってどちら様ですか？

俺にはそんな人物の心覚えはないし、誘拐した覚えもない。

というか、この声は女がこの人？

「人違いじゃないのか？ 俺はクレイ様なんて知らないぞ？」

「ここでシラを切っても無駄です。あなたの肩にいらっしやるじゃないですか！」

「肩？」

俺の肩にいるのはスクルドだけだ。クレイ様なんて人物じゃない。

ということは、やっぱり勘違い……ってのは無理がある。やっぱり勘違いじゃないんだろ？

「スクルド、お前ってクレイ様って名前なのか？」

「キユイ」

スクルドは首を横に振った。あれ、違うの？

「こいつはクレイ様じゃないって言ってるけど?」

「そ、そんな……クレイ様。あ、あなたが無理やりクレイ様を脅しているんでしょう」

「なんで?」

「クレイ様は神獣『パスカドウ』の幼獣です。欲深い人族のあなたならクレイ様をお金儲けの道具にしようとしてるんでしょう!」

パスカドウ? なにそれ。

神獣つてのは……心中? いや、それは無理があるな。

神獣つてことは、スクルドのやつ実はすごいんじゃないのか?

「スクルド、お前はそのパスカドウってやつなのか?」

「キユイ」

首を縦に振るスクルド。

はあ……神獣ねえ。

「で、フードさん。神獣つてのは金儲けになるの?」

「そんなこと人族じゃない私にはわかりませんよ！ どうせ人族のあなたはクレイ様を見世物にしたりするんでしょう！」

「はあ……」

勘違いなのか？ でも誘拐とかってことは、スクルドはもともとこの人が面倒を見てたってところか。

「俺はこいつが近くの森で腹をすかしてたから飯をやっただけだよ。そしたらこいつがついてきたから面倒を見る。別に誘拐とかをしただけじゃない」

「嘘です！ あなたがエルフの里からクレイ様を誘拐したんでしょう！」

「だから、こいつはクレイ様じゃないらしいぞ？ 神獣違いじゃないのか、フードさん」

「誰がフードさんですか！」

「突込みが遅い。さつきもそう呼んだのに今更そこを突っ込むなんて……それじゃあ一流の芸人になれないぞ」

「けっこうです！ あなたみたいな欲深い人間の言うことなんて嘘に決まっています！」

「ほう。つまりは、あんたは自分が一流の芸人になれると思ってるのか」

「違います！ 話を逸らそうとしないでください！」

「うち。やっぱり無理があったか。」

「でも、スクルドは違っつて言ってるのに……」

「なあ、スクルド。お前はこの人に見覚えはあるのか？」

「キユイ」

「首を横に振る。」

「まあ、そりゃこんなフードさんが知り合いつて人はあんまないよな。」

「ほら、こいつも知らないって言ってるし。そのクレイ様ってのは別のところにいるんじゃないのか？」

「違います。間違いなくそのお方がクレイ様です。そもそもパスカドゥは成獣と幼獣が御一方ずつしかいません」

「じゃあどうやって子供を作るの？」

「細胞分裂とか？」

やだよそんな神獣。

「ふう〜ん……スクルド、お前つてもしかして昔はクレイ様って呼ばれてた？」

「キユイ」

首を……縦に振った。

お前……

「じゃあ、この人の言つとおり誰かに誘拐されたのか？」

「キユイ」

首を横に。

「じゃあ、自分で出て行ったとか？」

「キユイ」

今度は縦に。

「残念。つまりはフードさんのところが嫌で逃げ出したと言っわけだな」

「キユイ」

我が意を得たりとばかりに力強くうなづくスクルド。

ペットに嫌われる飼い主もここまでくるとある意味すごいわ。

「と言うわけで、お宅のところが嫌でこいつは逃げ出したみたいだぞ。少なくとも誘拐とかではない」

「嘘です！ 私たちはクレイ様をルーティア様よりお預かりしていただんです。それをクレイ様が自ら里を出るはずがありません。あなたが無理やりクレイ様を脅しているんですよ！」

「いや、さっきの俺の言葉のどこに脅すような要素があったよ」

「それは……わかりませんが、そうに決まっています」

何この人。

子供じゃないんだから、もっときちんと論理的に判断してよ。

「ああ……どうしよう。と、とりあえずもっと落ち着いて話ませ

ん？」

こつという人って苦手なんだよな。

こつちの言うこと全く聞かないし、自分の思い込みを全力で信じてるから。

スクール本人の意思をきちり伝えれば諦めてくれるかな？

……無理そうだ。

でも、俺にはどうしようもないし……

はあ、なんでこんなめんどくさいことになったんだ？

19話 なんか問題だらけでした（後書き）

おっさん&レナ登場。

ようやく出番のお2人です。おっさんはともかくレナは迷宮編が終わるまで出せないんじゃないかって思ってたんですが、思った以上に早く出せました。

で、旧作のときから思ってたんですが、スクルドの影が薄い気がするんですが、皆様はどう思いますか？

20話 問題は問題のままでした

(略)

で、俺とフードさんは家へと戻った。

どうかその辺の店に入ろうかとも思ったけど、さっきの調子で怒鳴られたりしたら他のお客さんに迷惑だし、目立ってしょうがない。

それだったら、多少声を荒げたって問題がない家の方がいくらか
ました。

「それで、フードさんとスクルド……あなたが言うクレイ様との関係
を詳しく教えてもらってもいいですか？」

俺はフードさんが椅子に座るのを待って口を開いた。

「だから、フードさんではないと言っているでしょう！」

「じゃあ、名前から教えてもらえますか？」

「なんで私があなたみたいな誘拐犯に名乗らなくちゃいけないんですか？」

「じゃあ、フードさんって呼ぶしかないですね」

「むう〜……レナです。レスティアナ・ブラウティア」

なんで、レスティアナ・ブラウティアってのがレナになるんだ？

”レ”スティア”ナ”・ブラウティアだからか？ 別にレスティアとかスティア、ティアとかニツクネームもいろいろあると思うけど。

まあどうでもいいか。

「それでその、レスティアナさんとこいつの関係は？」

「さつきも話したでしょう。ルーティア様からクレイ様をお預かりしたんです」

「ルーティア様ってどちらさん？」

「クレイ様の御母上、今代のパスカドウです」

今代のこととは世代交代制なのか？

「ふう〜ん……それでそのルーティア様から、スクルドを預かって育てていた。しかし、こいつはそれが嫌で飛び出したってわけだ」

「そんなはずがありません。あなたが、誘拐したんでしょう！」

「だから違つつての。そもそもこいつがどこで飼われてたかなんて知らないし、俺は近くの森で偶然会っただけなんだから」

「か、飼うー!? あなたはクレイ様をペット扱いする気ですか!?!」

「ううん……まあペットって言つよりは相棒なんだろうけど、ペツトつてのも間違つてないかな」

愛玩ペット。俺の癒しスキルド。

冒険では頼れる相棒だし、普段は俺の心を癒してくれる大事な存在だ。

「あなたの不当な扱いに、クレイ様は大層ご立腹です!」

「……そうなのか?」

「キコイ」

案の定スキルドは首を横に振った。

「違つつてよ」

「いえ、そうに決まっています。クレイ様、帰りましょう?」

言いながらレスティアナさんが差し出した手にスクルドがかみついた。

まさかスクルドがかみつくななんて思ってもみなかったのか、レスティアナさんは驚きのあまりに固まってしまった。

肩を震わせてる。と、思ったら声を上げて泣き出した。

子供かよあんた。

「クレイ様が……クレイ様がいやしい人族の男にかどわかされてしまいました!」

ワンワン泣きながらそう叫ぶレスティアナさん。

かどわかすってお前。

よっぽどこの人のこと嫌いなんだなスクルドって。

「なあ、そんなにレスティアナさんのことが嫌いなのか?」

「キュウ……」

スクルドは首をかしげた。なんだその中途半端な対応は……

「うう〜ん……嫌いじゃないけど、戻りたくないとか？」

「キユイ！」

力強くうなづくスクルド。

なるほどね、レスティアナさんを拒否したんじゃないかと戻りたくないってことか。

フードで顔は見えないけど、気持ちレスティアナさんがうれしそうだ。

「レスティアナさん。とりあえずこいつは戻りたくないって言ってますし、諦めてもらえませんか？ 別にこいつをどこかに売り飛ばすだとか、見世物にしたりはしないんで」

「そんなこと信じられるはずがありません！ それに私は里の命を受けてクレイ様をあなたの魔の手から救い出すために来たんです。おめおめと帰れるはずがありません」

だから、スクルドが帰りたくないって言ってんだよ。

なんなんだこいつは。

「でもさあ、スクルドにそんな敬うような口調で話す癖に、なんでこいつの意思は無視するんだ？」

「こんな人族だらけの街にいたら、誇り高いパスカドウであっても毒されてしまうからです。今だってあなたのせいでクレイ様は……」

「キユイ！」

レスティアナさんの言葉は最後まで続けられなかった。

人族を、ひいては俺を罵り続けていたレスティアナさんの態度にだんだんと機嫌を悪くしていったスクルドが吠えたからだ。

いつも通りのかわいらしい鳴き声だけど、雰囲気全然違う。

毛は逆立っているし、不機嫌というか怒っているのは誰の目に見ても明らかだ。

ここまで本気で怒ってくれるのはうれしいんだけど、レスティアナさんがまた肩を震わせてる。

嘆いたり喜んだり忙しい人だ。

「まあ、口調からレスティアナさんがこいつのことを心底尊敬して心配してるのはわかるんですけど、こいつ自身は帰りたくないって言ってますし、こいつが戻らない方向で考えてくださいよ。あんまりしつこいとスクルドに嫌われますよ？」

「それは困ります！」

即答するぐらい困るんなら、こいつの話にすっかり耳を傾けるよ。
でもまあ、嫌われるってのは効果覷面みたいだな。

「スクルド、お前はレスティアナさんたちのところに一生戻りたくないのか？」

「キユウ？」

首を傾げるってことは絶対ってわけじゃないんだな。

戻りたくないのに原因があるってことだろうな。

「スクルドもいつかは戻るかもしれないって言ってますし、気長に待つって方向で考えてくださいよ」

「……………わかりました」

納得はしかねるみたいだけど頷いてくれた。

うん、よかったよかった。

いきなり命を狙われたときはどうしようかと思ったけど、ようやく話が通じたよ。

「クレイ様がお戻りになると決心してくださるまで、ここで待たせてもらいます」

「は？」

今なんとおっしゃいましたか？

ここで待つ？

「ただいま」

「っげ！」

ここでアリアさんが帰ってくるなんてタイミングが悪すぎる。

「どうしたのガイ……って、何その人!？」

「この人は……その」

家に帰ったら突然フードで顔を隠した怪しげな人がいたら、そりゃビビるよな。

逆の立場だったら俺だってそうなるよ。

「あ、どうもはじめまして。今日からここに住まわせていただきます、レスティアナ・ブラウティアです」

「はい？」

「うちよ、おま」

何を言っやがるんだこいつは。

誰も了承してねえし、俺にそんなこと決定権はないんだよ。

「ガイ、どういうこと？」

「これは……その」

アリアさんの声が震えてる。ついでに握りしめた拳もプルプルと

……

怒らないでくださいよ。俺だってどうなってんのかわかんないんですから。

「クレイ様の御心が変わるまで、いつまでも待たせていただきます」

お前ちよっと黙れ。

「誰よ、クレイ様って」

「スクルドのことらしいです」

「はあ？」

何が何やらわからない。

誰か助けてほしい。

「つまり、彼女はスクルドの元の飼い主で、連れて帰りたいけどスクルドがそれを嫌がってるってわけね」

「はい」

しばらく続いた騒ぎもようやく治まり、なんとかアリアさんへの説明を終えた俺は胸の奥から息を吐いた。

疲れた。

「それで、スクールもいつかは帰るつもりらしいから、彼女はそれをここで待ちたいと」

「はい。そうです」

「……」

「そうらしいです」

「なんでそんなことになるのよ」

そんな俺が知りたいですよ。

「さっさとスクールを返してあげればいいじゃない」

「それはまあ、スクールが嫌がってますし……」

「それでこの子をここに住ませるって言うの？　ただでさえ、あんながうちに来て狭くなったのにこれ以上人が増えるなんてダメよ。それに部屋だってもう余ってないんだから」

別に俺はレスティアナさんをここに住まわせたわけじゃないです。

それは彼女が勝手に言ってるだけなんです。

「えっと、レスティアナさん。この部屋の主であるアリアさんがダメと言つので、ここでスクルドを待つのは諦めてもらえませんか？」

「何ですか？」

何で……だと？

だめだ。この人には俺の言葉が全く通じない。

俺が胸元に投げたボールをそのままポケットにしまって別のボールを投げかけてきてみたいだ。

「だから、この部屋はアリアさんが借りてるものだから、借主であるアリアさんがレスティアナさんがここでスクルドの心変わりを待つことをダメって言うてるからです」

「……ならば、なぜあなたはここに居るんですか？」

「それはまあ、いろいろと理由があるからで。レスティアナさんがここに住むのがダメな理由とは関係ないです」

「でも、その人族の女性は、部屋が足りないからダメだと言いました。ならば、あなたが引越せばいいじゃないですか。当然、クレイ様はここに残して」

なんでそうなる。

「いや、それはなんか違うだろ」

「……では、その人族の女性」

「何よ」

「私は不本意ですがこの男と同じ部屋で構いません。極力あなたの生活にも干渉しないように部屋から出ない努力しましょう。それでもだめですか？」

「ダメよ。そもそもあんた、家はどこよ」

「リエルド王国との国境沿い北側にある森の中です」

「国境沿いの森？　って、あんなところに人が住んでるところがあるの？」

「人族は住んでいません。動物や私たちエルフの里があるだけです」

「……エルフ？」

「はい」

レスティアナさんはアリアさんの問いに答えながらフードをまくり上げ、その顔をあらわにした。

明かりを受ける金色の髪は鮮やかに煌めき、透けるような白い肌、

強い意志を感じさせる瞳。全体的に整った顔立ちをしていて、一言で言えば美人。

美人員合ではアリアさんといい勝負をしてるな。

そんな美人のレスティアナさんの顔で、特徴的なのは先のとがった長い耳だろう。

マンガなんかで描かれているエルフと同じ形をした耳。それは人族のものとは明らかに違ったものだ。

「……あんだ、エルフだったの？」

「はい」

「アリアさん、彼女がエルフだと何か問題なんですか？」

驚いた様子のアリアさんに俺は尋ねた。

街中ではエルフこそ見当たらないが、人族以外の種族だってそれなりに見かける。そんなに人族以外の種族が珍しいとは思えなかった。

「あんだねえ。エルフって言えば、森の中にあるエルフの里からほとんど出てこないのよ。それこそ人族をけがらわしいとか言ってる毛嫌いしてるんだから」

「そうです。ただ、私たちエルフは人族を毛嫌いしているわけでは
ありません。その男のように欲深で最低の者を嫌っているだけで、
人族と言う種そのものを嫌っているわけではありません」

……あの、俺が何かしましたか？

そんなに嫌われるようなことした覚えがないんですけど……

「ですので、あなたとその男の關係に興味はありませんし、そんな
のを取るつもりもありません。クレイ様の御心が変わるまでここに
置いていただくことはできないでしょうか？」

「ちょ、ば、こんなの私もいらないわよ！」

泣きたい。

アリアさんまでこんなの扱ってひどすぎるよ……

「クレイ様の御心が変わって、里へ帰ると言うことになればすぐに
私も出ていきます。その間はその穀潰しの男とは違って、お金も
入れさせていただきます」

穀潰しってあの……俺だって少しはお金を入れてますよ？

「そ、そう言う問題じゃないわよ。そもそも、あんたこの街に来て
どんだけ経ったの？ さっきの話を聞いた限りじゃ昨日今日の話じ
ゃないわよね」

「そうですね、だいたい1週間ほど前でしょうか」

「だったら、その間に住んでたところがあるでしょ？ スクルドの
心変わりなんてそこで待つてればいいじゃない」

「いえ。1週間は近くの森で過ごしていました。それが苦痛だとは
言いませんが、私にはクレイ様を見守り、いざと言うときはお力に
なり、この男の魔の手からクレイ様を守ると言う重大な使命がある
のです。そのためにも、できる限り近くにいる必要があります」

「だからって、あんたねえ」

「そもそも、その男とあなたは恋人関係でもないのに同居している
と言うのに、女の私がダメな理由はなんですか？」

「だから、部屋の数が……」

「そんなのその男を追い出せば済む話でしょう」

「だ、ダメよ！」

あ、アリアさん！

「なぜですか？」

「そ、それはその……マスターからの命令でここに住まわせてるのに、勝手に追い出したりしたら怒られるし、減給されるし……」

そ、そんな理由なんですか？

ちょっと悲しい。いや、かなり悲しい。

「ならば、百歩譲って、部屋はこの男の部屋で構わないとも言いました。それならば、部屋の数は問題ではないでしょう」

「で、でも……こいつに寝込みを襲われたりするかもしれないのよ？ あなたみたいな美人が隣で寝てたらこいつみたいな、エロガキが我慢できるはずが……」

「あの……アリアさん。さすがにそんなことしませんよ？」

「あんたはどつちの味方よ！」

あ、そう言えば……

でも、目の前で自分の名誉が傷つけられるような話を聞いて黙ってるなんてひどいだよ。

「その後心配なら、大丈夫です。この男が襲えないように、私が寝ているときは拘束の魔法で縛っておきます。そうすれば、襲われる

心配はありません」

「それひどくない!?!」

「あなたは関係ありません。黙っていてください」

いや、どう考えても関係あるだろ。

というか、さっきからこの女性2人は俺に恨みでもあるのか？

なんで俺のピュアな心をずたずたに引き裂こうとするんだよ。

「だからって、若い身空でこんな男と同じ部屋で寝泊まりするなんてダメよ。どうしてもって言うなら、私の部屋にきなさい……あ」

「あ」

「キコイ?」

「いいんですか!?!」

勢いに任せて口走っちゃったんだろう。あからさまに「しまった!?!」って顔してる。

そんなアリアさんの様子に気が付きもしないレスティアナさんは小躍りしそつなぐくらいに喜んでるし。

はあ。

まあ、アリアさん。あきらめた方がいいですよ。

たぶんこの人、イエスって言うまで絶対にあきらめなかったですから。

「なしなし、今のなし。言葉のあやよ、勢いで間違えて言っちゃっただけだから」

「いいえ、私はしかとこの耳で聞きました。では、今日からあなたの部屋で住まわせていただきます」

アリアさん、諦めてくださいって。

もう何もかも手遅れだし、無駄な努力ですから。

こうして、この家に新たな同居人が増えることになった。

美人2人と1つ屋根の下という全国のおつきいお友達にタコ殴りにされそうな状況だけど、出来ることなら変わってほしい。

仕事も、環境も、この家の状況も全部その人に変わってほしい。

はあ……

20話 問題は問題のままでした（後書き）

イライラしてうざくてムカつくキャラクター、レナが同居人になりました。

あれですね、読者諸兄にけっこう嫌われてるみたいだったので、さらに突き詰めてみました。

実際、こんな感じで人の話聞かない友人いますけど、大嫌いですw 冗談ですよ。時々ムカつきますけど。

でも、そんな彼女は2章に入ってしばらくすれば、主人公にべつたりのデレキャラに……なるかもしれません。

少なくともハーレム要員ですので、主人公に惚れた後は主人公に対するウザさは鳴りを潜める……はずです。

さてはて、19話でスクルドの影の薄さの話をしましたけど、思わぬ反響を呼びました。感想が普段の倍くらい来るってのには軽く驚きです。

今度は、レナのウザさに対する苦情が殺到するかと思うと、ちょっと鬱ですw

まあ、こんなキャラですが、意外とかわいい一面を見せる（かもしれない）レナをよろしく願います。

21話 迷宮探索にはまだ行けないみたいです

(略)

昨日は、レスティアナさんとの騒動のせいで時間は夜になってしまったので、試し切りは中止になってしまった。

まあ、レスティアナさんの放った矢を切り落とせるぐらいの業物で、振るえば軽く、斬撃は鋭いってことが分かったから必要ないのかもしれないけど。

だけどまあ、問題。というか、疑問はある。

剣が啼き、体が勝手に動いたのはいったいなんでだろう。

もしかして、この剣は魔剣とか呪いの剣なんだろうか？

でも、体調に異常はないし、誰か人を切り殺したいみたいになちよっと危ない思考は全く働かない。

むしろ、剣を抜いた時には爽快感を感じて、振るのが楽しいだけだ。

これが繰り返されていくうちに何かを切りたい。という欲求になり、始めはモンスターそして人。ってなるのかもしれないけど、今のところそんな欲求は全くない。

これはあれだろうか、剣が意思を持っているとかそんな話なのか？

剣よ、我が声にこたえろ。

なんて、あぐらをかいて剣を握り、目をつぶって念じてみるが何の反応もない。

何をしてるのかとスクルドが不思議そうな顔で見上げて来るだけだ。

ううーん、なんでだ？

やっぱり違うのかなあ。

困ったときのチートアイテム、ギルドカードをチェックしてみる。

前見たときは装備品の欄なんてなかったけど、もしかしたら何かわかるかもしれない。

Name: 獅子王 ガイ > G a i S h i s h i o h < L v : 5
Race: 人族
Age: 17
Job: 冒険者 勇者
Title: T a m e r

Ability
格闘: L v . 3
剣術: L v . 6
槍術: L v . 0
斧術: L v . 1
弓術: L v . 0

魔法：Lv・0

Passive：幸運Lv・ - - - ???の加護Lv・ - - -
???の加護Lv・ - - - ???の呪いLv・ - - - 冒険者Lv

v・4 肉体強化Lv・6 剣士Lv・3

Action：

> equipment<>スキルド<

なんか微妙に変わってる？

というか、まったく装備したことのない斧術レベルが上がってるってどういうことだ？

それに、基本のレベルは5のままなのにパッシブスキルのレベルも上がってるし。

というか、スクルドの欄の横にあるえ、えくいぶめんと？ っていうのはなんだ？

えくいぶめんと……最初のやつは『い』、か？

いくいぶめんと。mentってのは動詞を名詞にする役割があるって前に授業でやった気がする。

ってことは、いくいぶだけで考えれば意味が分かるはずだ。

いくいぶ、いくいぶ？

もしかしてあれか、「イイイイイクイイ IPP！」か？

俺の名前の由来の彼が変身するときには叫ぶあれなのか？

だとすれば、変身するって動詞の名詞形……変身？

あれか、ギルドカードの魔法の力で変身するってことか？

意味わかんないし………冒険者が変身するなんて話聞いたこと
ないよ。

だったら彼がやってたあれは変身じゃないってことか。

彼はイーQUIPPの時どうしてた？

なんか変身って感じのイメージが強すぎるんだよね………

叫ぶ 変身 合体ってルートしか思いつかないし。

変身じゃないとしたら………

生身から形が変わるんだから………変態？ 変体？

結局意味ほとんど変わってないし。

変わるんじゃないかって………つける？

つけるって言うよりは、纏う………装備？

イーQUIPPは装備する。イーQUIPPメントは装備？

これなら、ギルドカードに載っててもおかしくないか。

……って、俺が見たい情報まんまじゃん。

「equipment」

……何も画面が変わらない？

あ、そう言えば、初めて見た時もスクルドって声に出しても何にも変わらなかったんだっけ。

だめじゃん。

意味ないし。

アリアさんに聞くか？

そう言えば、あん時にアリアさんもわからないって言ってたよな……ギルドならわかるとも言ってた気がする。

そうか、ギルドカードなんだから、ギルドに聞けば教えてもらえるじゃん。

とりあえず、ギルドに行こう。

キューマさんをお願いしてた仲間のお願いの件もどうなったか気になるし。

ん、今日のやることは決まりだな。

で、ギルドへ来たわけだけど、なぜか俺の後ろについてくるレスティアナさん。

家を出ようとしたら、見つかってしまい、スクルドと一緒にいなくなら当然自分も行くと言って聞かなかった。

まあ、ギルドならそんなに危険もないだろうし、ついてこられて困ることもない。

「すみません、ギルドカードのことで聞きたいことがあるんですけど……って、アリアさんじゃん」

「ん？ ガイじゃない。どうしたの？」

何の気なしに話しかけた受付の人はアリアさんだった。

なんか、何人も受け付けの人がいるのに俺が会った受付さんってアリアさんか、モブ子さんだけな気がする。

しかも、モブ子さん1回だけだし。1回なのに名前が強烈過ぎて

忘れられないし。

「で、今日は何の用なの？ またなんかやらかしたの？」

「違っつて。ギルドカードのことでわかんないことがあったから調べてもらいに来たの。ほら、前に聞いた時にギルドじゃないと本人情報欄は調べられないとか言ってたじゃん」

「ああ〜。つて、今更そんなこと調べに来たの？」

「まあ、新しい疑問が出てきたからついでに前のことも調べてもらおうと思っただけ。はい」

俺は言いながら自分のギルドカードをアリアさんに手渡す。

アリアさんは受け取ったギルドカードを何か魔法陣みたいなものの上に載せて魔法陣を起動させる。

「はい。これがあなたの本人情報欄よね、何が知りたいの？」

表示された本人情報を見せながらアリアさんが尋ねてくる。

「一番下のイークイップメントとスキルドってところ。口に出して言っても表示されないんだ」

「ん？ ああ、このこと？ これは特記事項欄よ」

「特記事項？」

「そ。レベルが上がると本人情報はあんまり更新されないけど、武器なんかはちよくちよく変更されるでしょ？ だから変更するたびに表示されて、変更を確認したら本人情報のページには表示されないの」

「へえ〜。それってどうやって確認するの？」

「1つ戻って、ここの特記欄を開くだけ」

「なるほどね。わかったよ、ありがとう」

なるほど、そんな面倒なシステムだったのか。

ギルドカードの最初のページなんて本人情報以外確認してなかったから知らなかったよ。

まあ、後で確認するでしょう。

「まさか、これだけのために来たの？」

「違う違う。キューマさんをお願いしてたことがあったんだけど、それがどうなったかの確認をしようと思ってね」

「ああ、そうだったの。ちょっと待ってて……モブ子ちゃん」

アリアさんはモブ子さんに話しかけてキューマさんの居場所を確認している。

というか、相変わらずモブ子さんはモブらしい顔をしてるな。ぶっちゃけ、美人でも不細工でもない普通の人の顔だ。

「お待たせ。すぐに来てもらえるから、その辺で依頼の確認でもしながら待ってて」

「へいへい」

まあ、姫様からの依頼以外をしてるような余裕はないだろうけどね。今はどんなもんがあるのかぐらいは確認してもいいか。

ええと。ゴブリンの討伐、ホワイトボアの討伐、スライムの討伐、ベアの討伐 *etc etc* っつて、討伐依頼しかないし。

やっぱり、迷宮から魔物が溢れて大変なのかな。雑魚から俺の知る限りは強いのもでそろってるのに、ほとんどの依頼が受注ランク不問になってるし。

数が多すぎて、いちいちランクを気にするよりは、確実に減らした方がいいだろう。

非常事態につき、ランク制限は設けていません。報酬は通常時の1.5倍、失敗してもギルドPの減点はなし。その代り、危険なモ

ンスターの依頼を受けて死んでも文句は言つな。って感じの注意書きが書いてあるし。

でも、ランク制限して確実にやったほうがいいんじゃないんだろうか。

「や、お待ちせ」

「あ、どもキューマさん」

「それで、さっそくだけど知りたいのはこの間のお願についてだよね」

「はい。仲間になってくれそうな人はいましたか？」

「いやあ、残念だけどやっぱり無理だったよ。足手まといはいらないとか、罠に使っていいならとか言われちゃったよ」

そりゃ困るわ。

足手まといってのは仕方ないけど、罠云々はマジで勘弁だ。

「ところで、その人は君が自分で見つけたお仲間かい？」

「え？ ああ、レスティアナさんのことですか。違いますよ。彼女はスクルドの……俺の相棒を以前世話してた人で、どうしても連れ帰りたいって言ってましてね。こいつ自身が断ったんですけど、心

変わりするまで待つ、どこに行くのにもついて行くって言って、それこそ迷宮までついてきそうな勢いでして……………ん？」

そう言えば、レスティアナさんは弓の使い手だよな。俺の命を狙ったときだって正確に俺だけをめがけて矢が飛んできたし。

「さっきから何の話をしているんですか、あなたは」

「いや、俺は冒険者で迷宮に入ることになってるんだけど、その時にレスティアナさんについてきます？」

「なぜ私があなたなんかについていかなくてはいけないんですか」

「俺が行くってことはスクルドも一緒ですよ？」

「当然ついて行きます」

ああ、やっぱりそうなるのか。

だとしたら、スクルドに危機が迫る状況には手を貸してくれるはず。スクルドのピンチってのはすなわち俺のピンチだ。

仲間が増えるのと大して変わらないな。

「仲間ではないですけど、みたいなものです」

「へえ。彼女は冒険者なのかい？」

「そうなの？」

「違います」

「じゃあ、レベルはいくつ？」

「さあ？」

「って、あんた自分のレベルを知らないのか？」

「この世界ではレベルなんてわかりやすいぐらいに自分の成長が見られるもんがあるのに、それを活用してないなんて。」

「どこかのギルドには所属してないのかい？」

「いえ、してません」

「それなら、迷宮に入るってことだし、うちで登録するといいいよ」

「結構です」

「……………ガイ君、僕は彼女の機嫌を損ねるようなことを言ったのかな？」

「ご心配なく、俺に対してもあんまり変わんないんで」

というか、レスティアナさん的にはキューマさんも俺と同じランクなんだろうか。

欲深で薄汚い人族とかそんな感じの。

「でも、迷宮は基本的に冒険者ギルドの管轄でね。冒険者以外は立ち入り禁止なんだ」

「そうなんですか？」

「そうなんです」

知らなかった。

「だからどうしたんですか？」

「つまりは、スクールと一緒にいけないってことですよ」

「……………それは、困ります」

「だったら登録してください」

「つく、わかりました」

スクールと一緒にいられないってというのが効いたのか、渋々と言

う感じでレスティアナさんは受付に向かった。

受付に立ったレスティアナさんの相手は、苦笑まじりのアリアさんがしている。

「それじゃあ、仲間は見つかったってことでいいのかな？」

「そうですね、一応は……でも、2人だけで迷宮に入っても大丈夫ですかね？」

「どうだろう。彼女の实力はどんなものなのかはわかっているの？」

「弓はなかなかうまいと思いますよ。動いている相手に連射しても狙いは正確ですし」

これは自分の身を以て味わったから間違いないと思う。

最後にレスティアナさんに剣を突き付ける前、連射した矢のすべてがスクルドには絶対に当たらない軌道を取りながらも、まっすぐと俺を狙っていた。

スクルドの体は小さいけれど、剣を構えた俺はスクルドの乗っている右肩を前にして走っていたんだ。

右肩がちょうど真ん中で狙うなら一番やりやすいだろうけど、あえて範囲の狭い右肩以外を狙える实力があるのは確かだ。

「へえ。それなら、弓術のレベルはそれなりにあるんじゃないかな？ たぶんレベルも」

「どうですかね？ 彼女が強かったら、その分俺も助かるんですけど」

「まあ、それは明日のお楽しみだね」

明日？ ああ、そう言えばギルドカードを作るのには1日かかるんだっけ。

それだと迷宮に潜るのも明日にした方がいいんだろうな。

まあ、今日のうちは装備のこととかを調べるのに集中すればいいか。

お姫様への報告まで後6日。1週間を切ってるけど、まあレステイアナさんもいるし何とかなるだろう。

というか、何とかなってくれないと困る。

キューマさんも仕事があるのか自分の執務室へと戻り、レステイアナさんが戻ってくるまでの間にギルドカードを調べることにした。

最初のページを開いて、特記の欄を開く。

newというマークが浮かんでいるのはequipmentの欄とtamerと書かれた下にあるスクルドと言つ欄。

他にもいくつか書かれているようだが、文字は黒く開こうとしても開けない。たぶん、まだ俺には関係ないから開けないんだろう。

とりあえず、以前からあったスクルドの方を開いた。

Name : スクルド > Skuld < Race : パスカドウ
Rank : 神獣

condition : good

……これだけ？

俺の本人情報欄に比べてめっちゃめっちゃ情報量が少ない。

あ、でも、ここに神獣って書いてある。ギルドカードってそんなことまでわかるんだ……

それにコンディションってのは、まんま今のスクルドの状態だろうな。

様子がおかしかったら見ただけでもわかるだろうけど、ギルドカードでも確認できるのは……便利か？

まあいいや。

次は、俺の装備品だな。

剣のこととか書いてあると助かるんだけど……

E q u i p m e n t

A r m s

m a i n : バスタレイド

s u b : ククリ刀

A r m o r

h e a d : - - -

b o d y : 鋼の鎧

a r m s : 鉄の手甲 賢人の指輪

l e g s : - - -

ククリ刀ってのはグルカナイフの別称だから問題なし、防具類も大丈夫だ。

でも、主装備のバスタレイドってのはなんだ？

「バスタレイド」

声に出すことでさらにページが先に進む。

バスタレイド

class: 剣
type: バスタードソード
rarity: スーパーレア

これだけ？

俺の知りたいことがほとんどわかんないじゃん。

でも、スーパーレアって……ええ！？

呪いの剣かどうかとか調べるにはやっぱり武器屋とかで直接聞く
しかないのか？

「……お待たせしました、クレイ様」

俺が頭を悩ませていると、手続きを終えたレスティアナさんが戻
ってきた。

ギルドカード片手に頭を抱えている俺に訝しげな視線を向けたか
と思えば、すぐにどうでもいいと判断したのか意識のすべてがスク
ルドに向けられている。

「別にお待たせなんて言われるほど、待ってないよ」

「あなたには言っていないせん」

ですよ。

はいはい。わかってますよ。

なんで俺はこの人にこんなに嫌われなきゃいけないんだ？

何はともあれギルドでの要件は終わった。

どうせ今日は迷宮にも行けないし、おっさんの店に行って話を聞くとしよう。

おっさんの店に行く途中、昼食がてら買ったバーガー風の食い物をなぜか、レスティアナさんの分まで買うことになり、俺の財布はさらに軽くなることをこのときの俺は知る由もなかった。

21話 迷宮探索にはまだ行けないみたいです(後書き)

冒頭にあったイーQUIPPのくだりは、趣味です。

わからない人には全く分からず、まったくおもしろくもなんともない
いうえに、意味も分からなかったでしょうが気にしないでください。

ギルドカード新機能、そして主人公の現在ステータスが今回は登場
しました。

新機能はしょぼく、ステータスはほとんど成長していないというや
った意味があるのかはなはだ疑問な話でしたが、今回の迷宮編が終
わるころにはこれが……な変化を見せるはずです。

お楽しみに(してくださる方はいるのでしょうか?)

次回は迷宮に再突入するお話です。

後2、3話で終了すると思います。

その後はついについに、個人的にはスクールと癒し要素を二分する
彼女が登場……するかもしれせん。

22話 剣はなかなか強力みたいです

(略)

無事にギルドカードを受け取ったレスティアナさんとスクルドを肩にのせた俺は迷宮へとやってきた。

昨日はおっさんに新しいバスタード、バスタレイドのことを聞いてみたんだけど、使い手を操るような剣は魔剣だろうが呪いの剣だろうが存在しないらしい。

つまり、この間俺の体が勝手に動いたのはこの剣が原因じゃあないといことだ。

だったらなんで？ って疑問はあったんだけど、スキルとかにもそれらしいものはなく、原因は不明。

時間もなし、現状では何か問題があるわけでもないので迷宮へと行くことになったわけだ。

ちなみに、レスティアナさんのレベルは87だったらしい。

俺の17倍だ。強すぎると思う。

そのことを知ったキューマさんが言っていたのだが、レベルだけならSランクか下手をすればSSランクに匹敵するとかなんとか。化け物ってやつですね。

こんだけふざけた強さなら人の話を聞かないで自分勝手なのも納

得……できないでしょ。

レベルと性格は関係ないじゃん。

閑話休題。

とりあえず、レスティアナさんと一緒に俺たちは迷宮に来たと言
う点が重要だ。

そして問題。

迷宮でセーブした場所にはセーブした人間しか行けない。と言
うことだ。

つまり、前回セーブした30階に行こうとしたら、レスティアナ
さんだけが1階から挑戦する必要がある。出てくる。

俺の調べてる迷宮が、この迷宮と同じなのかがわかっていない以
上は、別々になってしまうのはまずい。

と言うわけで、1階から再挑戦することになった。のは、いいん
だけど、やっぱりと言うかなんというか、モンスターがいなかった。

前回同様に5階には俺が一か所にまとめた冒険者の遺体。通りが
かった時に腐臭がしてちょっと気分が悪かったのは秘密だ。

そして、30階に到着。通路の途中には前回倒したギガースパン
ダの死体が骨になってた。どうやら、別のモンスターに食べられて
しまったらしい。

最初にパンダを発見したホールには誰もおらず、俺たちが逃げ出した移動紋章に乗って31階に飛ぶ。

っていうのが大まかな流れだ。

こっからが本題。

31階に到着すると同時にモンスターの大群が……いなかった。

やっぱりぜんぜんモンスターがいない。

ちなみに、レスティアナさんは後ろからついてくるだけだし、話しかけても返事をしてくれない。

正直つらい。

前回と同じくスクルドは寝るし、レスティアナさんは無言でストーキングしてくる。

仲間が増えたはずなのに前回より気分が重いつてどういうことだ？

とりあえず、そのまま探索を続けて、現在は53階に到達した。

おわかりだろうか、漆黒の迷宮は52階までしか到達した人間はいない。つまり、ここが漆黒の迷宮だとしたら俺たちが到達記録を更新したってことになる。

まあ、キューマさんが言っていた可能性として、ここが漆黒の迷宮じゃないって可能性はありえるだけに単純に喜べないわけだけど。

しかも、ここに来るまでもモンスターは0。

前回みたいに途中でパンダが現れることもなかった。

まったくもって迷宮の謎が深まるばかり。

なにせ、モンスターも現れないし、何の手がかりも見つからない。

そもそもこんな状態じゃ、何を手掛かりにすればいいのかもわからない。

このままだと、一番下まで潜んなきゃいけないんじゃないのか？

この空気でのこの退屈なまま100階以上下までとか……発狂するわ。

「なあ、しりとりでもしないか？」

さつきから無視され続けてきたし、ダメもとで俺は言った。

もはや退屈とか寂しさで気が狂う寸前だからだ。

「な、何を突然！ この変態」

「え、なんで？」

「い、いきなりわ、私のお尻に触りたいだなんて、変態以外の何物

でもないじゃないですか、この薄汚い下郎！」

内容はともかく、返事をしてくれたのは嬉しいけど、しりとりを知らないのか……

軽くカルチャーギャップ。

「いや、レスティアナさんの尻に触る遊びじゃなくて……しりとりってのは、言葉の最後の文字を最初に持つてくる言葉をつなげて言う遊びだよ。パスカドウ、で『ど』だから、ドメドメ草、で『う』の次は宇治金時みたいな」

「……宇治金時ってなんですか？」

あ、この世界にはさすがに宇治金時なんてないわな。

でも、誤解は解けたみたいでよかった。

「宇治金時ってのは、お茶と小豆っていう甘い豆を細かく砕いた氷にかけて食う菓子みたいなもんだ」

「へえ……人族は面白いものを食べるんですね。氷の菓子などなかなか目にしたことはありませんが」

そういえば、この世界にかき氷なんてあるのか？

魔法で氷は作れるだろうけど、かき氷機とかなさそうだし……

「それで、その言葉遊びをする必要があるんですか？」

「いや、ただの退屈しのぎの遊びだけど」

「何が面白いんですか？」

「完全な暇つぶし。一応、語句を多く知らない子供にたくさん言葉覚えさせるって意味はあるだろうけど」

「10年以上生きていれば、しりとりなんてしなくても新しい語句は覚えられるし、しりとりは完全な暇つぶしに成り下がるけど。」

377

「ルールは、言葉の最後を使うだけですか？ それでは永遠に終わらないじゃないですか」

「ん、が最後に来る言葉を言った方の負け」

「なぜですか？」

「ん、で始まる言葉なんてないから」

「？ ンジャロベス、ングレフィリ、ンドレアの寒、いくらでもあるじゃないですか」

……この世界にはそんなもんがあるのか。

しりとりとして成り立たないじゃん。

しかも、この世界のものの名前をそこまで知ってるわけじゃい俺にはレスティアナさんの言ったものが本当にあるのかわからないし、俺の言うこともレスティアナさんはわからないだろう。

ダメダメだ。

「まあ、何にしてもやるつもりはありませんが」

「じゃあ、今までのやり取りはなんだったの!？」

ルールの確認までしといて、やらないってどういこと!？」

そんなに俺をおちよくって面白いんですか？

たぶんおそらく、俺の予想では、この世界の女性は絶対Sしかない。
ない。

アリアさんは肉体的に、レスティアナさんは精神的に俺をいじめ
て楽しんでいるに違いない。

「でも、迷宮探索だつて言うのに、モンスターがぜんぜん出ないつ
て言うのは退屈ですよね」

「……………」

え、シカト？

さっきまで話してたじゃないですか。

突然無言になるとかやめてくれませんか？

「……………そんなバカなことを言っている場合ではありませんよ」

「へ？」

レスティアナさんは言いながら弓に矢をつがえた。

モンスターでも現れたのかと思って正面を凝視するが、それらしいものは影も形もない。っは、まさかアリアさんだけじゃなくてレスティアナさんまで肉体的に俺をいじめるつもりか!？

バツと勢いに任せてレスティアナさんの方に振り向くと、まさに矢を放とうとしている瞬間だった。

あんなものが刺さったらやばい。

痛いじゃすまないかもしれない。

俺は慌てて剣に手をかけると、操られるがままに剣を抜き、振る

った。

そして、地面に落ちる2匹の巨大な蝙蝠のようなモンスター……
って、モンスター!?

どこにいたんだこいつら。

正面にも背後にもそれらしい影はない。

ならば横かと視線を巡らせるが、やはり影も形もない。

するとあり得るのは下か上。下にはいるわけないし、上だろう。
と、思つて視線を上げると10匹ぐらいの蝙蝠が天井に張り付いて
いた。

天井からぶら下がるような形じゃなくて、天井にその体を広げて
張り付いているんだ。薄暗い迷宮の中じゃあなかなか気づけないの
も仕方がない。

って、仕方がないじゃすまないよ。

気づかないで襲われてたら、軽くやばいって思えるぐらいにデカ
いんだ。

羽を広げた大きさはたぶん1メートル近い。ぎろりとこちらを睨
んでくる目は、赤く爛々と輝いている。

蝙蝠つて暗闇に住むから目が退化してるもんじゃないのか？

そんなことはどうでもよくて、この蝙蝠の一番の脅威はおそらく

牙だ。

デカイ。

スクルドの頭ぐらいなら口に入れて噛み砕けるんじゃないかってぐらいにデカイ。」

「ダークネスバットですね。里の近くの森にもいます」

「へ、へえ〜……ちなみに強いのか？」

「大したことありません。10匹程度ならギガースパンダより少し強いぐらいです」

やばくない？

たかが蝙蝠なのにあのパンダより強いのか！？

たとえば単体としては驚異じゃないとしても、今日の前にいるのは間違いなく群れだ。

レスティアナさんの言う通りならパンダよりも強い敵が目の前にいるってことだぞ？

「おしゃべりしている余裕はないですよ。さっさと始末するなり、やられるなりしてください」

「は？ 一緒に戦うんじゃないの？」

「なんでですか？ クレイ様に脅威が迫っているならまだしも、あなたを助ける道理はありませんよ」

「だ、だってレスティアナさんが手を出さなかったら、スクルドだって危ないじゃないか」

「安心してください。ダークネスバットは大きい獲物から先に仕留めます。あなたを食う終わるまでクレイ様に手出しはされません」

安心できないし……

つまり、俺がやられたらスクルドを助けるために戦うけど、俺がやられるまでは手出ししないんですね。

勘弁してくれよ。というか、この蝙蝠の習性やめてくれよ。

どうせなら小さい方からってことにしてくれれば、レスティアナさんも手助けしてくれたのに……

「それで」

「はい？」

「よそ見しててもいいんですか？」

「っげ」

蝙蝠はかみつく攻撃をしてきた。

ガイは攻撃を回避した。

きわどいけど。って、やばいってもう、よそ見してる場合じゃない。

連続して襲い掛かってくる蝙蝠の攻撃を避けつつ、剣の動きに身を任せてこちらも攻撃を繰り返す。

1匹、2匹と羽を切り落とし、地面に落ちた蝙蝠に止めを刺そうとしなかったので、仕方なく頭を踏み潰してやった。

剣の動きも万能ってわけじゃないのか、時々蝙蝠の攻撃が俺の鎧に傷をつけたが、おっさんの店で買った鎧は頑丈で、へこんだ様子もなさそうだ。

4匹目の頭を踏み潰したところで、次の蝙蝠が正面から迫ってくる。

「キユイ」

スクルドの鳴き声に反応して一瞬だけ後ろを見れば、後ろからも迫ってくる蝙蝠。

同時攻撃ですか。

ぎりぎりまでひきつけてから、蝙蝠の突進をしゃがんで避ける。

さすがに正面衝突して自滅するほど馬鹿じゃないらしく、前後の蝙蝠はそれぞれが高度を変えてすれ違おうとする。

その一瞬を狙って下から剣を突き上げ、2匹の蝙蝠を串刺し。

さあ、これで残りは4匹まで減った。

剣を振るって剣に残った蝙蝠の体を落とすと、次に迫ってきた蝙蝠を下から切り上げる。

それとほぼ同時に足元から迫ってきた蝙蝠には蹴りをプレゼント。

基本の攻撃は剣の動きに任せてればいいし、俺には全体を見渡す余裕がある。

もしも前のバスタードでこいつらと戦うことになったら、最初の1匹を倒す前にこっちがやられてただろう。

掘り出し物の剣をほとんどタダでくれたおっさんには感謝するほかないな。今度なんか買いに行こう。

最後の1匹の頭を踏み砕いた俺は、ポケットに入れていた布で剣についた血をぬぐうと剣を鞘に戻す。

これで一安心だな。

「なんで、あなたは無事なんですか？」

レスティアナさん。ようやく安心して胸をなでおろしてる俺にそんなひどいこと言わないでください。

あからさまに残念そうな顔とかマジでへこむから。

でも、モンスターを倒し終えたのはよかったけど、この階に来てモンスターが現れたってのはどうということだろう。

前回の30階の次は53階。

何か共通点でもあるのか？

共通点と言えば、3のつく階ってことだけど、33階や43階には現れなかったし……

次にモンスターが現れるのはどの階なのか予想することも出来そうにないな。

まあ、見つかるまで進むしかないけど。

「とりあえず、先に進もう」

「……………」

あの、返事してください。

22話 剣はなかなか強力みたいです（後書き）

短め&進展少なめ。

次の話で、今回の迷宮の核心というか、謎とかが解明される直前まで進みます。

主人公のいる迷宮はどこなのかわかる！ …… かもしれません。

23話 迷宮にも人は居たみたいですよ

「忌々しい。まったくもって忌々しい」

漆黒の迷宮、その最下層にいる男はイラついた調子で吐き捨てた。

彼の前には迷宮内の状態を知らせる水晶球が置かれ、そこに冒険者らしい男女の姿が映し出されている。

男女の冒険者たちは、突如として誰も入れないはずの迷宮の下階層に現れ、どんとこの場所に近づいてきている。

普通に考えれば、たった2人の冒険者がこの場所にたどり着けるはずがない。

それはたった1人で迷宮の最深部に居座る男にも同じことが言えるのだが、彼の場合はこの迷宮に入った状況が違う。

突然平原を歩いていたら、この場所に落ちてきたのだ。

普通に考えれば、平原を歩いていて迷宮に入ることなどおかしい。

いや、あり得ないことだ。

しかし、男には普通ではない部分がある。

男は、前々からラスィーダという運命を司る女神の加護を受けていたからだ。

神の加護とは、世界を作った何人、あるいは何十人の神々から生まれてくる人間に与えられる力。

加護を与える神によって、その効能は様々だ。

例えば、戦神ゼンディアの加護であれば、様々な武器の扱いに長けるということや、身体能力が一般人とは根本の部分から異なるということがある。

ラスィーダの加護。

それは、様々な事象が加護を受けている人間にとってより良い形になるというものだ。

男にとって、この場所に落ちたというのは間違いなく幸運といって差し支えないものだった。

加護を受けているとはいえ、人生のすべてが順風満帆と言っわけではない。

魔術師として何とか成功しようと様々な努力を続けてきたが、なかなか成功の目を見ない。

そういう意味では、ラスィーダは運命の女神というだけではなく、いたずら好きという面が神話には多く描かれており、加護を与えた人間により多くの困難を与えとも言われている。

そんな様々な試練ともいえる日常を続け、ようやく努力が結ばれそうになったと言うのに、国は亡びた。愚かな王のせいだ。

亡びた国は国王が愚か者であったがために、国力は衰える一方で、男にとつては願ってもみなかったチャンスだった。

国が傾いた時、多くの有能な人間は国を捨て、様々な国へと散った。

天才でも、努力する秀才でもない、一般人よりもいくらか優れていると言う程度の男にも国に仕える機会が巡ってきたのだ。

しかし、国は亡び、大国であるバルデンフェルトに併合されてしまった。

いくら努力を続けようとも、バルデンフェルトの宮廷につかえる魔法使いとなるには男の実力も、才能も金も名誉もなにもかもが圧倒的に足りていなかった。

だが、男にも再びチャンスが巡ってきた。

冒険者ではなく一介の魔法使いが。否、魔法使いと言う名の研究者が迷宮の最深部に到達したという記録は古今の歴史をひも解いても1度としてあったことではない。

否。

今男のいる迷宮の最下層に到達した人間など古今存在しない。

なぜなら、男がいる場所は迷宮のボスがいる、今までに最下層とされていた場所よりもさらに下に存在するからだ。

ボスのいるフロアよりもさらに下の階があるというのは、人類史上初の発見だ。

だが、この事実を発表したところで男は人類で初めて本当の最下層を発見した男。という名前だけで終わってしまう。

男が求めるのは、宮廷魔法使いという確固とした地位だ。

ならば、何をしなくてはいけないのか。

決まっている。迷宮の謎を解明しなくてはならない。

宮廷魔法使いは、なにも魔法の実力に長けた人間だけがなれるものではない。

新たなる魔法の形態の発見。もしくは開発。

現存する魔法であってもギルドカードに使われている魔法のように、まったく解明されていないものだってある。

研究から得られた新たなる発見の発表をもってしても宮廷魔法使いや国の重役に近い地位に就くことはできる。

そう言う点では、迷宮の謎の解明と言うのは成果として余りあるものがある。

迷宮に落ちてからそろそろ3週間近くが経つ。

1日中迷宮の中で研究を続ける男は、1度も外に出ることはなく。また、外に出ることも出来なかった。だが、これは大して問題には

ならない。

魔法を使えば飲み水は用意できるし、食料などは魔法を使って植物の成長を促せば野菜などには困らない。

肉に関しては、そうこれが男にとって現在わかるもつとも大きな発見の1つ。モンスターの召喚魔法陣があるのだ。

魔法陣に魔力を流し込めば任意のモンスターを召喚することが出来る。

これを用いることで、男は小型でさして脅威にならないモンスターを召喚し、食料としていた。

地面はごつごつとしていて眠りづらいことこの上ないが、寝れないわけではない。

服だつて水の魔法で洗濯し、風の魔法で即乾燥。洗っている間に全裸でいたとしても、それをとがめる人間など存在しない。

衣食住のすべてにおいてさしたる問題はなかった。

だが、ここにきて男女のたった2人の冒険者によって問題が生じていた。

モンスター召喚魔法陣の横には、いくつかの水晶があり、それらに魔力を流し込むことでボスを除いたほぼすべてのモンスターを操作することが出来る。というのも、男が発見した新事実の1つだ。

その水晶を使って、モンスターの大部分を中階層から上階層にか

けて移動させ、わざと迷宮から溢れかえらせることで迷宮の攻略を足止めさせようとしていた。

だが、たった2人の冒険者たちは下階層、それも男がいる156階その3つ上である153階まで迫ってきている。

2人の冒険者だったので何とか足止めしようと強力なモンスターを召喚し、各階に行かせて足止めか、できることなら殺そうとしたのだが、そのすべてが振り返り討ちにあっている。

今もまた、3頭のギガースパンダが男の冒険者によって倒されてしまった。

ギガースパンダが男の召喚できる単体では最強のモンスターだ。

それ以上強力なモンスターを召喚するには男の魔力は小さすぎる。

普通の迷宮であればギガースパンダ以上に強力な個体などいくらでもいるのだろうが、ボス以外ではギガースパンダ以上に強力なモンスターはこの迷宮にはいなかった。

もはや数で押すか、ボスに頼るほかないのだが、これ以上モンスターを召喚するにはいくつも召喚しすぎて魔力は枯渇気味。

ボスならば、この冒険者たちを倒せるかもしれないが、ボスが敗れるということはすなわち迷宮の消滅。

確実に勝てるかもわからないと言うのに、そんな危険を冒すようなまねを何の心配もせずに見ているようなことは、男にはできないことだった。

どうすればいいのか。

ボスをどこかに逃がす？

どこに逃がすと言うのだ。

「つくそ。どうする。どうすればいい」

男が悩んでいる間に、男女の冒険者たちは男のいる上の階。つまり、ボスのいる155階に到達した。

いよいよもって時間がない。不味すぎる。

何か手段はないのか。

何をどうすればいいのか。

妙案は思い浮かばない。

男は何かいい手はないかと、まだ調べ終わっていない水晶にも片っ端から魔力を流し込んだ。

このままではこの迷宮が消滅してしまうのだ、時間がない以上手をこまねいている場合ではない。

幸い、迷宮の自爆や自己崩壊の類は起こらなかったが、迷宮の随所が変動し、3階と4階、5階が融合。

10階から50階へ移動する魔法陣が出現。

モンスターの解放。

トラップの消滅。

様々な意図しない変化が迷宮を襲った。

それぞれの階に居合わせた冒険者たちは突然の変化に驚き、慌てながらも迷宮を出るか、とりあえずの調査を試してみようとそれぞれが動き出していた。

男にとってはそんな冒険者たちのことなど、どうでもいいし知る必要もないことなのだが、男にとっても意図できなかつた。

何よりも重大な事実がある。

それは、今までに存在しなかつた最下層と今まで存在した最下層が融合したことだつた。

男の正面にはボスであるアイアンナイトが無言のままに整列し、ちよつどその部屋へと入ってきた男女2人組の冒険者たちと対峙することとなつた。

「お、お前は俺を召喚した時の爺！」

「お、お主がなぜそこにいる」

冒険者を前にした男、今は亡き国でたったの1日だけ宮廷魔法使
いになった男、ジ・ジーは自分が召喚した勇者を前に驚きの声を上
げた。

23話 迷宮にも人は居たみたいです（後書き）

2日連続で短め。しかも大部分が説明。しかも、初のガイ視点なし。というか主人公なのにガイのセリフ1つだけ。

ごめんなさい。

というわけで、じじいの再登場です。

迷宮編をかき始めた時から、黒幕（？）はこの人に決めていました。ただし、プロローグには討たれた（死んだ）と書いていたのになんて？ って疑問があるかもしれませんが、詳しくは次回で。

というか、旧作から含めて王様もじじいも出番少なく、可哀そうだったのでじじいだけ復活。

そしてこれが、きな臭くなっていた主人公の周りの問題とも関連した問題に発展して………あとは秘密です。

ちなみに、この話で迷宮（漆黒の迷宮に関してだけ）の秘密が明らかになったわけではありません。

次の話で、この迷宮の謎がある程度解明され、なんでどうして？ がちよっとだけ明かされます。

今回は、主人公がまさかの大覚醒………するかもしれません。

24話 お別れみたいです

(略)

断続的に襲い掛かってくるモンスターたちを倒し、87階に到達したところで俺は思わぬ人物と再会した。

俺をこの世界に召喚した元凶。

俺がこんな明日をも知れない世界を生きなくてはならなくなってしまった原因を作った爺。

「な、なんでお前がこんなところにいるんだよ」

たしかこの爺は、デブと一緒にバルデンフェルトとの旧国境で捕まったはずだ。

自分の目で見たわけじゃないけど、街中がお祭り騒ぎだったあの日に何度か耳にしたので間違いないはず。

「それは、こちらのセリフじゃ。なんでお主がここにおる」

「なんでも何も、俺は冒険者でこの迷宮を調べに来ただけだ」

「な、なにお？ お前なんぞついこの間この世界に来たばかりじゃろうが！ それなのに、この迷宮の最下層まで到達したと言っのか

!？」

「は？ 最下層？ でもこいつで87階だろ？」

「155階じゃ！」

「……は？」

155階？

いつの間にそんなにワープしたんだ？

おっさんから新しく渡されたプレスレットにだって表示されてる階は87だ。

それがどうして155階になる……ああ、なるほど。

「爺さん。ぼけてるんならもっと安全なところで生活しろよ」

「ぼけ取らんわ！」

ぼけてないなら、自分のいる階を間違えたりしないだろ。

って、どうしたレスティアナさん。急に俺の肩を叩いたりして。

「あなたはそこの変態と知り合いなんですか？」

変態？

……

……

……

……

へ、変態だ！

「じじい！　なんででめえ全裸なんだよ！」

「な、なに！？　っわ。見るな！　見るでない！」

こんなところで爺に会ったって言う驚きで、今の今まで気づかなかつたけど爺は全裸だ。

「ご丁寧に脱いだ服が爺さんの近くに落ちてるし。」

迷宮の中で全裸になるなんて、自殺行為だ。

というか、命の危険がある迷宮の中でわざわざ全裸になるなんて
どんなマゾの露出狂だよ……

危険が多いだけにさらされる快感ってやつがあるのか？

「で、どうなんですか？」

「試してみようなんて思っ
てないぞ！」

「？ 何をですか？ 私はあの変態が変態あなたの知り合いなのかと聞いているだけです」

「いや、知り合いは知り合いだけど」

というかレスティアナさん。

今、あなたって変な字をあてませんでした？

「そうですか。やはり、変態あいつは変態あいつを呼ぶんですね」

「違う！ 少なくとも俺はあの変態じじいと違って普通だ！」

「変態はみんなそう言っ
つんです」

「だから違うって！ そもそもあの爺が俺をこの世界に召喚した
だけで、顔を覚えてただけだ。知り合いなんかじゃない！」

「今更他人のふりをしようとしたところで遅いですよ」

だから、ちがうつつうに……

やばい。泣きたい。

最近、心の涙の流しすぎで心が水分不足と塩分不足でストライキを起こしそうだ。

「わしだって変態じゃないわ！ ただ服を洗濯しておったから、脱いでいただけじゃ！」

「こんなところで洗濯する馬鹿がいるか！」

「ここにおるわ！」

んな馬鹿な返しは求めてねえんだよ。

こんなところで洗濯なんかする馬鹿でアホで命知らずなやつがいるわけない。

そんな自殺志願者ありえないだろうが。

「それで、見たところ大した実力もないのにアイアンナイトの群れの中にいて大丈夫なんですか？」

「ふ、ふん。この迷宮内のモンスターはわしの言いなりじゃ。アイアンナイトの中におっても問題はない」

「ふむ……なるほど」

レスティアナさん、どうかしたんですか？

一人で納得しないで俺にも教えてください。

「ところで物は相談なんじゃが……」

「なんだ？」

「なんですか？」

「服を着てもいいかのお？」

「……どうぞ」

「どうぞ」

いつまでも生き恥晒してるのは確かに嫌だよな……

レスティアナさんはこんなんだけど美人だし、狼狽えもせず恥かしがることもなく、冷徹な目だけを向けられていたら、いかな露出狂でも服を着たくなるってもんだらう。

「ふむ。待たせたの。お主らなかなか物分りもよいようだし、1つ相談があるんじゃが」

「なんだ？」

「なんですか？」

「この迷宮を攻略するのを中止してくれんかの？」

「なんで？」

「わしにも事情があるんじゃない？」

事情？

突然、迷宮攻略をやめろって言われても、こっちにだって目的がある。

何の説明もなしだと、やめるわけにはいかないよな。

レスティアナさんは、迷宮攻略の話になると、興味をなくしてしまった。

あくまでスクルドについてきただけだし、どうでもいいんだろう。

「こっちにだって、この迷宮を調べる事情がある。それとも、お前が解決してくれるのか？」

「いいぞ」

「だろ？ だったら攻略をや、め……るなんて……は？ 今なんて言った？」

「わしもこの迷宮を調べとる。お主らの知りたいこともついでに調べてやるから、この迷宮から出ていくがよい」

「なるほどな。でも、どのくらいかかるんだ？ そもそもどうやってお前の調べたことを俺に伝えるって言うんだよ」

「この迷宮が調べ終われば、すぐにここから出るわい。どうしても早めに知りたいと言うのなら、逐一この迷宮に来るがよい、地上とわしのいる場所をつなげる道はすでに見つけておる」

なら、問題ないか？

わざわざ俺が危険な目に遭わなくても、爺さんが解決してくれるっていうなら渡りに船だ。

そもそも何の知識もない俺が迷宮のことを調べるって言ったって、普通に考えたらできないことだろ。

それを専門家の爺さんが肩代わりしてくれる。

こんなにいい話はないな。

「よし。わかった。いいぜ、迷宮を出ていくよ」

「そうか。それは助かるわい」

「んじゃ、このことはお姫様に報告して、引き継ぎ済ませたから今回の俺の報酬だけ受け取るっ」

「ん？ お主。今、なんと言った？」

「報酬を受け取るうって……ああ、心配すんな。わけを話せば、今回の俺の報酬以外にもお姫様がお前にも報酬を用意するだろうさ。信賞必罰、仕事さえすれば一応報酬はきっちり用意してくれるし」

「お姫様とは、バルデンフェルトの？」

「そう、たしかセリル姫だっけ？」

「な、なんじゃと!？」

なにをそんなに驚いているんだ？

もしかして、俺がお姫様と知り合いだからうらやましいとか……

んなこと言っただって、今の俺とお姫様の状態とか関係を知ったら、うらやむよりも同情してほしい。

まあ、爺さんは俺とお姫様の関係なんて知らんだろうけど。

「悪いが、お前たちを外に出すわけにはいかなかった」

「はあ？」

何を突然。

うらやましすぎてヤンデレ的なあれか？

事情は説明するからやめてくれよまじで。

「あんな、爺さん。うらやましいのかもしいけど」

「行け、アイアンナイツよ！」

「うらやま……って、話聞けよ！」

俺の話を聞こうともしなかった爺さんの命令に従って、アイアンナイツ？ でもレスティアナさんはアイアンナイトって言ってただど……

ってそんなことはどうでもいい。

アイアンナイトの集団…… ああ、集団だからアイアンナイツになるのか。

……って、だからそんな場合じゃなくて。

アイアンナイトの集団が俺たちに襲い掛かる。

見た目は完全に重装備の鎧騎士。

たぶん、鉄のフルプレートメイルを着込んだようなモンスターだから、アイアンナイトって名前なんだろう。

先頭を付けてきたアイアンナイトの剣による一撃を寸でのところで回避して、俺は剣を抜いた。

「話も聞かないでいきなり襲い掛かんじゃねえよ」

「うるさい、さっさと死ぬがいい！」

一度は勝手に呼び出しておいて、今更死ねとか言うなんて、いたいどんだけわがままなんだよ。

俺はアイアンナイトの剣を、剣の動きに導かれるままに受けると、アイアンナイトの腹を蹴って距離を開けた。

例のごとくレスティアナさんは静観しているのだろうと、一瞬だけ視線を向けてみれば、レスティアナさんの方にもアイアンナイトが向かっていたようで、すでにあちらの戦いも始まっていた。

ようやく冒険者の仲間らしい形で戦うことが出来る。

思えば、今日の迷宮に入ってからからの戦いのすべてが俺とほんの少しのスキルドの助けによるものだったのを考えれば、思わず涙が出そうだった。

「つと」

よそ見をしているところをランスを持ったアイアンナイトが攻撃してきたが、避けざまに胴を薙いでやる。

鉄と鉄のぶつかり合う嫌な音が響いたが、何とかアイアンナイトを両断することが出来た。

俺の剣、バスタレイドは鉄をも断つことが出来るようだ。

だけど、手応え的にはギガースパンダよりも硬い。

そりゃそうか、あつちは肉と骨。こつちは全身が鉄だ。どつちが硬いかなんてわかりきってる。

死角から攻撃してきた剣装備のアイアンナイトの腕を切り落とし、胴体に回し蹴りを叩き込む。

「いつてえー！」

さすがは鉄。

防具も付けない足で蹴っては痛むのも当然だ。

やるなら、手甲を付けた腕で殴るとかだな。

でも、手甲がゆがんだらまたこれも買い直しかよ……

左右から襲い掛かるアイアンナイトの攻撃を転がるようにして回避する。と、俺の退路を読んでいたのか、すでにその場所で待機していた大剣装備のアイアンナイトが薪割りでもするかのように大剣を振り下ろした。

「どおわ」

我ながら変な声を出してしまったけど、なんとか大剣も避けられた。

それにしても、アイアンナイトは集団での戦法ってやつを心得てるみたいだ。

1体が囷になってもう1体が死角から攻撃するだとか、基本的に連携をとって攻撃してくる。

1体当たりの攻撃力はそれほど高くはないっぽい。人間の使う武器と同じで振るスピードも大差ない。が、防御力はギガースパンダよりも上。

少なくともこの迷宮で戦ったどのモンスターよりも強敵なのは間違いないさそうだ。

「レスティアナさん。こいつらを倒すいい方法とかないんですか？」

俺はハルバードを装備したアイアンナイトを両断しながらレス
テナさんの傍に寄ると尋ねた。

どう見てもアイアンナイトは50体以上いる。

このまま戦い続けたらこっちが不利になるのは目に見えていた。

「あなたは馬鹿ですか？ 群れを倒すときは群れの頭を潰せばいいに決まっているじゃないですか」

いつも通りに人のことを傷つける言葉を口にしてくるが、いつも
の余裕はなさそうだった。

さすがにこれだけの数を相手取ったらレステナさんでもきつ
いのだろう。

「頭……ってことは、じじいか！」

「あなたは馬鹿ですか？」

また言われた……

「あれはあくまで群れの頭に指示を出しただけです。アイアンナイ
トの集団のボスはジェネラルに決まっています」

「ジェネラル？」

よくよく見てみれば、確かにそれらしいのがいた。

1体だけ襲い掛かってくるアイアンナイトたちから離れている、
一際豪華な装飾のなされた鎧だ。

つてか、兜に角つけて真っ赤なのはどどういうことだ？

普通のアイアンナイトだって重装備の鎧とは思えないくらい速い
つてのに、3倍速く動かれたら死ぬる……

それ以前に、あそこまでたどり着けるかどうかすら疑問だ。

すでに10体近くを倒しているが、さっきの数と比べてみてもほ
とんど減っているように見えない。

さすがに、倒した先から再生や新しいアイアンナイトが生み出さ
れているようなことはなさそうだけど、圧倒的なまでの数の差は覆
しようがなかった。

「レスティアナさんの弓矢であいつを倒せないの？」

「馬鹿ですね」

断定された……

「たとえば、ジェネラルを狙って矢を放ったとしても、他のナイトが身を挺してかばいます。いえ、それ以前にこの距離だったら避けられるでしょう」

距離はざっと50メートルってところか。

さすがに銃弾ほどじゃなくても、レスティアんさんの矢はかなりの速さだ。

それを回避できるってのはなかなかのもんだと思う。

やっぱ、3倍の速さで動くのか？

あの鎧の中は赤い……

「うおー！」

やばい。よそ見してる場合じゃない。

このままだと死ぬる。

というか、さっきからこんなんばっかだ。

なんとかこの状況を打開すればもう少し落ち着けるんだろっけど

……

そのためにはあのジェネラルを倒さなくちゃいけないってことだ
る？

そのためにはアイアンナイトの大群を何とかしなくちゃいけない。

でも、そうするのはキツイから、一点突破でまずはジェネラルか
らってどろどろ巡りだ。

「どろすりゃいいんだ？」

今度は油断しない。

迫りくるアイアンナイトの攻撃を手甲で受け止め、片手で握った
バスタレイドで真つ二つにしてやる。

さらに俺の隙を狙うように別のアイアンナイトが迫りくるが、そ
いつはスクルドの突撃で吹っ飛んだ。

ん？

なにか今おかしくなかったか？

アイアンナイトの胴体部分にはスクルドが通り抜けた風穴が開い
ており、1度に貫通された3体ぐらいのアイアンナイトが同時に崩
れ落ちる。

縦横無尽にアイアンナイトの中を駆け回るスクルドの姿は、ボス
猪から俺を救ってくれた時のそれだった。

毛は逆立ち、白っぽい光のようなものにその体が包まれている。

お前、その技は使えなかったんじゃないのか？

今まで俺に嘘をついていたのか？

ひどいじゃないか！

だけど、これはチャンスだ。

間違いなく、誰がなんと言おうと、絶対にチャンスなんだ。

今のスクルドは、アイアンナイトの体と言う障害物があっても、そんなものはすべて通り抜けてジェネラルの下にたどり着ける。

ジェネラルだって結局はこいつらと同じ鉄の鎧だ。

スクルドの突撃で貫通できるはず。たぶん。

「よし、スクルド。そのままあのジェネラルをぶっ飛ばせ！」

「キュイ？」

え、お前何か言った？ みたいな感じで立ち止まるなよ。

そしてかわいらしく首を傾げるなよ。

って！

「スクルド！」

「クレイ様！」

俺はスクルドが止まった瞬間を狙いましたように矢が放たれたのを見た。

スクルドは俺に気がとられていて動かない。そして、気づいていない。

自分でも気づかぬうちにバスタレイドを渾身の力を込めて投げた。

俺の狙った通りにバスタレイドはスクルドの盾になる位置に突き刺さったのだが、問題はその先だ。

俺には武器がなくなった。

そして何より、バスタレイドが手を離れたおかげで敵の攻撃を自動で察知する剣の力がなくなったってことだ。

迷宮に入った時のレベルは5だぜ？

いくらパンダやらを倒してレベルが上がっていたとしても、本来は下階層レベルのモンスターと戦えないほどにレベルが低い俺だ。

実戦経験だっってほんの短い間にたったの数度。

そんな俺が、バスタレイドを持って百戦錬磨のような身のこなしをしていて苦戦するような相手に倒せるか？

否。倒せないとしても、攻撃を避けることができるか？

答えは簡単だ。

「キユイ！」

「!?!」

アイアンナイトの突き出したランスが俺の体を貫いた。

24話 お別れみたいです（後書き）

まず最初に、ごめんなさい。

理由はいろいろですが、迷宮の謎が解明されませんでした。

きっちり迷宮の説明を入れると、普段の3倍くらいの量になりそうだったので、仕方ないのでここで一度区切ります。

と言っわけで、迷宮の謎解明は27話までお預けです。

ついでに、いつもより遅くなっすんませんでした。

25話 迷宮はなくなったみたいですよ

俺の名前は獅子王ガイ。勇気あるGGGの隊員……ではない。ただの元高校生で異世界に召喚された冒険者いや、一応は勇者らしい。

命の危険が付きまとうファンタジー世界に召喚されてしまった俺は、どうやら死んでしまったらしい。

だって、いくら鎧を着ているからって心臓をランスで一突きだぜ？

モンスンのランスみたいなかさのランスで突かれたら鋼の鎧だってさすがに耐えられるもんじゃない。

自分でも心臓のあたりを貫かれたのは理解したし、間違いなく自分の体が冷たくなっていく感覚も感じた。

だけど、なのに、そうだっていうのに、なんで俺は生きているんだ？

足はある。

体だって半透明になっていない。

もしかして、これが死後の世界ってやつか？

それにしても、三途の川もきれいなお花畑も見当たらない。

というか、何も無い。

「そりゃそうよ。死んでないもん」

誰だ？

どこからともなく声が聞こえたけど、それらしい人影はない。

やっぱり、なにも見当たらない。

「あ、先に自己紹介しとくわね。私、リンフィア。まあ、神様なんて仕事をやってるの。スリーサイズは教えてもいいけど、体重はヒ・ミ・ツ？」

なんなんだろう。この声だけを聴いていると痛い人にしか思えないのは。

「ちよつとお！ 誰が痛い人よ！ あ、もしかして居たい人？ そんなに私と一緒に居たいの？」

たぶん馬鹿だ。

「馬鹿じゃないわよ！」

というか、なんで俺は声を出してないのに、こいつは俺の考えることがわかるんだろう。

「だから、私は神様なの。あなたみたいな、人間の考えることなんて、簡単にわかつちやうのよ」

インチキ霊媒師とか、インチキ超能力者みたいな言い分だな。

「インチキじゃないわよ！ というか、インチキ神様ってなに!？」

そんなの俺が知りたい。

でも、無理になって否定するところが怪しいな。

「ちょっとお。そんなに私のこと疑ってるの?」

信じられる要素がないからな。

「もう。仕方ないわね。あなたの名前は獅子王ガイ」

そんなのはいくらでも調べようがある。

「そうね。あなたが生まれたのは地球の日本。生年月日は8月18日。あら、獅子座ね」

……調べられる。たぶん。

「初恋の相手は幼稚園の頃担任だったうつ」

わかったやめろ。

お前が神だと認めよう。

「あら、残念」

それで、その神様が俺に何の用だ？

ランスで心臓貫かれたし、死ぬと思うんだけど。

「でも、死んでないわ」

なんで？

「なんでも」

意味が分かん。

「わかんなくていいのよ。まあ、あんたは主人公に選ばれたから」

主人公？

「そう。主人公が何もかも知ってたら面白くないでしょ？」

やっぱり、意味が分かんないんだけど。

「ふふ。いつか元の世界に戻るために戦い続ける勇者。そして訪れる愛する人たちとの別れ。おもしろいじゃない」

まあ、そういうった物語がおもしろいってのには同感だけど、俺が主人公に選ばれる理由がわからない。

「そうね、だいたいは名前とか性格とかで選んでるんだけどね。あなたの場合、選んだ理由は」

名前だな。

「 正解」

つまり、この世界に召喚された俺たち勇者は、お前の考える物語の主人公なわけだ。

「ちがうわよ」

え？

「主人公はあなただけ。他の勇者たちは世界に呼ばれただけの人間。あなただけが特別な」

ぜんぜんうれしくないな。

というか、あんたの娯楽のためだけに俺は呼ばれたってことだろ？

「それも違う」

はあ？

「私は、この世界に呼び出された人間の中から主人公を決めるだけ。それ以前もその先もすべては主人公しだい」

つまり、俺みたいな人間の人生を眺めて、物語として楽しむってことか？

「まあ、だいたい正解ね」

そいつの人生を眺めて楽しむってことは、手助けとかはしないわけだ。

「そ。まあ、主人公だし、ちょっとだけ依怙彘貞はするけどね」

依怙彘貞？

「ヒ・ミ・ツ。まあ、あとでギルドカードでも見ればわかるわよ」

確認しておきたいんだけど、俺は何人目だ？

「？」

主人公を選ぶ基準がすでにあつて、あなたの口ぶりだと、俺以外を選んだことがあるようにも聞こえた。

だったら、俺より前の主人公になった人間がいるんだろ？

そいつは地球に帰れたのか？

「ふふ、なるほどね。だけど、ヒ・ミ・ツ。さっきも言ったけど、主人公がいろいろ知っていると面白くないでしょ？」

わかんないぜ？

もしかしたら、帰れるって希望を持つことでより一層頑張るかも
しれない。

「でも、ダメ。私は楽しみたいのよ」

最低だな、神様ってやつは。

「知らなかったの？」

俺の境遇を考えれば、最低ってのはもともとだったな。

「そゆこと」

にしても、どう考えても心臓にランスが突き刺さったんだから、俺は死んだんだろ？

それを今更主人公だからとか言われてもどうしようもない。

どうする気だ？

「だから、言ったじゃない。死んでないって。今こうしてはなしてるのは、そうね……特別サービスってやつかしら？」

なんで疑問形なんだよ。

「さあ？ そろそろ時間かしら。じゃあね」

ちょっと待て、おい！

俺は静かに目を開いた。

目に入るのは倒れる前に見た、迷宮の天井。

何も変わっていない景色。

どういうことだ？

俺はゆっくりと立ち上がると、自分の体がどうなっているのか確かめようと意識を巡らせる。

地面を踏みつける感触も、剣を握っている手の感覚もすべてが何一つ変わらず、俺が生きていると教えてくれた。

鎧も、ランスで貫かれた部分に穴が開いているのに、俺の体には傷一つない。

立ち上がった俺のことに気が付いたのか、スクルドも、レスティアナさんも爺も、驚いたような顔でこっちを見ている。

というか、さっきよりもアイアンナイトの数が減っている気がするのなんなんだ？

俺が倒れてからさらに戦いが続いたんだろうか？

だとしたら、俺はどのくらい長い間倒れていたんだ？

そもそも、なんで俺は生き返ったんだ？

何もわからない。

とりあえず状況を確認めようとあたりを見回してみると、アイアンナイトが12体、ジェネラルが1体に爺。

あれだけいたアイアンナイトたちをスクルドとレスティアナさんはたったの2人でこれだけ倒したって言うのか。すごいな。

ただ、無傷でこれだけのことが出来たわけじゃない。

レスティアナさんは額から血を流しているし、スクルドだって見るからに弱ってきている。

起きたんだし俺も手伝わなきゃな。

って、武器がない。

ああ、そうか。そう言えば、スクルドを守るために剣は投げたんだっけ？

俺が倒れた時と変わらずに地面に突き刺さっているバスタレイドのもとまで歩いていくと、俺はそれを無造作に引き抜いた。

この状況だったら、速攻でジェネラル倒した方がいいのか？

でも、ジェネラルの強さがわからない以上、長引いた場合にはレスティアナさんたちが危ない。

12体ぐらいならそんなに時間もかからないで倒せるだろうし、

先に倒すのはアイアンナイトだろうな。

走りだし、剣の動きに合わせて……合わせて？

剣は自ら動こうとしない。でも、アイアンナイトとの距離はほんのわずかな間になくなり、バスタレイドを振るった後には真っ二つになっていた。

なんでだろう。

剣は動こうとしないのになぜか体が勝手に動く。

いや、俺の意志でアイアンナイトを倒せるだけの動きができる。

残りの数も少なくなったアイアンナイトが3体同時に俺に襲い掛かってきても、動きが遅い。

アイアンナイトが振るう剣も、こちらに突き出されてくるランスも、少し離れた距離から放たれた矢も、そのすべてが遅い。

スローモーションとは言わないけれど、さっきまでやっと線ととらえていたアイアンナイトの攻撃の軌跡がはつきりと理解できる。

俺は、ランスと剣の軌道を少しだけずらして同士討ちをさせると、眼前まで迫っていた矢を手でつかんだ。

「なんだろ、この気分」

俺はさらに迫ってきたアイアンナイト2体を切り伏せて、レスティアナさんに歩み寄った。

「レスティアナさん、大丈夫？」

「え、ええ……それよりも、なんであなたが生きてるんですか!？」

珍しくレスティアナさんが取り乱している。

そりゃそうか、明らかに致命傷の傷を受けた人間が、何事もなかったように動いてるんだから。

「いや、わかんない。むしろ俺が知りたいくらいだ」

倒れていた時の記憶はある。

倒れる前の記憶じゃない。倒れた後の俺が起き上がるまでの間、その記憶はある。

だけど、それがなんで俺が生きていると言う結果につながるのかわからない。

レスティアナさんに聞いてみたい気もするけど、とりあえず後にした方がいいだろう。

「キユイ！」

スクルドが俺の肩に飛び乗って頬をすりよせてくる

そうか、お前も心配してくれたんだな。

まあ、レスティアナさんですら多少は心配してくれていたみたいだし、スクルドだったらなおさらか。

「ごめんな、スクルド。心配させちまって」

「キユイ！」

さて、スクルドにも謝ったし、残りの7体とジェネラルを倒して迷宮の調査を始めよう。

剣を構えて襲いくるアイアンナイトを両断し、ハルバードで突きかかってきたアイアンナイトは、ハルバードに横から蹴りを入れて距離を詰める。

下から逆袈裟の形でアイアンナイトを切り伏せると、死角から迫ってきた剣の一撃を、腰から抜いたグルカナイフで受ける。

俺の動きが一瞬固まった瞬間を狙って襲い掛かってきたアイアンナイトもいたのだが、俺の肩から跳躍したスクルドがそいつの体を貫いたおかげで、その場で崩れ落ちていた。

即座にグルカナイフで剣を受け止めていたアイアンナイトの体にバスタレイドを突き刺し、矢を放とうとしていたやつには、グルカナイフを投げつけてやる。

うまい具合に兜にナイフが突き刺さり、矢はあらぬ方向へと飛んでいく。

残りは2体。と、思ったのだが、すでにレスティアナさんが倒し終えていた。さすがだ。

「その動きは、なんですか？」

レスティアナさんが驚いたように俺を見ている。

驚くのも無理はない。

今の俺の動きは、さっきまでの剣に任せた動きではなく、それよりもさらに数段早く、それでいて正確に、敵を圧倒する動きをしていた。

自分でも不思議なことこの上ないけど、いきなり武術の達人になっってしまったような気分だ。

今になって思うと、剣に任せていたあの動きは、ところどころに隙や無駄な動きがあった。

もっとレベルが上がって強くなれば、今の動きだってダメなところは見つかるのかもしれないけれど、今の俺には十分すぎるほどに

高度なレベルだ。

急にレベルが上がった。

なんでだ？

これが、あいつの言ったた依怙贖罪なのか？

あれだ。

考えるのは後にしよう。

とりあえず今やらなくちゃいけないことをやっておかないといけない。

俺は、バスタレイドを握りなおすと、剣を引き抜いたジェネラルと正面から対峙した。

一騎打ちをやつた。

スクルドも俺の肩から降りてこちらを見つめている。

ここで負けたりしたらかつこ悪いよな。

俺は、思わず苦笑しながらも駆け出した。

ジェネラルの方もこちらへ走っている。

ちょうど、最初に対峙していた場所の中央あたりで俺たちはお互いの剣をぶつけ合った。

最初の心配は杞憂だったな。

赤くて角付きだからって、なんでもかんでも3倍速くなるわけじゃないみたいだ。

ただ、単純な戦闘能力はアイアンナイトよりも上だ。

避けられないような速さじゃないけど、アイアンナイトの攻撃みにたいにゆっくりとした動きには見えない。

それにしても、こいつの動きとアイアンナイトの動きで速さが違いすぎないか？

「うち、くそ！」

攻撃は回避できる。

だけど、俺の攻撃だって相手には避けられている。

攻撃が雑になってるのか？

だけど、そんなに余裕があるわけでもない以上、ある程度雑になっってしまうのも仕方ない。

ジェネラルの攻撃は繊細さとかそんなものを感じられるようなものではないけど、鋭く、それでいて力強い。

アイアンナイト5体を同時に相手取るより、こいつを相手にする方が圧倒的に面倒だ。

これは、ジェネラルを先に狙ったりしないで正解だったみたいだな。

ジェネラルとの戦いが始まって5分以上が経過したが、一向に勝負がつく気配はない。

モンスターでも動物みたいなやつは体力とかの問題があるんだろうけど、こいつはどうなんだ？

鎧型の生き物なのか、鎧に憑依した幽霊みたいなやつなのか。

前者だったら、そろそろ動きが鈍くなってもいいと思うけど、後者だったら面倒だ。

少なくともこっちの体力は有限である以上は早めにけりをつけないとやばい。

もう5分くらいなら問題ないだろうけど、それ以上になるとこっちの動きが鈍くなりそうだ。

ジェネラルの一撃をバスタレイドで受けながら考える。

グルカナイフを持っていたら、防御に使えるからバスタレイドで攻撃って形にできたんだろうけど、生憎グルカナイフはさっきのアイアンナイトの頭に突き刺さったままだ。

手甲は何度も防御に使っているせいでそろそろ壊れそうだし、あ

んまり当てにできない。

というか、手甲で防御したら手甲を伝って別の場所を狙った突きを放ってくるから、あんまり防御には使いたくない。

バスタレイドを横に薙ぎ払って、胴を狙うがジェネラルは一步下がって攻撃を回避する。

上段から剣を振り下ろしてくるけど、返す刀でそれを防ぐ。

……ちよつと、いい攻撃思いついたかも。

俺は、バスタレイドの刃を左手で握り、渾身の力を込めてジェネラルを押し離す。

後ろに押し下げられてたたらを踏むジェネラルの胴を狙って剣を振るう。

さつきとほとんど変わらない一撃だ。

案の定ジェネラルはスウェーバックのような形で俺の一撃を回避した。

ここだ。

俺は剣を止めそのまま体ごと前に突き出る。

全力で振るった剣を途中で止めたので、腕が引きちぎれるような痛みがあったが、そんなことは無視する。

俺が剣を止めたのはジェネラルの丁度目の前。

このまま剣を突き出せば、答えは簡単だ。

限界まで上体を逸らしていたジェネラルがまっすぐと伸びてくる剣を避けられるはずがない。

これ以上無理に下がろうとすれば、バランスを崩して倒れるほかにない。

そうなたらそれでよし、倒れた相手を押さえつけて剣を振り下ろせばいい。

倒れないようにバランスを取っていれば……

バスタレイドがジェネラルの胴体に突き刺さった。

「う、おおりやあああ！」

体をひねるようにして突き刺さった剣を横に押し込む。

バスタレイドがジェネラルの横腹を引き裂いた。

そして、俺の体は限界までひねられている。

俺は瞬時にバスタレイドを両手で握り、ひねった反動を利用して大きくバスタレイドを振るう。

周りから見てみれば、野球のバットを振るっているような形にも見えたと思う。

俺の振るったバスタレイドは、見事なまでにジェネラルの頭部をとらえ、両断した。

あれが野球ボールならホームランだろう。

……

「あ、これで終わりか」

次の攻撃が来ると思って思わず構え直していた。

ジェネラルの頭は上半分が地面に落ちている。

この状態で反撃してくれば、ホラー以外の何物でもない。

いや、そもそも中身のない鎧が勝手に動いている時点でホラーか。

「あ、ああ……」

ジェネラルの体が崩れ落ちるのを目にした爺は、この世の終わりのような顔をしてその場に膝をついた。

爺が泣いている。

号泣だ。

ぶっっちゃけ気持ち悪い。

可愛い女の子とかだったら慰めてあげたり……できないな、たぶん俺じゃあおろおろして終わりだろう。

そう言えば、爺の言う通りならこのジェネラルがこの迷宮のボスに当たってることだろうけど、そいつは今、倒された。

つまり、迷宮がクリアされた。

と言うことは……迷宮がなくなる？

やばいんじゃないのか？

崩れ落ちるとかだったら中にいる俺たちだって潰れて死ぬだろ。

逃げなきゃやばいかもしれない。

と、思っていたのだが、その心配は不要だった。

気づけば俺は草原に立っていて、あたりを見回すと迷宮の中にいた冒険者らしい人たちが不思議そうな顔をして立っている。

スクルドやレスティアナさんだっけすぐ近くにいた。

よかった。

迷宮をクリアしたら地上へ強制転送されるらしい。

徐々に事態を把握できてきたらしい冒険者たちの反応は様々だった。

嘆く者、喜ぶ者、いまだに不思議そうな顔をしている者。

人数的には金稼ぎに有効な迷宮がなくなって嘆いている人が多いみたいだ。

申し訳ない。

ただ俺は、いつの間にか手に握られていた鍵と、いつの間にか目の前に現れていた宝箱のようなものを、前にして不思議な顔をしているほかなかった。

25話 迷宮はなくなつたみたいです(後書き)

いろいろ突っ込みどころと謎がいっぱいなの26話でした。

最初の神様(?)に関しては、まあたぶん重要キャラクターでしょう。

何で生きてんの? とか、なんでいきなり強くなつてんの? とか、依怙贖つて何したの? とか、なんで作者は生きてるの? とかの疑問はだいたい次回にご説明します。

この中に一つだけ次回紹介できないことが混じっています。

ということ、たまには閑話なんかを書いてみようと思いますので、正解者に閑話で書いてほしいリクエスト権を差し上げます。よろしければどれが次回説明できないことなのか予想してみてください。

- 1、主人公はなぜ無事だったか
- 2、なんでいきなり強くなったのか
- 3、依怙贖とは何がされたか
- 4、なぜ作者は生きているのか

感想に番号を書いて奮ってご応募ください。

1人もいないと悲しいので、誰かお願いします。

正解者多数の場合は、作者が勝手にあみだくじを作って抽選とさせていただきます。

26話 なんだか強くなったみたいですよ

(略)

迷宮が消滅したのは夕方。

たぶん、迷宮攻略の特典が何かで突然現れたらしい宝箱と、抜け殻のようになった爺を持って移動することになった。

さすがに、スクルドやレスティアナさんも怪我をしていたし、その足でお城に説明しに行くのはあれだったので、とりあえずギルドで怪我の手当てをするついでに、キューマさんをお願いして報告は後日にしてもらったこととした。

ざっとキューマさんに事情を話して、爺はギルドの方で保護と言うか監禁と言うかという対処をもらった。

迷宮攻略と言う大仕事が終わった俺は、家に帰ってすぐに泥のように眠った。

そして翌日。

アリアさんはいつもどおりギルドへ向かい、レスティアナさんは部屋の中で何やらやっている様子。

あぐらをかいている俺の膝の中ではスクルドが丸くなっている。

俺は何をしているかと言うと、宝箱を前にいろいろと考えている。

迷宮を攻略できたのはレスティアナさんのおかげでもあるし、一緒に中身を確認してどうするかを話し合おうとしたのだけど、レスティアナさんはいらぬの一点張りだった。

中身次第だけど、売れるものだったら売って売り上げの半分を渡そうとは思っているのだが、なかなか箱を開ける勇気がない。

トラップとかだったらどうしよう。

「悩んでも仕方ないか」

いつまでもこのままでいるわけにはいかない。

午後になれば、お城へ行かないといけないし。

鍵穴に昨日いつの間にか俺の手の中にあつた鍵を差し込んでゆっくりと回す。

カチンという音が鳴ったかと思えば、あっさりと箱は開かれた。

中を覗き込んでみれば、袋が3つにナイフが1本、猫か何かにつけるような首輪、そしてこれはサークレットって言えばいいのか？

なんとなく、孫悟空が頭につけてるやつに何となく似ている。

あれって確か、呪文を唱えると頭が割れそうになるほど痛むらしい。

指輪のこともあるから、こつこつアイテムを考えなしに装備するのはやめよう。怖いし。

他のやつは、なんかあれだな。

首輪はスクルドのサイズにどう見てもぴったりだし、ナイフは緑を基調とする鞆に収まっていて、見るからにエルフとかが使いそうな感じだ。

3つ並んだ小さな袋の中身を確認すると、中身はすべて10000 B金貨が10枚入っていた。

どう見ても、3人……正確には2人と1匹で分けられる中身だよ
ね。

俺の心配は、ある意味杞憂だったわけだ。

ああ、心配して損した。

というか、なんで俺のだけこんな微妙そうなやつなんだよ……

とりあえず、レスティアナさんの分は箱の中に残しておいて、スクルドの方だよな。

スクルドは、神獣だ。

つまりは、獣の神様だ。

そんなスクルドに首輪なんてつけていいのか？

リード付でもないから、そんなに屈辱的とかじゃないだろうけど、やっぱり首輪をつけることは動物的には主従とかそういう感じの問題に発展するんじゃないのか？

というか、スクルドが許可してもレスティアナさんが見つけたら、めっちゃめっちゃ怒られそうだしな……

逆に、スクルドの分の報酬があるのに、スクルドに渡してなくてレスティアナさんは怒りそうだけど……

踏んだり蹴ったりじゃないか。

片手に首輪を持ってぼんやりしながら、膝の上のスクルドをなでる。

相棒だけどペット。

ペットだけど相棒。

ペットなら、首輪ぐらいつけた方がいいのはこの世界でもいっしょなのか？

「キユイ？」

「あ、悪い。起こしたか？」

「キユイ」

スクルドは、気にするなどとも言つように俺の手を受け入れている。

はあ、癒される。

この家では、女性陣に散々な目に遭わされてるけど、お前だけは俺の味方だよな。

「キユ？」

「ん？ ああ、これか？ 昨日の宝箱の中から出てきたんだよ。なんか、俺たち全員に合わせたような装備とかが入ってたんだけど…
…お前これ付けるか？」

「キユイツ！」

「ご機嫌ですね。」

自分から飛びついてきて、俺の手から首輪を奪い取ると、早くつけるとも言いたげにこっちに首輪を突き出してくる。

「はいはい」

俺はスクルドの口から首輪を受け取ると、ベルト型の首輪のバックル部分を外してスクルドの首輪に撒きつけてやる。

バックルを戻すときに毛を挟んだりすると、スクルドが痛い思いをするから慎重に。

ん。大丈夫みたいだな。

「よし、できたぞ」

「キユイ！」

ああ、ああ。嬉しそうに走り回ってまあ。

鏡の前まで行って、首輪の確認までして……まるでネックレスを贈られた女の子だな。

……そう言えば、あいつは女の子だったな。忘れてた。

「さて、問題は俺の方だけど……」

なんとなく、このサークレットからは指輪と同じ気配を感じる。

スクルドの首輪はそんな変な気配みたいなものは感じなかったから、安心してつけたし、スクルド本人……人？ まあいい。

スクルド自身も望んでいたからつけた。

だけど俺のこのサークレットが、指輪と同じような装備だったら？

そして、俺がサークレットに認められなかったら？

頭がボンツ！ って……怖っ！

絶対死ぬ。ていうか、死ななかつたら人間じゃない。

というわけで、とりあえずは封印だな。

どっか、適当なところにしてしまっておこう。

後はそうだな……迷宮で見た夢であるの意味の分からん女がギルドカードを確認しろとか言ってたな。

迷宮でレベルも上がっただろうし、冒険者として確認しておくのは大事だよな。

「オープン、本人情報」

Name: 獅子王 ガイ > Gai Shishioh < Lv: 15

Race: 人族

Age: 17

Job: 冒険者 勇者

Title: Tamer Hero Labyrinthmaster

Ability

格闘：Lv・12
剣術：Lv・47
槍術：Lv・2
斧術：Lv・9
弓術：Lv・0
魔法：Lv・0

Passive：神獣の加護 運命神の加護 神獣の主 幸運Lv・
- - - ???の加護Lv・ - - - ???の呪いLv・ - - -
冒険者Lv・17 肉体強化Lv・21 剣士Lv・32
Action：神獣同化 超速再生

>skill<>equipment<>スキルド<

………なんか、めっちゃめっちゃすごいことになってる。

なんだこの、スキルのレベル。

前回見たときは2桁なんて俺の年齢ぐらいだったんだぞ？

それが、なんで40とか、30とかになるんだよ。

しかも、完全に素の状態のレベルをスキルのレベルが通り越して
るし……

というか、加護が増えてる！？

前は????が2つだったのに、神獣……スキルだな。

スクルドの加護に、運命神？ これは、なんだかわかんないけど、運命神の加護。も1つおまけに????の加護……

3人目？

3人目の神様にも目をつけられたのか、俺は……

もしかしたら、運命神か、????が昨日の神様（仮）なのかもしれないな。

依怙贖つてのは加護をするってことだと思っただけ。

というか、ギルドカードを見ればわかるって言うてた以上、これ以外にはありえないよな。

でも、加護ってどんな得があるんだ？

それにしても、ギルドカードの変化に突っ込みどころが多すぎて、これ以上どうやって突っ込めばいいのかわかんねえ……

とりあえず、あれだ。特記事項欄が更新されてるってことは、スキルってのが見れるってことだよな……

1つページをもどして、特記事項からskillの欄を開く。

どうやら、passiveは見れないみたいだけど、actionの方は見れるみたいだな。

> 神獣同化 < 3 / 3

主従関係にある神獣のスキルを使用できる。

> 超速再生 < . . . / . . .

傷を回復する。

……意味が分からん。

いや、神獣同化はなんとなくわかった。

俺の動きが急に早くなったりするあれは、スクルドの白っぽい光に包まれて突撃するあれが俺にも使えたからってこと……だと思っ

思い返してみれば、アリアさんを助けるときに使ったような気もするけど……

なんであの時も使えたんだ？

あの時には、このスキル使えなかったよな……

問題なのは超速再生だ。

傷を回復する。

って、まんまじゃねえかよ。

スキル名見ればわかるつつつの。

というか、actionスキルのくせになんで使用回数とかの明記がねえんだよ。

不親切にもほどがあるだろうが。

無限に使えるならactionじゃなくて、passiveの方だろうが。

はあはあ……疲れる。

「さっきから、ぶつぶつぶつぶつとうるさいのですが、何をしていますか？」

「あ、レスティアナさん。悪い。ちょっと、いろいろわかんないことがあってさ……」

どうやら、俺の突込みはちょっと口から洩れていたらしい。

不機嫌そうな表情で、レスティアナさんが部屋らか出てきてしまった。反省。

「わからないことですか？」

「うん。実は、昨日の戦いで感覚が変わったと言っか……ほんと、いろいろあってわかんないことだらけなんだけど。とりあえず、疑問なのは、俺は倒れただろ？」

「そうですね。あのまま死んでくれたらよかったですけど」

……相変わらず毒舌ですね。

まあ、確かに自分でも死んだと思っていたわけだけど。

「まあ、レスティアナさんの希望はとにかく。俺としてもあの時は死んだと思ってたんだよ」

「だったら、死ねばいいじゃないですか」

「真顔で死ねとか言うのやめてもらえませんか!？」

真剣と書いて、本気というルビを振り、さらに小さくマジと書いてあるような表情で言われると本当に怖いんだ。

レスティアナさんは美人だし、美人の冷たさと言うかそう言ったものは、なおさら怖い。

「とにかく。なんでか知らないんだけど、俺は生き返った」

「たしかに、それは私も疑問に思っていました。私たちエルフは治癒系の魔法を得意としていますが、あそこまで見事に心臓を一突きにされた人間を生き返らせるような魔法は存在しません」

「だろ? それに、生き返った後も問題なんだよ」

「だったら、死ねば解決しますね」

「だから、死ねって言うな！」

しっこい……

本気ではっ倒したくなってきた……無理か。

レベル的にレスティアナさんの方が圧倒的に上だし、スクルドは今鏡を見るのに夢中。

前回のようなハンデがない以上、俺の勝ち目は薄そうだ。

「毎回毎回水を差されても進まないから、続けるけど。生き返った後の戦いで、いきなりアイアンナイトの動きが遅くなったんだよ」

「そうですね。それは、なぜだか予想はつきますね」

「ほんとか？」

「はい」

「なんでだ？」

「なぜ私が、説明しないといけないんですか？」

「え？」

「……冗談です。寝たからだと思います」

「は？」

「間抜けな顔はやめてください。不愉快です。あなたが倒れていた間、気を失っていたか、本当に死んでいたのかはわかりませんが、世界はそれを寝ていたと判断したと言っていることだと思います」

「……寝たら強くなるのか？」

そんなんだつたら、この世界は強者だらけだろう。

そもそも、この世界に来てから何度となく眠っているけど、あんな感覚は一度も味わってない。

「この世界にはもともとあなたたちの世界と違って魔法は存在しました。ただし、レベルやスキルがもともとあったわけではありませんん」

「はあ？」

あのファンタジー設定がもともとなかった？

だつたら、なんでそんなもんが今はあるって言うんだ。

「あなた方、勇者が召喚されてからこの世界にスキルやレベルと言うものがシステムとして誕生しました。もともと存在しなかったものが、突然現れたので当初は混乱を招きましたが、次第に利便性がわかったので、定着したんです」

「へえ」

携帯とかインターネットが普及したのとか、そんな感じか？

いや、それよりももっと規模の大きなものだろう。

なにせ、世界の理そのものが変化したようなもんだ。1年や2年や10年じゃあ混乱はおさまらない……か？

「だいたいそれが1000年ほど前の話です」

……1000年……そりゃ、今になったら普通のことだよな。

当初のことを知ってるのなんてそれこそエルフぐらい……もしかして、レスティアナさんもその当時から生きてるのか？

だったら、自分のレベルとか知らなかったのも納得できるけど……

「そして、発見されたのが、スキルはレベルが上がったとしても実際に効果が出るのは、当人が眠った後になるということですよ」

「……眠っている間に、体がスキルを使えるように変化してるとかそんな感じか？」

「!？」

「何をそんなに驚いた顔をしてるんだよ」

「……まさか、あなたにそんなことが理解できる頭があるとは思いませんでした」

「失礼だな、おい」

まったく。こいつは俺のことをなんだと思ってるんだ。

「そういうわけで、あなたもあの迷宮でレベルが上がったと言うことでしょう。それがあの死んでいる時に、世界はあなたが眠っていると判断したんだと思いますよ」

そんなに死んでいるを強調しないでください。

でも、そう言うことが。

いきなり剣術とかのレベルが上がってるのは別にしても、レベルが上がった効果が倒れてる間にあったってことなら、一応納得できるな……

でも、1000歳(推定)のレスティアナさんでも死んだ人間が

生き返るような方法を知らないってことは、やっぱりあの神様（仮）が俺を生き返らせたってことじゃないのか？

本人は違うつて言ってたけど、本当のところなんてわかんないしなあ。

「それで、そろそろ時間ではないんですか？」

「なにが？」

「いえ、家にいるつもりなら私は構わないのですが」

そう言って、部屋に戻るつとするレスティアナさん。

……？

時計に目を向けると1時を過ぎていく。

城での報告予定は1時30分くらい。城まではおよそ30分かか
る。

って、いつの間にこんな時間に！？

やばい。急がないと。

俺は、鏡の前でいろいろなポーズをとっていたスクルドが肩に乗るのを確認し、バスタレイドを慌ててひつつかんで家を出た。

ギルドにある独房の中、ジ・ジークは抜け殻のように呆然としながら、小さな窓から差し込む日の光を浴びていた。

迷宮がなくなってから1日が過ぎた。

本来ならば、今頃も迷宮の中で将来につながる研究を続けているはずだった。

しかし今は、薄暗い独房の中で、ほんのわずかな光を浴びているだけの男に成り下がってしまった。

ジ・ジークは昨夜にだされた夕食も、今朝に出された朝食にも手を付けることはなかった。

生きている意味などない。

人には、必ずやらねばならぬことがあり、それを成すために人は生きる。

王であれば国を治めるため。

騎士であれば国を守るため。

役者であれば人々を魅せるため。

物書きであれば人々を楽しませるため。

吟遊詩人であれば人々に詩を伝えるため。

ジ・ジーにとっての成すべきことは、迷宮の謎を解き明かし、
宮廷魔法使いとなることであつた。

しかし、その夢もはやかなわない。

自分の成すべきことはなくなつてしまつた。いや、できなくなつてしまつた。

あの男のせいで。

あの男さえいなければ、何も問題はなかつた。

あの男さえいなければ、自分の未来には迷宮の謎を解明したと言
う、前人未到の偉業を成し遂げるといふ明るいものが待つていたと
言つのに。

すべてはあの男のせいだ。

あの男がこの世界に存在するせいだ。

その男を召喚したのが、自分自身であると言つのに、ジ・ジーの
心の中はそんな恨み言で満ち溢れていた。

次第に、呆然としていた瞳には憎悪と言つ感情が満ちていく。

殺したい。

恨めしい。

呪ってやる。

負の感情だけが、ジ・ジーを突き動かした。

そして、やはり運命の女神はジ・ジーに味方しているようだ。

「出る。これから、城に向かってもらおう」

ジ・ジーは看守に言われ、牢から出された。

城でどのようなことが待っているのかはわからなかったが、今はそんなことよりもあの男。獅子王ガイにどのような復讐をするのかということ、頭はいっぱいだった。

そんな男は城へと連れられて行く。

それがどのようなことになるのか、それを今知る者はどこにもいなかった。

26話 なんだか強くなったみたいです(後書き)

更新を見越して12時あたりに確認していた読者の皆様、ごめんなさい。

なかなか進まなくて更新できませんでした。

というわけで、あんまり進んでいない27話です。

早速ですが、正解発表。

- 1、なぜ主人公は無事か 詳細不明
- 2、なんでいきなり強くなったか レベルアップの効果が発揮できたから
- 3、依怙贖とは何がされたか 加護を授けられた
- 4、作者はなぜ生きているか それは読者を楽しませるためです ……物を投げないください。

というわけで、正解は1でした。

4なんてどこにあったか、わからなかった方は、sideout後のジ・ジの部分を読んでみてください物書き(作者)のことを書きましたw

というわけで、正解者は3名でした。うち、1名の方は辞退ということで、リクエスト権は、せっかくなので2人にプレゼントいたします。

希望は、できればメッセージボックスにてお願いします。

無理ならば、感想でもかまいません。

辞退される場合は、そのしるしをお伝え願います。

27話 お金持ちになれるみたいです

(略)

例のごとく城へ着くなりすぐに謁見の間に通された。

お姫様は玉座でいつも通りのお美しいお顔でこっちをまっすぐ見つめてくる。

うん、ちょっと度胸がついてきたかもしれない。

この状況になってもあたふたしなくなったのは、大きな進歩だ。

……と思う。

「では、報告を聞こうか」

「はい。結論から言うと、原因はわかりませんでした」

「知っておる」

そりゃあ、昨日キューマさんに話したことは伝わってるよな。

形式が大事だし行っただけだけど。

「しかし、迷宮を踏破したおかげで、根本的な問題は解決されたというだけで間違いはないな」

「はい」

……とうは、ってなんですか？ 党派？

「うむ。依頼の内容とは若干違うが、問題を解決したのは事実。成
功として問題はない」

「ありがとうございます」

あ。ありがたき幸せって言うんだっけ？

まあいいや。突っ込まれないし。

「さて。これからの話をする前に一つお前に頼むことがある」

「な、なんででしょうか？」

まあた、面倒なことを頼まれるのか？

今度は断ろう。

さすがに、今回の報酬を人質に断れないようにするつもりだって
言うのなら、こっちだって反論してやる。……本当だぞ。

う、嘘じゃないからな。

「そこに隠れているエルフに、殺気を放たぬように言ってほしい。しかし、あれはお主の連れであろう？　なぜ、あのような場所にいる」

へ？

セリル姫が指差したのはビルで言えば3階分くらいがふき抜けになっっている天井のあたり。

エルフってことは、レスティアナさんなんだろうけど、あんなところにいるのか？

というか、お姫様のくせに殺気とかわかんのか！？

俺なんて全然気づかないけど……

「……レスティアナさん。いるなら、降りてきてもらってもいいですか？」

「……………」

やっぱり、いないんじゃないのか？

返事なんて返ってくるはずないよな。

「ふむ。顔を合わせるつもりはないようだな。まあ、殺気を収めただけ良しとしよう」

全然わからん。

返事がなかったし、適当なこと言った恥ずかしさを紛らわすために言ってるわけじゃないよな……

「では、今回の報酬の話に移ろう」

「……あ、はい」

「先に言っておくが、正確に言えば、依頼は達成されていないとも言える」

まあ、迷宮からモンスターが溢れている原因の調査だったからな。

迷宮をクリアしたおかげで、迷宮はなくなったし、結果的にモンスターが溢れ出ることはなくなったから、今更原因はどうでもいいのかもしれないけど……

まさか、大国って言われてるバルデンフェルトが、そんな理由で報酬を値切ったりしないよな。

「しかし、根本的な原因を取り除いた事実と、今後予想された被害を抑えたという点からも十分な結果は残っている」

回りくどいな。

「よって、報酬は250万Bとする」

「はあ……250万………に、250万!？」

日本円にしたら……2億5千万円。

年末か、グリーンジャンボの1等に当たった額ぐらいあるし……

「不服か？」

「……すいませんが、俺には報酬として受け取るのに、この金額が少ないのか多いのかわかりません」

「そうだな。三井、もと冒険者のお前から教えてやれ」

「っは。……えっと、ガイ君。普通なら冒険者は迷宮を攻略することと報酬はもらえないよ。お金になるのは、出てくるモンスターの素材とか拾ったアイテムなんかを売って収入にするしかない」

はあ……でも、あの迷宮にアイテムなんて全然なかったですけど。

「今回は、国からの依頼ってことで報酬が発生したわけだけど、国から依頼を受けた場合の報酬の相場は、危険度にもよるけど10万Bから100万Bくらいだね。今回の依頼だったら、最高危険度の迷宮だったし、150万から200万Bくらいが妥当な線かな。まあ、僕の経験的にだけど」

つまり、250万は破格の報酬なわけですね。

「連れている契約獣を軽んじるわけではないが、人であらねばそこまで金を必要とすることもあるまい。お主の他にはあの、エルフの女以外に仲間はいないと聞いている。ならば、2人と1匹でこの額を十分にわけられよう」

「わかりました。ありがとうございます」

契約獣ってのはスクルドのことだろう。

他の人から見ると、こいつはそう言うポジションに見えるんだな……俺としては契約してる自覚なんてないけど。

とりあえず、セリル姫様の言う通りに分けるなら、100、100、50だけど、レスティアナさんがなんて言うか……

均等にわけるとも考えておいた方がいいかな。

「そう言えば、今回の迷宮での戦いで指輪は役に立ったのか？」

「っえ!？」

指輪ってあの、魔法の威力が上がるってやつですよ?

……全然役立たずだったなんて言っても大丈夫か?

「多少の傷を負ったところで、魔物さえ倒せばすぐに傷が癒えるのだ。いくらかは助けにもなっただろう」

「はい?」

傷が癒える?

それって、どういうことですか?

あの指輪の効果って魔法の威力向上じゃなかったのか?

「あの、すいません。あの指輪の効果って魔法威力の向上じゃなかったんですか?」

「? 何を言っている。渡したときにも説明しただろう。あの指輪は魔物を倒せば倒すほど魔力をため込み、装備者が傷を負えば、溜まった魔力から治癒に必要な分を消費して傷を癒すと」

「……すいません。全然聞いてませんでした」

「なに！？ では、あの指輪の由来も聞いていなかったと言っのか？」

「………はい。……あの、どういったものなんですか？」

「すいません。申し訳ないとは思っていますが、そんなあきれ顔をしてないでください。」

「あの指輪は、かつて賢人と言われた魔法使いが、迷宮に向かった際に治癒魔法を使えぬ代わりに、創り出したものだ。殺した魔物のすべてを魔力として吸収するために、エルフの秘術でさえもおよばぬ傷でさえたちどころに癒すことが出来る。一説によれば、死者でさえ蘇ったとも言われている」

「………あ、ああ！」

「これか。」

「これのおかげだったのか！？」

「あの時、ランスで心臓を突き刺されたときに、この指輪の力が働いたって言うのか！？」

「どうりで、神様（仮）が否定するはずだよ。」

神様（仮）本当に何もしてなかったんだから。

ん？ でも、そんなすごいアイテムを……なんで俺に？

「あの、説明はわかったんですけど。そんなすごいものをなんで俺に？ 自国の強い騎士とかに与えた方が、俺みたいな冒険者なんかに渡すよりも、よほど役に立つんじゃないですか？」

「ん？ まあな。しかし、お主がそれを付けた時にも言ったが、あの指輪に認められねば指が飛ぶ。これは一種の呪いであり、どんな治癒の魔法を使ったところで、治すことはできん」

……やっぱ、怖いなこの指輪。

「しかも、認められるのは10億もの人間に1人とも、その時を生きる人間の中で1人とも言われている。その指輪を創った本人ですらも、指がなくなったほどだからな。万が一にも我が国の騎士の指がなくなれば、そやつは騎士として使い物にならなくなる。そんな危ない賭けはできんよ。まあ、そんなものがなくとも我が国の騎士は優秀だからな」

……だつたら、俺の指はなくなってもよかつた、と？

しかも、さりげなくお国自慢まで……

「そうですね。まあ、おかげで私は命が救われたようですので、感謝するほかはないですが。本当にセリル姫様のおかげです、ありがとうございます」

「……命を救われた？ そんなにひどい傷を負ったのか？」

「はい。迷宮の最後にアイアンナイトの集団と戦うことになったのですが、その際ランスが胸を貫きました。なぜ無事だったのか疑問だったのですが、おかげで疑問が晴れました」

「……………」

あれ？

何をそんなに驚いた顔をしているんですか？

「あの、なにかおかしかったですか？」

「……………いや。お主はよほど運がいいようだな。さすがにあの指輪でも致命傷を治癒するには数千か、はたま数万か。途方もない数の魔物を倒す必要があるだろう。どうやら、前の持ち主が倒していた魔物の魔力が残されていたのだろうな。お主は、実に運がいい」

……………マジっすか？

そう何度も死にたくはないけど、これがあれば死ぬ心配はだいぶ

減るかと思っただけど、それでもないんだな……

というか、今回はお姫様の言うとおり、本当に運が良かったわけだ。

数万ものモンスターを倒すなんて、どんだけの時間がかかることやら……

そもそも、前の持ち主はそんなだけの数のモンスターを倒しておきながら、指輪の力を必要としないぐらい怪我をしてないってことだろ？

どんだけ強いんだよ……

「姫様、ちなみに前の指輪の所有者は誰だったんですか？」

「知らん」

「え？」

「私は、それを商人から買い取っただけだ。私個人の所有物だったからこそ、お主に報酬として渡すことも出来たんだがな」

そうか。

すごい強い人だったんだろうから、できたらちょっと会ってみたかったんだけどな……

まあ、わかんないもんはしょうがないか。

そこまで、会いたいわけでもないし。

「他に聞きたいことはあるのか？」

「いえ。とくには」

「そうか。悪いが、私にはこの後にもやるべきことがある。今回の件ではお主には礼を言う他はない。これは報酬を支払っているということは別の問題だ。何かあれば、いつでも訪ねてくるがよい」

「うは。ありがとうございます」

「うむ。報酬は額が額だからな。ギルドの方に届けておく」

「はい」

「そうだ。1つ尋ねるがよいか？」

「え？ あ、はい」

「この街を出る予定はあるか？」

「？ いえ。今のところはありません」

「そうか。では、今後も何か依頼があればお主を頼らせてもらおう」

「は、はい。ありがとうございます」

すげえ。

俺の知る限りでもバルデンフェルトはものすごい大国だ。

そこのお姫様ご用達の冒険者だなんて……ものすごい出世だな。

今回は十分な報酬も手に入ったし、しばらくのんびりできるだろう。

せっかくだから、魔法とか今まで知らなかったことの勉強でもしてみようかな。

とりあえず、決まってるのは、さんざん世話になってるアリアさんになにかうまいものでもご馳走しよう。

s i d e o u t

ガイが城を出たころ、謁見の間には新たな人間が呼び出されていた。

たった1日の間だけ亡国の宮廷魔法使いだった男、ジ・ジーである。

腕には魔力封じを兼ねた枷がつけられ、謁見の間の中央で無理や

りに跪かされている。

「お前が、迷宮の中にいた男だな」

「そうじゃ」

「ふむ」

こんな状況でも尊大な様子でいるジ・ジーをセリルは興味深そうに上から下へ舐めるように視線を這わせた。

騎士の中の幾人かは先ほどのジ・ジーの態度に顔をしかめたものもいる。

ガイはしゃべり方こそ王族に対するものではないが、セリルを敬おうとする意識は感じられる。加えて彼は、セリルが直々に仕事を依頼した客人でもある。

しかし、このジ・ジーは違う。

今回の事の真相を取り調べるために呼ばれた、罪人だ。

そんな男のセリルに対する態度には、狭量にならざるを得ない。

しかし、ここで手を出してしまえば、叱責されるのは騎士たち自身だ。

必死に剣にのびようとす腕を抑え、騎士たちはことの始終を見

守っている。

「迷宮でなにをしていた？」

「ふん。迷宮を研究しておっただけじゃ」

「ほう。迷宮を研究していたのか。なるほどな。では、お前は迷宮の最下層にいたということだな？」

「そうじゃよ。ただ、お主の言う迷宮の最下層とは違う」

「いまだ公表されていない、フロアボスのいる階よりも下の階にいた」

「フロア……なに！？ なぜ、お主がそれを……」

言葉の機先をとられたジ・ジーは驚きに目を見開いた。

いまだ、誰も到達していない。誰にも知られていない迷宮の謎を解き明かそうとしていた自分だけが知っているその場所を、目の前の女は知っていると言うのだ。

「なに、簡単な話だ。その場所での研究はすでに我が国で行われている。その場所で迷宮内の魔物の操作や、迷宮の構造を変えられると言うことも判明している」

「な、なに！？」

「その場所にお前がいた。そして、普通はありえないほどの魔物が迷宮からあふれ出す。なにが原因かは明白だな」

「な、なぜ……」

信じられない、そんな顔でジ・ジューは狼狽えるほかなかった。

セリルの方は、そんなジ・ジューを見て唇の端をゆがめる。

「気づかなんだよ。我が国で研究されている迷宮は500年以上前に発見され、攻略を進めるうちに近年になってようやく発見された場所だ。それをつい最近できたばかりの迷宮でもやあの場所にたどり着く人間がいるとはな」

「く、くそ……くそお」

ジ・ジューは崩れるようにその場でうずくまった。

バルデンフェルトで研究され、それが発表されないのは未だ説明されていないからだ。

バルデンフェルト側の迷宮は、国がその場所を発見し、研究している以上設備や人数、あらゆる点でジ・ジューが行っていた研究よりも上に行くのは間違いない。

仮にジ・ジューが研究を終えたころには、それらのすべてが周知の

事実となっていただろう。

起死回生の機会が実は、何でもなかったと知らされたジ・ジーは愚かだった自分を嘆くほかない。

「お前の罪は重い。研究のためとはいえ、地上を壊滅の危機へと追いやった。これは我が国の中にもありながら、国を危機に追いやる極めて重大な犯罪行為だ。よって、斬首とする」

「な、なあ！」

ジ・ジーはセリルの言葉を聞いて、口をパクパクと動かした。

言いたいことの1割も声にならない。

斬首。つまりは死刑だ。

なぜ、自分が死ななくてはならないのか。

ジ・ジーには理解できなかった。

「連れていけ」

「っは」

ジ・ジーは衛兵に両脇を抱えられ、謁見の間を出されようとして

いる。

ここで死ぬ。

ジ・ジーにはどうしても我慢ならなかった。

例え徒勞に終わることであっても、研究の邪魔をしたのはあの男なのだ。

あの男さえいなければ、こんなことにはならなかった。

もしかしたら、バルデンフェルトですら解明できていない謎が、自分の手で解明されていた可能性とて0ではないのだ。

「くそ。あの小僧に、わしが呼び出したあの小僧に復讐もしていないと言っのに……」

「！ 待て！」

「は？」

「？」

ジ・ジーの言葉を耳にしたセリルが衛兵たちを呼び止める。

「お前、今なんと言った？」

「な、なにとは？」

「お前があつた男を召喚したと言つのか？」

「あの男？ 小僧か？ わしをこんな目に遭わせたあの小僧を知つて居るのか！？」

「ふむ。どうやら、間違いないようだな」

セリルは顎に手を当ててわずかに思考を巡らせる。

この男は、どう見てもそんなに大した男ではない。しかし、しかしだ。

「いったん、先ほどの処罰を保留とする。そやつは牢に入れておけ」

「っは！」

今度こそジ・ジーは衛兵たちにつれられて謁見の間を出て行った。

残されているのは、セリル直属の騎士たちと侍女のマルフィオレだけだ。

「マルフィオレ、お前はあつた男をどう見る？」

「先ほどの老魔法使いのことでしょうか？」

「そうだ。かつては、我が国で勇者召喚を行っていたお前はあの男が勇者を召喚できるだけの實力があると思うか？」

「……いえ、そうは思えません」

マルフィオレ・セティスリア。

セリルの侍女でありながら、かつてはバルデンフェルトでも指折りの魔法使いだった女性だ。

セリルが口にしてきた通り、バルデンフェルト帝国内で5人しかいない召喚魔法が使える人間の1人でもある。

「お前もそう思うか……」

「はい。今は亡きデ・ブーの悪政により有能な魔法使いたちは皆、別の国へと移りました。召喚魔法が使える人間であれば、なおのことでしょう」

召喚魔法とは、魔法の中でも最上級の難度を誇る魔法だ。

魔法使いと一言に言っても、初等から最高位魔法まで4段階の難度の魔法が存在する。

初等魔法などは戦闘力を持たないそこらにいる民ですら扱える魔法で、言ってしまうえばこの世界の人間はすべてが魔法使いのような

ものだ。

しかし、魔法使いと呼ばれるのは、その先。

中等魔法を扱える人間を差すのが常識だ。

その上に、上等魔法が存在する。

4段階とは言っても、最高位魔法は伝説とも言われる魔法であり、事実上最高位を除いた3段階と言っても過言ではない。

そして、召喚魔法は事実上、最大難度の高等魔法。そのすべてを極めた人間がようやく扱えるレベルの魔法なのだ。

魔法使いは実力があればあるほど、どの国も喉から手が出るほどに欲しがるといえる人材であり、高等魔法が使える人間ならば、宮廷魔法使いと言って遜色ない。

しかし、この国には高等魔法を使える人間が残っているはずがないのだ。

「あの老魔法使いは、よくても中等魔法最上級でしょう」

「そこも見解は同じだな」

召喚魔法は、高等魔法の基礎概論をもとに行使される魔法である以上、高等魔法が使えない魔法使いには十中八九、いや100%使えない。

ならば、なぜあの男、ジ・ジューは獅子王ガイという勇者を召喚することが出来たのか。

ガイに感じる、普通の勇者たちとは違う何かがあるのか。

ジ・ジューの行った召喚魔法を調べることが出来るかもしれない。

セリルは、騎士たちにも見えぬようにニヤリと笑みを浮かべた。

27話 お金持ちになれるみたいです（後書き）

というわけで、28話です。

これで前回謎だった、主人公ってなんで無事だったの？ という謎が解明されました。

改訂版になってから不幸の連続だった主人公にもようやく運が回ってきたようです。

さて、side out後の展開に関しては、適当に流しておいてください。

いろいろなときな臭い感じですが、1章が終わるまでにはある程度解決します。

ホントは、キッターンを出そうと思ったんですが、長くなるのでカット。

そのうち、彼もまた登場します。

28話でとりあえずは迷宮編は終わりです。

今回は、プリル登場前の日常編、そしてダメになった鎧の再購入編という予定ですが。

せつかく一段落しているので、閑話を入れます。

ただ、連続しているストーリーの中で物語とは無関係の閑話を入れるのは個人的に好きではないので、外伝という形の短編で公開します。

明日の更新分は、外伝になるので、本編はお休みです。
よろしかったら読んでやってください。

追記、今気づいたのですが、23話が抜けて24話になっている……
そのまま続けて今回が28話扱い……訂正しました。orz

28話 冒険者を続けるみたいです

(略)

迷宮をクリアしてから数日が過ぎた。

お姫様からもらった報酬のおかげで金にも困らず、平穏な日々が続いている。

ちなみに、報酬は俺とスクルドが80万Bずつで、レスティアナさんには90万B受け取ってもらった。

案の定、姫様の言っていたスクルドの分は50万Bにして、俺とレスティアナさんが100万Bっていう振り分けは、断固として反対されたのでお互いに最大限譲歩した結果がこれだ。

俺とスクルドは2人で金を使う以上、ある意味スクルドの分け前はレスティアナさん以上だ。という無理矢理な論法で納得させた。

たまには俺だって、強気に出ることだってできるんだ……たまにだけ。

とまあ、問題なく報酬を分け合うことができたし、金はあるから無理に仕事をする必要はない。

実に平和な日々が続いている。

昼ごろになって起きて、アリアさんの作っておいてくれた昼食を食べる。

夕方まで市場とか商店を冷やかして、夜にはアリアさんの作ってくれた夕食を食べる。

食費とか入れてるって言っても、もはや二トと変わらない。

ただ、1週間もたつてないのに問題が生じつつある。

生じたわけじゃない、まだ問題って言うほどのものじゃないから。

だけど、それはこのままだと深刻な問題になりそう。

それは、何かと言えば、退屈なんだ。

この世界には漫画がない、テレビもゲームもパソコンもない。

現代人の俺にとってこの世界は退屈すぎるんだ。

迷宮をクリアするまで怒涛のような毎日を通り過ぎてきたから気付かなかつたけど、この世界には娯楽が少ない。

このままだと退屈で死んでしまいそう。

仮にこの世界に来てから冒険者にならないで、下働きを続けていればこんな考えは思いもよらなかったと思う。

商店なんかで働いている人を見ても、店主以外は実に忙しそうに働いている店がほとんどで、毎日くたくたになるまで働いていただろう。

だけど、幸か不幸か俺は冒険者として大金を掴んでしまった。

何事もない平和な日々を過ごしている以上、この退屈ってやつは
実に厄介な敵だ。

どうするか。

俺以外のこの世界に来た人間は、その大部分が召喚した国に仕え
ている。

それはつまり、国に仕える勇者として毎日鍛錬の日々を続けてる
ってことだろうから、俺みたいに毎日ぶらぶらとすることがない以
上、こんな疑問は抱かないと思う。

三井さんみたいに召喚した国には仕えず、冒険者になる人だっ
ているだろうけど、その人たちだって冒険者として日々仕事をして
いるだろう。

戦闘力を持たずにこの世界に召喚された人たちだって、料理人や
下働きなんかをして生活をしている。

たぶん、こんな疑問を持ったのは俺が初めてなんじゃないだろう
か……それはさすがに言いすぎか。

だとしても、娯楽が広まってない以上は、俺ほど深刻に退屈っ
てやつを問題だと思っていなかったってことだ。

この退屈と言う敵を打倒するために、俺も何かをしなくちゃい
けない。

「それで、あんたはなにをするわけ？」

「それがわからないから、相談してるんじゃないですか」

「馬鹿ですね」

「ええ、馬鹿ね」

「2人ともひどくない!？」

夕食の席で、そんな俺の考えを話したところ、アリアさんとレスティアさんの2人から馬鹿呼ばわりされてしまった。

2人ともひどい。

「馬鹿って言うなら、2人はどうすればいいのかわかるっの?」

「そんなの簡単じゃない」

「そうですね。あなたは、冒険者でしょう?」

「はたらき冒険なさいよ」

「そんな、身も蓋もない……」

そりゃあ、俺だって冒険者なんだから他の人たちと同じように冒

険するつてのも選択肢の1つだけど、それにはどうしても危険が付
きまとう。

俺が求めてるのは、安全で自分が死んだり怪我したりしない娯楽
なんだ。

仕事がしたいわけじゃない。

人間誰だつてニートとして生活できるなら、ニートでいたいはず
なんだ。

「そもそも、あんたがもらったお金だつて、一生活できる額じゃ
ないのよ。そのお金がなくなったらどうするつもりよ」

「それに、あなたが冒険者を続けていないと、いつまでたつても死
んでもらえずにクレイ様を連れ帰るのが遅くなってしまっじゃない
ですか」

「……確かに」

確かに、レスティアナさんの意見はともかくアリアさんの言う通
りだ。

バルデンフェルトは俺みたいな本籍を持たない勇者でも、国内で
生活する以上は1年に一度税金を納める必要がある。

額はだいたい1000B。これは、日本とかと同じく資産とか
で前後するから、俺の場合は収入が不安定な冒険者と言うことを考

えても1万Bくらい。

俺の寿命が、日本の平均ぐらいと考えて75歳くらいって考えれば、残り60年くらいこの街で生活すると60万B。

いつまでもアリアさんの家にいるわけにもいかないから、そのうち自分で家を買ったり借りるなりしないとイケないし、生活費その他もろもろを考えれば、おおよそでも年間2万Bは消費される。

これも60年間払い続ければ、120万B。

いくら節約したって、半分も減らせないだろう。

そうすると、俺がニートとして生きていくには大体200万Bはないと厳しい。

「あんだだつて、結婚すれば子供も生まれる。そんなことになったら、どれだけのお金が必要か……養育費ってのはあんだが考えてる以上に高いわよ」

「う、うう〜ん」

「それに、クレイ様の生活をあなたが想像する貧乏な生活にするのは私が認めません」

レスティアナさんの意見は無視するにしても、やっぱりこのまま働かないってのは無理がある。

でもあれだ、とりあえず冒険者ギルドをやめられるまでは二ートを続けて、冒険者を辞めてから働けばいいんじゃないか。

そうだよ。そうすれば、命の危険だってない。

「とりあえず、冒険者ギルドをやめられるまではこのまま生活を続けて、冒険者をやめたら働くよ」

「あんだねえ……それがまかり通ると思ってるの？」

「は？」

「あんたは今、バルデンフェルトの三姫、その中でも蛇みたいに狡賢くて、しつこいことで有名なセリル姫様が直接依頼を出すような冒険者なのよ？」

「うん、まあ」

「そのセリル姫が、あんたを認めてるってことは最終的にあんたをバルデンフェルトの騎士にでも取り込もうとしてるってのが、うちのギルドの大方の予想よ」

「……………」

「その姫様が、あんたが冒険者を辞めることを許すと思う？」

「……………無理……………」

っていつか、三井さんもこの間の別れ際に言ってたは。

セリル姫が俺を狙ってるって……それって、やっぱりそういついとだよな。

「仮に、セリル姫の強引な勧誘を断れたとしても、冒険者を辞めることは絶対に認められないわ」

「な、なんで？」

「迷宮をクリアできるような冒険者が、怪我もしてないのに引退するなんて認められるわけないじゃない」

「……………でも、あれは偶然だったんだよ？」

「世間はそんな見方してくれないわよ」

……………いやいや、諦めるな俺……………

ニートライフを送るんじゃないのか？

でも、ここ数日ニートライフを送って、楽しかったか？

楽しくとも何とも……………うん、文字通り何にもなかったんだよ……………

平和だけど、平和すぎて刺激がない。

冒険者として生活してても、死なないようにすれば何とかなる。

幸い、姫様からもらった賢者の指輪があるから、モンスターと戦ってさえいれば、怪我だってほとんどしないで済む。

時々危険度の少ない迷宮で、ちよつと上の方の階層を巡って、普段は雑魚モンスターを狩る。

うん。なんとなく、未来図が想像できる。

「冒険者を、続けるしかないですよね」

「嫌？」

「さあ？ そんなに嫌じゃないってのが素直な感想です。死ぬのは嫌ですけどね」

「死なないように努力すんのも冒険者の仕事の内よ」

「そうですね」

まあ、仕方ない。

冒険者として、頑張ろう。

……だとしたら、鎧があのみんまっつてのはまずいよな。

迷宮でランスに突き刺された穴がそのまま残ってるし……

明日あたり、おっさんの店にでも行ってみるか。

「じいちゃんさま」

「はい、お粗末さま」

とりあえず、手甲の状態も確認しとかないな、冒険者になつてからずっと使ってるしそろそろメンテも必要だろうし。

「よかったですね」

「え！？ な、なにが？」

「あの男が、冒険者をやめてこの家を出て行くと言わなくて……」

「うちよ、あんた何言ってるのよー！」

「？ アリアさん、どうかしました？」

「なんでもないわよー！」

「は、はあ」

き、急に怒るなんてどうしたんだ？

まあ、アリアさんが怒るのはある意味デフォだから気にしてもし

ようがないかもしれないけど……

明日は早めにおっさんの店に行きたいし、今日は早めに寝るとするかね。

冒険者としてやっていくと決めた翌日、俺はさっそく新たな防具を求めてバスタレイドを買ったおっさんの店を訪れた。

防具の品ぞろえは良いとは言えないが、別に質が悪いわけでもないし、おっさんの人となりを多少は知ってる以上、この店がいいだろう。

まあ、いろいろサービスしてもらった恩もあるし。

「おっさん、いるかい？」

「おお、坊主どうした？」

「防具を買おうと思ってね」

「防具？ この間、買ったじゃねえかよ。それに、うちは武器屋だぜ？ 防具が欲しいなら防具屋に行けよ」

「そう言わないでくれよ。武器はこの間買ったバスタードがあるから必要ないけど、迷宮で防具が壊れちまってね、新しくしたいんだ」

「だから、防具なら防具屋だろ？」

「おっさんには、いろいろおまけしてもらった恩があるし、防具だって数は少ないけど質は良いじゃん。俺はおっさんの店で買いたいんだよ」

「ったく、うれしいこと言ってくれるぜ」

まずは店に並べられた防具を適当に見る。

今回は、冒険者としてやっていくと決めた以上、下半身を守る防具も買わなくちゃいけない。

さすがにフルプレートメイルなんて買っても、重すぎてなかなか使えないし、腰回りを守る防具にブーツみたいな形のものがいいんだよな。

「おっさん、やっぱり防具はこれで全部？」

「ああ。前のバスタードの時みたいに店の奥にあつたりはしねえよ」

「そっか、残念」

バスタードの時みたいに、掘り出し物があったりしたらうれしかったけど。って、それはさすがに贅沢か。

店に並んだものから選ぶとしたら、この辺になるんだよな。

前に買ったものと同じタイプの上半身を肩まで守れる鎧。

前はうまく表現できなかったけど、よくよく考えてみればサヤ人の防具の、タンクトップ型じゃない、肩まで守れるタイプのやつによく似てる。

さすがに、サヤ人の防具みたいに、肩の部分が軟らかくて簡単に腕をあげられるってわけじゃないけど、上段から剣を振り下ろすのに問題ない程度には稼働できる。

しかも、今回のやつは値段が一ケタ違う。

前は1万Bだったけど、今回のやつは15万Bだ。

何が違うかと言えば、材質が違う。

前のやつは、鋼製。鉄より硬い材質でなかなかいい品だったんだけど、さすがにどでかいランスで一突きにされたらたまらなかった。

だけど、今回の材質は鋼。

変わってないかと思うけど、実は違う。

前回は魔法を使って大量生産された人の手がほとんど入っていない鋼だったけど、今回は職人の手によって作られた、人の手によって作り出された鋼だ。

同じ鋼でも、硬度や重さ、値段は段違いだ。

つてのが、おっさんの説明なんだけど……

「なあおっさん。この間来たときは、こんなに高いもん売ってなかったよな？」

「おう」

「じゃあなんで？」

「おめえが、獅子王ガイだろ？」

「ああ。うん。つてか、なんで知ってるの？」

「キューマから受け取った手紙に書いてあったよ。んで、お前が最近噂になってるお姫様から直接依頼を受ける冒険者つてわけだ」

「ああ……そうだけど」

「そんな超一流の冒険者がくるんだぜ？ 下手なもん置けねえよ。そいつは借金して買った、うちの店の中でも特別な一品だ」

「へえ〜……つて、借金のの!？」

「ああ。お前が活躍すれば、お前の武器を売ったのはこの店だつてわかる。そうすりゃ冒険者たちはうちの店に集まるぞ。そうすりゃ、借金なんてすぐに返せるよ」

「だからって……無茶しすぎでしょ」

「まあな。とにかく、うちの店の宣伝頼むぜ。お前には期待してるんだからよ」

そんなに期待されたって、応えられる自信はありません。

でも、できるだけだけの努力はしたいな。おっさんいい人だし。

とりあえず、この鋼の鎧とセットみたいな感じの鋼製の手甲。

鋼のすね当てに、それに合ったブーツ。

腰回りを覆うタイプのやつはちょっと見当たらないな……

あとは……そうだ、頭を守る防具もないとまずいよ。

やばいやばい。

体は守ってるのに頭はノーガードとかありえないし。

「そう言えば、おっさん。迷宮をクリアした報酬でこんなもんが出てきたんだよ。なんだかわかるか？」

俺は、そう言っておっさんに見せようと思ったサークレットを力ウンターに載せた。

「こいつは……サークレットだが……なんだこりゃ？」

「おっさんにもわからない？」

「いや。どんなもんだかはわかるぞ。さすがに、武器屋なんてやってる以上、鑑定はできるしな」

でも、バスタレイドは見落としましたよね。

あれは、特別なのか？

スーパーレアの装備なんて早々見かけるもんでもないけど、おっさんでも気づかないにか工夫でもあったとか……

って、そんなことして誰が得するんだよ。あほらしい。

「で、それって呪いとか、かかってる？」

「呪いっていうか、付与はいろいろとついてるな。こんなちんけなサークレット1つに全能の祝福つきなんて初めて見たよ」

「全能？ 祝福？」

「ああ。全能つてのは魔法の属性でも、光と闇を除いた火、水、風、土、雷の5属性に軽減効果があるってことだ。祝福つてのは、装備することで装備者に直接能力が付与される装備のことを言うんだけどな」

あれだ、祝福ってのは装備すると素早さが+2されるとかそんなアイテムなわけだな。

全能っていうのに、光と闇は除くってのはイマイチ納得できないけど、そんなもんなんだろう。

「こいつは、全能耐性 - 50%、魔力上昇、魔法威力上昇って馬鹿みたいな祝福がされてる」

「それってすごいのか？」

「すごいってもんじゃねえよ。これを売れば、デカイ家を買える。魔力と魔法威力の上昇率が10%なんて初めて見たぜ」

10%って言ったたら、なんか大したことなさそうだな。

「全能耐性 - 50%ってのも普通はありえねえよ。そうだな、おんなじ形のサークレットでも普通はどれかの属性1つだけの耐性で10%もありや十分ってところだ。その普通のサークレットでも耐性があるってだけで1万Bは下らねえよ」

……単純計算なら5つの属性耐性があるから、5倍。さらに、耐性が - 50%で通常の5倍。

値段をそれに当てはめれば……25万B？

ああ、でも魔法威力とかの向上もあるんだよな。

50万Bくらい？

「ちなみに、それに値段をつけるとしたらいくらぐらい？」

「俺なら最低でも白貨1枚は出すな」

「……それは、デカイ方？ 小さい方？」

「小さい方でだ」

さすがに1億はないか……でも、100万B？ ……ありえねえ。

これ売れば、目標額突破して、ニートライフ満喫できるじゃん。

やっぱ、冒険者辞めてニートになろうかな……

って、ダメだダメだ。

俺がニートになったら、おっさんが借金まみれになっちゃうし、お姫様に恐ろしい目に遭わされる……

ああ……でも、危険は少なくて安心できるニートライフにも心が引かれる……

って、二トライフを送っても、退屈で死ぬんだよ……

はあ。報われない。

「あんまり、見せびらかしたりするなよ。盗人に取られたりしたら、洒落にならん。さっさと頭につけとくんだな」

「つけとけば、取られないの？　こんな頭に軽くはめるだけのものすぐに外れそうだけど」

「マジックアイテムだからな。このレベルのアイテムだと、装備者の意志で外そうとでもしない限り絶対に外れねえよ」

マジックアイテムスゲエ。

危険もないみたいだし、装備しよう。

100万Bのアイテムが盗まれるとかシャレにならないし。

「で、今回買うのはこれで全部か？」

「ん。まあ」

俺がカウンターに載せた、買うものはさっきも確認した鎧と手甲、ブーツにすね当ての4つだ。

「おいおい。全部で40万はいくぞ」

「大丈夫。お姫様から、たんまり報酬貰ったからね。今回は前みたいにサービスしてもらわなくても大丈夫だよ」

「っへ。だったら、せいぜい俺はお前から金をふんどくってやるよ」

「ははは。お手柔らかに」

「やなこった。こっちは借金までしてるんだ」

「それは、おっさんが勝手にやったことだろ？」

「お前のためだよ」

「店のためでもある」

「言ったなこの野郎」

俺とおっさんは軽口をたたきながらその後も延々と雑談をつづけた。

これから冒険者になるって決めただけど、こんな人間関係が気づけるんならまんざら間違った選択でもなかったのかな。

28話 冒険者を続けるみたいです（後書き）

というわけで、29話改め28話です。

現在、閑話として「箱庭の勇者」外伝「ギルド職員の休日」を短編として公開中です。

興味がある方は、読んでみてください。

29話 偽物がいるみたいです(前書き)

累計PV100万突破 累計ユニーク20万突破

箱庭が続けられるのは読者の皆様が見てくださっているという事実です。

本当にありがとうございます。

29話 偽物がいるみたいですよ

(略)

防具やらの調整なんかが終わりに、受け取ったその日から冒険者としての活動を始めた。

自分の意志でやると決めた以上、キューマさんが最初に提示してくれた通常の倍の報酬というのはやめてもらい、お姫様から受け取った報酬で、前に出してもらった武器の代金もすべて支払った。

これで、俺は誰かに後ろめたい思いもしないで、冒険者をやることが出来る。

さすがに、ギルドに恩があったりするとなんか後々面倒なことになるそうだし、借りっぱなしってのはよくないからな。うん。

と言うわけで、今日もまた肩にスクルド、後ろにレスティアナさんという陣形で仕事を受けた。

今回の仕事はゴブリンの討伐。

近くの村を襲ったりする10匹くらいの集団で、なかなか村人たちは困っているそうだ。

で、実際にゴブリンたちの巣まで来たわけなんだけど、なめてましたごめんなさい。

というか、前情報がおかしい。

10匹どころじゃない。どう見ても30匹はいる。

でもまあ、ゴブリンくらいなら大したことないだろう。と
思ったら、意外とキツイ。

なにがキツイのかと言えば、30匹のうち20匹以上がメイジ
なんだ。

ゴブリンメイジってのは、要するに魔法を使うゴブリン。

単純な攻撃力も低いし、接近戦になれば簡単に倒せるけど、
近づくのが難しい。

なにせこっちの遠距離攻撃手段と言えば、戦いに参加しよう
としないレスティアナさんの弓だけ。

よって俺はとにかく走って魔法を避けながらゴブリンを1匹
ずつ倒している。

これがなかなか大変だ。

1匹を斬ろうとすれば、後ろから別のゴブリンが魔法を打
ってくる。

それを避ければ、目の前のゴブリンが魔法を打ってくる。

ゴブリンに手玉に取られている俺は、外から見れば滑稽に映
るだろう。

実際、レスティアナさんの冷やややかな視線が痛い。

サークレットのおかげなのか、魔法をくらってもそこまで痛くないし、ダメージって言えるものは少ないけど、塵も積もればなんとやら。

避けずに喰らい続けて倒れるなんて目も当てられない。

というわけで、魔法を避けてるわけだけど……

ゴブリンの数がなかなか減らない。

最初に数えた時はだいたい35匹いたわけだけど、俺が倒したのが5匹。スクルドが2匹。レスティアナさんが0。

このままじゃ日が暮れても終わんないかもしれない……

この仕事が終わったら、とりあえず魔法の勉強をしよう。

モンスターにも中遠距離の攻撃をしてくる奴はけっこういるみたいだし、迷宮でアイアンナイトと戦った時は弓を装備している奴が少なかったら、たまたま勝てただけだ。

それに、あの時の感覚はなかなか再現できない。

今回の戦いでも、剣の動きに任せないで、自分から動いて戦うことはできてるんだけど、アイアンナイトをまとめて相手にしたあの時の最後の動きと比べるとどうしても今一つって思ってしまう。

あの感覚が何なのかはわからないけど、あの時にあんなったって

ことは、今の俺でもあの感覚を持つことは不可能じゃないはずだ。

って、ゴブリンと戦っている最中にそんなことを考えている場合じゃない。

今は使えない魔法のことなんて、今考えていても仕方ない。

とにかく今は、1匹ずつ確実に止めを刺そう。

結論。

ゴブリンメイジと戦うときは、きちんと作戦をたてましょう。

いや、何とか倒せた。

倒せたけど時間がかかった。

3時くらいに始まった戦いは、日が傾いてあたりがオレンジ色になったころになってようやく終わった。

だいたい、2時間以上は戦っていた計算だ。

最終的に、魔法の打ちすぎで魔法が使えなくなったゴブリンメイジを一方的に虐殺した。

……なんか、言い方が怖い。

でも、事実だ。

最初は、ゴブリンメイジたちも10匹くらいが戦闘、残りは魔力の回復っていう感じだったんだけど、数が減って使用量が回復量を上回るとその後は意外とあっけなく終わった。

だけど、モンスターの魔力ってのは恐ろしい。

残り5匹になってからの猛攻は本当に危なかった。

5匹が同時にファイヤーボール（仮）で集中砲火してきたんだ。

しかも、それが30分以上続いた。

30分間魔法を打ち続けられるってのは相当すごいんじゃないのか？

まあ、一発あたりの威力は低く、サークレットの軽減効果もあったおかげで、こっちは怪我らしいけがはない。

避けまくったのもデカかったと思う。

とにもかくにも、魔法だ。

魔法を覚えよう。

とりあえずは今日のお仕事は終わりだし、街に帰ったらギルドに報告して家に帰れる。

なかなか大変な仕事だったけど、無事に終わってよかったよかったです。

なんて、そう思ってた俺が甘かった。

どう考えても、この世界に来てからの俺の不幸さってやつは群を抜いてる。

俺つてもとこんな不幸だったっけ？

いやさ、何があったかと言えば、襲われてるわけだ。

誰に？

盗賊に。

「なかなか、いい女じゃねえかよ、そのエルフは」

「男はバラして、女は高く売れそうだな」

「男だつて、それなりの値段で売れるんじゃないかねえのか？」

「馬鹿、あんな男じゃ誰も買わねえよ」

「それもそうか。がっはっは」

「ぎゃははは」

……なんで、俺は何も恨まれるような覚えのない盗賊にまで馬鹿にされなきゃいけないんだ？

というか、レスティアアナさんも俺が罵倒されたところで同意するように頷かないでくれませんか？

それ以前に、盗賊さん方の会話は何？

すごく説明口調と言うか、突然現れていきなりそんなこと言われてもこっちは対応に困りますよ？

急展開すぎて、こっちは混乱するし謂れのない罵倒は受けるし、踏んだり蹴ったりだよ。

「おら、おとなしくそのねえちゃんこっちに寄越しな」

「言つとおりにすれば、お前だけは助かるかもよ？」

バラすとか目の前で言っておいてよく言つよ。

というか、レスティアアナさんが俺の言つとおりに動くとも思ってるのか？

こっちが、喜んで渡そうにも絶対に断られるんだぞ。

「早くしろガキが！」

「ああ……と。そのあなた方は盗賊でいいんですね？」

「あん？ そうだ。俺たちは泣く子も黙る『親切盗賊団』だ」

読みを変えればしんせつ盗賊団。

……なんなんだこいつら……

この説明口調とかは、こいつらの親切なのか？

んなアホな。

「……で、あなた方は何がしたいんですか？」

「だから、その女を寄越せって言ってるんだよ」

「つまり、人攫いをしている。」と

「そうだよ！ くだらないこと言ってるでさっさとしろ！」

見た目はどう見ても盗賊だし、やってることも一応盗賊。

盗賊なんて初めて見たよ。

でも、身のこなしって言えばいいのかな。それが、大したことない。

剣は持っているけど、重心の置き方もテキトーだし、構えもなっていない。

これが油断を誘っているとかならなんとなく納得できるけど、目の前の親切盗賊団の皆さんは大まじめな顔をしていらっしやる。

これはあれだ。

俺でもわかる。

こいつらは大したことない。

下手したら、さっきまで戦ってたゴブリンたちの方がよっぽど手ごわそうだ。

人数は、隠れてでもいなければ5人。

この間のアリアさんを襲った連中と同じ感じで瞬殺できそうなくらいだな。

「はあ………あんたたち」

「ちょっと待ったあ！」

「盗賊なんて馬鹿な………ん？」

誰だ、人がせつかく盗賊たちを説得しようとしてるってのに邪魔

するのは。

「な、なにもんだ!？」

「ど、どこに居やがる!」

声はすれども姿は見えず。

盗賊団の皆様も、声から察するに男がどこにいるのかをきょろきょろと探している。

「話は聞かせてもらったぜ。とおっ!」

軽快な着地音。

なんとなく俺の目を引いたのは、短めのオレンジ色の髪。

夕日を受けてさらに色を深めている。

カーゴパンツにタンクトップ。

なんとなく、ガテン系のお兄さんを想像させる体つきと服装。

高校進学せずに就職した中卒ヤンキーか？

そう言えば、地球でも幼馴染にいたな。

髪の毛はまっきんきんで、いつもこんな感じの服装。

冬場に遊びに行ったときにも同じ格好だったから、正直正気を疑ったのは良い思い出だ。

あいつは元気にしてるんだろうか？

「残念だったな、盗賊ども。この俺、獅子王ガイに見つかったのが運のつきだ！」

……またか？

またなのか？

「な！？ し、獅子王ガイだと！？」

「おい。まずいんじゃないかねえのか？」

「帝国の勇者だぞ。下手に相手したら、帝国まで敵に回る……」

「に、にげるお！」

オレンジ髪の名乗りはよっぽど効いたんだろう。

盗賊たちは、蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。

いやまあ、これがオレンジ髪のおかげだったら、素直に感謝でき
たんだろうけど……

ねえ？

「大丈夫だったか？」

「……ええまあ……」

「そうか、それはよかった」

なんとなく、いい人そうなのが救いだけど、だからって人の名前
をかたるのはどうなんだ？

というか、迷宮クリアとお姫様が鼻屑にしてくれてるって話が方
々に広がってるせいで、俺の名前は変な方向に有名になってないか？

いくらなんでもこうも短い間に2人も俺の名前をかたる奴に会う
なんていくらなんでもおかしいだろ。

「俺は、獅子王ガイ。名前ぐらいは知ってるか？」

「ええまあ……名前はよく聞きますけど……」

下手に言つと話がややこしくなるからやめておこつ。

少なくとも、この人がかたる分には悪評は立たないだろう。人助けしてるし。

「そうか、ならよかったよ」

ん？

この差し出されたてはなんですか？

握手を求めるなら手は横を向いているはずですよ？

なんで手のひらを上に向けてこっちに突き出しているんですか？

「実は、金に困っててね。助けられたんだから、お礼ぐらいは払うよね？」

前言撤回。

こいつもだめだ。

はあ。なんで、俺の名前をかたる奴は変なやつしかいないんだ。

いや、そもそも人様の名前をかたる人間がまともなわけないか。

「あのねえ」

「お兄ちゃん」

「ん？」

オレンジ髪の後ろに現れたのは1人の少女。

薄いピンク色の長い髪に、白い肌。

華奢で折れそうな体つきで髪と同じ薄いピンクっぽいワンピースを着ている。

年齢は10歳ぐらいか？ もっと小さいかもしれない。

とりあえず、俺にはお兄ちゃんなんて呼ばれる覚えはないから、オレンジ髪の妹か？

似てないな。おい。

髪の色だって全然違うし、顔だって似てる部分が一つもない。

少女は美少女としか言いようのない顔つきだけど、オレンジ髪はいいとこいって2枚目半。人のこと言えるのかって？

大きなお世話だ。

そして、一番の大きな違いは少女の額には一本の角が生えていると言っ点。

獣人とかエルフじゃないよな。

今までに街でも見たことない種族みたいだけど……鬼族？ それとも、虫族？ ……虫はないか。

「セリカ。お前、なんでこんなところに……」

やっぱり、お兄ちゃんってのはオレンジ髪のことだったようだ。

ピンク少女はオレンジ髪のもとまで駆け寄ると、ギョツと服の裾を掴む。

困った顔をしているけど、まんざらでもなさそう。

ぶっちゃけ、ムカつく。

俺の周りにも美女がいるって？

大きなお世話だ。

というか、俺の周りの美女は、こんなかわいらしい仕草をしない。

こんな保護欲をかきたてる上目づかいをしない。

俺のことをひたすら罵倒して、罵倒して、罵倒しつくすことしかしてくれない……泣きそうだ。

それにしても、マジでうらやましい。

前の世界で俺もそう呼んでくる奴はいた。

いたんだけど、こんなかわいらしい女の子じゃなかった。

どうせなら俺も、こんな可愛い女の子にお兄ちゃんって呼ばれたかった。

あいつがあの子みたいな女の子だったら、俺だっているいると無理してでも相手をしてやったんだろっけど……

そう言えば、あいつは元気にしてるんだろうか。

こんな異世界に来てしまったから、会うことも出来ないけど、心配だな。

かわいらしい女の子じゃなかったけど、あいつは大事な妹分だったんだ。

やばい、ちょっとホームシックだ。

「セリカ、お前街で待ってるって言っただろ？」

「ん〜」

裾を握ったままいやいやと首を振るピンク少女。

なんだろう、俺はロリコンじゃないけどものすごい抱きしめたく
なった。

美少女パワー恐るべし……

「と、とりあえずちょっと待ってる。俺は大切な話をしているところ
だから」

「ん？」

そこで初めてピンク少女の目がこちらを向いた。

兄ちゃんを奪おうとする敵。みたいな感じで睨まれたりするのはか
と思っただら、ピンク少女は無表情のままこちらに歩み寄ってくる。

ん？ どうした？

トコトコと俺の周りを一周して、次に目を向けるのは俺の肩。

もしかして、スクールを抱きたいのか？

と、思ったらスクールじゃなくて俺の腰あたりにギュッと抱き着
くピンク少女。

って、何事！？

なんでいきなり抱きしめられたの？

「お!? まさかセリ力が懐くなんて……悪いね。そいつはものすごく人見知りするんだけど、気に入った相手にはところ構わず抱き着く癖があつて」

それは癖なのか？

美少女に気に入られるのはうれしいけど……ろ、ロリコンじゃないぞ!

というか、気に入ったのはスクールじゃなくて俺なのか？

スクールに抱き着きたいけど、届かないから代わりに俺を抱きしめてるとかじゃないよな？

「ああ……とりあえず、そいつをこんな街から離れた場所に居させたくない。街に移動しないか？」

「……まあ、いいですよ。どうせ俺たちも街に帰るつもりだったし」

「そうか、助かるよ」

こうして、俺たちとオレンジ髪、ピンク少女は街へと移動を開始した。

よほど俺のことが気に入ったのか、一向に離れようとしなないピンク少女の手を握りながら。

なんとなく、後ろめたい気持ちとほんのり生暖かい感情が胸に湧き上がる。

ロリコンってこんな気持ちなのかな……

って、俺はロリコンじゃない。本当だぞ！

29話 偽物がいるみたいです(後書き)

というわけで、よくわからない29話です。

今回登場したセリカは、旧作のプリルです。

ちょっと、キャラクター変更してみました。

フルネームはそのうちるので省略。

髪の色 赤 ピンク

髪形 おかっぱ ロング

性格 ??? 人見知り

という感じの変更です。

基本、無口なキャラクターですが、皆様よろしくお願いします。

30話 俺はお兄ちゃんみたいです

(略)

街へと戻ってきた俺たちは、とりあえずギルドへ向かう前にオレンジ髪とピンク少女が宿泊している宿屋兼酒場に入った。

先にギルドで今日の仕事の報告なんかをしたかったんだけど、オレンジ髪がどうしてもピンク少女を宿に戻らせておきたいというから仕方なくと言った感じがした。

まあ、とつくのとうに夜の帳も落ちていたので、幼い少女を連れて外を出歩くつても不用心だし、仕方ないつてのは事実だ。

で、とりあえず酒場で話をするついでに少し遅めの夕食を取ることにした。

家でアリアさんが夕飯を用意しているかもしれないけど、すでに11時を回っている。

これなら、まあ仕方ないだろう。

アリアさんだって許してくれる。

ある意味だけど、仕事で遅くなっただし。

俺の正面にオレンジ髪、隣にはピンク少女。

レスティアナさんだけはテーブルが違うけど、俺たちのすぐ後ろ

の席に陣取っている。

「で、さっそくだけど君らを助けた報酬の話をしたいんだけど」

「はあ……まあ、助けられたのは事実ですし、多少のお礼はしてもいいと思うんですけど」

「けど？」

「あんた、人の名前を勝手に騙るなんてどういっつもりですか？」

「な、なに！？ な、名前を騙るってな、なんのことだ？」

……動揺しすぎだろ。

なんか、この人憎めないなあ。

基本的には良い人そうだし……いやいや、だからって人の名前を騙るってのは名誉棄損？ いや、詐称罪？

だめだ。俺にはなんて罪名だかわからない。

とりあえず、いいことじゃないのはたしかだ。

このままこの人が俺の名前を騙り続けたら、獅子王ガイは人助けをするけど、見返りに金品を要求するがめつい奴だ。なんて、噂になっただらたらまらない。

下手したら、アリアさんに殺される……………ほんとにありそうで怖すぎる……………

「さっきあなたは獅子王ガイって名乗ってたけど、俺の名前も獅子王ガイって言うんだよね」

「……………なるほど」

なにがなるほどなんですか？

「いくら俺のファンだからって、名前を騙るのはよくないぞ」

いやいやいやいやいやいや、それはあんたでしょ？

え？ 何言っちゃってんのこいつ。

「君が俺のファンなのはよくわかったよ。ここ数十年は誰も成しえなかった迷宮のボスの討伐。帝国三姫として名高いセリル様の覚えもいいこの俺を尊敬する君の気持はよくわかる」

「いや、だから……………」

「つぶ。そう、無理をしなくてもいいんだ。もしかして、後ろの彼女に言ってしまった手前、後に引けなくなっているんだろ？ 大丈夫。君のことを訴えたりはしないよ」

「いや、だから……」

「罪なのは冒険者として成功しすぎているこの俺さ。君のような俺のようにになりたいと思う人間を増やしてしまった俺がいけないんだ」

「いや、だから……」

「そうだ。そこまでファンだって言うなら、俺と一緒に仕事を受けないか？ 俺の活躍を間近で見せてあげよう」

「……………」

ダメだこいつ。

人の話を全く聞こうとしない。

なんなんだろう、この人は。

勝手に人の名前を騙っておいて、俺が名前を騙ってるって勝手に決めつけるし。

ちょっとムカついてきた。

そうだ。あれだよ、こいつを獅子王ガイ扱いして、こいつがピン手になったところで颯爽と正体を明かす。

よくある展開だけど、何気にカッコいいし、一度はやってみたかった。

そうだよな。丁度いい機会だし、やってみよう。

「はあ。わかりました。すいませんでした獅子王ガイさん」

「つぶ。わかってくれればいいんだ」

「それじゃあ、俺を仲間にしてもらえませんか？」

「え？ あ、ああ。いいとも。だけど、俺が受ける仕事は君みたいな初心者には受けられないような危険な仕事だよ？ い、一応君を守るようにするつもりだけど、絶対とは言えない。そ、それでも大丈夫かな？」

「はい。あの獅子王ガイさんと一緒にできるなら、命なんていくらでもかけます」

なんか、自分で言ってる悲しくなるな。

「そ、そうか……わかった。でも、パーティを組むのは主義に反するから、俺が仕事を受けたら、君と合流して一緒に仕事に向かうってことでいいかな？」

「……ええ。わかりました」

そうか、パーティを組んでしまうと、ギルドカードにパーティメ

ンバーの名前が登録されるから、正体ばれるんだよな。

まあ、それはお互い様だけど。

しばらくは金にも困らないから、正体を明かすまでの間くらいは、パーティを組まなくても大丈夫だろう。

それに、仕事を受ける以上は俺だって働くんだし、分け前くらい要求したって罰は当たらないだろう。

オレンジ髪たちと出会った翌日、とりあえず予定していたとおり街の南側のはずれへとやってきた。

冒険者が仕事へ出るのはだいたいこの場所で、俺が待ち合わせ場所のここに来てからも何組かの冒険者たちが外へ出て行った。

昨日話し合った通りなら、オレンジ髪が仕事を受けてこの場所にやってくるはずだ。が、オレンジ髪は一向に現れない。

待ち合わせの時間は10時だったのだが、今の時間は11時。

どう考えても遅刻だ。

いい加減しびれを切らして、ギルドへ直接行こうかと思ったところで、オレンジ髪がようやく現れた。

「いやあ、お待たせ」

「お待たせじゃねえよ。いつまで待たせるつもりだ」

「悪かったね。君を連れて行けるような仕事を探してたんだけど、なかなか条件に見合う仕事が見つからなくてね、悪いんだけど今日はなしにしよう」

「はあ？」

「明日の時間は12時にして、今日は明日のために早めに休むといい。それじゃあ」

「ちょー！」

オレンジ髪は俺が呼び止める間もなく、そそくさとその場からいなくなってしまった。

おいおい、どういうことだ？

昨日仕事を受けた感じだと、仕事はかなりいろんな種類があった。

それこそ、危険度があほみたいに高い仕事もあったし、俺が受けたゴブリン討伐みたいにそれなりの仕事だって十分にあった。

まさか、いきなり仕事がなくなるなんてことはありえない。

ああ、そうそう。

昨日の俺の仕事は、契約の数よりもゴブリンの数が圧倒的に多かったことと、その大半がゴブリンメイジだったおかげで、報酬が2、5倍に跳ね上がった。

とは言っても、もともとが大したことのない仕事だったおかげで、報酬として受け取った金額は2500B。

本来のランクはCに相当する仕事だ。

お姫様から受け取った報酬のおかげで金銭感覚が若干麻痺してるけど、あまり高くもなく少なくもない金額ってところだろうか。

まあ、今そんなことはどうでもいい。

ちなみに、帰るのが遅くなってアリアさんにめっちゃ怒られたのはヒミツだ。

って、だからそれはどうでもいい。

とにかく言えることは、さっきのオレンジ髪のおかしいってことだ。

仕事は十分に選べる範囲のものがあつたはずなのに、なんであいつは明日なんて言ったんだ？

……考えても仕方ないし、とりあえず今日は自分で仕事を選ぶとしよう。

予定が変わったおかげで、なんだか調子も崩された気もしたが、とりあえず俺が受けたのは、採集の仕事だ。

以前に俺が受けた仕事と同じく、ドメドメ草の採集。

その数は前回の倍、40株。

まあ、前みたいなのはそうそうないだろうから、今回は成功するだろうけど、嫌な予感しかないのはなんでだろう。

そう言えば、今まで受けた仕事はことごとく予想外の出来事に襲われている。

最初の採集の仕事では、ホワイトボアに襲われたし、三井さんたちと一緒に行った討伐の仕事では変な話を聞いて騎士と戦うはめになった。

迷宮の探索では、わけのわからんことになってパンダに襲われるだとか、迷宮をクリアするはめになったり。

昨日のゴブリン討伐だって、数が予定の3倍だ。

こうやって考えると、俺が受けた仕事はことごとく予定外の事態に襲われる。

アリアさんも言っただけ、普通はありえない。

これが、俺が主人公に選ばれた弊害だとしたらまったく困った話だ。

はあ。

どうしよう。

これでまた、ドメドメ草が荒らされて39株しか手に入らなかったりしたら……

わざわざ街に戻って買うつても変な話だよ……

まあ、少なくとも前回みたいに数がそろわなかったのに何の対応もせずに仕事失敗したことにはならないようにするってのは決まってるから、仕事失敗にはならないだろうけど……

街にもドメドメ草がないとかいう事態になったら終わりだな。

いやいや、マイナス思考はやめよう。

そうだ。

今の俺の嫌な予感なんて、単なる気のせいだ。

そう思わないとやってられないよ。

「……………」

「つけられていますね」

「……………やっぱり？」

なんか街を出たあたりから、俺たちを追いかけるように気配が移動している。

なんとなく人の気配みたいなものを感じられるようになったのは、レベルアップのおかげなんだろうか。

剣の腕が上がった時も思ったけど、なんかの達人にでもなった気分だ。

けど、さすがに暗殺者とかの気配がわかるわけではないと思う。

じっさい、今も俺たちをつけている気配は明らかに素人っぽい動きをしているのに、時々気配を見失う。

これが、命を狙う暗殺者とかだったらたまったもんじゃない。

まあ、素人の気配でも多少はわかるようになったのは大した進歩だろうけど…………

「なんで追いかけて来るんだろ」

「さあ……………あなたが傷物にした女性が、恨みを晴らそうとしているのかもしれないね」

「そんなことしてないよ!？」

……まったく、レスティアンさんはこんなまじめなところでも平然と変なことを言うから嫌だ。

というか、いい加減もう少し態度を軟化してほしい。

「今更言い逃れしたところで、事実を変えられませんかよ」

「まさかの決定事項!？」

いつの間にか事実がねつ造されてしまった。

名誉棄損だ!

弁護士を呼べ! 不当なねつ造には断固として立ち向かうぞ!

なんて、心の中でしか言えない俺は小市民……

でも、実際のところ何者だろう。

こっちに敵意はなさそうだけど、なんかちょこまかについてこられて若干面倒。

「っ」

なんだいきなり棍棒なんかで襲いかかってきて。

お前はいつたい何者だ！

って、はぐれゴブリン？

普通は集団のゴブリンがなんで一匹だけ？

まあいいか。

とりあえず、バスタレイドで一刀両断すると、邪魔にならないように草むらへポイ。

なんか、人に害成すモンスターなんだけど、こつやって出てきたからいきなり倒したりするのはどうなんだろう。

ゴブリンにだって生活があるのかもしれない。

家では腹を空かせた子供たちが……

考えても仕方ない。

人間はいつだってどこだって他の生物を迫害して発展する生き物だ。

まあ、それがいいとは言わないし、こつちに何の害も与えない相手を殺したりするのはどうかと思うけど、今回はいきなり襲われたんだし、仕方ないだろ。

ドメドメ草の生えているだろう場所まで適当に進む。

今更だけど、今回きた森は、前回ホワイトボアに襲われたのとは別の場所だ。

さすがにそんなに時間も経ってないから、あの森にはドメドメ草が採集できるほどは成長していない。

だから、正確な場所がどこかわからないから、適当に進んでるわけだけだ。

そろそろ見つかってもいいと思うんだけどなあ……

「っお

なんて、思っていたらちょうどドメドメ草が群生している場所に到達した。

ドメドメ草以外にも色とりどりの花が咲き乱れ、森の中という場所だけどきれいな花畑の中にいるようにも感じられる。

……ダメだ、俺は詩人みたいな感性は持ち合わせていないから、この景色をうまく表現できない。

いや、冒険者に詩人みたいな感性も語彙も必要ないよな。

うん。とりあえず、ドメドメ草を集めよう。

ドメドメ草を引っこ抜いては、腰につけた袋に入れていく。

そんなに大きなものじゃないけど、40株もあると結構な量だ。

重くないけど、かさばるのは面倒だな。

10分ほどして40株を集め終えたが、念のために袋から出して数を確認する。

これで数が足りなかったと言われたら笑えないからな。

「39、40。ふう、とりあえず問題なしかな」

ドメドメ草を袋に入れ直し、手に持って元来た道に戻ろうとしたところで、俺の視界にそれは映った。

木の陰に隠れようとしているんだろうが、時々こちらを見つめるためにぴよぴよこと飛び出すその頭の色には見覚えがあった。

緑や茶色、黒と暗い感じの色が多い森の中で、そのピンク色の頭は非常に目立つ。

「セリカちゃんだっけ？ なにしてるの？」

「！」

俺に気付かれたことに驚いて隠れようとしたけど、今更遅い。

恐る恐るこっちを見ようと木の陰からこちらをうかがうさまは何ともかわいらしいものがある。

いやいや、俺はロリコンじゃない。

「……まさか、あんな子供にまで手を出すとは……やはりあなたは最低ですね」

「だから、違っつて」

レスティアナさんの言葉にはあまり反応しないようにしよう。

下手にこっちが反応するから面白がって変なことを言ってるのかもしれないし。

「こっちへおいでよ」

ちょいちょいと手招きをすると、始めは警戒した様子だったけど、こちらへと歩み寄ってきた。

いくら比較的 안전한森とはいえ、こんなところまでついてくるなんてずいぶんアグレッシブな子供だな。

モンスターだっていないわけじゃないし、襲われたりしたらやばいだよ……

「どうしてこんなところまで？ お兄ちゃんが心配するぞ？」

「お兄ちゃんじゃない……」

「は？」

オニイチャンジヤナイ？

そう言えば、セリカちゃんは角が生えてるのに、オレンジ髪は普通の人族だ。

兄妹って言うには無理がある。

すると……あれですか？ 誘拐ですか？

昨日はなんも不自然そんなことはなかったけど、あのオレンジ髪に誘拐されたんですか？

なんて、不届きものだ。こんな美少女を誘拐するなんて……

人の名前を騙り、美少女を誘拐する大悪人じゃないか！

「そうか、セリカちゃんも苦労したんだな」

「？」

俺の中では、ある晴れた昼下がりに売られていく子牛やら、母を訪ねて何千里と歩く少年やら、ミツバチの彼やら、いろんな物語の悲しい部分をピックアップして作り上げられた物語が展開し、セリカちゃんに当てはめられていた。

いやさ、これが真実だとは限らない。

だけど、だけどだ。

あの男は、セリカちゃんにお兄ちゃんじゃないと言わせるだけの何かをやっているんだ。

それだけです。悪決定。

もはや言い逃れのできない大罪人だ。

「セリカのお兄ちゃんは、お兄ちゃんだもん」

そう言って、ギュッと俺に抱き着くセリカちゃん。

どういうことでしょうか？

え、あの？ はい？

じよ、状況が理解できない。

お兄ちゃんはお兄ちゃんだもん。って言うのは、どづいうことだ？

あのオレンジ髪はお兄ちゃんじゃなくて……

「それは、俺がセリカちゃんのお兄ちゃんってことかな？」

「ん」

俺の腰に抱き着いたままうなづくセリカちゃん。

意味が分からん。

いや、セリカちゃんの仕草もなにかも可愛いんだけど、言うてることは理解できない。

可愛いことと言っていることは関係ないけど、あれ？

どづいうことだ？

自分でも本当になになにやらわかんなくなってきた。

「……犯罪者ですね」

違いますよ？

え、あの……でも……

ダメだ。誰か助けてくれ。

31話 森は大変なんだぜ

(略)

いまだに俺には理解のできない事態が継続している。

セリカちゃんがなんで俺をお兄ちゃんと呼んだのか、俺がお兄ちゃんだとしたらオレンジ髪はなんなのか、まったくもって訳が分からない。

レスティアナさんは冷たい視線でもって俺を見つめているし、誰か助けてほしい今日この頃……

とりあえず、あれだ。

本人から話を聞こうにも、セリカちゃんの口数は少なく言うていることもまったくもって要領を得ない。

だったら、誰に説明を求めればいいのか。

こんな森の中じゃ、オレンジ髪の話も聞こうにも聞くことはできないし、俺の疑問に答えられる人間なんていやしない。

とりあえず、セリカちゃんに解放された俺は、そこそこ太い木の幹に寄りかかって、花畑で戯れているセリカちゃんを眺めているんだけど……レスティアナさん、その汚いものを見るような眼はやめていただけませんか？

別にセリカちゃんを眺めているのに変な意味はないんですよ？

ほんとだよ。

スクルドもセリカちゃんと一緒に駆け回っている様は、子犬と戯れる無垢な少女って感じで実に絵になるし、かわいらしいことこの上ないんだけど……

いやいや、だから変な意味はないんだって。

「それで、どうするつもりですか？」

「どうするって？」

「あなたが幼い少女に自分を、お兄ちゃんと呼ばせる変態だと言うことはわかりましたが、いつまでもここに居るわけにはいかないでしょう。あの男の下に彼女を送り届けるにしても、いつまでここに居るつもりですか？」

いや、変態ってあの……

断じて俺が呼ばせてるわけじゃない。

むしろ、なんで俺がお兄ちゃんなんて呼ばれたのか俺が知りたい。

まあ、いつまでもここに居るわけにはいかないってのは同意見だけど、まだ日も高いし楽しんでる様子のセリカちゃんを無理やり街に連れ帰るのも、なんだか気が引けるんだよね。

「まあ、ここならそんなに危険もないし、日が暮れるまでまだ時間はあるからもう少しここに居てもいいだろ。あのオレンジ髪のとこにセリカちゃんを連れてくにしても、もしもあいつがセリカちゃんを誘拐してたとかだったら、そんなわけにもいかないし」

「誘拐犯がよく言いますね」

それは、スクルドのことですか？ それともセリカちゃんのことですか？

というか、どっちにしろ俺が誘拐したわけじゃないですよ。

「まあ、その話は置いて、セリカちゃんとあのオレンジ髪の関係がわからないとね……そう言えば、セリカちゃんって何族に何の？」

「彼女は鬼人族です」

「鬼人？」

「ええ。額の角がその証です」

角が生えてると鬼人族ね……まんまだな。

というか、こんな普通にレスティアナさんが俺の質問に答えるなんてなんか、裏がありそうで怖い。

……勘ぐりすぎか？ そうだよな。

「そうするとやっぱりあのオレンジ髪とは種族が違うってことだろ？ まさか、ハーフってことはないよな」

「ハーフ？ ああ、異種族間の子供と言うことですか？ それならば、違いますね。基本的に人族と他種族が交わった場合は、ほぼ間違いない人族です。低確率で相手の種族の子供が生まれる場合はありますが、まずありえませんか」

……でも、そうするとあの子の両親のどちらかが鬼人族でもう片親が人族だとしたら、セリカちゃんとあのオレンジ髪が兄妹って可能性はあるわけだな。

でも、セリカちゃんはいつのことをお兄ちゃんじゃないって言うってたし……

どづいづことだろづ。

「お兄ちゃん！」

「おっと」

こちらに駆け寄ってきたセリカちゃんがダイブしてきた。

なんとか受け止めることはできたけど、危ないからあんまりやら

ないでほしい。

「遊ぼ？」

「ん、ああ。わかったよ……！」

俺はセリカちゃんに手を引かれて立ち上がったが、その時になってこちらに対する敵意ってやつに気付いた。

困まっている？

「困まれていますね」

「やっぱり？」

「……魔物でしょうね」

「わかんの？」

「盗賊や人であればこのようにあからさまな敵意をこちらに向けることはありません。おそらくゴブリンやスライムなどの低級の魔物でしょう」

そうか。犬型とかのモンスターだったら気配を殺すだろうしな。

そうやって考えると、こんなあからさまな敵意を出すのは雑魚っ

てなるわな。

1つ勉強になった。

……でも、なんでモンスターが俺たちを狙うんだ？

困むつてことは、最低限の戦略的な知識はあるってことだろうけど、そんな風にまでして俺たちを狙うつて言うなら、それこそ俺たちを狙うつて言う目的をもって行動してない限りありえないだろ。

どう考えてもこの広い空間を困むだけの数を集めるのに、適当に狩りをしてたつて理由は考えづらい。

「来ますよ」

「っち！」

俺はレスティアアナさんが言った瞬間、セリカちゃんを抱いて花畑の中心まで跳んだ。

直後に火の玉が着弾したつてことは、相手にはメイジ系のやつがいるつてことだな。

俺がそんなことを考えていると、そろそろとゴブリンが木々の隙間から現れる。

1、2、3、4……多すぎ。

数えらんねえ。

どう見ても昨日のゴブリンたちより多い。

「……ずいぶんゴブリンにモテますね」

「レスティアナさんがモテてんじゃないの？」

さすがにレスティアナさんもこの数を目の前にして動揺してるみたいだ。

そりゃそうだろ、襲ってくるゴブリンたちを切り捨ててはいるけど一向に増え続けるゴブリンたち、その数は優に100を超える勢いだ。

塵も積もれば何とやら。

いくら雑魚と言われるゴブリンでも、数が多すぎる。

ちらほら普通のゴブリンとは違う見かけのやつとかもいるけど、ゴブリンより弱いつてことはないだろ。むしろ、逆に強そうだ。

「オーガこそいませんけど、ホブゴブリンが10、ホブゴブリンメイジが15、ゴブリンメイジが30はいますね」

ゴブリンは進化する種族だ。

ゴブリンからホブゴブリンへ、さらに進化するとゴブリン系最強種のオーガになる。

あれだな、ワン キー、ゴウ キー、カイ キーって感じだ。順番違ったっけ？ まあいいや。

むしろ、ニド ン、ニド ーノ、ニド キ グの方が、それらしいか？

って、どっちでもいい。

兎にも角にも数が多いってことに変わりはないし、こっちには非戦闘員のセリカちゃんがいる以上圧倒的に不利だ。

そもそも、これだけの数の差を考えれば、セリカちゃんがいなくてたって苦戦しそうなのに……

やっぱり不幸だ。

というか、なんで俺が仕事を受けるたびにこんな厄介なことばかり起きるんだよ。

絶対悪い意味で主人公補正かけてるよ、あのインチキ女神。

勝手に主人公にしたとか言って、迷惑なことこの上ない。

「とにかく、セリカちゃんを安全な場所に連れてかなきゃまずいだろ」

「そうですね……これだけの数に囲まれてますし、一点突破で包囲を抜けましょう」

迫りくるゴブリンたちを斬っては投げ斬っては投げ、いつもは傍観してるレスティアアさんもさすがに戦わずにはいられない状況だ。

2人で一方向を狙って斬り進み、後ろはスクルドが守っている。

時折、真ん中にいるセリカちゃんを襲おうとするゴブリンがいたが、誰かがそいつを切り捨てて徐々に進んでいく。

基本的にゴブリンは知能の低い種だ。

囲むつてところまでは思いついても、包囲を継続する手段まで頭は回らないらしい。

包囲を抜けたところで俺がセリカちゃんを肩に担いで一気に駆け出した。

馬鹿なゴブリンも、程度ってものがある。

逃げる俺たちに向かって火の玉が雨のように降り注ぐ。

俺はサークレットのおかげで大したダメージにはならないだろうけど、セリカちゃんに当たったらやばすぎる。

なにかのアトラクションかとも思っているのか、セリカちゃんは楽しそうにキャッキヤと笑っている。

いや、笑ってる場合じゃないからね。

昨日のゴブリンメイジたちの猛攻よりもさらに激しい火の玉の雨の中を死ぬような思いで走り続け、俺たちはようやく森の外へと出ることが出来た。

はあ……死ぬかと思った。いや、まじで。

森の外に出たところでゴブリンたちも追撃をやめ、森の奥へと戻って行った。

もしかしたら、あそこはゴブリンたちの縄張りで、侵入者の俺たちを攻撃してきたのか？

だけど、この森は低危険度で、いたとしても数十匹程度のモンスターがいるだけのはずだ。

あれだけの数のゴブリンが縄張りにしてるなんて聞いたことがない。

念のためにギルドで確認した方がいいな。

もしも最近ゴブリンの縄張りになったんだとしたら、あの森の危険度を改める必要があるはずだ。

とりあえず、俺たちはそれぞれ怪我なんかがないかを確認して、街へ戻ることにした。

セリカちゃん、降ろしたからってなんでそんな不満そうな顔をしているんですか？

side out

バルデンフェルト帝国第6騎士団所属2等騎士 キッタローン・マグカフェルは典型的なエリート一家の出身で、この街に来ている騎士の中では、勇者である三井を除けば最も若い男である。

10歳でバルデンフェルト騎士学校へ入学、家の援助もあつたが歴代3位のわずか3年でそれも卒業し、それから数年の間は順調に出世を続けてきた。

バルデンフェルトの特殊な階級付の成された騎士の中で、騎士団所属の2等騎士と言えば近衛騎士団や精鋭として名高い白騎士団や黒騎士団へ上がるまであと一歩というレベルで、言うなれば2軍チームのトップ選手と言える。

ただの中小貴族の次男や三男であればそれでよかったのだが、キッタローンは違った。

キッタローンの今の地位は、騎士の家系としてバルデンフェルトでも有名なマグカフェル家にとって実に恥ずべきことであり、キッタローンは実家ではつまはじきものにされていた。

兄はキッタローンの年齢のころには白騎士団で名を馳せていたし、弟はすでに黒騎士団で4等騎士として活躍している。

3人兄弟の中で、名前のない騎士団ナンバースに所属しているのはキッタロオンだけだ。

キッタロオン自身そのことが恥ずべきことだと言つのはわかっている。

戦場では武功をたてようと駆け回るが、いつも大きな手柄は横から奪い取られ、彼自身の武功は微々たるものでしかない。

それが自分よりも下の騎士であれば、いくらでも文句はいえたのだが、彼の武功を奪うのはだいたいが彼よりも上の階級の騎士だ。

それを同僚に愚痴ったこともあった。

しかし、その同僚がそれを上に報告し、同僚は昇進、自分は降格

いつもいつも、どこかでキッタロオンは裏切られていた。

弱小国家を攻めるセリル姫の騎士団に組み込まれたことも、彼には何もいいことはなかった。

本来であればセリル姫が隣国を攻めるのだから、近衛騎士団が出るものかと思われていたが、もともと数の少ない王族の近衛騎士団は本国に詰めているため、単なる弱小国家を攻めるためにわざわざ出撃したりはしない。

キッタロオンが組み込まれたのは名前のない騎士団ナンバースから各2名ずつ選出された仮初の騎士団だ。

しかも、その騎士団長はもともとセリル姫が子飼いにしていたバルデンフェルトの騎士ですらなかった男だったのである。

仮初とは言え近衛に近しい仕事を与えられたことに家の人間は喜んでいたので、騎士団長が騎士でもなかった男であることを知ると、キッタローンに対する態度はすぐに普段のものに戻った。

それでも、戦になれば武功の立てようはある。

キッタローンはわずかばかりの期待を持って隣国へと向かったのだが、戦の1つもせずには国は落ちた。

キッタローンを取り巻く環境は何一つとして変わらない。

弱小国家を攻め落とした次は、リングガ地方中央地域でも強大で知られるリエルド王国との戦いになるのだが、その戦いにセリル姫は赴かない。

つまり、キッタローンはこのまま本国へと戻ることになる。

リエルド王国を攻めるための本体が到着するまでの時間を落とし、た国で過ごすことにはなったが、キッタローンには何の成果もなく、ただ無為な時間だけが過ぎていた。

そしてそれは、キッタローンが苛立つのに十分な時間であった。

臨時の近衛兵団、騎士団ですらない、臨時の近衛兵団に選ばれた名前のない騎士団の騎士たちは今の状況に憤りを感じる様子がない。

それだけでも、現状に不満を持つキッタローンにとっては許しが

たいことだと言つのに、さらに彼を苛立たせるのが1人の冒険者の存在だ。

近くの迷宮に異変があり、魔物が迷宮の外へ溢れ出た際、事態を収めるためにセリル姫がとつた方法が冒険者を雇うことであつた。

なぜ、自分たち騎士の手で解決させようとしなののか。

なぜ、冒険者などという無法者に頼ろうとするのか。

キッタローンには理解できず、苛立ちはつのである一方だつた。

「冒険者……か……」

キッタローンは誰にも聞かれぬほど小さな声で囁くのだつた。

31話 森は大変なんだぜ（後書き）

現在展開しているセリカ（旧プリル）のお話で1章は終わりです。

side out後の話でいろいろと疑問に思うことはあるかと思いますが、1章の間にある程度説明が入りますので、疑問は疑問のまま取っておいてください。

基本的に話と関係ない、騎士団の説明だけさせてもらいます。

名前ナンバースのない騎士団は、黒騎士団や白騎士団のように 騎士団ではなく、第6騎士団のように第 騎士団という数字で表される騎士団のことです。

黒、白、近衛を精鋭、野球なんかの1軍チームとした場合、ナンバースは2軍チームです。

騎士の等級に関しては説明を入れるつもりですので省略します。

追記

箱庭とは関係ありませんが、活動報告にてアンケートを行っています。興味がある方はよろしければお答えください。

32話 王国の騎士だったんだぜ

(略)

ゴブリンに追い掛け回された森から、ようやく街へ戻ってきた俺たちは、その足でオレンジ髪の宿へ向かった。

ギルドへ行くにしても、セリカちゃんとの話をはっきりさせてからじゃないと気分が悪い。

セリカちゃんの手を引いて宿へ入ると、俺の目に飛び込んできたのは酒場スペースのカウンターでどうしようもないほどに取り乱していたオレンジ髪の姿だった。

見るからに、関われば面倒そうな雰囲気を出していて、正直近寄りたくない。

だけど、このまま回れ右をしてしまえば、セリカちゃんの発言の真意ってのがわからなくなってしまう。

……よし、決めた。

帰ろう。

セリカちゃんはここに残していけば、そのうちオレンジ髪だって気づくだろう。

君子危うきに近寄らず、もう少しあいつが落ち着いたら改めて聞くことにしよう。

そう思って宿を出ようとしたんだけど……あの、セリカちゃん。なんで俺の服の裾を掴んでいるのかな？

恨めしそうに見つめられてもお兄さん困っちゃうんだけど。

「セエリイカアアアアア！！！」

やばい、気づかれた。

オレンジ髪がものすごい気持ち悪い顔でこっちに走ってくる。

男の俺でもあれはちょっと生理的に受け付けない。

マジで逃げたい。

というか、逃げよう。

走り出そうとしても、相変わらず服の裾をセリカちゃんが握っているから走れない。

え、どうすんの？ どうすんのこれ……

今にもオレンジ髪がこっちに飛びかかって来ようとしている。

考えているような時間はない。

「せえりいかあああああ！」

「どうおりゃあ！」

ルパ 3世が「ふうじ ちゃ〜ん！」と飛びつくように跳んだオレンジ髪の顔面めがけて拳を突き出す。

セリカちゃん以外は視界に映っていなかったんだろう。見事なまでに俺の拳はオレンジ髪の頬を打ち抜き、オレンジ髪はテーブルや椅子を巻き込みながらきれいに吹っ飛んだ。

まさか、ここまで威力があるとは……

レベルが上がったおかげで、筋力とかその辺も上がってるんだろう。パンチ力が地球にいたころとは段違いだ。

ピクリとも動かないオレンジ髪。

もしかして、やりすぎた？

いくらあまりの気持ち悪さに加減が出来なかったとはいえ、殺してしまったりしたら俺は犯罪者の仲間入りだ。

お姫様に気に入られてるからとかそんな理由では、どうにもできないだろう。

ま、まずいかもしれない……

「お、おい。大丈夫か？」

「う、うぐう」

どうやら生きてたみたいだ。

よかった。これでひとまずは安心できる。

見た目重症っぽいけど、たぶん大丈夫だろう……うん、たぶん。

こういうやつは、ゴキブリ並みの生命力を持ってるって相場が決まってるんだ。

「……兄ちゃん、そいつは大丈夫なのか？ 医療魔術所に連れて行った方がいいんじゃない……」

心配そうな顔をして宿屋の主人が話しかけてきた。

大丈夫大丈夫。こういうやつは、この状態から案外すんなり復活するから。

「うぐう」

……血を吐いた？

というか、俺は主人公らしいけど、この世界は物語じゃなくて現実なんだよな……

つまりこいつにキャラクター性なんてものを求めても無意味だ。

こいつはこのままだと………

や、やばい!?

俺は慌ててオレンジ髪を担ぎ上げると、セリカちゃんの手を引いて宿を飛び出した。

向かうのはギルド、あそこなら診療所が併設されてる。

結論。

いくらオレンジ髪が気持ち悪かったからと言って、手加減はしましよう。

よかった。

本当に良かった。

オレンジ髪はなんとか一命を取り留めた。

あと5分遅かったらまずかつたらしい。

マジでよかった。

でもあれだ、人の名前を勝手に語ってたわけだし、天誅ってやつだろ。うん、きつとそうだ。

治癒魔法つてのは本当に大したもんで、瀕死だったオレンジ髪が瞬く間に復活した。

今では、無事に帰ってきたセリカちゃん……オレンジ髪曰く、誰かに誘拐されたかと思った。だそうだ。

とまあ、無事にセリカちゃんと再会できたオレンジ髪がセリカちゃんを抱きしめておんおんと泣いている。

そんなに心配なら、しっかりと見てなきゃダメだろ。

というか、お前とセリカちゃんはどどういう関係だ？

……頭の中でいくら考えたって答えなんて出るわけないか。

「なあ、お前とセリカちゃんってどどういう関係なんだ？」

「ん？」

オレンジ髪が落ち着いたところを見計らって、俺は直接オレンジ髪に尋ねた。

「ここではぐらかされでもしたら、本気で正体を明かして問い詰めてやる。」

「幸いにもここはギルドだ、いくらでも俺の正体を証明してくれる方法はある。」

「……それは、どういう意味だ？」

「セリカちゃんが言ってたんだ、お前はお兄ちゃんじゃないってな。そして、お兄ちゃんってのは俺を指してるとも言っていた。最初は、お前とセリカちゃんが兄妹かと思ってたんだけど、違うんだろ。だったら、お前とセリカちゃんの関係ってのはいったいなんなんだ？」

「……なるほどな」

オレンジ髪は観念したかのように1つため息をつくど、抱きしめていたセリカちゃんから手を離し、適当な椅子に腰かけた。

「最初にお前に謝らなくちゃいけないことがある」

「？」

「俺は獅子王ガイじゃない」

「……………」

ええ……まあ、知ってますけど。

ていうか、ええ！？　ここではらしちゃうの？

せつかく、お前がピンチになったところで颯爽と正体を明かすつもりだったのに……

いや、まあ大丈夫だ。まだこいつが俺じゃないって話しただけで俺の正体がばれたわけじゃない。

「俺の本当の名前はゲイル・チゲーズ。リエルド王国で騎士をしている」

「は？」

リエルド王国ってあれですよ。お隣の国でしょ？

そろそろバルデンフェルトと戦争になるけっこうデカい国だって聞いたけど。

その国の騎士がなんで、バルデンフェルト領のこの街にいるんだ？

「その、リエルド王国の騎士がなんでこの街に？」

「実は、王国の命を受けて獅子王ガイを探しに来たんだ」

俺を、探しに？

いったいどうして。

少なくともリエルド王国なんて行ったこともないし、国がかかわるようなデカい規模の何かをした覚えなんて……あるな。

そう言えば、迷宮をクリアするなんて100年に1度くらいの偉業だ。

どんな理由にしろ、それを成し遂げた俺はある意味有名人なんだろう。

「……それで、なんで獅子王ガイの名前を騙ったりしたんだ？」

「名前を騙ればそのうち本人の方からやってくるだろうと思ってな。本人が来ないとしても、彼に近い人間にでも会えればいくらでも方法はある」

なるほどね。

たしかに、名前を騙っていれば本人のほうからやって来る可能性は高い。と、思う。

少なくとも、俺は自分の名前を騙られれば理由を知りたいし、悪さのために使われるようなら相手を潰すためにも騙った人間を探す。

他の人間はどうか知らないけど、オレンジ髪、ゲイルが探して

いるのは俺なんだから、間違った方法ではないだろう。

だが、1つ思うんだ。

「わざわざ、そんなことしなくても冒険者ギルドで名指しで依頼を出すとか、受付に直接依頼したいから紹介してほしいとか言えばよかったんじゃないのか？」

「!？」

気づかなかったのかよ……

この街の人間は俺の顔も知らない人間が多いし、外を出歩くのも苦労しない。

幸いにも顔もわからない英雄のように扱いたいという風潮があるみたいで、ギルドの方にも直接依頼をしてくる人間はほとんどいなかった。

まあ、何人かはいたし、直接話もしたけど、まぐれで迷宮をクリアしただけの俺には無理そうな依頼や冷やかしながらもあつたおかげで、直接来た依頼ってのは1度も経験がない。

だが、少なくとも直接俺と話す方法はいくらでもあるはずだ。

「な、なるほど。確かに思いもしなかった」

あれだ。こいつやっぱ馬鹿だ。

リエルド王国ってのは、どうしてこんな馬鹿を寄越したんだろう。

「まあ、今更だけどね。で、探し出してどうするつもりなんだ？」

「……我が国で獅子王ガイに会いたいという者がいてな。王国まで同行を願うつもりだ」

……わざわざ隣の国へ？

直接、その人が会いに来ればいいじゃないか。

それとも、国を出れないような重要人物？ それとも、病人とか？

少なくとも、わざわざそんな人間が会いたいと思える人間じゃないと思うんだけどな。

「なるほどな……って、その話はここまでにして。セリカちゃんは何のためにあなたと一緒に？ 話を聞いた限りじゃ、セリカちゃんがこの街に来る理由がないだろ」

もしもゲイルが不慮の事故なんかで使命を果たせずに倒れた場合の保険だとしても、セリカちゃんじゃ幼すぎる。

こんな子供がリエルド王国の騎士つてわけでもないだろう。

そもそも、俺の聞いた限りでは、リエルド王国つてのは典型的な選民思想、人間至上主義の国つて話だ。

セリカちゃんは鬼人族、亜人の一族である以上は、リエルドの風潮から考えてそんな国からの命令を受けるような立場にあるとは考えづらい。

「セリカは、俺の親友の妹だ。そいつもその両親もとある理由で亡くなつてな。国ではいろいろと後ろ指さされるが、俺が面倒を見ていたから、本当は俺に獅子王ガイを連れてくるよう頼んできた者に懐いていたから、彼女に預けたはずなんだが、いつの間にか馬車の中に潜り込んでいてな。気づいたのが遅かったから、追いつくわけにもいかないから連れてきたんだ」

なるほど。

だから、お兄ちゃんじゃないつてセリカちゃんは言ってたわけだ……ん？

だったら、なんで俺がお兄ちゃんになるんだ？

死んでしまったつて言うゲイルの親友がお兄ちゃんで、俺は違うだろ。

もしかして、俺と似てるとか？

「その親友さんは俺に似てるんですか？」

「いや、まったく。あいつは顔もよかつたし、背も高かつた。鬼人だつて言うのに珍しく魔法の扱いにも長けていた。あらゆる意味で規格外の英雄みたいな男だつたな」

……ええ、ええ。俺は背も高くないし顔もよくないですよ。

なんで、わざわざそんなことを言つて俺と比べるのかな？

似てないなら、似てないって一言いえば済むんじゃないですか？

あれか？ この世界の人間はとりあえず相手をけなすのがコミュニケーションなのか？

「セリカちゃんが、俺のことをお兄ちゃんつて呼ぶ理由つて何か思い当たることはあるか？」

「……ないな。だからそのことでも昨日は驚いたんだ。セリカが兄と呼んだのは、俺の親友だつた実の兄だけだつたからな」

じゃあ、なんでだろう。

本人に聞いても要領を得ないし、そもそもほとんどしゃべつてくれない。

懐いてくれてるってのはよくわかるんだけど、お兄ちゃんって呼ばれるたびにレスティアナさんに白い目で見られたりして心が痛むんだよな。

とりあえず、理由が知りたいんだけど……無理か。

「話は、これで終わりか？ だったら、せっかくだから、今教えてもらった方法で獅子王ガイにコンタクトを取りたいんだが」

「ああ。うん。聞きたいことはもうない」

「……ん？」

もしかして、まだ気づいてない？

というか、本気で俺が獅子王ガイじゃないって思ってるのか？

ゲイルは、診療所を出ると、すぐ隣にあるギルドへと入って行った。

……まあいいか。どうせ、話は聞いたんだし。

でも、どうするかなあ……

リエルド王国で俺と会いたって人の話も気になるけど、この街も慣れてきたから結構気に入ってるんだよな。

それに、バルデンフェルトとリエルドが戦争になったら、簡単に

国境を超えることはできなくなるだろう。

この街ではそんな気にならないけど、今だって開戦前の緊張状態が続いてるみたいだから、たぶん簡単には行き来できない状況だろう。

下手したら、リエルドに行ってる間に開戦、この街には戻れないってことになるかもしれない。

この世界に召喚された街だし、1カ月程度だって生活してるから愛着もある。

少なくともこの世界で俺の故郷って言えるのはこの街だ。

戻れないってことになったら困るし、断ろうかな。

……いや、でもお姫様をお願いしていつでも国境を越えられるようにしてもらおうか？

いやいや、そんなことしたら見返りにかなり面倒な依頼をされそうだ。それはちょっと嫌だ。

この街を出たらアリアさんともしばらく会えなくなるだろうし、おっさんの店でだべることだってできなくなる。

デメリットが多すぎるし、この話は断ろう。

うん。セリカちゃんと別れるのは辛いけど、アリアさんやおっさんと別れるのだって辛い。

この街に残ることに十分なメリットがある以上は、セリカちゃんと別れるのだって耐えられる……はずだ。

うん。大丈夫だ。

ギルドで依頼を終えたらしいゲイルが診療所に戻ってきて、セリカちゃんを連れて宿へ戻ることになったとき、俺と別れたくないと俺の腕を掴むセリカちゃんを前にして、俺の決心は早くも鈍るのだった。

32話 王国の騎士だったんだぜ（後書き）

もうすぐ1章は終わります。

ようやく改訂前の旧作と同じぐらいのところまで進んだわけですが、文字数が1.5倍くらいに増えている……
このままだと旧作と並ぶ2章に入るころには文字数がもっと増えていそう……

まあどうでもいい話なんですがね。

セリカがお兄ちゃんと呼ぶ理由なんかはもう少し後でわかります。

33話 俺が本物なんだぜ

(略)

「……もう一度言ってもらえるか？」

オレンジ髪ことゲイルに、冒険者個人に依頼したいのなら、ギルドで呼び出せばいいと言った翌日。

案の定張り出されていた呼び出しに応じて訪れたギルドの一室で、俺を前にしたゲイルはそう言った。

「どうも、直接依頼をしたいからって呼び出しをかけられた獅子王ガイです」

「……君が獅子王ガイ？」

「ああ。最初にあつた日にも言っただろ？」

「あれは冗談だと思った」

「普通は気づくと思うけどな」

「それは俺が馬鹿で間抜けだとも言いたいのか？」

「……違ったのか？」

普通気づくだろ。

というか、本気で今まで気づいてなかったってのには驚きだな。

「……念のためにギルドに確認しても？」

「構わないぞ」

「ちょっといいですか？」

「ん？」

「なんだ？」

「先日から思っていたんですが、その面白い口調はなんですか？私を笑い殺すつもりですか？」

「……やっぱり？」

自分でも似合わないとは思ってたんだけど、せっかくすごい冒険者みたいに周りからは思われてるみたいだし、それっぽいしゃべり方にしようと思ったんだけど失敗だったかな……

普段の口調を知らないゲイルからすればわからないだろうけど、レスティアナさんは笑いをこらえてるし、ドアの向こうからはアリアさんの笑い声が聞こえる。

笑わないのはスクールだけだ。

……いや、寝てるから気づいてないだけか。

ゲイルなんかは何を言ってるのかわからないって顔をしてるけど

……

やっぱり似合わないことはするもんじゃないな。

「いや、ゲイル。気にしないでいいよ。こつちの話だから」

「……急に砕けたしゃべり方になったな」

「こつちが素だから、気にしないでくれ」

「そうか」

「で、ええ〜と。依頼は昨日も話してた、リエルド王国に同行してほしいってやつだろ？」

「ああ、そうだ」

「断る」

「……報酬も聞かずに答えていいのか？」

「報酬とか以前にこの街を離れるつもりはないから」

「……それは困ったな」

お前、それは全然困ったような顔してないよな？

なにその不敵な笑みは。

髪の毛黒く染めて、髭生やして、問題ない。とか言ってくれない？

いや、それにしても似合わないか。

「……なにか俺が断れないようにする作戦があるとでも？」

「いや、そんなものはないな」

だったら、なんだ？

いや、作戦があっても面と向かって教えるわけないか。

そこまでこいつも馬鹿じゃないってことだな。

「断られるなら、了承するまで付きまとうだけだ」

……作戦なかった。

というか、迷惑だなおい。

セリカちゃんに付きまとられるならともかく、こいつみたいなガテン系の兄貴っぱいのに付きまとられるなんて……ケツが痛くなりそうで怖い。

いや、昨日のセリカちゃんに飛びかかってきたときのキモい顔思い出したら、なんかマジで怖くなってきた。

大丈夫だよな？

こいつにそんな趣味は……無いと信じたいけど。

「獅子王ガイ。逃がさないぜ」

舌なめずりをするゲイル。

……いや、自信なくなってきた。

誰か助けて……

s i d e o u t

迷宮の脅威もなくなり、最低限の警戒さえ怠らなければ問題がなくなっただはいえ、バルデンフェルトの騎士たちには、油断という言葉はない。

今日もまた、鍛錬場にて騎士たちがお互いの力を高めあうために共に鍛錬を続けている。

キッタローンもその1人であり、振るう剣は鋭く、休むことなく鍛錬を続けているために滝のような汗が剣を振るうたび地面に落ちる。

「キッタローンのやつ、まだ休まないのか？」

「もう3時間以上ぶっ続けだろ？ そのうちぶっ倒れるんじゃないのか？」

鍛錬場の隅で壁に背中を預けた騎士たちは、いつまでも鍛錬を続けているキッタローンを眺めながらぼそぼそつぶやいた。

「あそこまで無理してるのって、ガイルが試合で負けた時に女みたいな顔して、戦い方も女みたいだなって負け惜しみ言ったからだろ？」

「たぶんな、まあ確かにキッタローンのやつは女みたいな顔してるが、負け惜しみ言われたくらいであそこまでムキになるか？」

「でも女顔ってことがもともと、あいつのコンプレックスみたいだからな。それに戦い方だって、正面から力押しって言う騎士の正道からそれてるしな」

「動き回って、フェイントも織り交ぜた攻撃ってことだろ？ でも、三井だつてあいつと同じ戦い方じゃないか」

「三井のやつは同じ戦い方でも、時と場合を使い分けるからな。正面から戦うべき時は、きつちり正面から戦ってるよ。その点考えると、キッターンはいつもあの戦い方だからな」

「そうは言っても、たしかあいつって子供の時に腕に大けがして腕力が俺たちの半分以下だつて話だろ？ それで同じ戦い方しろつてのは無理があるだろ」

「無理だつて言うなら、騎士になんてならなければいいんだ」

「おいおい、あいつつてマグカ费尔家の次男なんだぜ？ 騎士にならないなんて不可能だつて」

「お家に逆らえないつてのは貴族の定めつてか」

「それに、俺はあいつの戦い方だつて間違つてないと思うしな」

「本気か？」

「おう。だつて、あいつの戦い方はフェイントを混ぜたりはするけど、不意打ちとかはしない。正々堂々つて意味では、あいつの戦い方だつて十分に騎士つて言えるだろ」

「俺も同感。力押しだけつてのは、バルデンフェルトが数で敵を圧倒できるから多少の策なら気にしないで戦えるからで、ほぼ同数の敵が相手だつたらカモにされて終わりだし」

「まあな。確かに、そうやって考えると今度のリエルドとの戦いなんかは厳しいものになるだろうな」

「まあ、俺たちはリエルドとの戦争がはじまったら、本国に戻ることになるけど」

「そうだな。ああ、死ぬ心配がなくてよかった」

「おいおい、その言葉は、騎士としてどうなんだ？」

「いいんだよ。騎士だって死にたくはないさ」

「まったくだ」

気づけば何人も騎士たちが集まって笑い転げていた。

さすがに数十人も騎士がいても、端の方に5人でも集まれば目立ってしまう。

その場に集まっていた騎士たちは、どう考えても5人より少ないことはありえない。

とすれば、鍛錬場の中央で鍛錬を続けている騎士たちから見ても、あいつらは何をしているんだ。と奇異の視線を向けられていた。

そして、誰もが視線を向けているだけで済む話ではない。

たとえ監督する人間がいなくとも、まじめな人間とはどこにもいるものなのだ。

「お前たち、いつまでもそこで何をしている」

「っげ!？」

「き、キッターローン!？」

「いや、これはその……」

「さっさと鍛錬を続ける!」

「は、はい!」

「た、ただいまあ!」

集まっていた騎士たちはキッターローンに一喝されてわらわらと散って行った。

それぞれが鍛錬を始めるのを見て、キッターローンはようやく一息ついて壁に背中を預ける。

正直へたり込んでしまいたいほどに疲れていたが、先ほど騎士たちを一喝した自分がだらけるわけにもいかず、気力だけで体を支えている。

「ずいぶん、力が入ってるな」

「……三井か」

「あんまり根を詰めすぎて倒れたりするなよ。お前はこの街にいる騎士の中じゃあ一番の実力者なんだから」

「貴様を除けば、だろう」

「はは、俺は騎士じゃないからな」

「それで、セリル姫直属の近衛隊隊長を務めているのだからな。まったく、代わってほしいものだ」

「一応、姫様直々の使命だから俺の一存で交代ってわけにはいかないよ。自分でも分不相応だとは思っけど」

「実力を考えれば妥当だ。ただ、貴様が騎士でないと言うことが気に入らない」

「……それは、ガイ君も同じかな？」

「……なに？」

「この間も君らしくなくつつかかっていたけど、ガイ君が騎士でもないのに迷宮をクリアしたから苛立ってるのか？」

「……違う」

「だったら、なんで」

「やつが冒険者だからだ」

「？俺だつて元冒険者だけど？」

「貴様は、元冒険者であっても、今は冒険者をやめて我が国の勇者の1人だろう。だが、やつは姫様の誘いを断り、冒険者を続けている」

「……もしかして、姫様の誘いを断ったことに腹を立ててるのか？」

「……………」

「つまり、ガイ君に嫉妬してるんだ」

「ち、ちがう！」

「ははは、冗談だよ。まさか、君が姫様に恋してるってことはないよね。許婚までいるんだから」

「……………」

「どうした？」

「……………あの話は破談になった」

「マジで……？」

「……………ああ」

「すまん」

「……………謝るな」

三井からすればまさか想像もしていなかっただけに、軽い調子で言ったはずの言葉が2人の間に重くのしかかった。

壁際で話している2人以外は皆、剣を振るい、中には試合を行っている者もいる。

「っと、よかった見つかった」

「どうした？」

「実は、ガーシュが次の見張り番だったんですけど、午前の鍛錬で怪我しまして、代わりに誰かをお願いしたいんですよ」

「……………午前の連中で、代わってくれるやつはいなかったのか？」

基本的にこの街にいる騎士たちは2組に分けられ、鍛錬や哨戒、雑務を午前と午後に分けて行っている。

仕事の欠員が出れば、本来なら各組の中で調整が必要になるのだが、生憎と午前の鍛錬で乱闘騒ぎが起こったためにけが人が続出、欠員が多すぎて数が足りないらしい。

「まったく。乱闘に参加した人間は全員減給と始末書の提出、あとは今後1カ月は休暇申請不許可だな。というか、なんで午前のうち

に報告しないんだ」

「それは……マルシユ副長も乱闘に巻き込まれてしまったので指示がなく、誰かが報告するだろうと全員が考えていたようでした」

「……休暇申請不許可は2カ月、始末書は各自10枚以上だ。見張り番も継続してやれ。と、言いたいところだが、キッタローン。行ってくるか？」

「なに？」

「今日のお前はちょっと無理をし過ぎだ。そろそろ、鍛錬時間も終わりだし、お前は見張り番で体を休めてろ」

「……………わかった」

「よろしくな。俺が汗を流し終わったら交代に行くから、それまでは頑張ってくれ」

日はまだ高い時間だと言うのに太陽の光が一切届かない地下にあつては、わずかな松明の頼りない光だけが唯一の光源だ。

補強はなされているものの、地面がむき出しになっている地下牢のじめじめとした空気は、鍛錬を終えたばかりで汗も流していないキッタローンには余計に不快に感じられた。

牢に入れられているのはたった1人。

だからと言って、警戒を疎かにしていいわけでもない。

本来ならば、位の低い騎士が行う仕事ではあるものの、三井の気遣いであればこそキッターローンも引き受けた仕事だ。

「……見ない顔じゃな」

「……………」

牢に入れられたただ一人の男、ジ・ジーを前にしたキッターローンは何も言おうとはせずに冷たい視線を向けている。

相手は、自覚の有り無しは別にしても迷宮の力で大きな問題を起こしかけた犯罪者だ。

そんな男と無駄な会話をする気はキッターローンにはかけらもなかった。

「……おもしろくないのぉ。お前は、あの男のことを聞かんのか？」

「……あの男？」

「わしの研究しておった迷宮をクリアした男じゃよ。名前は………シオーガイじゃったか？」

「……なぜ、あの男のことを貴様に聞く必要がある」

「なぜ？ 当たり前じゃろう。あいつを召喚したのはこのわしなのじゃから」

「……なんだと？」

ジ・ジーとセリル姫が会話したあの日、謁見の間にいたのは隊長である三井を除けば、キッタローンたちとは別のもう一組の騎士たちだった。

つまり、キッタローンはあの日にジ・ジーが口にしていて、獅子王ガイと言う冒険者を召喚したという言葉は聞いていなかったのだ。

これがキッタローンではなく、別の騎士であれば驚くこともなかっただろう。

だが、キッタローンは他の騎士たちとほとんど会話をしない。会話をしても事務的な会話がほとんどであり、ジ・ジーに関する噂話などまったく耳にした覚えがなかった。

「お前が、やつを……」

「そうじゃよ。ふん。お主はわしを馬鹿にはせなんだな」

「どづいづことだ？」

「他の連中は皆、この国に残っていたわしが召喚魔法を使えるはずがないと言い、連中の信じる真実を無理やりにわしから語らせようとした。それとも、お主も本心ではそう思っているのか？」

「……確かに、あのデ・ブー王が政権を握ってからこの国にはろくな人間はいなかったな」

「ふん。それがわしに召喚魔法を使えぬ理由にはならんというのに、連中はそれがわかっておらん」

「ふむ。なるほどな」

「……お主には話してやろうか？ わしがなぜこの国で召喚魔法を使ったのかを」

「……そうだな。頼む」

「答えは簡単よ……」

33話 俺が本物なんだぜ（後書き）

念のため、途中で更新したわけではありません。

演出の都合上、会話の途中で話を区切っただけです。

というか、今回はいつにも増して会話ばかりですが、ここまで会話が多い回は今までにあっただらうか……

34話 俺の出番はないんだぜ

ジ・ジーの話を聞き終えたキッタローンは、自分の常識がにわか
に崩れ去る思いだった。

ジ・ジーが獅子王ガイを召喚した方法。それは、今までの召喚魔
法とは根本から違う方法だったからだ。

仮にこの方法を発表したとしても、同じ方法は2度と使われない
だろう。おそらく、たとえ知っていたとしても、禁忌とされこの話
をすること自体が禁じられるはず。

下手をすれば、知っているだけで暗殺される心配すらある。

キッタローンははじめとした地下に居ながら、自分の喉がから
からに乾いているかのように感じられた。

「お前は、そんな方法でやつを召喚したと言うのか？」

ジ・ジーの話を聞いている間、終始無言を保っていたキッタロー
ンはようやくこれだけの言葉を絞り出した。

「そうじゃよ。お主もあの男を見たじゃろ。それが証拠じゃ。口惜
しいがわしには召喚魔法は使えんよ」

話を聞く限りでは、今はバルデンフェルトに併合されているこの国は、召喚魔法が使えるだけの魔法使いはいなかった。

この老人もその例には漏れていなかったのだろうことは、キッタローンにもよく理解できていた。

「確かに、お前がやったのは召喚魔法ではない。だが」

だからと言って、なんとという方法で召喚を行ったと言うのか。

例え、そのことを思いついたとしても、実行することなど不可能だ。いや、普通に考えれば思いつくことすらあり得ないだろう。

それだけ、この老人が行ったことは常識を逸していた。

「だが、結果は召喚と何も変わらんじゃろ？」

悪びれた様子もなく言い放つ老人に、キッタローンは背筋が冷める思いだった。

狂信者。

不意にそんな言葉が脳裏をかすめる。

「して、お前はどつするつもりじゃ？」

「どつする……とは？」

「これをお主らの姫に報告するのか？ それとも、黙っているつもりか？」

「それは……」

本来であれば報告すべき事柄だ。だが、報告してどうすればいいのか見当もつかなかった。

仮に報告したならば、帝国は真実を見極め、その方法を使おうとするだろう。しかし、どうやってもこの方法は使えない。

そうすると、帝国はこの方法が存在しないものとしてあらゆる記録を抹消しようとするはずだ。

事実を知っている自分は暗殺される可能性がある。

ならば、どうすればいいのか。キッターンにはどうすればいいのかわからなかった。

「お前は、この方法を誰かに話すつもりはあるのか？」

「……ない。お主が最初で最後じゃよ」

「だが、あの男を召喚した方法がわからなければ帝国はお前を拷問にかけてでも真実を明らかにするだろう。それでも、この話をしな

いと言う保障ができるのか？」

「大丈夫じゃよ」

ジ・ジューはそう言うと、袖の中から小さな瓶を取り出した。

おそらくだが、キッターローンにもその中身の予想がつく。

「毒……か」

「そうじゃよ」

どうやって持ち込んだのかはわからないが、間違いないだろう。

ジ・ジューの纏う空気、ジ・ジューの瞳が真実だと言つことを物語っているのが、キッターローンは経験からよく理解できた。

「……どうやって持ち込んだのかは聞かないが、そんなものを用意しておいて、なぜわざわざ私に話をした」

「この世でやりたいことがなくなったからじゃ」

「なに？」

「わしを加護していたラスイーダに見放された。こうなっては、わたしには今まで生きる糧としていたことのすべてが、夢の話になって

しもうた。もう、わしにはこの世でやりたいことも生きる意味もない」

「だから、死ぬ……と？ だったら、何も話さずに死ねばいいだろう」

「この世でやりたいことはないが、最後に、わしが見つけたこの方法を誰かに伝え、それをどうするのかをあの世から見ることが出来ればいい。それだけじゃよ」

「……お前が死ねば、私はこの方法を墓場まで誰にも話さず持つていくぞ」

「それもまた一興じゃ。この話をどうするかはすべてお主の思うがまま」

そう言ってジ・ジーは笑みを浮かべた。

今まで幾度となく戦場に出てきたキッタローンでも、このような笑みを浮かべる人間などほとんど見たことがなかった。

死を悟り、死を受け入れ、それでいてこれからも生きるものを呪う笑み。

キッタローンには、ジ・ジーの笑みが死神のそれにしか思えなかった。

不意に誰かが近づいてくることが気配で察したキッタローンは、自らの顔にありありと浮かんでいるであろう感情を無理やりに押し

とどめた。

案の定、三井が扉を開けてその姿を現す。

「お待たせ。他の連中はみんな汗も流し終わったし、ここは俺が代わるからお前も行って来いよ」

「……ああ、わかった」

ジ・ジーから離れることが出来る。そのことだけでキッターローンは、いくらか救われた気がしていた。

「まだ、話そうとはしないんじゃないな」

「はい」

その日の夕方に近い時間になって三井はセリルの執務室を訪れていた。

話すのは、地下牢にいるジ・ジーのことだ。

なぜ実力的には不可能なはずのジ・ジーが、獅子王ガイを召喚で

きたのか幾度となく尋問を重ねてきたが、一向に話そうとはしない。

時間はあるので焦る必要はないが、あまり悠長なことを言っていて何か問題が起こってしまえば面倒なことになる。

なによりも、セリルは自らが感じている獅子王ガイの異質さの正体は何なのかを早く知りたくて我慢がならなかった。

「このまま黙っていれば拷問も辞さぬと言うことは伝えたのじゃない?」

「はい」

「そうか、ならば明日は実際に拷問にかけよ。無論殺さぬようにな」
「っは」

セリルの言葉に三井が頷いたところで、不意に扉の向こうが慌ただしくなり、誰かが扉をたたいた。

「どうした」

「し、失礼します」

セリルの言葉に促されて扉を開けたのは当然のことながら、1人の騎士。

息を切らし、肩を上下させている様子からも慌ててこの場所に来たのは瞭然だった。

「どうしたのじゃ？」

「そ、それが……」

「む？」

「その……」

「どうした、速く言え」

「っは！ ち、地下牢に捕らえていたジ・ジーが死亡しました！」

「な、なんじゃと!？」

まったく想像もしていなかったことを言われ、セリルは乱暴に椅子を蹴飛ばして立ち上がった。

「ど、どういふことじゃ」

「それが、どうやら毒を隠し持っていたようで、気づいた時には手遅れに」

「っく。牢に入れる前に身体検査はしたはずじゃろう。何者かが毒

を渡したとでもいうのか？」

「それは、現在調査中です」

「つく」

セリルは侍女、マルフィオレが位置を直した椅子に座りなおすと不機嫌さを隠すこともなく舌打ちした。

報告に来た騎士は、自分がその場に居合わせたのに何もできなかったことを悔やんでか、肩を落としている。

「話は分かった。とりあえず俺もすぐに行くから、お前はマルシユを呼んできてくれ」

「っは！」

落ち込んでいるのはよくわかるが、いつまでもそのままにいるわけにはいかない。

三井は気落ちしていた騎士を行かせると、セリルの方へ向き直った。

「調査は私の方で進めさせていただきます。姫様の相手は、マルフィオレさんがお願いします」

「了解しました。姫様のご機嫌取りは私がやっておきましょう」

「本人を前にそんな話をするでない！」

ジ・ジの死亡騒ぎがあった翌日、キッタローンは城を出て街を訪れていた。

昨夜はジ・ジが牢に入ってから見張り番をしていた全員の事情聴取が行われ、キッタローン自身も当然話を聞かれたのだが、三井が突発的に頼んだという事実があるため、毒を用意することは不可能となり、早々に解放された。

実際のところは、ジ・ジが毒を持っていたことを知りながら報告もせず、ジ・ジの行った召喚の真実を知っていながら、それも報告していない。

その事実が、キッタローンの気を重くさせていた。

人通りが多くにぎやかな街の空気も、照りつけるような太陽の光さえもキッタローンの沈んだ心を救うには力が足りず、道行く人々はキッタローンの異様な空気を感じ取り彼の周りだけは壁があるかのようにぼっかりと空間ができていた。

そんな周りの様子にも気づかず、キッタローンはバルデンフェル

トに仕える騎士として、報告をするべきかしないべきかという身が裂けるような葛藤の中にあった。

騎士の本懐としては報告をすべきであろう。

しかし、報告をすれば自らの命が危うい。

戦場であれば自らの命を懸けて戦うことに何の疑問もないが、この場合に命を懸けてまで帝国に尽くす理由があるのだろうか。

家は長年帝国に仕えていた騎士の家系であり、自分もそうなるものだと一心不乱に生きてきた。

だが、その結果はどうだろうか。

騎士として成功せず、家では疎まれ、何の意味も感じられない場所^ナで働かされている。

普通の家であれば2等騎士まで出世すれば大したものだ。

^ナ名前のない騎士団の見習いである5等騎士から始まり、騎士団長である1等騎士になれる者もそうはいない。

実質副団長クラスである2等騎士も一般的な家庭の数倍にも及ぶ俸給が支払われる。

しかし、キツタローンの家ではそうではない。^ナ名前のない騎士団の2等騎士では出来損ない扱いしかされない。

白騎士団や黒騎士団で活躍している兄弟がいればなおさらだ。

そんな家に、そんな帝国に義理立てするような理由があるのだろうか。

騎士として本来ならば考えてはいけないことだとわかっていても、胸の奥底から湧き上がる思いにキッタローンは抗えなかった。

そう考えてしまうのは、なにも家のことだけが原因ではない。

必ずしもそうではない、家がまったく関係していないわけでもないのだから。

昔から心のどこかで思っていたこと。この街に来てからその願いが大きく膨らんでいる。

「コリア！ てめえ何しやがるんだ！」

「っひい！」

不意に聞こえてきた騒ぎにキッタローンは騎士としての習慣から何も考えずに、騒ぎの中心へと近づいていた。

店の周りを囲むようにしてできた人垣の先頭にまで来ると、どのような事態が起きたのかは容易に想像ができる。

地面に落ちたグラスと食事、壊されたテーブル。

胸倉をつかまれたウェイター姿の男と顔を赤くしどう見ても怒り

をあらわにしている筋骨隆々とした男。

どう見ても何かミスをしたウェイターに男が怒っているのだろう。が、些かやりすぎているのも明らかだ。

「お前ら、そこまでにしろ！」

「あん？」

「!?!」

キッタローンが止めに入るのよりも早くその男は人垣から抜け出て騒ぎの中心に立っていた。

つなぎのような服を腰で縛り上半身部分は垂れ下がっている。だからと言って上半身が裸と言っわけでもなく、タンクトップを着ているので男の細いながらも引き締まった体つきのすべてが大衆にさらされているわけではない。

「なんだてめえは！」

「貴様のような悪党に名乗る名前はない！ とりゃあ！」

タンクトップの男はそれだけ言うと、問答無用でウェイターの胸ぐらをつかんでいる男に殴りかかった。

この男、馬鹿ではないだろうか。

キッタローンの頭の中に浮かんだのは、勇気ある男の行動を褒め称えるものでもなく、そんな考えだった。

理由も聞かず、一方的に殴りかかる。これではどちらが悪党かわかったものではない。

「ぐほあ！」

「て、てめえ！」

「あ、あにきい！」

同じテーブルにしていた男たちが次々に立ち上がって殺気立つ。

込み合う時間でもなく同じテーブルにしていたのだから、仲間と考えるのが妥当な線であるうちに、タンクトップの男は、殴り倒した男に仲間がいることなど想像もしていなかったのかあたふたとしている。

キッタローンは1つため息をつくると人垣から進み出て騒ぎの中心へと入っていく。

「そこまでにする」

「なんだてめえは！」

「お前もこいつの仲間か!？」

またも外からの乱入者が現れたことに騒ぎを起こしていた男たちは慌ただしく叫ぶ。

キッタローンは、隣に立つ馬鹿なタンクトップの仲間だと思われることに頭を痛くしながら剣を抜いた。

「別にこの男の仲間ではないのだがな。騎士とし………いや、こんな騒ぎを前にして見逃すことが出来なかったただけだ」

「おお。あんたも男だな」

「黙れ」

騎士として見逃せなかった。その言葉を出そうとしたのだが、最後まで言うことが出来なかった。

それでも自分は騎士なのだろうか、キッタローンの葛藤はより深いものになる。

思い悩んでいるからと荒くれ者どもがおとなしくなるわけではない、殴り倒されている男の仲間がナイフを片手に襲い掛かってきた。

日ごろから騎士として厳しい鍛錬を続けているキッタローンからすれば、単調で動きも早くない攻撃など何の脅威にもならない。

苦も無くナイフを避けると襲い掛かってきた男の首筋を剣の柄で殴りつける。

男が地面に倒れこんだのを目の端で確認すると、残りの男たちが襲いくるのに構えようとしたのだが、それは徒勞に終わった。

キッターローンが構え直すのとほぼ同時に残りの男たちもタンクトップの男に倒されていたからだ。

見事な上段回し蹴りが最後の男の側頭部をとらえて、男は地面に倒れ伏す。

「うっし、これで終わり。あんた、なかなかやるな」

「お前こそなかなかの腕だ」

「まあな。これでも騎士だし」

「騎士？」

この街に来ている騎士はそれなりの人数はいるものの、全員の顔ぐらいは記憶している。その記憶の中の騎士たちに目の前のタンクトップの男がいた覚えはなかった。

それに、国ごとに多少の違いがある戦い方のくせが明らかにバルデンフェルトのものではない。

キッタローンの記憶に間違いがなければ、タンクトップの男の動きは、リエルド王国に伝わる武術の動きのはずだ。

「まあいい。人を待たせてるから、俺は行くよ」

「ま、待て！」

キッタローンが止める間もなくタンクトップの男は人垣をかき分けて走って行った。

なんとか追いかけようともするが、この騒ぎをこのままにしておくわけにはいかない。

キッタローンは、急いでタンクトップの男を追いかけてたくも、警兵が来るのを待つほかになかった。

34話 俺の出番はないんだぜ(後書き)

初、ガイの出番が皆無の話です。

メインはどう考えてもキツタローン。

このまま主役が交代……はさすがにないですけど。

35話では、ガイ視点の話に戻ります。

35話 決闘なんだぜ

(略)

ゲイルの依頼を断った翌日。

アリアさんの仕事も休みと言うことで、俺たちは3人と1匹にストーカーが1人というよくわからないメンツで街に出ていた。

昼食を俺とアリアさんが雑談しながら済まし、レスティアナさんとゲイルの野郎が別のテーブルから俺を睨むと言う、これまたよくわからない事態にも発展した。

いろいろと疑問があるんだけど、ゲイルは帰ってほしいし、レスティアナさんは家で一緒に飯を食うんだから、外でも同じにしたいと思うんだ。

とまあ、楽しかったのか楽しくなかったのかわからない食事の話は置いておくにして、その後はアリアさんに引っ張りまわされて街の中を右往左往。

ちょっと前の合コンの時よりもさらに多くの店、しかも女性もののブティックやらに行くことになった。

さすがに、下着屋……ランジェリーショップだっけ？ に入らせれそうになったときは本気で抵抗した。

男として女性の下着に興味はあるけど、女性ばかりの店の中に入る勇気はないし、気づかないで入りかけた時のレスティアナさんの

冷たい視線がトラウマものだったんだ。

それに、俺が興味あるのは女性が身に着けている下着であって、未使用のものには……いや、うん。

うそです。ごめんなさいごめんなさい。

ひい……そんな目で見ないでくれ。

レスティアナさん本気で怖いから。

マジでマジで勘弁して。

……はあはあ……

な、ナンデモナイデスヨ？

頭の中で考えるだけであの視線がありありと思ひ浮かんでくるあたり、呪われてんじゃないだろうか。

うん。とりあえず忘れよう。

今日も一日、楽しく終わりました。で、終わればよかったんだけどね。

ついに仕事の時だけじゃなくて街中でも不幸に襲われるようになったみたいです。

俺の目の前にはキッターローン。

剣を抜いて、ものすごい形相でこっちを睨みつけている。

話し合いとかじゃあ解決しないよね。

はあ。

なぜこうなったのか、話は30分くらい遡る。

気づいた時には、視界の隅でちよろちよろと動き回っていたゲイルがいなくなっていた。

まあ、ゲイルは仲間でも何でもない、どうでもいいやつだし居ようが居まいが関係ない。というか、ストーカーだからいない方が助かる。

いや、でも突然いなくなったら何かあったのかって心配になるよな。

……どうでもいい。そう、どうでもいいんだ。

「ガイ、どうしたの?」

「いや、なんでもないよ」

キヨロキヨロとあたりを見回している俺を不審がったアリアさんが尋ねてくるけど、ゲイルのことはどうでもいいと無理やりに納得してをう答える。

あんなやつのこと心配するような義理はないんだ。

嫌な予感しかしないけど、気にしたら負けだ。

とりあえず、両手に持った荷物というか、袋のおかげで指先が圧迫されて血が止まってるっぽいからそろそろ休みたい。

むしろ、こっちの方が重大な問題だ。

「アリアさん……そろそろ休み……たい……んだけど」

「ん。どうしたの？」

気のせいじゃないよな。

アリアさんにスクルド、レスティアナさんと俺たちは3人と1匹のほずだ。

だったら、俺の腰のあたりにある感触は……

「お兄ちゃん！」

「せ、セリカちゃん!？」

「お、お兄ちゃん！？ ちょっと、ガイ！ どういうことよ」

「いや、これはその……」

な、なんでセリカちゃんがここに？

というか、アリアさん怖いです。そのお美しいご尊顔に青筋を浮かべるのどうかと僕は思っんですよ。

まじで。

勘弁してくれよ。

「この子はセリカちゃんと言いまして、俺に仕事を依頼しようとしたオレンジ色の髪の男いたじゃないですか。あいつの関係者なんですよ」

「ふう〜ん。で？」

「俺にもわからないんだけど、この子は俺のことをお兄ちゃんと呼ぶわけですよ……」

「どっ」

「……あの、それだけなんですけど……」

だから、アリアさん。その「で？」って言う顔が怖いんですよ。

怒りを隠そうともしないで、こっちを睨みつけて来るし。

美人の怒っている顔ってのは普通の人が怒っているときの顔より数倍怖いってことわかってます？

そもそも、なんで怒ってるのか全然分かんないし。

「あんたは、その子にお兄ちゃんとか呼ばれて喜んでるわけだ」

「……よ、喜んでません」

いや、なんかこんなかわいい子にお兄ちゃんって呼ばれるのはうれしいですよ。

もともといた世界で俺のことをお兄ちゃんって呼んでたやつは、こんな可愛い子じゃなくて弟みたいなやつでしたし。

でも、それを口にしたら殺される。

俺は本能的にそう感じた。

「喜んでるんでしょ？」

「う、うん」

「喜んでるわよね？」

「……はい、ちょっとだけ」

「はあ。私はね、あんたがこの子にお兄ちゃんって呼ばれて喜ぶ変態コトでもいいのよ。でも、なんでそれを私に話そうとしないの？」

話したら殺されると思ったからです。

いや、というか、変態でも構わないとかアリアさんレベルたけえ

……

何が構わないのかわからないけど、面と向かって話せなんてちょっと無理難題が過ぎませんか？

「あんたが、そう呼ばれたって言うなら、いくらでも呼んであげるわよお兄ちゃん」

「……………」

それはちょっと……

なんかキャラが違いますよね？

アリアさんみたいな年上のお姉さまみたいな人にお兄ちゃんって呼ばれるのはなんか違うじゃないですか。

それはそれで背德的というかなんと……いやいや、だから俺はロリコンじゃないんだよ。

別にお兄ちゃんと呼ばれたい願望があるんじゃないかって、こういう小動物みたいな子にお兄ちゃんって呼ばれて頼られたり懐かれたりするのがちよっとうれしただけであって……

やばい、このままだとマジでロリコンになりそうだ。

もしかして、もう手遅れか？

いやいやいや、大丈夫。大丈夫だ。

「アリアさんが言うのはちよっと違うと言いますが……」

「なによ、私に不満があるって言うの!?!」

「あ、アリアさんはアリアさんの良さがあると言いますが、アリアさんにお兄ちゃんと呼ばれましてもなんとというかその……」

「似合わない」と

「いえいえ、そういうわけでは……」

「キャラが違う」と

「あまり意味が変わってないですよね」

「気持ち悪い」と

「そうです。……って、違う。なんか流れで頷いちゃったけど、違う」

「……そう、それが本心だったのね」

「だから違うって……」

俺には何が起きたのかわからなかった。

気づいた時には空を飛んでいたんだ。

何が起きたのかわからないでこっちを眺めているセリカちゃんと驚いた様子のレスティアナさんが眼下に見えたかと思うと、風が俺の頬を撫でている。

人間って飛べるんだな。なんて、俺が考えていると、ものすごい衝撃が俺を襲う。

地面に落ちてから気づいた。

俺はアリアさんに殴り飛ばされたんだ。

拳を振り上げた状態で動きを止めているアリアさんを見ることでようやく俺は理解した。

俺が殴り飛ばされた瞬間に避難したんだろう、スクルドが俺に歩み寄ってきている。この薄情者め。

というか、アリアさん強すぎです。

拳は早すぎて見えなかったし、体感だけだとぶん3メートル以上の高さまで飛んでたぞ。

「あ、あふいあしゅんはにふるへふは」

……日本語がしゃべれない!?

もしや顎が砕けたか?

慌てて顎を触ってみるけど、どうやら砕けてはいないようだ。よかった。

でも、うまくしゃべれない……顎が外れた?

いやいや、下からはめ込む方向に殴られて外れるわけないよな。引っ張られたならともかく。

たぶん、殴られた衝撃で一時的に顎が馬鹿になってるんだろう。

「何しゃべってるのかわからないわよ」

アリアさん、そんな冷たく言わなくてもわかってますよ。

というか、こうした張本人がんなこと言わんでくださいよ。

いや、殴られた原因は俺の馬鹿な発言のせいか。

でも、痛いわぁ。アリアさんって冒険者やっても結構いい線行くんじゃないのか？

正直、拳の速さはアイアンナイトの剣よりはるかに速かったし。

「セエリイカアアアア！！！」

……まためんどくさいのが来たよ。

せつかくいなくなったと思ったのに。というか、こっちの問題が解決してないのに来るんじゃないやねえよ。

「セリカ、お前なんでここに居るんだ！？ 宿で待ってるって言っただろ」

「……お兄ちゃんに会いに来たんだもん」

「そ、そんなに俺に会いたかったのかぁ」

セリカちゃんのセリフを聞いてゲイルの顔がデレデレと溶けていく。

こいつはこいつで立派な変態だろうな。馬鹿だし。

お、俺は違つぞ。

「……違つもん」

「え？」

「お兄ちゃんはあつちだもん」

そう言つて俺を指差すセリカちゃん。

ああ、ああ。ゲイルのやつ完全に固まつてるよ。

ん？　なんか古くなった機械みたいな動きでこっちに顔を向けたけど……あれは血涙？

おいおい、血の涙を流すつてホントにあるのかよ。というか、こんなくだらない理由で血涙を流すな。

「貴様あ！　セリカをたぶらかしやがつてエ！」

「この前もセリカちゃんにお兄ちゃんつて呼ばれたつて言つただろ
うが！」

拳を振りかぶつて襲い掛かってくるゲイル。

この馬鹿野郎。街中で暴れるやつがあるか。

このままだと警兵とかが来るんじゃないのか？

なんか、人垣も出来てるし。

「死ね！ 死んでしまえ！」

「つちよ！？ おまつ！？ つくそ。お前は俺を王国に呼ぶために来たんじゃないのか！？」

「うるさい！ 死ねえ！」

「だああ！ この馬鹿たれが！」

バスタレイドを鞘のまま腰から抜いてゲイルの側頭部を殴りつける。

馬鹿みたいに……馬鹿なゲイルがまつすぐ突っ込んできたから、狙いをつけるのは簡単だ。

「うお！？」

ゲイルの頭を殴りつけた直後に矢が飛んできた。

れ、レスティアナさん……最近おとなしいと思ったらこんなとこ

ろで……

……あれ？

レスティアナさんの方に視線を向けるけど、レスティアナさんは弓を構えていない。

というか、レスティアナさん自身が驚いた顔をしている。

レスティアナさんじゃない？

だったら誰が……

「くそお！ もうお前なんか知らん！ 俺はセリカを連れて王国に帰る！」

復活速いなおい……

今日一日目覚めないぐらい本気で殴ったんだぞ。それなのにもう起き上がってるとか……

「セリカ、帰るぞ！ あいつのことは忘れる！」

「ん〜！」

セリカちゃんの腕を引いて、帰ろうとするゲイルだけど、セリカ

ちゃんの方が本気で嫌がってる。

というか、もともとお前が俺にお願いする立場であって、お前の都合なんて俺には関係ないよな？

……それにしても、セリカちゃんの保護者がゲイルなのは知ってるけど、はたから見たら幼女誘拐しようとしている変態にしか見えない。

周りを囲んでる人たちもにわかになんかざわめいてるし。

ん？　なんか、変だな。

「どづいづことだ？」

「ん？」

「あれ？」

あいつは……そうだ、金鬼　郎だ。

城で俺に難癖つけてきた騎士だよ。思い出した。

でもなんで城にいるはずの騎士がここに居るんだ？

騒ぎを収めに来るなら警兵だろ。

「なぜ、貴様らが一緒に居る！」

ゲイルと俺を交互に見ながら金鬼 郎が怒鳴り散らす。

なんでって、俺はただのストーカー被害者ですけど何か？

「おお、お前はさっきの」

あれ？ 知り合い？

まさか、ゲイルと金鬼 郎は知り合いだったの？

でも、なんか金鬼 郎の様子を見る限りだと、好意的には見えな
いんですけど。

「貴様はリエルドの人間だな？」

「ん？ ああ。リエルド王国リユートミナ領騎士、ゲイル・チゲ
ゾだ」

おいおい。まだ戦争になってないとは言え、緊張状態が続いてい
る相手国でそこまで堂々と名乗っていいのか？

「今、バルデンフェルト、リエルドの両国は移動に厳しい規制がか

かっているはずだ。騎士であれば国境を越えられるはずがないのに、なぜ貴様はこの街にいる！」

「そりゃあ、関所を通らないで国境沿いの壁を乗り越えて」

……犯罪じゃん。

え？ そんな方法で、この街に来たの？

しかも堂々とそれを話すとか……分かつちやいたけどお前馬鹿だろ。

……いやいや、冗談だよな。

さすがにそこまで馬鹿じゃないだろ。仮にも騎士なんだし。

「……この場でそんなくだらない冗談を言うのか？」

「いやいや、マジだから」

マジだったらなおさらダメでしょ。

ていうか、本気で言ってたんだ。

「ここまで堂々としてるといつそ清々しい……わけないよな。

やっぱりこいつ馬鹿だ。

「……ご、この街に来た理由は？」

「そこにいる、獅子王ガイをリエルドにつれてきてほしいってやつがいてな。そいつを連れに来たんだ」

……あんだ、帰るとか言ってますでした？

当初の目的はそうだったかもしれないけど、帰るつもりならそれも言った方がいいよね。

じゃないと、火に油そそぐことになるんだから。

お前だって知ってるよな？ 俺はセリル姫が気に入ってる冒険者なんだぞ？

それをこれから戦争になる国の人間が呼びに来たとか馬鹿じゃないの？

「本気で言っているのか？」

「ああ」

「……そうか」

金鬼 郎はそう言つと、腰にある剣を抜き放ち、それを俺に向け

た。

「獅子王ガイ。私、キッタローン・マグカフェルは貴殿に決闘を申し込む！」

え、なんで俺？

という、経緯があつたわけだ。

いきなり決闘とか言われてもわけわかんないしね。

普通今の状況だったら、俺じゃなくてゲイルの方に血統を申し込むもんじゃないの？

だつて言うのになんで俺？

「なあ。なんで俺と決闘なんだ？ 普通に考えたらあっちのゲイルの方に決闘を申し込むもんじゃないのか？」

「お前をこの街から出すわけにはいかない」

「まあ、お姫様にもご鼻屑にされてるし、その理由はわかるけど。だつたらなおさら俺を連れ出そうとしてるゲイルの方を止めるんじ

やないのか？」

「私にも理由がある。あの男を止める以前に貴様を殺さなくてはならない」

殺すとか……いきなり穏やかじゃない話になったな。

なんでだ？

「ちよ、ちよっと。あんたバルデンフェルトの騎士でしょ？ なんとガイを殺すとか言うのよ」

「うるさい。関係のない貴様は黙っている！」

「はいそうですか、なんて黙るわけないでしょ！ ふざけたこと言っていないで理由を話さないよこの馬鹿男！」

俺とキッターローンの間に割って入ったアリアさんがまくしたてる。

いやいや、馬鹿男はキッターローンじゃなくてゲイルの方でしょう。

「き、貴様！」

馬鹿呼ばわりされたことに怒ったのか、何かそれ以外にも理由があったのかはわからない。

わからないんだけど、キッタローンは剣を振るった。

そして、その剣はアリアさんを捉え、アリアさんの頬が切れる。

アリアさんが切られた。

「てめえ！」

俺は一も二もなくバスタレイドを抜き放ってキッタローンに切りかかった。

寸でのところでバスタレイドの一撃はキッタローンに受けられたが、俺はとにかくキレていた。

このふざけた野郎を許せるわけがない。

「決闘でもなんでも受けてやろうじゃねえかよ！ このくそ野郎！」

俺とキッタローンの2人は街の外まで移動した。

幸いにもアリアさんの傷は浅く、治癒魔法を使わなくとも痕も残

らず治るだろうとレスティアナさんが言っていた。

治療に関しては人族など及びもつかないエルフ族のレスティアナさんがそう言ってくれたことには安心できたが、大事を取ってアリアさんにはレスティアナさんに連れ添ってもらってギルドの診療所に行ってもらった。

俺はとにかくキッタローンの野郎をぶちのめしてやらないと気が済まない。

自国の人間を守るべき騎士が、自国の人間であるアリアさんを傷つけた。

正確にはアリアさんはバルデンフェルトの人間じゃないし、歴史上の地球に存在した騎士は自分の利益なんかのために戦っていたてのは知ってる。

だけど、三井さんに聞いていたバルデンフェルトの騎士は、たとえ自分の国の人間ではなくともいたずらに一般人を傷つけたりはしない。

名誉と自分の国、王族に忠誠を尽くす、地球の騎士と違い俺たちが物語の中で知るような騎士に近い姿だという話だった。

だと言うのに、キッタローンはアリアさんを傷つけた。

あろうことが自分たちの守るべきものを守るための剣で一般人のアリアさんを斬りつけたんだ。

到底許せることじゃない。

「ああ。一応決闘と言う話だから、立会人にはリエルド王国リユー
トミナ領騎士、ゲイル・チゲーズがつとめさせてもらおう」

俺とキッタローンの後についてきていたゲイルが俺たちの真ん中
に立って言った。

「勝負の方法は、剣でいいんだよな？ 勝敗は負けを認めるか相手
の剣を飛ばすか。まあ普通の決闘と同じ方法で。なんか意見はある
か？」

「ない」

「私も構わん」

「んじゃ、始め」

ゲイルのやる気のなさそうな声と共に俺は一気に駆け出した。

間合いにキッタローンが入ると同時に剣を抜き放ち、逆袈裟の
形で斬りかかる。

日本刀のように速さのある居合ではないが、キッタローンは剣を
抜いているわけじゃない。さっきのように剣で受けることはできな
いはずだ。

と、思ったらキッタローンは後ろに下がって俺の攻撃を避けた。そのまま俺と同じように鞘から剣を抜くと同時に俺に斬りかかってくる。

俺は無理やりに空振りをした剣を引き戻してキッタローンの一撃を受ける。

この野郎、俺を殺すつもりだ。

決闘の正式なルールなんかは知らない。だけど、相手の剣を飛ばすか、戦闘不能にする、相手に負けを認めさせる。って方法があるのは確かだ。

俺はキッタローンが剣を振れないように右腕を狙ったんだけど、キッタローンは問答無用で俺の首を狙ってきた。

剣を受けられなかったら、頭と胴体がさようならしてたのは間違いない。

「て、てめえ」

「おとなしく死ね」

「んな風に言われるだけで死ぬるかよ！」

俺はつばぜり合いの状態からキッタローンを押し込んで空間をあけると後ろに下がりざま胴を放つ。

元の世界で剣道の授業をしていた時に、剣道部のやつから1本を奪った俺の必殺技だ。

今まで人間相手の戦いがなかったから使う機会がほとんどなかったけど。

が、キッタローンは俺に押された勢いを利用して、さらに後ろに下がっていた。

あつけなく俺の引き胴は避けられてしまい、キッタローンからの反撃に備えようとするが、キッタローンは攻めてこなかった。

「?」

キッタローンは俺が構え直すのとほぼ同時に俺との距離を詰め、正面から斬りかかるとかと思えば横から、横にいたかと思えば後ろに回り込んでいた。

「な!」

ぎりぎりキッタローンの攻撃を受けたと思ったら、キッタローンはすぐに別の位置に移動し、攻撃を放ってくる。

キッタローンの攻撃は変幻自在に、俺を翻弄するような動きと共に放たれる。

もしもダメージ狙いで腕や足なんかを狙われれば受けきれなかっただろうけど、なぜかキッターンは俺の頭や首、心臓なんかの急所しか狙ってこなかったので、受けたり避けたりすることが出来た。けど、強いわこいつ。

迷宮で戦ったアイアンナイトなんて比べ物にならない。

アリアさんを助けるために戦った騎士よりもはるかに強いだろう。

俺はレベルアップして強くなったけど、キッターンの方が実力的に上なのは間違いなかった。

このままだと負けるのは時間の問題だな。

何とかしないと。

防戦一方だった俺はなんとか反撃しようと剣を振るう。

がむしゃらに振るったところでキッターンには簡単に受けられてしまうけど、俺の強みは剣が普通のものじゃないことだ。

バスタレイドはスーパーレアの剣。

対してキッターンの持つ帝国の騎士の剣はそこまで大したものじゃない。加えてキッターンの剣は普通のものより細めだ。

剣の耐久度を考えればアドバンテージは俺にある。

俺はがむしゃらに剣を振るってとにかくキッタローンの剣を狙った。

急に俺が攻勢に転じたのに焦ったのかキッタローンの動きがわずかに鈍る。

俺はその隙を見逃さずに渾身の力を込めてバスタレイドを振り下ろした。

それまでの剣と剣がぶつかる音ではなく、乾いた音が鳴り響いた。

バスタレイドは地面に突き刺さり、キッタローンの持っていた剣の半分が見当違いの場所に突き刺さる。

「それまで。獅子王ガイの勝ちだな」

キッタローンの剣が折れたのを確認してゲイルが言った。

はあ……完全に無理やりな方法だけど何とか勝てた。

ったく。

こいつにはアリアさんに土下座させよう。

戦っているうちに多少は怒りも冷めた俺はそんなことを考えながらバスタレイドを鞘に戻した。

「おい。お前にはアリアさんに謝ってもらっからな。って、あれ？」

キッタローンはいつの間にかその場からいなくなっていた。

さすがに消えるわけがないとあたりを見回してみると、すでに街へと続く門をくぐるうとしているところだった。

って、逃げるつもりかあの野郎。

「待てこらー！」

俺は慌ててキッタローンを追いかけようとしたが、街の中の人ごみに紛れたキッタローンの姿を見つけることはできなかった。

まったく。どうなってんだこれは？

35話 決闘なんだぜ（後書き）

引き胴の部分は正確にはつばぜり合いからの駆け引きなんかがあるわけですが、剣道の小説ではないので省略しました。

剣道を知らない方に軽く説明しますと、

剣と剣をぶつけ合った肉薄している状態がつばぜり合い

そこから、相手との距離を取るように相手の横っ腹を狙うのが引き胴です。

詳しく知りたい方は自分で調べてください。

本文にはあまり関係ないですしw

36話 新たなるお姫様登場なんだぜ

獅子王ガイとバルデンフェルト騎士、キッタローンが決闘を行ったという話はすぐに城で書類を決裁していたセリルの下にも届いた。

キッタローン・マグカフェルと言えば、バルデンフェルトでも有数の騎士の家であるマグカフェル家の次男で、この街に来ている騎士の中でも1、2を争う実力者だ。

なぜ、そんな男が獅子王ガイと決闘なんて真似をするのか理由もわからず、セリルは決裁を終えていない書類などもすべて後回しにしてキッタローンを呼び出した。

誰も想像もしていなかった事態だけに、謁見の間にはほぼすべての騎士が集まり、キッタローン自身が来ると収まりのつかないざわめきが謁見の間を包んだ。

「要件は、わかっているな」

「はい」

ざわめきが収まるのも待たずにセリルは言った。キッタローンは恭しくこうべを垂れたまま、ただ一言答える。

決闘を終えたばかりだと言うのに怪我らしい怪我也見当たらず、セリルにはキッタローンが決闘をしたという事実がここにきて嘘だったのではないかと思えた。

「キッタローン。お主が獅子王ガイと決闘を行ったと言うのは真か？」

「はい」

「なぜだ」

「それは……あの男が帝国に害をなすとわかったからです」

「害……じゃと？」

害をなすと言っても、彼自身の功績を考えればまったく見当もつかない。

この街が危機に瀕した迷宮の件も解決に導き、帝国の恥とも言わべき事件も解決して見せた。

少なくとも、獅子王ガイが帝国に害をなすとは思えない。ならば、キッタローンの勝手な思い込みだろうか。

以前にもキッタローンがガイを敵視していたことはセリルも覚えていた。だからと言って、直接決闘を申し込むなどと言うのは、行き過ぎている。

「獅子王ガイが帝国に害をなす。なぜそう思ったのか言ってみよ」

「獅子王ガイ……やつは、人ではありません」

「なんじゃと？」

人ではない。

キッタローンの言ったことはあまりにも荒唐無稽でその場にいる誰もがすぐには理解できなかった。

この場合の人と言えば、人族ではなく人型の種族だろう。エルフも獣人も含めた亜人と人族、そのすべてを含めた人間ではないということなのだろう。

だが、どう見ても獅子王ガイは人間であり、魔物の類であるとは考えられなかった。

「どういう意味じゃ」

「私は、死亡したジ・ジーから獅子王ガイの召喚に関する話を聞きました」

「なに!？」

「そして、その話の結論として、獅子王ガイは人間ではない。という事実を知ったのです」

それからキッタローンは自分が知った獅子王ガイの召喚に関する

真実をその場で語った。

誰もが話を信じようとはせず、キッタローンの話を冗談か何かだ
と思い込もうとしたが、キッタローンの話す雰囲気と、話の内容を
聞いていくうちにそれが真実だと理解する。

獅子王ガイが人間ではない。そんな荒唐無稽な話が、それこそど
うでもいい話のようなほどありえない事実を知った、知ってしまった
たその場にいる全ての人間が、キッタローンの話が終わった後も口
を開けずにいた。

「確認するが、それは真実なのだな」

「はい」

「にわかには信じられん……」

「……………」

獅子王ガイが召喚された方法。そのあまりにも常軌を逸した方法
に驚きを隠せないのはセリルも同じであった。

驚くのと同時に信じられない、何かの冗談ではないかという思い
もあるが、自らに仕える騎士の言葉を、その決意の瞳を目の当たり
にしては信じるほかになかった。

それに、以前から感じていた獅子王ガイの異質さ。それがキッタ
ローンの話を聞いた今となっては、間違いでなかったということが

よくわかる。

彼が普通の人間ではない、普通の勇者ではないというセリルの考えは間違いではなかったのだ。

「なぜ、すぐに話そうとはしなかった。いや、今頃になって話すつもりになったのだ？」

「……獅子王ガイを殺すことが出来れば、なんにも言わずに帝国を去るつもりでした。しかし決闘をしてわかったのですが、私では奴を殺すことが出来ません」

決闘を行った最初のうちこそキッターンが優位にことを進められたが、ガイは戦いの中で成長をしている。

同じ敵と戦えば一度勝った相手に負けることはないだろう。

騎士として戦場に立ってきた経験から、キッターンはそう感じていた。

「ならば、どうせ死ぬとしても真実を帝国に知らせてから死のうと思っただが為です」

決闘で負けたその瞬間に、キッターンは自らの生が終わったのだと理解した。

獅子王ガイがこの世界に来て間もない勇者であることは知っている。

たとえ迷宮をクリアしたという実績があつたとしても、加護や勇者としての才能などによって運だけを味方にそれを成し遂げるのは不可能ではない。

事実、それだけの實力を持っていたが、迷宮に入ろうとしなかったがためにその名を残さなかつた人間をキッターンは知っている。

そして、そんなこの世界では運以外に取り柄がないであろう男に敗北した。

こんなことが家に知れば今までは比べ物にならぬほど罵倒の限りを尽くされるだろう。

いや、それだけではない。

勘当されるのは間違いないだろう。

そうであるのなら、もはや生きる意味もない。

「……たしかに、騎士でありながらそのような事実を騙ろうとしなかつたのは、騎士として失格だな」

「はい。覚悟はできております」

キッターンは自らの生を捨て、これから何が起きようともなん

と言われようとも、何の後悔もなかった。

「だが、お主は何か話したのか？」

「え？」

突然のセリルの言葉に、キッタローンは彼女がなんと言ったのか
すぐには理解できなかった。

自分の一大決心のもとからの発言に対し、何か話したのかとはあ
まりの話ではないか。

「おそらく、この話を知る騎士は殺されるだろう。だが、そんな話
は私が直接あの男から聞いた話であって、この街にいる騎士は誰も
知らぬ」

「ひ、姫様……」

セリルの言葉にキッタローンは我が身が震えた。

なぜ自分は話すことをためらったりしたのだろうか、このような
素晴らしい姫に仕えることが出来て自分はどれだけ果報者なのだろ
うかと涙が流れそうだった。

「あああら、セリルったら。相変わらず優しいのね」

「!?!」

「ね、姉さま!?!」

感動の場面であったが、突然割り込まれた言葉に、誰もが視線を集めた。

謁見の間と廊下を区切っている大きな扉を開いて部屋の中に入ってきたのは、煌びやかなドレスに身を包んだ美しい女性。

その場にいる誰もが知っている人物ではあるが、なぜこの場にいるのかがわからない。

バルデンフェルト三姫でもことさら美で知られる魅惑の姫、シャイアナ・シエスト・アナ・バルデンフェルトの姿がそこにあった。

「な、なぜシャイナ姉さまが」

ことさら驚いていたのはほかならぬセリルであった。

この街の統治、そのすべてを父親であるバルデンフェルト帝から任されている彼女がいるというのに、なぜ新たな王族を迎える必要があるのか。

リエルド王国との戦いを始めるためには、王族が先頭に立ち戦いの正当性を述べたうえで戦いを始めるのが礼儀であり、実際リエル

ドとの戦いが始まる際には別の誰かが来ることは理解していた。

しかし、リエルドとの戦いが始まるのはまだ先の話であり、セリル以外の王族がこの街に来る理由など皆目見当がつかない。

「あら。あなたが救援を要請したんでしょ？　まあ、問題は解決したらしいけど」

救援。その言葉にセリルは覚えがあった。

たしかに、迷宮から魔物が溢れだした際には事の重大さから本国に援軍を要請した。

しかし、シャイナも言っているように問題が解決した際に必要がなくなったと伝令を走らせたのも確かだ。

連絡が届くのに時間がかかるのは確かだが、すぐに解決したおかげで、軍が本国を出立するよりも早く不要と言う連絡が届いているはずだ。

「援軍は不要と言う連絡は出したはずじゃ。なぜ、解決したことを知りながらこの街へ……いや、それにしても速すぎる」

「ふふふ。もともとリエルドとの戦いを早めると言う話があったね。あなたからの連絡が来たころにはすでに軍は出ていたのよ」

「半年は後の話では？」

「お父様が決めたことですもの。娘の私たちが意見することではないわ」

父、バルデンフェルト皇帝の話を出されてはセリルには黙る他なかった。

圧倒的なカリスマ、政治力を持って広がり続けるバルデンフェルトを統べている父は、たとえ娘に説得されようとも意見を覆すことはない。

「じゃ、じゃが。なぜフレア姉さまではなくシャイナ姉さまが」

「あら、セリルは私よりも姉さんの方がよかったの？ 昔はあんなに姉さま姉さまと私の後を追いかけてきていたのに。いつの間に嫌われてしまったのかしら」

「い、いえ。けしてシャイナ姉さまが嫌いと言うわけではなく。軍を引き連れるのじゃからフレア姉さまだとばかり……」

「ふふふ。わかってるわよ。でも、フレア姉さまは今ちよおつと外せない用事があるの。私は代理よ」

そう言ってシャイナは艶美な笑みを見せる。

その場にいる騎士たちは皆、シャイナの笑みを見て魂を抜かれるかのような思いだった。

それだけシャイナの笑みには男を魅了する力がある。

「でも、いざ来てみたらビックリね。まさか、この街を救った冒険者の真実を知ることが出来るなんて」

「……シャイナ姉さまは私の決定が不服ですか？」

「別に。まあ、いたずらに騎士を減らしたくないというあなたの思いも理解できるわ。でも、当事者に何の罰も与えないのはダメよ」

「では、どうしろと？」

「そうね。そのあなた」

「はい」

「あなたはクビよ」

シャイナはキッターローンを差して首を切るジェスチャーと共に言い放った。

たしかに何の罰もないのは自身でもどこか納得できなかったのだろう。キッターローンは心のどこかでほっとしていた。

「ね、姉さま」

「あら、あなたは反対なの？ 彼は納得してるみたいだけど」

「き、キッタローン。貴様はそれでいいと言うのか!？」

「……はい。セリル姫様。致し方ないことかと」

キッタローンが抗う気がないことを理解したセリルはがっくりと肩を落とした。

「それに、獅子王ガイと言ったかしら？ 彼もこの国から出さないとまずいわよね」

「な!？」

シャイナはあっけらかんと言いつ放ったが、セリルはキッタローンのことを言われた以上に動揺を隠すことが出来なかった。

獅子王ガイをこの国から出す。

その発言が信じられない。

この国に積極的に協力しようと言う姿勢はあまり見られないが、迷宮をクリアした実績だけでも帝国に有益な人間であることは間違いない。

たしかに、キッタローンの話から普通ではないことも理解できたが、だからと言って国を出すなどと言う短絡的な考えはありえない

とセリルは考えていたからだ。

「何を言っているんですか姉さま！」

「だって、危ないじゃない」

「あ、危ないも何も」

「あれの危険性はあなたも知っているでしょう？」

「ですが、やつを研究することで対策を考えることも出来る。この国から出すべきではない」

食い下がるセリルにシャイナは呆れたように首を横へ振った。

「何度でも言っけど、危ないじゃない。魔人なんて」

36話 新たなるお姫様登場なんだぜ（後書き）

新キャラ登場

魔人とは何ぞやってのは、まだ本文では明らかにはなりません。箱庭世界における一般的な魔人に関する話は各種設定あれこれに書いてありますので、先にどんなもんか知りたい方はそちらをご覧ください。（設定には魔族と表記されています）

37話 街を出ることになったんだぜ

「じゃが、魔人だからと言って国を追えば、それこそ恨みを買ってはないか」

「あらあら、魔人の恐ろしさはあなただって知ってるでしょ？ なにしる、今でこそ昔の姿を取り戻しつつあるけど、国が私たちの生まれる前の大きさにまで追いやられたのは、魔人のせいなんだから」

「だからこそ、怒りを買うべきではないか」

「やり方次第でしょ。この街に着いてから調べたけど、この街にリエルドの騎士が来ているわ」

「っな!？」

「彼の目的はあの魔人をリエルドに連れ帰ること。せつかくだから、面倒事はリエルドに押し付けてしまえばリエルドの制圧も楽になるじゃない」

「じゃ、じゃが」

セリルは言葉に詰まった。

魔人の危険性。それはシャイナの言うことがもつともであるだけに無視できないことだ。

帝国内に魔人がいる。そのことが民に知られば、民たちは不安

になり、下手をすれば国外に逃げ出すだろう。

大陸西南部のリング地方、その半分にも及ぶ大国であるバルデンフェルトであっても、遊び半分の魔人の行いにより亡びる可能性がある。

数百年前にはリング地方すべてを統治していたバルデンフェルト帝国が一時期最西端のごく小さな国にまで追いやられたのは他ならぬ魔人の手によるものだった。

過去に前例がある以上、国内に魔人がいる危険性と言う点ではシヤイナに反論する術がない。

「幸いにもあなたはあの魔人に依頼をすることができるんでしょ？
だったら、リエルドの内部調査を兼ねて騎士についてリエルドまで行ってほしいとでも言つて、国を出せばいいのよ。その後は、魔人が戻る前に戦を始めて国境を封鎖、魔人がいる街を徹底的に攻め立てて魔人をこの国に戻れないようにすればいい」

「じゃが、帝国がリングを統一した後はどうする。統一してしまえば嫌が応にも国内に魔人がいることになる」

「それまでに魔人を倒せるだけの勇者を召喚すればいいじゃない。
1人でダメなら2人でも3人でも。帝国が大きくなれば召喚魔法を使える魔法使いも数が揃うわ。幾重にも補助魔法をかければそれだけ強力な勇者が召喚できる」

「召喚できなければどうする」

「どちらにしる、帝国がリングを統一すれば魔王領と接するわ。それまでに魔王領との境を守れるだけの勇者がいなければ、帝国は魔王領からの進撃で倒れることになるわ」

やはりと言うか、シャイナの言葉にセリルは何も言い返す言葉が思い浮かばない。

シャイナの言うとおりなのだ。

たしかにこのまま領土を拡大しても、人ならざる種が統べる大地、魔王領から先は進むことが出来ない。

バルデンフェルトが領土を広げているのは、かつてリング地方を統べていた帝国をもとある姿に戻そうとするが為だ。

かつてバルデンフェルト帝国が最も大きな領土を誇っていた時代にも、今と変わらぬ魔王領は存在している。

強力な魔物、人間では太刀打ちできない魔族。さらにはそれらを超越した存在、魔王などという馬鹿げたものまでいるのでは、魔王領を支配することなど夢のまた夢のような話だ。

魔王領からは、時折周辺の国を襲う時期がある。

その時には、魔王領に接していない国までもそれに対抗するために軍を派兵している。

誰も魔族に支配されたいとは考えないからだ。

魔王領からの攻撃を防ぐのに最も効果があるのが勇者である。

強力な勇者はただの1人で数千にも及ぶ魔物たちを一掃し、この世界にいる人間たちの被害を大きく減らしてくれる。

その勇者は、各国が最高の術式を用いて召喚する最高クラスの勇者であり、魔王領からの進軍を抑えるために召喚された勇者たちは、そのすべてが魔人に匹敵する実力を有していたとも言われている。

しかし、実際にその話を真実だと証明しようとする国が魔人と戦うために1人の勇者を召喚した。

その当時、その国は現在のリエルド王国と同等かそれ以上と言われるほどに強大な国であったが、召喚された勇者はあえなく敗北。

召喚した国も3日と持たずに魔人によって滅ぼされている。

魔人とは、大国すらもまともには相手取ることが出来ないほどに強大な敵なのだ。

「あの魔人も、そういう意味ではいい試金石じゃない。魔人を倒せるだけの勇者が召喚できれば、魔王領までも制圧するための戦力になるわ」

「じゃが、勇者の実力を見るために戦いを挑み、帝国が狙われればどうする。それに、やつは今我らに敵意がない。友好的ですらある者を魔人じゃからと追放してはまずかるう」

「魔人は気まぐれよ。つい先日もしュリーガン公国が国内に存在を

確認していた友好的な魔人に滅ぼされているわ。まあ、この街で精一杯お仕事をしていたあなたはしらないでしょうけど」

「し、シュリーガンが亡びたと言うのか!？」

シュリーガン公国は、規模でこそバルデンフェルトに比べられるものではないが、バルデンフェルト、リエルドに次ぐ強大な国家だった。

バルデンフェルトの見解とすれば、リエルドを制圧した後は、最後の難敵がシュリーガン公国であったのだが、その国も今は存在しない。

シュリーガン公国は数年前から国内に魔人がいることを公表していた。

そのことにより、民の数は大きく減り、様々な産業に影響を与えられていたが、魔人を味方に出ることが出来れば周辺各国を制圧するのにこれ以上ない戦力になる。

公国は、魔人の力を当てにして国民の減少すらも無視をし、魔人の機嫌取りに全力を注いでいた。

数年は魔人もシュリーガン国内に留まり、時折魔王領に帰っては公国へやって来るといふ形をとり一見友好的な静寂を保っていたのだが、ついにそれが崩された。

命からがらに国を脱した兵の言葉によれば、魔人は「厭きた」と一言を口にする、城を一瞬にして消し去ったという。

その後も逃げ惑う民衆を虐殺し、シュリーガン公国首都、グルイラは半日も経たない間に跡形もなく消えたという。

話を聞いた周辺各国は実情を知るために調査を行ったのだが、グルイラがあつた場所には焼け焦げた平地がただ広がっているだけだったと言う。

「セリル。あなたは帝国もシュリーガンの二の轍を踏ませるつもり？ あなたのわがままで帝国7億もの民を犠牲にするつもりなの？」

「そ、それは……」

「あなたがなんと言おうと、私たち王族には民を、そして国を守る義務があるの。魔人が国にいる危険性と国の外にいる危険性、その2つを比べて国の外にいる方が安全ならば私たち王族は国内から魔人を排斥する義務があるのよ」

「……………わ、わかった」

シャイナの言葉に、セリルは折れるしかなかった。

side in

キッターローンとの決闘の翌日になって、俺はお城に呼び出された。

キッタローンの野郎に文句はあるし、三井さんかお姫様に直談判してやるうと思っただけにいいタイミングだ。

ああそう。アリアさんの傷の具合は、レスティアナさんが言っていた通りに傷跡も残らないぐらいに軽いものだった。

まあ、だからといってキッタローンを許すつもりはないけどな。

アリアさんは軽傷とはいっても、キューマさんに言われて仕事は休み。

騎士に切られたと言うこともあって、キューマさんも城の方に抗議をするそうだ。

味方が増えて助かる。

で、珍しく私用があるっていうレスティアナさんについてはこないで、俺とスクルドだけでお城に向かった。

お城に到着したら、いつも通りに謁見の間でお姫様が入ってくるのを待っていたわけなんだけど、なぜかいつもよりもずいぶん長く待たされた。

いつもだったら、3分もしないで入って来るのに今日はどうしたんだろう。

「面を上げなさい」

ようやく謁見の間にやってきたらしい、声に従って俺は顔を上げた。

にしても、今日はなんか声が違いますけど、風邪でも引きました……か？

誰？

声に出さなかったのは上出来だろう。

いつものお姫様、セリル姫様もいるにはいるんだけど、俺に顔を上げるように言ったらしい女性の斜め後ろに控えている。

俺に声をかけたらしい女性。

胸の谷間があらわになっていて扇情的なドレスを身にまとったナイスバディ……いやいや、いきなりそこから説明するのはどうよ。

ああ……緑色の髪……すごいな。髪の毛に緑の色素なんてあるのか？

いや、それを言ったらプリルのピンク色だって不思議な色だよな。

だからって緑はなあ……ぶっちゃけ変。

まあ、髪の色は変なんだけど美人なことには変わりはない。

目鼻立ちのはっきりしているし、ほっそりとした顎、若干垂れ下がりが気味の目、口紅を塗っているんだらうけど、そんなことがなく

とも目立つだろう。ぶっくらとした唇。

あれだ。アリアさんが女子高で言うお姉さまで、この人はアダルトな感じのお姉さまだ。

もう、漫画なんかでエロかつこいお姉さまとして出てくる、社長秘書みたいなそんな感じ。

まあ外見のことはこの際どうでもいいんだよ。

問題は、この人が誰かってことだ。

セリル姫様よりも前に立っているってことは当然、彼女よりも立場が上の人物。

お姫様の上って言うたら、王様？

あれで男？

いやいやいや、それはない。だったら女王様が王妃様ってことだよな。

若え……え、あの外見でセリル姫様のお母さん？

どう見ても20前後だろ……

この世界の女性の結婚適齢期なんて知らんけど、アリアさんが独身……ギルド職員のお姉さま方が彼氏欲しいと嘆いているあたりから考えると、20代ぐらいだよな。

まあ、王族がこれに当てはまるかはわかんないけど、仮に結婚したのが20歳としよう。

セリル姫様はたしか、俺よりも年上で、三井さんよりも年下ぐらいのはず。

ということは、18か9ってぐらいだろう。

……40ぐらい？ え！？ あれでアラフォー！？

信じらんねえ……耳の形も普通だしエルフってことはないだろう。

人族であるの外見で40歳とか……どんだけ若作りなの？

それともあれか？ 王族は見た目年を取らないとでも？ いつまでたってもお美しいんですか！？

「よくぞ参った。私はシャイアナ・シエスト・アナ・バルデンフェルト。バルデンフェルト帝国第2姫にして、あなたも知ってるセルフィールの姉よ」

……あ、お姉さまでしたか。

あぶねえ、このまま自己紹介なしで話が進んでたら、王妃様とかセリル姫様のお母様とか呼ぶとこだったよ……

もしもそんな風に呼んでたら……首が飛んでたな……間違いない。

って、姉？

なんで姉がいる。

この街の政治はセリル姫様がやるって話だよな。

ああ、きつとあれだ。

可愛い妹がすっかりしてるか見に来て、ついでに噂の迷宮をクリアした冒険者を見物しようって魂胆だろ。

妹がお気に入りの冒険者だし、姉としても気になるんだろうな。

俺には上はないけど、下の妹もどきがいたから、気持ちはわかる。

妹の仲のいい友達って言うたら、一回くらいは見ておきたいもの。

まあ、最近はお兄ちゃん、そんなこと考えるなんてウザいよ。とか言われてたけど……

そう言うお前は、どうなんだよ。

俺が、気になる子にアプローチかけようとしたら、俺より彼女のこと詳しいし、気づけば俺の黒歴史を彼女に教えてるとか……

はあ……鬱だ。

まあでも、下がいるって意味では、シャイアナ様？とも仲良くできそうだな。

「早速で悪いのだけど、あなたにはリエルドに向かってほしいの

……

……

……

……

……

……

……は？

おいおい、再起動するのにずいぶん時間がかかったぞ。

いや、それだけ衝撃的な話だったわけだけど。

なに、どういこと？

いきなりあなたは何を言っちゃってしてくれてるんだ？

自己紹介 依頼つてまあ、確かに冒険者への依頼の順序として間違っちゃいませんよ。

間違っていないからって、この状況でいきなり言われてはいそいで
すかなんて、なるわけないじゃないですか。

「報酬は、そうね……前金で300万B支払いましょう」

だから、こっちが了承も反応もしてないのに、いきなり報酬の話
とかすんなよ。

しかも、300万なんて……300万!?

ちよ、え!?! 迷宮クリアした時より報酬高いつてどづいこと?

まさか、危ない薬でも運ばせるつもりか?

いやいや、そんな薬運ぶだけで300万Bはないよな。

だったらなんで?

「なぜ……リエルドへ?」

「あなたも帝国がリエルドと戦争が近いことは知ってるわよね」

「はい」

「迷宮をクリアした冒険者として、あなたは随分と有名だわ。それ
こそ、リエルドに行けば王族と話す機会だってあるかもしれぬ」

「……俺にバルデンフェルトの間諜になれと」

「ええ。そうよ」

おいおい。

なんで、俺がスパイなんだよ。

確かに俺はリエルド王国から御呼ばれされてるよ、あのバカな騎士が来てるくらいだから。

だからって、なんで俺にスパイをしろとか言うわけ？

俺にはそんな技能はないし、バルデンフェルトぐらいデカい国ならそれくらい自分たちでいくらでもできるでしょ。

まあ、直接王族と話せるとしても、そんな相手を誘導するような巧みな話術なんて俺にはできませんよ。

「……お断りさせていただきます」

「あら、それは困ったわね」

……全然困ったように見えませんか。

はあ。まあ、お姫様の冗談だったってことだろ。

そりゃそうだよな、スパイなんて重大な仕事を冒険者に頼むなんてどうかしてる。

「実は、あなたがリエルドのスパイなんじゃないかって話がこの城に広がってるのよ」

「は？」

え、なにそれ？

初耳なんですけど。

「あなたは、ちょうどこの街を帝国が支配するタイミングでこの街にいたじゃない。だから、リエルドがあらかじめ帝国を調べるために用意していたスパイなんじゃないかって疑いがかかっているの」

おいおいおい、ちょっと待て。

ありえないだろ。

俺は、この街で召喚されたんだぞ？

しかも、リエルド王国の関係者なんて、つい最近出会ったあのバカくらいのもんだ。

それをスパイだなんて………どうかしてるだろ。

「私も、セリルからあなたの話は聞いていたし、すごい冒険者が国内にいるってわかって嬉しかったわ。ただどね、この世界に来て1月も経たない勇者が、ここ数百年誰も成しえなかった迷宮攻略なんて大業を成し遂げるなんて、普通はありえないのよ」

そりゃあ、偶然が重なった結果だから仕方ないじゃん。

俺だって、好きでクリアしたわけじゃないよ。

「で、実はあなたはリエルドに召喚された勇者で、帝国をスパイするために訓練をつけた後にこの街に来たんじゃないかって話になってね」

「それは違いますよ。俺は、真正正銘この街で召喚された勇者です」

「それを証明できる？」

「え？ …… そうだ、俺を召喚した魔法使いがこの城に捕まってるはずですよ。 前に話を聞いた時は処刑じゃなくて投獄って言うてたんですから」

そうだ。あの爺がいる。

少なくとも、俺を召喚した人物がいる以上はこの上ない証人になるはずだ。

「悪いんだけど、彼は死んだらしいわよ」

「え？」

「牢屋で毒を飲んでばったり」

「そんな……」

「それに、召喚した魔法使い1人だけだったら、証拠にもならないわ」

「な、なんで……」

「別に、自分が召喚したって言うだけなら、誰でもできるわ。それこそ、リエルドから大金を渡されてそう名乗り出る人間がいたとしてもおかしくないわ」

……仮に自分が殺されるとしても、貧民層なら家族のために自己犠牲になる人間は確かにいるかもしれない。

「だけど、だからって……」

他の証人と言えば、ハムがいたはずだけど……あいつは俺が召喚された次の日には帰らぬ人になっちゃったからな……

「帝国がこの街を制圧した時点で、召喚魔法を使えるだけの魔法使

いはこの国にいないはずなの。だから、自分が召喚したって名乗り出る魔法使いがいても、証拠能力は皆無よ。それに、本人はこの世にいないし」

……え、じゃあどうすんの？

スパイ疑惑を晴らすためにスパイ行為をしると。

なんか、本末転倒と言うか、意味わかんない状況になってるじゃん。

「で、でも、仮に俺がリエルド王国のスパイだったとして、今からリエルド王国に行かされたりしたら、結局は情報を持ち帰ることになるじゃないですか」

「あなたがこの街に居ようと居まいと、作戦は変更されるわ。仮にあなたがスパイだったとしたら、情報を何も持ち帰れずに、罰を受けただけ。だから、あなたがこの依頼を断ろうと努力すればするほど、あなたへの疑いが強まるのよ」

ちよ、おま……

マジかよ。

この街離れないって決めたのにこの街追い出されるの？

なんかひどくない？

スパイ容疑なんてかけられれば、いろいろと不自由な思いもするだろう。

下手をすれば拷問だって受けるかもしれない。

痛いのはやだなあ……

「この街には……戦争が終われば戻ってこれますよね？」

「ええ。リエルドさえ亡びれば、あなたの疑いも晴れる。そうしたら、この街にでもどこにでも行けばいいわ」

「……わかりました」

ああ……もう最悪だ。

戦争なんて、そう簡単に終わるもんじゃないよな。

半年か、1年か下手したら10年とか……

さすがにそれはないって信じたけれど。

だけど、いくらなんでも……はあ。

泣きたい。

「な、なんですってえ!？」

家に帰ってさっそくこの街を出る羽目になったことをアリアさんに報告すると、アリアさんは俺の鼓膜を破るつもりなんじゃないかってぐらいデカい声で言った。

いや、言ったなんてもんじゃない。叫んだ。

驚いてくれるのは嬉しいんですけど、もう少し俺のことを気遣ってもらえると助かります。

「ちよ、ちよっとどついついとよ」

「だから、今話した通りです。少なくとも1週間以内にこの街を出ることになりました」

「1週間ですか、まあそれまでに準備は出来ますし私は構いませんよ」

……意外だ。

てつきりレスティアナさんはあらん限りの罵倒を浴びせて来るも

んだと思っただけ。

なぜにこんなにおとなしいんだ？

なんか、裏がありそうで怖い。

「あんだねえ、そんな大事な話その場で決めたって言うの!？」

「いや、断れる空気じゃなかったんで……」

「空気だった、空気じゃなかったってあんだ、男だったらもつと強気になって俺はスパイじゃないって言いければよかったじゃない」

「だから、んなこと言える状況じゃなかったの！ いつもお姫様の後ろにいる侍女さんが鉄の処女とか拷問道具を大量に用意してたんだぞ！」

そうなのだ。

なぜか謁見の間と言う王族だっている公式な場所だと言うのに、シャイアナ姫様の後ろにいた侍女のお姉さんが、次々に拷問器具を持ち込んできていたんだ。

しかも、1つ1つ運んでくるたびに、俺の方を冷たい目で……まるで俺の反応を楽しみたいに運んでくるんだぞ。

あの怖さはその場にいないとわからない。

マジで怖かったんだ。

絶対、依頼をあの場で受けなかったら、拷問されてた……間違いないってマジで。

「あんたねえ……」

「し、心配しなくてもこの街には必ず戻ってくるから。今の俺があるのはアリアさんのおかげだし、仕事が終わったら今までのこと全部まとめてお礼をさせてもらおうよ」

「……絶対？」

「絶対」

お姫様だつて戦争が終われば戻ってきていいって言ったし、落ち着いて考えればバルデンフェルトとリエルドの戦力差は圧倒的だ。

下手をすれば、1年もかからないで勝負がつく可能性だつてある。

だったら、俺は精一杯仕事をして少しでも早くこの街に戻るよ
うに努力するだけだ。

「わかったわよ……約束だからね」

「うん……ああ、そうそう。俺が戻ってくるまでに恋人が出来たら、お祝いも盛大にさせてもらおうから」

「 (プチン) 」

ん？

なんか、切れる音がした？

いやいや、この部屋に切れるようなものなんてないよな。

レスティアナさん、なんでそんな呆れた顔をしているの？

ん？

アリアさん、そんなに肩を震わせてどうしたの？

……あ”！

俺は、レスティアナさんが呆れている様子を理解した。

恋人のいないアリアさんに、恋人が出来たらなんて言ったら、嫌味以外の何物でもない。

そりゃあ気を悪くするのも当然だ。

やばい、昨日みたいなアッパーカットでも喰らったらひとたまりもないって。

なんとか機嫌を取らないと……

「は、ははは。じよ、冗談だよ？ あ、アリアさんみたいに美人で優しい女の人に恋人がいない今の状況がおかしいだけなんだから…
…あの、俺が戻ってくるまでには絶対恋人もいるよね。もう、盛大にお祝いできるようにリエルドに着いたら、すぐに準備を始めておかないと……」

「 (プツ、プツ) 」

「そうだよ、アリアさんの素晴らしさをわかってない周りの男がどうかしてるんだって。アリアさんにふさわしい王子様みたいに完璧な男がきつとすぐにも迎えに来てくれるから……あの……ね？」

あ、アリアさん……顔が怖いです。

もしかして火に油を注ぎましたか？

なんか、もうレスティアナさんを家につれてきたときとか、セリカちゃんのことを見つかったときとは比べ物にならないくらい顔が怖いです。

阿修羅か般若か……鬼だって逃げ出すな。

いや、まじで……

「 (プツン) 」

なんか、すげえデカい何かが切れる音がした。

「この、バカアアアアア!!!」

「グホアッ!」

え、俺どうなった？

テーブル越しにアリアさんの拳を喰らったような気はした。

だけど、喰らったんだよな？

ずっと見てたけど、アリアさんの拳が動いたようには見えなかった。

684

テーブルがあるおかげで、足は使えないはずだし……

でも、痛くない。

痛く……いて、いてえ!

な、なんだ？

どうなった？

なんで、突然痛み出すんだ？

殴られてから、痛みだすまでなんで時差があるんだよ……

普通、殴られたことがわかんなかったら、痛みが来るのは殴られたことを理解した後だろ？

なんで、殴られたことを理解しようとしている途中で痛みが襲ってくるんだよ。

どんなマジックだこの野郎！

「ああ、もうわかった。私も一緒に行く」

え？ あの、どういふこと？

何がわかったの？

というか、ものすごい痛いんで湿布みたいなものありませんかね？

というか、一緒に行くって……あれ？

結局、街を出る日までに、リエルド王国のギルドへ異動が決まったアリアさんも俺の旅に同行することになった。

アリアさんに話した翌日には、ゲイルの馬鹿たれにも話に行き出発の日である今日までに、武器屋のおっさんや、迷宮で世話になったおっさんにも挨拶に行った。

そう言えば、あのおっさん2人が兄弟だったのは驚きだ。よく考えれば顔も体格も似ていたから、気づかなかった俺が鈍いのかもしれない。

そして、馬車へ荷物の積み込みも終わり、後は出発するだけという状態になると、門のあたりに見送りに来てくれた人たちの姿がちらほらと。

三井さん、キューマさん、モブ子さん、おっさんブラザー……以上。

あれ、意外と少ない？

まあ、さすがにお姫様がお見送りに来てくれるほど好感度は高くないだろうし、お姫様が一介の冒険者風情の見送りに来るのも問題だろう。

「坊主、リエルドに行っても達者でな」

「リエルドの迷宮では無茶するんじゃないぞ」

「ありがとう、おっさん」

おっさんブラザーとそれぞれ握手を交わす。

言っちゃ悪いが、汗臭いからさっさと次に行きたい。んだけど、おっさんたちはハグまでしてくれた。

だから、汗臭いんだよ。

……並び的に次はモブ子さんなんだけど、モブ子さんは俺のお見送りじゃなくて、アリアさんへのお見送りだからパス。

まあ、接点も少ないからね……でも、見送りに来てくれた唯一の女性だったのに……

「ガイ君。この街には必ず戻ってきてくれたまえよ」

「はい」

この街に来てから、さんざんお世話になったキューマさん。

いや、ある意味あんたのおかげで冒険者を続けられたよ……幸か不幸かは別にして。

まあ、ナイスミドルなキューマさんとは汗臭くもないし、握手だけでなくハグまでオツケーのスタンスでいたんだけど、キューマさんはハグをしてこなかった。

さすがナイスミドル。

ハグしてたら、鼻の下に蓄えられた髭がちくちくしただろうから、まあ助かった。

「ガイ君……すまないね、リエルドになんて追いやることになって

しまつて」

「いえ、三井さんのせいじゃないですよ」

三井さんは俺がリエルド行きの依頼を受けた後も、依頼を撤回させようとさんざん弁護してくれた。

これ以上文句を言えば、クビと言われても食い下がろうとする三井さんを見て俺が止めたぐらいだ。

さすがに、弁護してくれるのはうれしいが、俺のせいで三井さんが職を失うのは心苦しい。

その気持ちだけで胸がいつぱいです。

「……あと、もう一つ君に謝らなくちゃいけないことがある」

「へ？ なんですか？」

「……来い」

三井さんが言うと、門の陰から1人の騎士が現れた。

いや、元騎士と言った方が正しいんだろうか。

元騎士とはいっても、アリアさんを襲おうとした偽合コン事件の元騎士じゃない。

俺と決闘までした男、キッタローン・マグカフェルの姿がそこにあった。

「な、なんでお前が……」

キッタローンは、俺がスパイという噂を真に受けて決闘を申し込んできたらしい。

そのことで、真実が明らかでないのに、誇りあるバルデンフェルト騎士が噂だけをもとに決闘を行い、あまつさえ敗北。しかも、一般人まで傷つけたということもあり、騎士の位を剥奪されたのだ。

「実は、キッタローンにもチャンスが与えられることになってね。君との決闘だって、キッタローンなりに帝国を思っただけの行いだっただけなら、チャンスぐらいは与えるべきって話になったんだ」

「それと、今ここに居ることと何の関係が……まさか」

「そう。キッタローンもリエルドまで同行させる」

「な!？」

「幸いにもキッタローンは騎士の位を剥奪されたおかげで一般人だからね。今回の国境越えも問題なくできるし、連絡係にもうってつけってわけさ」

「……だからって」

キッタローンのやつは、まだアリアさんに謝罪していない。

バルデンフェルト帝国として、騎士団の代表の三井さんがお詫びに来たんだけど、キッタローン自身がアリアさんに頭を下げたわけではない。

そう言う意味で、俺はこいつのことを許せてはいない。

「別に、私はお前に許しを請うつもりはない。私は私の役目を全うするだけだ」

「うち。わかった。わかりましたよ。これもバルデンフェルトの依頼の一部ってことでしょ？ なら、納得するほかないじゃないですか」

「そう言ってもらえると助かるよ」

こうして、リエルドへ向かう俺たちの一行は、俺とスクルドアリアさん、レスティアアさんに加えて、ゲイル、セリカちゃん、キッタローンの計7名と1匹になった。

俺は少しずつ離れていく街から、こちらを見ている見送りに来てくれたみんなに、揺れる馬車の中から大きく手を振った。

徐々に小さくなっていく見送りのみんな。徐々に離れていく街。

この世界に召喚されてから、ほんの1カ月程度しか生活してないと言っているのに、間違いなくこの世界での故郷はこの街だった。

リエルドとの戦争。すぐには終わらないのかもしれないけど、戦争が終わったら必ず戻って来よう。

俺は膝の上で丸くなっているスクルドの背を撫でながら、いつまでも街の方向を眺めていた。

37話 街を出ることになったんだぜ（後書き）

これにて『箱庭の勇者』（ガイのなりあがり冒険記） 1章 街編』は完結です。

2章 リエルド王国編は1月再開予定です。

なんで、1カ月も時間が開くのかと言いますと、前回挫折した応募作品を新たに書くためです。とはいっても、まったくの別作品ですが。

というわけで、12月中は箱庭本編の更新はありません。

ここに重要です

12月中も感想ページの確認なんかは日に1度くらいはする予定です。気軽に感想などくださると嬉しいですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5099w/>

箱庭の勇者 ~ ガイのなりあがり冒険記 ~

2011年12月1日00時55分発行